

山口県埋蔵文化財センター調査報告 第19集
阿知須町埋蔵文化財発掘調査報告 第17集

赤 迫 遺 跡 (C地区)

—平成11年度県営ほ場整備事業（担い手育成型）に伴う発掘調査報告—

2000

財団法人山口県教育財団
山口県埋蔵文化財センター
阿知須町教育委員会



豎穴住居跡出土の須恵器・土師器



墓出土の和鏡

序

山口県では、恵まれた自然環境を保全しつつ、豊かな地域環境の創造に向け、農業基盤整備事業等の諸施策が推進されています。

地域によっては、こうした開発事業に伴い、地下に埋もれている歴史的遺産である遺跡等の消失が危惧されることから、財団法人山口県教育財団では、関係機関との調整を図りながら、必要な範囲について発掘調査を行い、その結果を記録としてとどめ、郷土を築いてきた先人の足跡を後世に残すこととしております。

本書は、平成11年度吉敷郡阿知須町赤迫地区の県営ほ場整備事業に先立ち、同地内に所在する赤迫遺跡（C地区）について、当財団が実施した発掘調査の記録をまとめたものです。

調査の結果、古墳時代後期から古代・中世にかけての集落跡を検出するとともに、数多くの遺物が出土し、当時の人々の生活文化の実態を知る上で、貴重な資料を得ることができました。とくに、古墳時代後期の竪穴住居跡が数多く見つかったことや溝・堀で囲まれた掘立柱建物跡群が確認されたことが、注目すべき成果です。

本書が、文化財保護に対する理解を深め、教育並びに学術研究としての資料、また、郷土史の基礎資料等として、広く活用されることを願うものであります。

終わりに、当発掘調査の実施並びに報告書の作成にあたり、御指導・御協力いただきました関係各位に対し、深く感謝の意を表します。

平成12年3月

財団法人山口県教育財団
理事長 牛見正彦

序

山口県の西南部に位置し周防灘に面した阿知須町は、気候温暖でふるくから多くの人々が集い生活を営んでまいりました。そして、今、2001年には、この阿知須の地で「21世紀未来博覧会」・通称、「山口きらら博」が開催され多くの人々が訪れようとしています。

このたび、県営ほ場整備事業に伴い、文化財保護を目的とし山口県教育財団・山口県埋蔵文化財センターと阿知須町教育委員会が合同で、赤迫遺跡の発掘調査を実施しました。

この赤迫遺跡（C地区）は、平成9年度に調査を行った赤迫遺跡（A・B地区）に隣接した遺跡であり、当初より主要な遺構の埋存が予測された場所でありました。

そして、この度の調査では、予想を上回る古墳時代から中世にかけての集落跡が確認でき、阿知須の歴史にまた新たなページを書き加えることができました。

本書はその発掘調査の記録であり、文化財に対する理解と認識のため、学術並びに教育のために大いに活用されることを期待して発行するものであります。

終わりにになりましたが、本書に係る発掘調査、本書作成のために御指導・御尽力いただいた多くの方々や関係機関に、また、発掘調査遂行にあたり絶大な御理解・御協力をいただきました地元の方々に対し、心からお礼を申し上げます。

平成12年3月

阿知須町教育委員会
教育長 二 川 守

例 言

- 1 本書は、山口県吉敷郡阿知須町赤迫に所在する赤迫遺跡（C地区）の発掘調査報告書である。
- 2 調査は、県営ほ場整備事業（担い手育成型）に伴い、財団法人山口県教育財団が山口県の委託を受け、阿知須町教育委員会が文化庁国庫補助を得て共同で実施したものである。
- 3 調査組織は次のとおりである。

調査主体 財団法人山口県教育財団 山口県埋蔵文化財センター
阿知須町教育委員会

調査担当 指導主事 上山佳彦（山口県埋蔵文化財センター）
指導主事 大村 勇（山口県埋蔵文化財センター）
指導主事 渡邊 栄二（山口県埋蔵文化財センター）
嘱託専門員 伊藤 恵理子（阿知須町教育委員会）
- 4 調査にあたっては、山口県農林部農村整備課、山口県美祢農林事務所、並びに地元関係各位から協力・援助を得た。
- 5 本書の第1図は、国土地理院発行の5万分の1地形図「小郡」・「宇部東部」を複製使用したものである。第2図は、阿知須町発行の「県営圃場整備阿知須地区」（C-4・C-5・D-4・D-5）を複製使用したものである。
- 6 本書に使用した方位は、国土座標（第3座標系）で示し、標高は海拔標高（m）である。
- 7 出土遺物のうち、石器の石材（表面観察による）については、山口県立山口博物館専門学芸員 亀谷 敦氏の助言を得た。
- 8 本書に使用した土色の色調の表記はMunsell方式による。

農林水産省農林水産技術会議事務局（監修）『新版標準土色帖』
- 9 図版中の遺物番号は、実測図の遺物番号と対応する。
- 10 竪穴住居跡実測図中の柱穴内の網かけ表示は主柱穴を表し、それ以外の網かけ表示は焼土範囲を表す。
- 11 出土遺物実測図中の土器断面は、黒塗りが須恵器、白抜きが土師器・瓦質土器・陶器、網かけが磁器を表す。
- 12 本書で使用した遺構略号は次の通りである。

S B：住居跡・建物跡 S K：土坑 S D：堀・溝状遺構 S T：墓 S P：柱穴
- 13 本書の作成・執筆は、上山・大村・渡邊・伊藤が共同で行い、編集は上山が行った。なお、本文の執筆分担は、次の通りである。

I-1・2 渡邊
II-1・2 大村
III-1 大村（S B41・43は伊藤）
2 渡邊（S B146・149は伊藤）
3・4 伊藤
5・6 上山
7・8 伊藤
IV-1～8 上山（IV-1のS B39～43出土遺物は伊藤）
V-1～4 上山

本文目次

I	遺跡の位置と環境	1
1	地理的環境	1
2	歴史的環境	1
II	調査の経緯と概要	4
1	調査に至る経緯	4
2	調査の経過と概要	4
III	遺構	7
1	竪穴住居跡	7
2	掘立柱建物跡	24
3	土坑	31
4	墓	31
5	堀	37
6	溝状遺構	39
7	包含層	39
8	柱穴	40
IV	遺物	41
1	竪穴住居跡出土遺物	41
2	掘立柱建物跡出土遺物	52
3	土坑出土遺物	52
4	墓出土遺物	52
5	堀・溝状遺構出土遺物	54
6	柱穴出土遺物	55
7	表面採集遺物	56
8	石器・石製品	56
V	まとめ	69
1	調査成果の概要	69
2	古墳時代	69
3	古代・中世	73
4	赤迫遺跡の歴史の変遷のまとめ	76
	——周辺のは場整備事業に伴う発掘調査と関連して——	

挿図目次

第1図	遺跡の位置と周辺の遺跡	第25図	堀土層断面図
第2図	調査区設定図	第26図	溝状遺構土層断面図
第3図	竪穴住居跡実測図①	第27図	包含層土層断面図
第4図	竪穴住居跡実測図②	第28図	柱穴遺物出土状況実測図
第5図	竪穴住居跡実測図③	第29図	竪穴住居跡出土遺物実測図①
第6図	竪穴住居跡実測図④	第30図	竪穴住居跡出土遺物実測図②
第7図	竪穴住居跡実測図⑤	第31図	竪穴住居跡出土遺物実測図③
第8図	竪穴住居跡実測図⑥	第32図	竪穴住居跡出土遺物実測図④
第9図	竪穴住居跡実測図⑦	第33図	竪穴住居跡出土遺物実測図⑤
第10図	竪穴住居跡実測図⑧	第34図	竪穴住居跡出土遺物実測図⑥
第11図	竪穴住居跡実測図⑨	第35図	竪穴住居跡出土遺物実測図⑦
第12図	竪穴住居跡実測図⑩	第36図	竪穴住居跡出土遺物実測図⑧
第13図	竪穴住居跡実測図⑪	第37図	竪穴住居跡出土遺物実測図⑨
第14図	竪穴住居跡実測図⑫	第38図	掘立柱建物跡出土遺物実測図
第15図	竪穴住居跡実測図⑬	第39図	土坑出土遺物実測図
第16図	掘立柱建物跡実測図①	第40図	墓出土遺物実測図①
第17図	掘立柱建物跡実測図②	第41図	墓出土遺物実測図②
第18図	掘立柱建物跡実測図③	第42図	堀・溝状遺構出土遺物実測図
第19図	掘立柱建物跡実測図④	第43図	柱穴出土遺物・表面採集遺物実測図
第20図	掘立柱建物跡実測図⑤	第44図	石器・石製品実測図
第21図	掘立柱建物跡実測図⑥	第45図	石製品実測図
第22図	土坑実測図①	第46図	竪穴住居跡出土の須恵器編年図
第23図	土坑実測図②	第47図	中世の堀・溝状遺構・掘立柱建物跡 の全体配置図
第24図	墓実測図		

表 目 次

第1表	竪穴住居跡一覧表	第11表	石斧観察表
第2表	掘立柱建物跡一覧表	第12表	石庖丁観察表
第3表	土坑一覧表	第13表	砥石観察表
第4表	墓一覧表	第14表	凹石観察表
第5表	土器観察表	第15表	石鍋観察表
第6表	土製品観察表	第16表	有孔円板観察表
第7表	鉄製品観察表	第17表	紡錘車観察表
第8表	和鏡観察表	第18表	石製模造品観察表
第9表	銅銭観察表	第19表	玉・勾玉類観察表
第10表	石鏃観察表		

図 版 目 次

巻頭図版	竪穴住居跡出土の須恵器・土師器	図版10	墓
	墓出土の和鏡	図版11	堀
図版1	赤迫遺跡（C地区） 遠景（西から）	図版12	溝状遺構・柱穴
	赤迫遺跡（C地区） 全景	図版13	竪穴住居跡出土遺物①
図版2	1地区 全景	図版14	竪穴住居跡出土遺物②
	2地区 全景	図版15	竪穴住居跡出土遺物③
	3地区 全景	図版16	竪穴住居跡出土遺物④
図版3	4 B・4 C地区 全景	図版17	竪穴住居跡出土遺物⑤
	4 A地区 全景	図版18	竪穴住居跡出土遺物⑥
	5地区 全景	図版19	竪穴住居跡出土遺物⑦
図版4	2地区北側 竪穴住居跡群	図版20	竪穴住居跡出土遺物⑧
	2地区東側 竪穴住居跡群	図版21	掘立柱建物跡・土坑出土遺物
図版5	竪穴住居跡①	図版22	墓・堀・溝状遺構出土遺物・ 表面採集遺物
図版6	竪穴住居跡②	図版23	柱穴出土遺物
図版7	竪穴住居跡③	図版24	石器・石製品
図版8	掘立柱建物跡		
図版9	掘立柱建物跡・土坑		

付 図 目 次

赤迫遺跡（C地区）遺構配置図

I 遺跡の位置と環境

1 地理的環境

赤迫遺跡（C地区）は、吉敷郡阿知須町赤迫に所在し、土路石川と井関川に挟まれた洪積段丘面の南縁・井関川左岸の段丘上に位置している。

阿知須町は、県中央南部に位置し、東は山口湾に面して周防灘に臨み、北は土路石川を境に山口市、南西は宇部市に隣接し、東西の最大幅は7.5km、南北の最大幅は4.8kmで、面積は約25.5km²である。

地形からみると、阿知須町西部及び海岸近くに独立してそびえる丸塚山（標高54m）のような丘陵性山地と東部の洪積世の海岸段丘に大別することができる。花崗岩地を上流にもつ土路石川と井関川はこの段丘を開析して西から東に流れ山口湾に注いでいる。河川は流砂で埋まりやすく、運搬された流砂は遠浅の海をつくってきた。

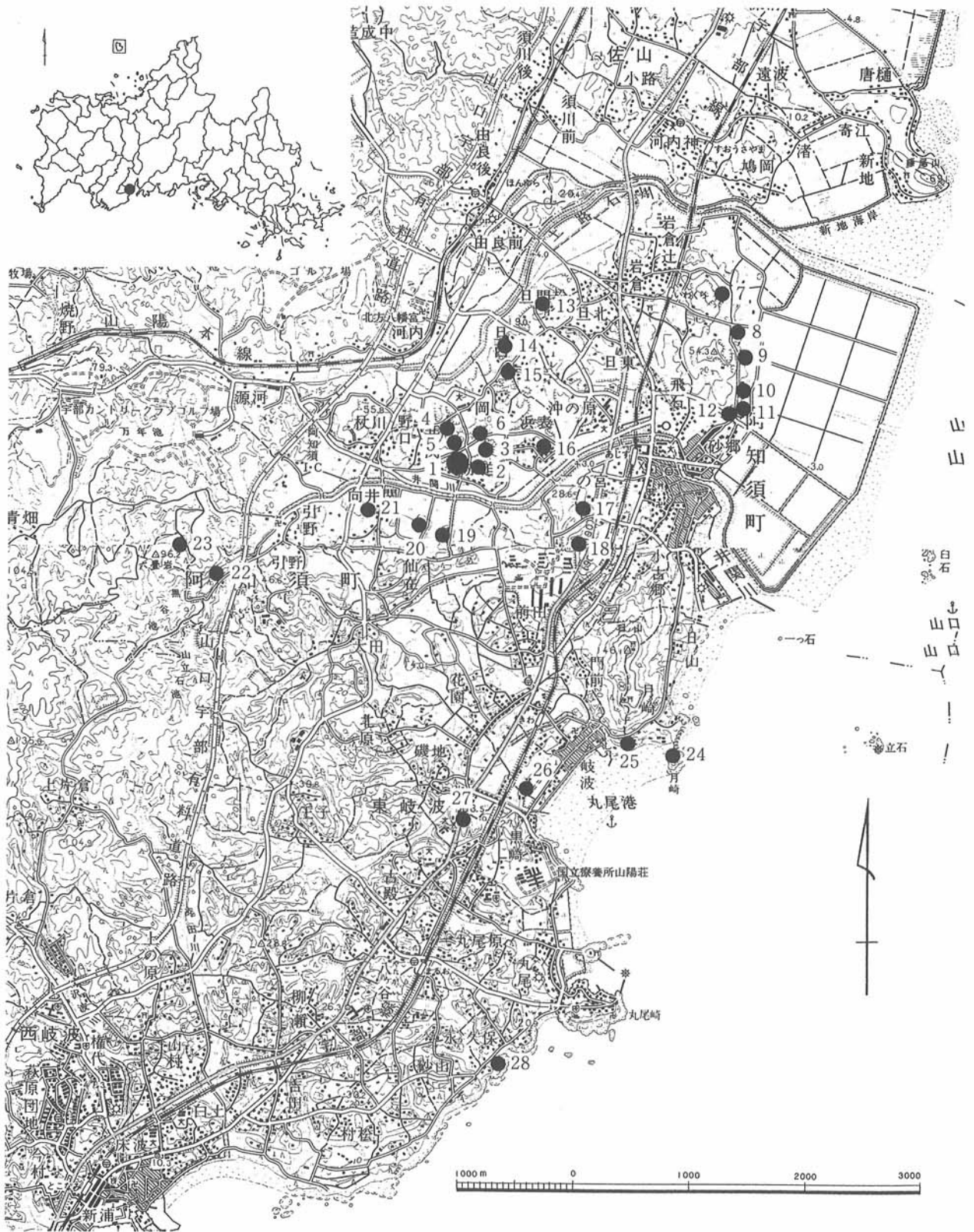
気候は、年平均気温15～16℃、年平均降水量1,600～1,700mmであり、海に面した瀬戸内の穏やかな気候条件に恵まれた地域で、早くから文化が開けていったものと考えられる。

井関川中流域洪積段丘から東に舌状に伸びた一つの支脈の先端に上河内遺跡（第1図の16）があり、その付け根に当たる部分に領家遺跡（同6）・神正遺跡（A・B地区）（同3）が所在し、谷を一つ隔てて赤迫遺跡（A・B地区）（同2）が位置している。赤迫遺跡（C地区）（同1）は、平成9年度発掘調査が行われた赤迫遺跡（A・B地区）と道路一つ隔てた西側の高台に位置し、その北側には上ノ尾遺跡（同4）・西光寺原遺跡（同5）が所在している。この赤迫遺跡（C地区）は、標高20m弱の段丘面上にあり、その南側は井関川に臨み、東側は浜区・浜表区の地域名が示すようにかつては海に隣接していたと考えられ、恵まれた立地条件にあるといえる。

2 歴史的環境

阿知須町の歴史は、岩上遺跡にみられるように今から1万数千年前の後期旧石器時代にはじまると考えられている。この遺跡は、町域の北端を東流する土路石川が浸食した洪積台地上に立地している。遺跡からは後期旧石器時代のナイフ型石器・搔器などの石器類が見つかった。また、井関川右岸の丘陵地に立地する岡山遺跡（同18）からも加工の痕跡が認められる石材が出土し、土壌分析の結果によると、縄文時代以前に溯り得る可能性が指摘されている。

瀬戸内海に面した丸塚山遺跡（標高54.3m）の東麓に広がる台地からは、縄文時代後期から晩期にかけての石器類が確認された。近くの砂郷遺跡（同12）からは、縄文時代の石錘の可能性のある漁具が発見されたことから漁撈を営み、背後の丘では狩猟・採集を行って生活していたと考えられる。昭和50年代の発掘調査では、阿知須町域の西半を占める丘陵地帯（標高50～100m）において弥生時代の遺跡が相ついで確認された。引野遺跡は、海水産の貝塚を伴う高地性集落として知られる。また、この付近の南山遺跡、高尾山遺跡、青畑遺跡もその陵線上（70～80m）に位置する弥生中期の遺跡である。彦地山遺跡（同22）からも弥生中期の埋葬遺構が確認された。当時は気候もしだいに温暖となり、弥生小海進の時期で人々の生活の拠点がしだいに高所へ移っていったものと考えられる。井関川中流域兩岸の洪積段丘上にある棚尾遺跡（同19）・向井山遺跡（同20）・赤迫遺跡（A・B地区）・西光寺原遺跡からは、古墳時代の隅丸方形の竪穴住居跡が検出され、古墳時代における集落の様子が



- | | | | | |
|-------------|---------------|---------------|----------|------------|
| 1 赤迫遺跡(C地区) | 2 赤迫遺跡(A・B地区) | 3 神正遺跡(A・B地区) | 4 上ノ尾遺跡 | 5 西光寺原遺跡 |
| 6 領家遺跡 | 7 丸塚1号墳 | 8 丸塚6・7号墳 | 9 丸塚2号墳 | 10 丸塚3・4号墳 |
| 11 丸塚5号墳 | 12 砂郷遺跡 | 13 旦遺跡 | 14 五反田遺跡 | 15 岡遺跡 |
| 16 上河内遺跡 | 17 岡山北遺跡 | 18 岡山遺跡 | 19 棚尾遺跡 | 20 向井山遺跡 |
| 21 向井関遺跡 | 22 彦地山遺跡 | 23 引野遺跡 | 24 月崎古墳 | 25 若宮古墳 |
| 26 波雁ヶ浜遺跡 | 27 花ヶ池窯跡 | 28 砂山古墳 | | |

第1図 遺跡の位置と周辺の遺跡

しだいに明らかになってきている。しかし、この地域での古墳は今のところ発見されていない。丸塚古墳群（同7）～（同11）は、阿知須町東縁の周防灘に臨む沿岸の洪積段丘の端近くにあり6世紀末から7世紀の間に築かれた横穴式石室の後期古墳である。中央政権との直接的なかわりのない土着の小集団を率いた首長一族の墳墓であると考えられている。水田耕作が可能な低地をまったくもない海に臨んだ段丘端に立地した古墳群は、その被葬者と海とのかわりを強く感じさせられる。また、山口湾周辺でも、月崎古墳（同24）や若宮古墳（同25）などの横穴式古墳が発見された。この他近隣には、生産遺跡として、6世紀末を中心とする須恵器の窯跡として知られる花ヶ池窯跡（同27）や製塩遺跡として著名な波雁ヶ浜遺跡（同26）がある。

古代制度が整った時期、阿知須町は、周防国吉敷郡賀宝郷の境域に属したが、山陽道から離れていたためこの時代の歴史や文化を伝える資料が少ない。しかし、赤迫遺跡（A・B地区）でこの時期と考えられる大型掘立柱建物跡などの遺構が確認され、緑釉陶器片が出土するなど、発掘調査により、文献にない古代の阿知須町史の空白の一端を埋める資料が見つかった。

中世初頭、大内氏は周防国の守護に、厚東氏は長門国の守護に補された。宇部市岐波の弘濟寺所蔵の文献（1336年）によれば、厚東氏の家譜による4代武綱・永綱父子は阿知須町近辺を領して白松氏を称し、その子孫がここに繁栄したといわれている。やがて大内氏は正平13年（1358年）、霜降城で厚東氏を破り防長両国を統一するに至り、白松氏は大内氏の支配下に入っていった。しかし、天文20年（1551年）大内氏は、陶晴賢の反乱により敗れた。毛利氏は、厳島で陶晴賢に勝利した後、大内氏の支配領域を治め、江戸時代をとおして阿知須町は、右田毛利の給領支配を受けることになった。

近年、岡遺跡（同15）・旦遺跡（同13）・五反田遺跡（同14）では、中世を主とする集落跡が確認されている。赤迫遺跡（A地区）では、中世の室町時代前期の14～15世紀頃の防御を目的としたような堀・溝状遺構が見つかった。平成7・8年度における領家遺跡、神正遺跡（A・B地区）の発掘調査でも室町時代後半の15～16世紀を中心とした集落遺跡が発見され、防御を目的に含めたと思われる堀・溝状遺構および土塁跡が遺跡を囲む形に巡らされていることが確認された。このことは大内氏の拠点山口の大きな政治変動が阿知須町にも影響を及ぼしていた可能性を示すと考えられている。

近世藩政期の産業は、井関村では農業を、阿知須浦では農業に加えて漁業及び廻船業を営むものが多かった。関ヶ原の合戦で敗れた毛利氏は防長二か国に減封となり、財政的な危機により大規模な新田開発に乗り出すことになった。その結果、古墳時代～中世にかけて人々の生活が営まれていた井関川、土路石川に挟まれた丘陵域も新田となり大きく変貌するに至った。

明治になると、井関村と阿知須浦が併合されて井関村になった。昭和15年阿知須町となり、戦時中一時期山口市に合併された後、昭和22年山口市から独立して町制を敷き、今日に至っている。

参考文献

- | | |
|-----------------------------|--------------------------------------|
| 1 阿知須町史編さん委員会 『阿知須町史』 1981年 | 7 阿知須町教育委員会 |
| 2 阿知須町教育委員会 | 『領家・神正遺跡(神正遺跡B地区)』 1997年 |
| 『引野遺跡 丸塚古墳群』 1977年 | 8 財団法人山口県教育財団 山口県埋蔵文化財センター・阿知須町教育委員会 |
| 3 阿知須町教育委員会 | 『神正遺跡(A地区) 赤迫遺跡(A地区)』 1998年 |
| 『五反田遺跡・中ノ坪遺跡』 1994年 | 9 阿知須町教育委員会 |
| 4 阿知須町教育委員会 『上河内遺跡』 1995年 | 『赤迫遺跡 B地区発掘調査報告』 1998年 |
| 5 阿知須町教育委員会 『岡山遺跡』 1996年 | 10 阿知須町教育委員会 『砂郷遺跡』 1999年 |
| 6 阿知須町教育委員会 『領家遺跡』 1996年 | |

Ⅱ 調査の経緯と概要

1 調査に至る経緯

山口県教育委員会では農業基盤整備事業に伴う工事から埋蔵文化財を保護するため、山口県農林部農村整備課と協議を行い、現状保存が避けられない遺跡については記録保存を目的とした事前の発掘調査を実施している。

近年、阿知須町赤迫周辺でもほ場整備に伴う発掘調査が行われている。平成7年度に領家遺跡が阿知須町教育委員会によって、平成8年度に神正遺跡（A・B地区）、平成9年度に赤迫遺跡（A・B地区）が財団法人山口県教育財団と阿知須町教育委員会によって調査されている（第2図）。

赤迫遺跡（A・B地区）の西側に隣接するC地区でも県営ほ場整備事業（担い手育成型）の対象となったため、山口県教育委員会と阿知須町教育委員会が平成10年度に埋蔵文化財の有無について、事前の試掘調査を行った。この結果、遺跡の埋存が確認されたため、山口県教育委員会と阿知須町教育委員会が山口県農林部農村整備課と協議を行い、現状保存が困難な6,400㎡の地域について発掘調査を行うこととなった。

調査は、山口県の委託を受けた財団法人山口県教育財団が調査対象面積の6,000㎡を担当し、文化庁の国庫補助を受けた阿知須町教育委員会が残りの400㎡を担当して、合同で調査にあたることとなった。

2 調査の経過と概要

調査は、5月6日、重機による表土除去から始まった。客土や包含層が厚く堆積していることや、調査面積が広いということもあって、全ての表土を除去するには約1カ月の時間を要した。これに並行して、作業員による遺構の検出作業も進めた。その間、測量業者に国土座標杭の設置を委託して実施し、調査員による平板測量も並行して行った。さらにこの時期は、梅雨を控えていたこともあって、流水路の区画設定や調査区の防災対策にも十分な配慮をして作業を進めた。

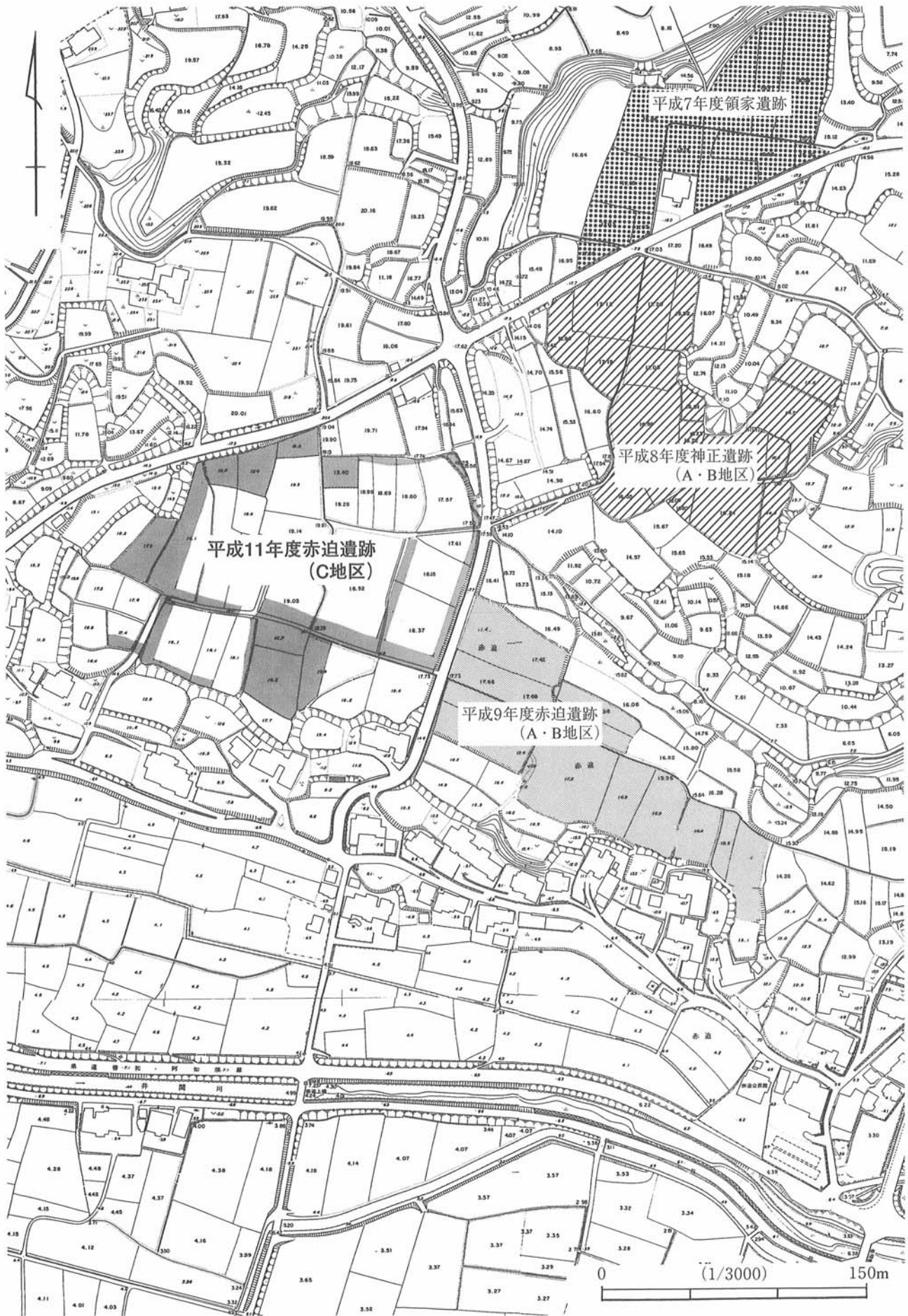
遺構検出や平板測量により、多数の堅穴住居跡、周囲を巡るような形でつくられている溝、土坑、多数の柱穴などの遺構があることが確認された。このような状況をふまえ、計画的・効率的に調査する必要性から調査方法や掘り込み順序の検討を行った。

調査区は、5地区に分けた。北側から東側にかけての細長い調査区を1地区、それから時計回りに2地区、3地区・・・とし、5地区を阿知須町教育委員会担当地区にあてた（付図）。

掘り込み作業は、6月11日、5地区の北側で、東西に流れる溝の掘り込みから始まった。最初のころは順調だった作業も、6月下旬からは長雨など天候不順に悩まされ、足踏み状態が続いた。特に、1地区の東側の一部では、道路横の側溝より低いところに遺構面があるため、側溝の排水が調



重機による表土除去作業



第2図 調査区設定図

査区に流れ込むことになった。この時期の調査は、なかなか思う通りに進捗しなかった。

7月にはいと、作業は竪穴住居跡の掘り込みが中心となった。竪穴住居跡の中には多量の遺物を含むものや切り合い関係のあるものが多く、慎重な作業が続いた。同時に、調査員によって遺構・遺物の出土状況を写真撮影して記録を残したり、その実測図を作成したりした。竪穴住居跡の検出数が多いの



遺構掘り込み作業

で、時として実測が追いつかず、次の竪穴住居跡を掘り込めないという状況にもなった。しかし、溝、土坑、柱穴の順番に作業が滞らないよう、作業手順を工夫して掘り込みを進めていった。

8月のはじめには、2地区の南側で包含層か溝かと思われていた遺構をトレンチ調査した。その結果、最深部では深さが1 m以上ある堀であるということが確認された。暑い最中ではあったが、天候を考慮しながら人力で掘り込むこととなった。

8月後半から9月にかけては、残暑が厳しい中、順調に掘り込み作業が進んだ。

9月3日には、阿知須町立井関小学校6年生の児童による遺跡見学と柱穴の掘り込み体験学習を実施し、地域の郷土学習の場として活用していただいた。



発掘体験

9月24日には、台風18号が宇部市に上陸し、直撃を受けたが、遺跡そのものは、前々日の万全の防災

対策により、ほぼ現形のまま保存することができていた。台風による作業中止はあったものの、この時期も全般的に良好な気候条件のもとで、順調に掘り込み作業が進んだ。

10月23日には、発掘調査の成果を広く地元・一般の方々に公開すべく、現地説明会を開催した。当日は天候もよく、地元阿知須町を中心に約90名の来訪者があり、竪穴住居跡の遺物の出土状況などを見学していただいた。

11月5日、すべての遺構の掘り込み作業が終了した。遺構面の清掃をした後、11月9日予定通り、ラジコンヘリコプターを用いて遺跡の空中写真撮影を行った。



検出された掘立柱建物跡

11月10日から11月26日にかけては調査員によって調査区全域にわたり、完掘状況のグリッド実測を続けた。11月30日、美祿農林事務所担当者への発掘調査終了確認の現地立会を経て、赤迫遺跡（C地区）の現地調査はすべて終了した。

その後、山口県埋蔵文化財センターと阿知須町教育委員会において、調査資料の整理、出土遺物の復元と実測、写真撮影を行い、財団法人山口県教育財団と阿知須町教育委員会が共同でこの報告書を刊行するに至った。

Ⅲ 遺 構

今回の発掘調査で検出された遺構は、竪穴住居跡56軒、掘立柱建物跡49棟、土坑136基、堀1条、溝46条、墓7基、柱穴約4,050個である。これらの遺構は、出土遺物などから、古墳時代～中世のものが多いと考えられる。また、遺構は調査区の南西部で密度がうすいが、その他の地域ではほぼ全面から検出されている。特徴的な遺構としては、古墳時代の多数の竪穴住居跡と中世の堀、調査区を巡るような状況で検出された溝があげられる。遺構面は、後世の水田開発などにより一部削平を受けているが、全般的に遺存状況は良好であった（付図）。

1 竪穴住居跡（第3～15図、図版4～7）

竪穴住居跡は調査区のほぼ全地域で検出されている。今回検出した竪穴住居跡は56軒であるが、調査区端のため一部しか確認調査できないものや、後世の削平によって一部が残存していない住居も含まれている。1C地区の西側から2地区にかけては竪穴住居跡の密集地であった。住居の規模は、一辺の長さ4mから5m台が中心で、6m以上の大規模住居跡が3軒検出されている。その平面形の多くは隅丸方形タイプで、一部が長方形を呈している。住居の主柱穴は4本が主体をなすが、2本のものもある。他にも柱穴が確認できず、地上に支柱を立てたと思われるものもあった。カマド跡と思われる焼土塊や煙出部が確認できたものが20軒で、住居の北側か西側の方向で、中央付近の壁下床面にその跡が見られる。しかし、袖部とみられる粘土壁や煙道部をもつ定型化した本格的カマド構造は確認されていない。したがって、カマドの基礎情報のみ取り入れ、本格的カマド構造をもつまでに至らない原初形態の地域色の強いカマド形態であったのではないかと考えられる。住居内に周溝をもつものが10軒ある。その周溝部の床面からの深さは比較的浅く、大部分が途中で絶えたような状況で検出された。また、屋外への排水路は検出されなかった。住居の埋土の多くは灰黄褐色系または黒褐色系の粘質土である。住居の床面までの深さは浅いものが多く、もっとも深いものが36cmとなっている。後世の削平も考えられる。出土遺物などにより、住居の時期は6世紀中後半に比定されるものが多くを占め、それより一段階古いものと新しいものがあると考えられる。全体的に遺物が多く、遺存状況も比較的良好であった。以下、主な竪穴住居跡について、紹介する（第1表）。

S B 9（第3図、図版6） 1C地区に位置する。住居の南側は調査区外であるが、主柱穴が4本の方形住居と考えられる。北壁中央部付近の床面にカマド跡と思われる焼土塊を確認した。埋土は灰黄褐色粘質土の単一層からなる。出土遺物には、須恵器の甕(40)・杯蓋(37・38)・杯身(39)、土師器の甕(43～45)・甕と思われるもの(47)・甌(46・48)・甌と思われるもの(42)・高杯(41)、切子玉(375)などが、床面直上の広い範囲で出土している。この住居の時期は6世紀後半に比定される。

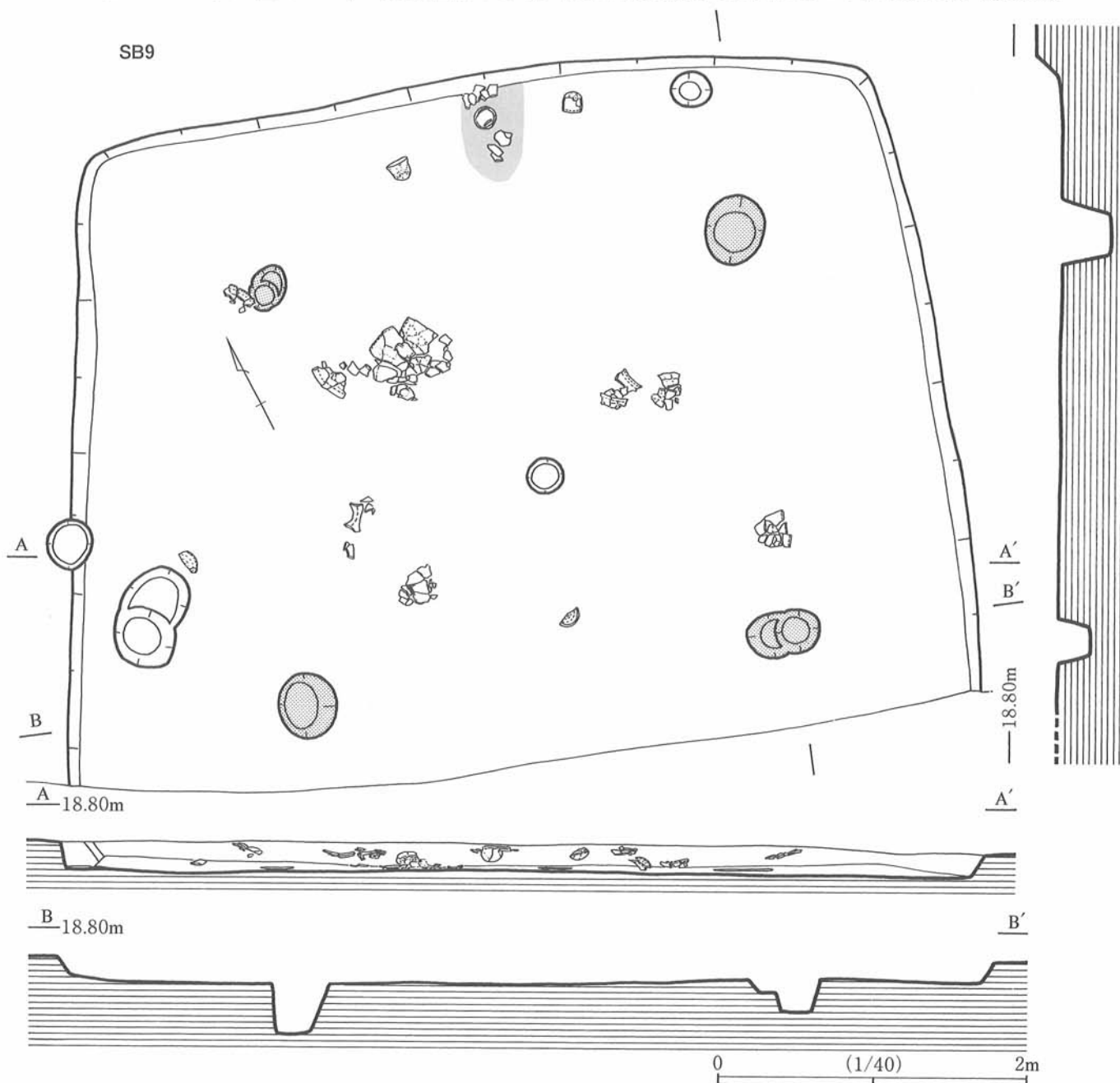
S B 14（第4図、図版5） 2地区の東側に位置している。主柱穴が2本の方形住居である。北西壁中央部付近の床面にカマド跡と思われる焼土塊があり、その周辺部で支脚として利用されたと考えられる石と遺物が密集した状況で出土した。住居の東側には規模が長軸120cm、短軸70cm、深さ7cmで、長円形の屋内土坑が掘り込まれている。出土遺物には、須恵器の杯蓋(53)、土師器の甕(62・63)・杯(55～61)・製塩土器(54)、砥石(376)などがある。この住居の時期は6世紀前半に比定される。

S B 18（第5図、図版5） 2地区の東側で、S B 14の南側に位置している。主柱穴が4本の方形住

居である。西壁中央部付近の床面にカマド跡と思われる焼土塊を確認した。埋土は上層が灰黄褐色粘質土、下層がにぶい赤褐色粘質土の2層からなる。埋土の中と床面全体から多量の遺物が出土した。出土遺物には、須恵器の壺(78)・長頸壺(80)・大甕(86)・杯蓋(72・73)・杯身(74~76)・蓋(79)・高杯(77)、土師器の甕(82~85)・杯(81)、有孔円板(392)、砥石(379)などがある。この住居の時期は7世紀初めに比定される。

S B 20(第6図、図版7) 2地区の北側に位置し、S B 21に切られている。主柱穴が4本の方形住居である。埋土の中と床面全体から多量の遺物が出土した。埋土は灰黄褐色粘質土の単一層からなる。出土遺物には、須恵器の杯蓋(88~90)・杯身(91~94)、土師器の甕(97・98)・杯(95・96)・甑(99~101)、有孔円板(397)、紡錘車(403・405)などがある。この住居の時期は6世紀前半に比定される。

S B 21(第6図) 2地区の北側に位置し、S B 20の南側に位置している。S B 20・S B 22・S B 23を切っている。主柱穴が4本の方形住居である。北壁中央部付近の床面にカマド跡と思われる焼土塊

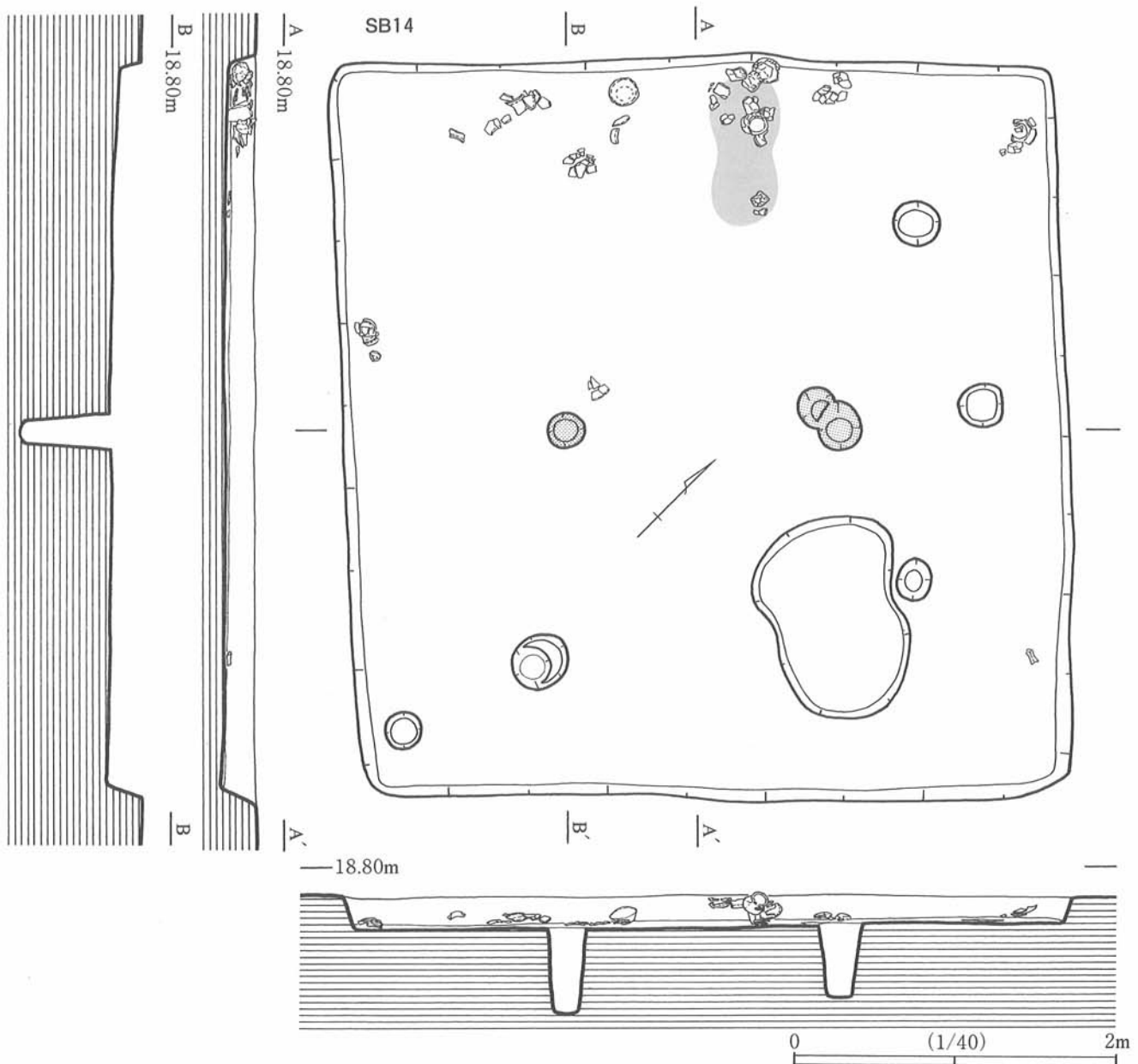


第3図 竪穴住居跡実測図①

を確認し、その外側に40cmほどの煙出部張り出しがみられた。埋土は上層が褐色粘質土、下層が明赤褐色粘質土にマンガング粒混入土の2層である。出土遺物には、須恵器の杯蓋(102)・杯身(103・104)・土師器の甕(106・108)・甌(107)・高杯(105)などがある。この住居の時期は7世紀初めに比定される。

SB41(第7図、図版6) 5地区の南西隅に位置する方形住居であるが、支柱穴は確認されていない。住居の北壁にカマドと思われる張り出しが存在するものの、床面から焼土は検出されなかった。遺物は多く、須恵器の杯蓋(191~193)・杯身(194~197)・短頸壺(198)、土師器の高杯(205・206)・甕(207)・鉢(208)・杯(209~214)・甕(215~218)・甌(219)・製塩土器(200~203)などが出土した。その中でも、須恵器(197)はその器形が特異で、土師器の鉢(208)も他の住居では器形に類例がなく、胎土も異なっている。また、小型鉢(204)・ミニチュア土器(199)・赤色塗彩した杯(211)、勾玉?(426)、滑石製模造品(416)の出土から、なんらかの祭祀的な儀礼をうかがわせ、5地区の他の竪穴住居の遺物構成とは異なる様相を呈する。この住居の時期は、6世紀前半に比定される。

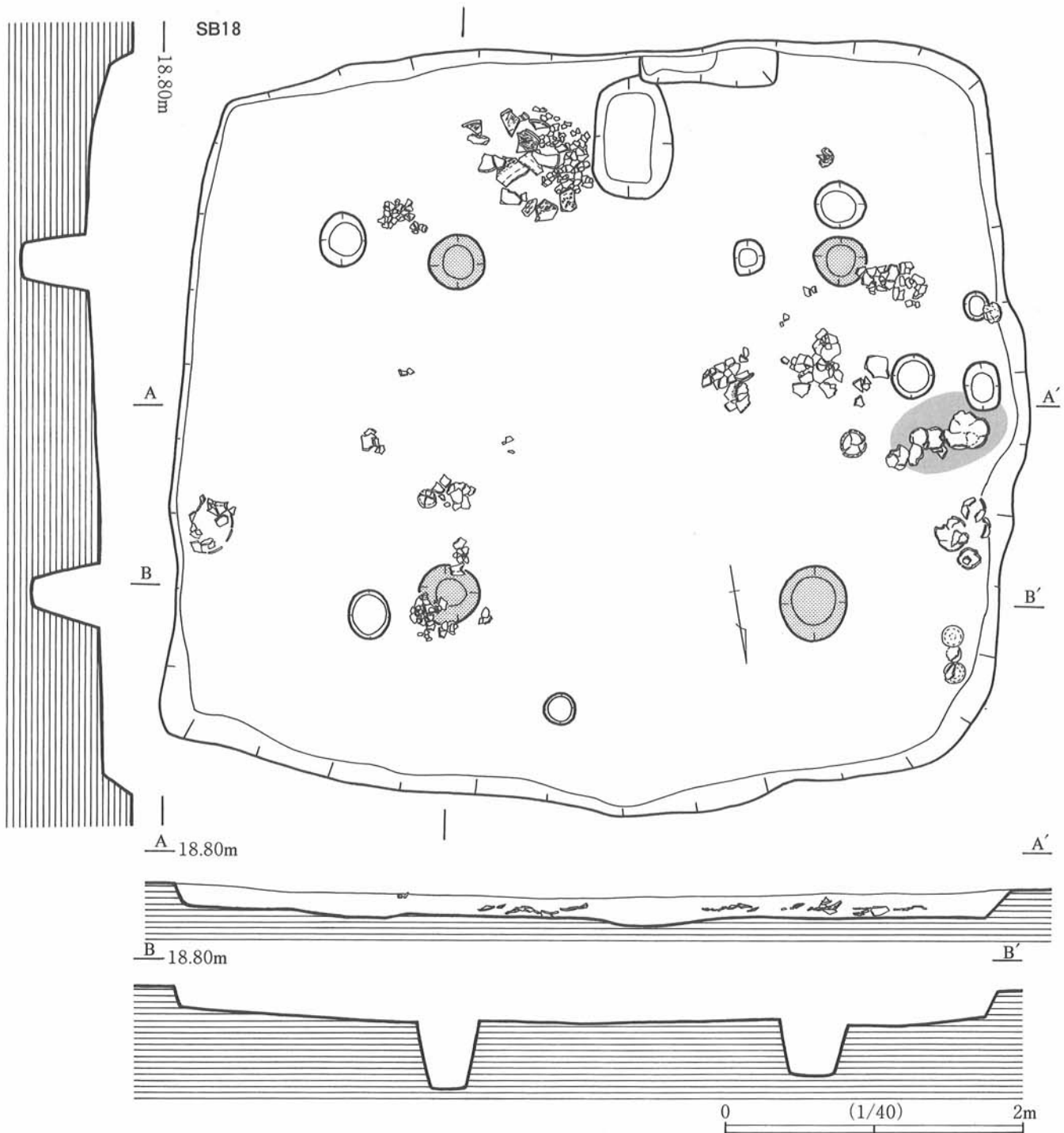
SB1・2A・2B(第8図、図版7) 1C地区の東側に位置する。SB1は、SB2A・SB2Bを切る、支柱穴不明の方形住居である。出土遺物には、須恵器の杯蓋(1)・杯身(2)・皿(3)、石鏃(372)



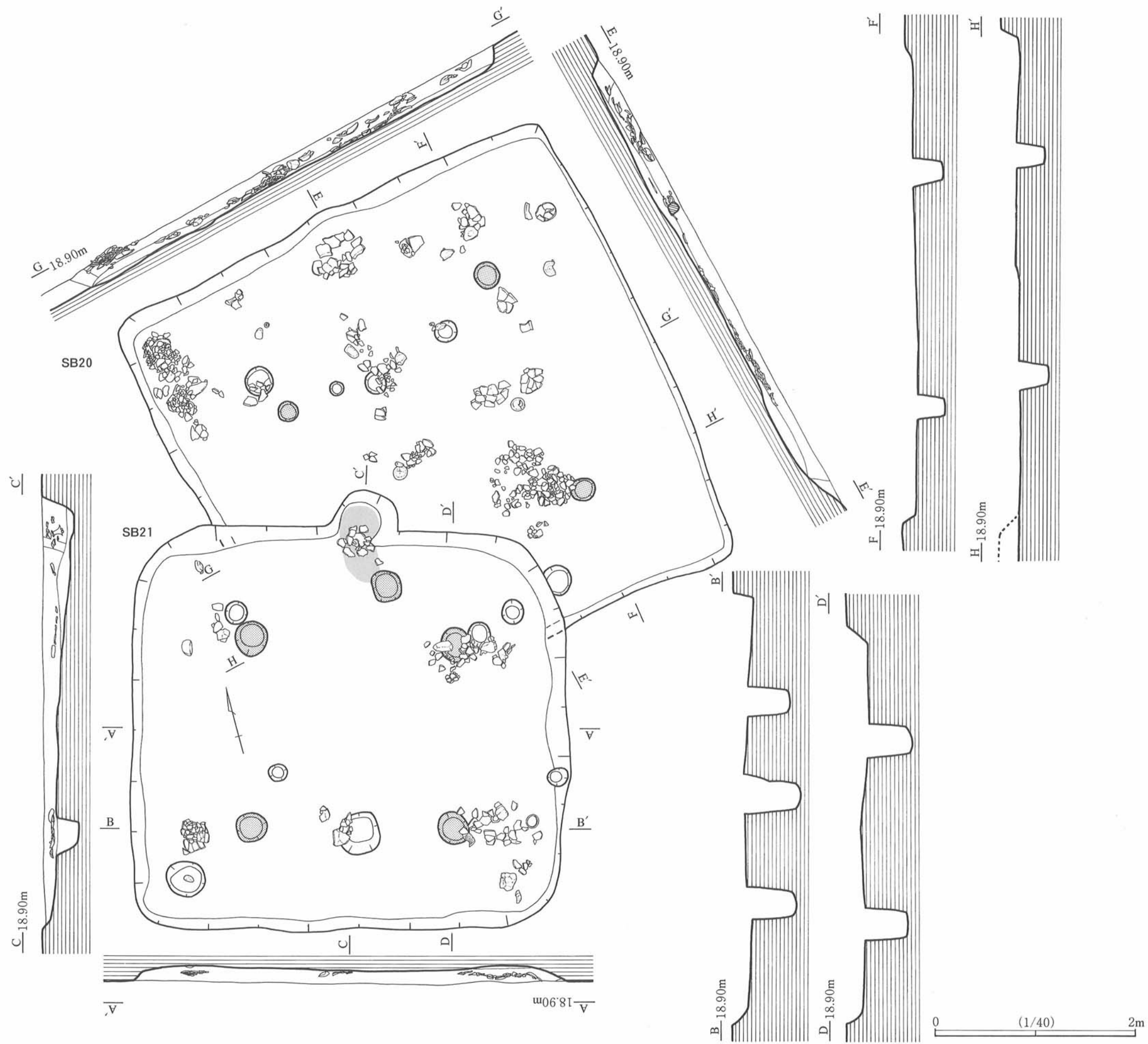
第4図 竪穴住居跡実測図②

などがある。また用途不明だが、床面から大きさが30cmを越す河原石が3点出土している。SB1の時期は7世紀初めに比定される。SB2AとSB2Bの新旧関係は不明。SB2Aは支柱穴が4本の方形住居である。出土遺物には、須恵器の杯蓋(4)・杯身(5)・提瓶の口縁部と思われるもの(6)、土師器の甕(7)・高杯(8)、土錘(9)などがある。SB2Bは支柱穴は不明、方形住居と考えられる。出土遺物には、土師器の甕(12~14)・甑(16)・杯(10・11)・ミニチュア土器(15)などがある。SB2AとSB2Bの時期は、6世紀後半に比定される。

SB5A・5B・6(第9図) 1C地区の中央付近に位置する。住居の南側は後世の削平で残存していない。支柱穴はいずれも確認できなかった。土層観察によるとSB6がもっとも古く、SB5A



第5図 竪穴住居跡実測図③



第6图 竖穴住居跡实测图④

とSB5Bに切られる。SB5AがSB5Bを切っている。SB5Bの北壁中央部付近の床面にカマド跡と思われる焼土塊を確認した。また、煙出部が外側に50cm張り出している。SB6の西壁中央部付近の床面にも焼土塊を確認した。SB5A・5Bには屋内周溝がある。SB5Bの周溝は北壁沿いであり、幅15cm床面からの深さ5cm。SB5Aの周溝幅は25cm、深さは床面から5cmほどである。これら住居内の出土遺物には、土師器の甕(18)・杯(20・21)・高杯(19)、砥石(380)などがある。これらの住居は6世紀後半頃の住居と考えられる。

SB8 (第9図、図版7) 1C地区の中央付近に位置する。住居の北側は調査区外であるが、支柱穴が4本の方形住居と考えられる。SB7を切っている。埋土は灰黄褐色系の粘質土で2層からなる。出土遺物には、須恵器の短頸壺(31)・杯蓋(25)・杯身(26~29)・蓋(30)・器台と思われるもの(32)、土師器の甕(33~35)・甑(36)・高杯(34)、砥石(381)、紡錘車(401・402)などがある。この住居の時期は7世紀初めに比定される。



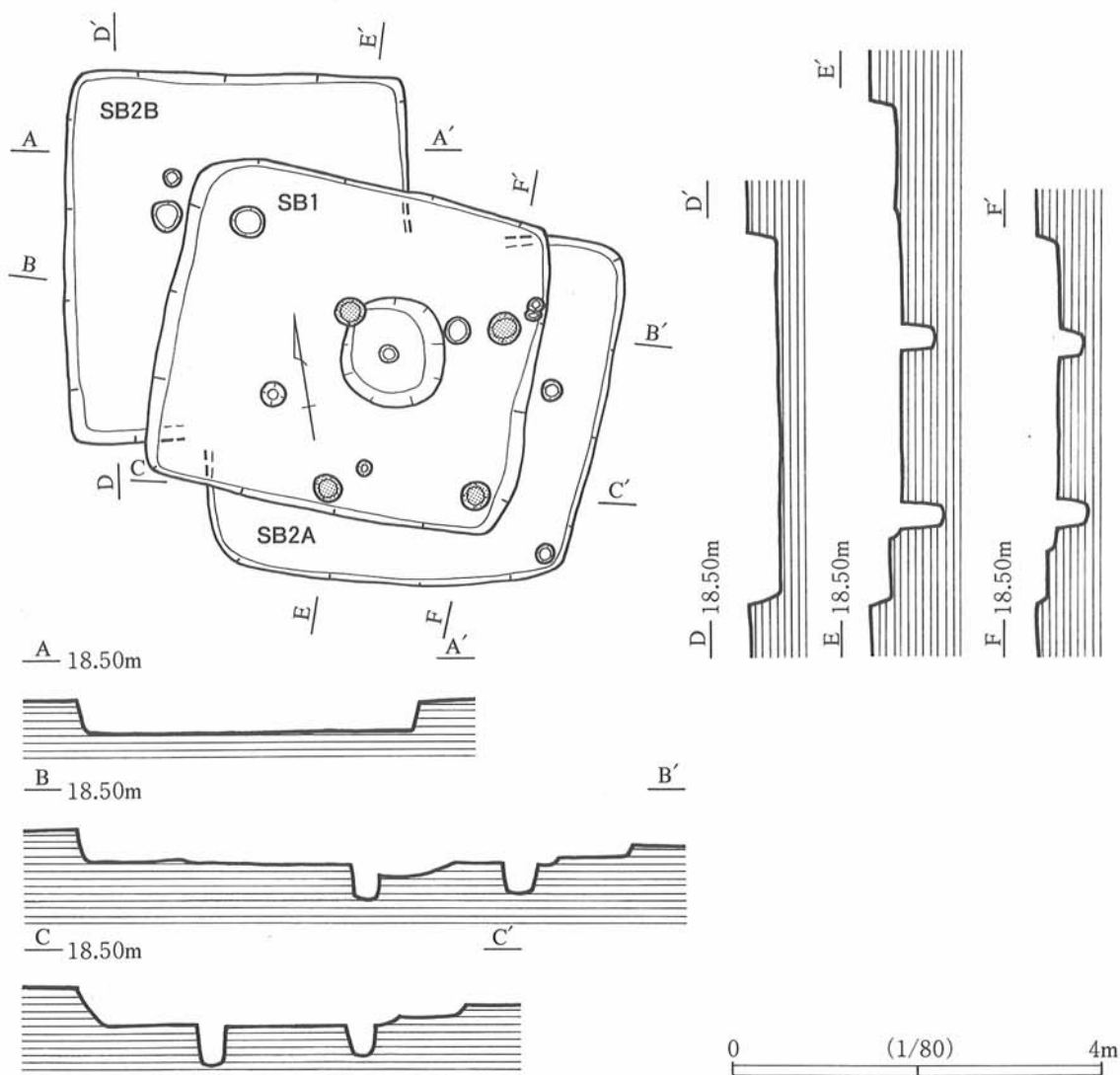
第7図 竪穴住居跡実測図⑤

S B 16(第10図) 2地区の東側に位置する。住居北側の一部は調査区外であるが、主柱穴が4本の方形住居である。北西壁中央部付近の床面からカマド跡と思われる焼土塊を確認した。また、周囲を幅15cm、床面からの深さが6cm程度の溝がめぐっている。埋土は灰黄褐色粘質土の単一層である。出土遺物には、須恵器の杯蓋(68)、土師器の杯(69)・高杯(70・71)、滑石製勾玉(423)などがある。この住居の時期は6世紀前半に比定される。

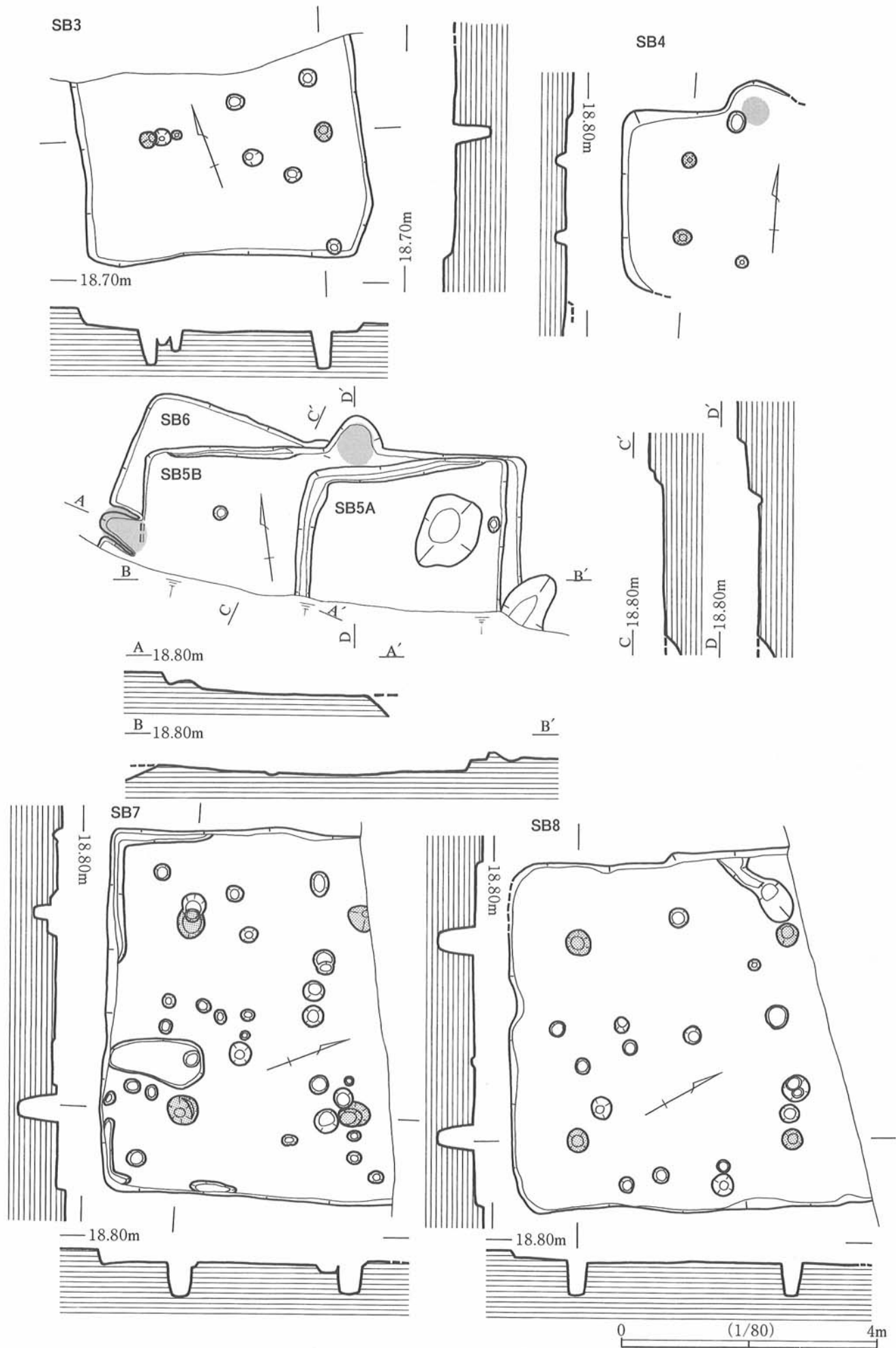
S B 22(第11図) 2地区の北側に位置する。主柱穴が4本の方形住居である。S B 21に切られる。北壁中央付近床面からカマド跡と思われる焼土塊を確認した。出土遺物には、須恵器の杯蓋(109)・杯身(110・111)、土師器の甕(112)・杯(113)・製塩土器(114・115)、砥石(382)がある。この住居の時期は6世紀前半に比定される。

S B 23(第11図) 2地区の北側に位置する。主柱穴が4本の方形住居である。S B 21に切られる。遺物は、須恵器の壺(121)・杯蓋(116・117)・杯身(118)・高杯(119)・甕(120)、土師器の甕(123～125)・高杯(122)などが、北壁に沿って出土した。また、埋土中からは石鏃(370)も出土している。この住居の時代は6世紀後半に比定される。

S B 24(第11図、図版7) 2地区の中央付近に位置する。主柱穴が4本の方形住居である。住居の東側に屋内周溝がある。周溝の幅は20cm、床面からの深さは5cmである。出土遺物には、土師器の甕



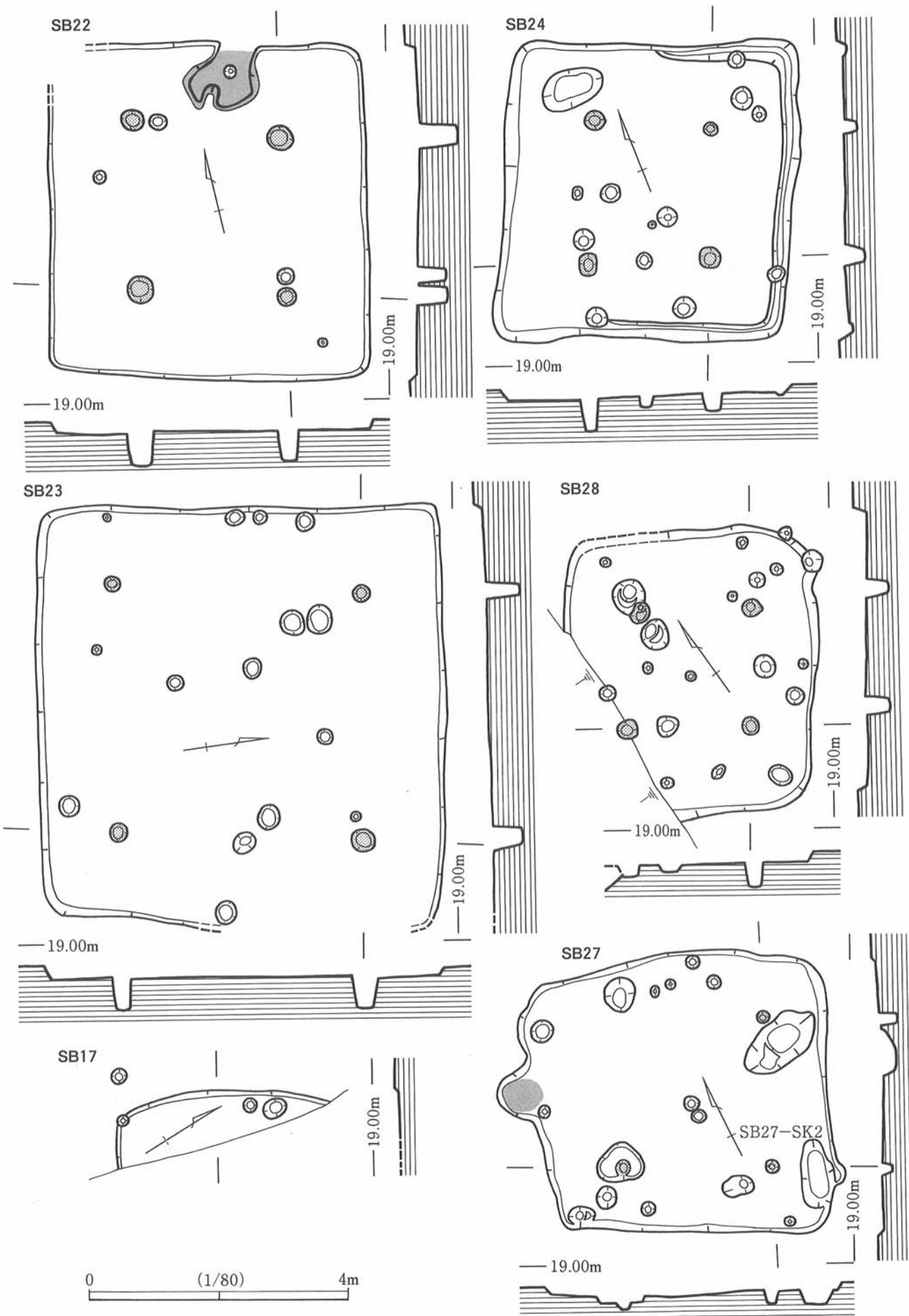
第8図 竪穴住居跡実測図⑥



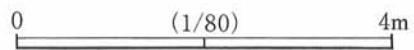
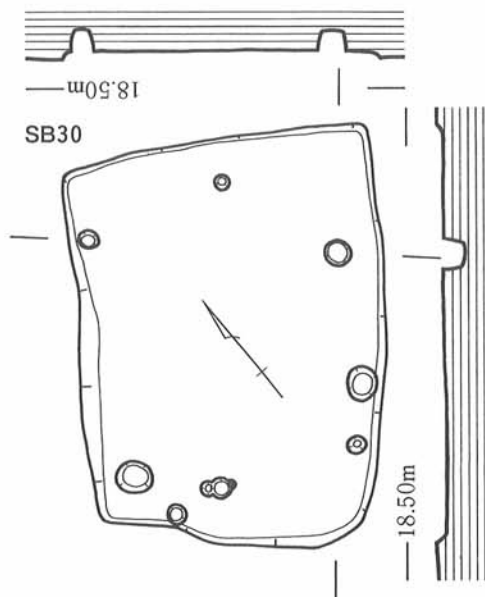
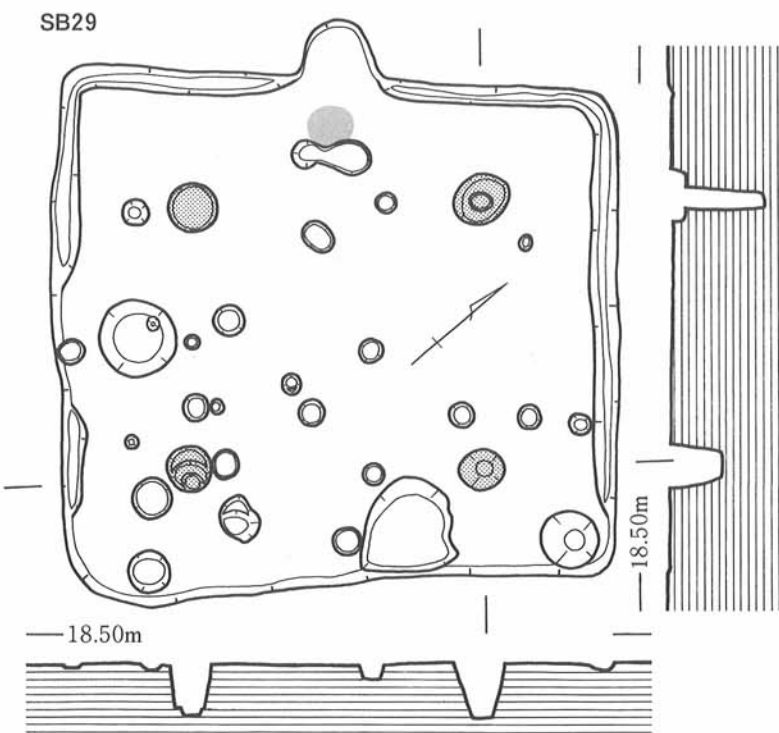
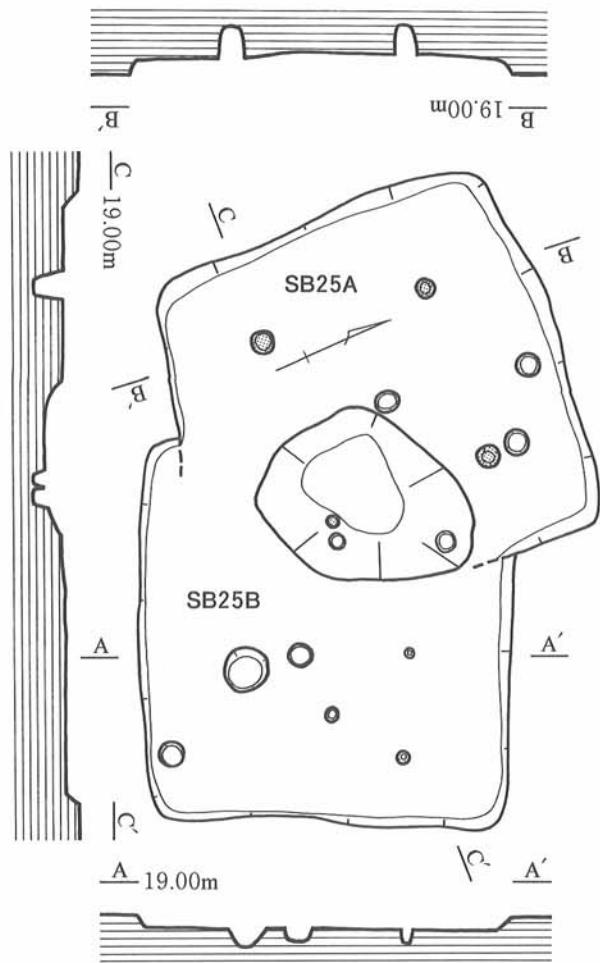
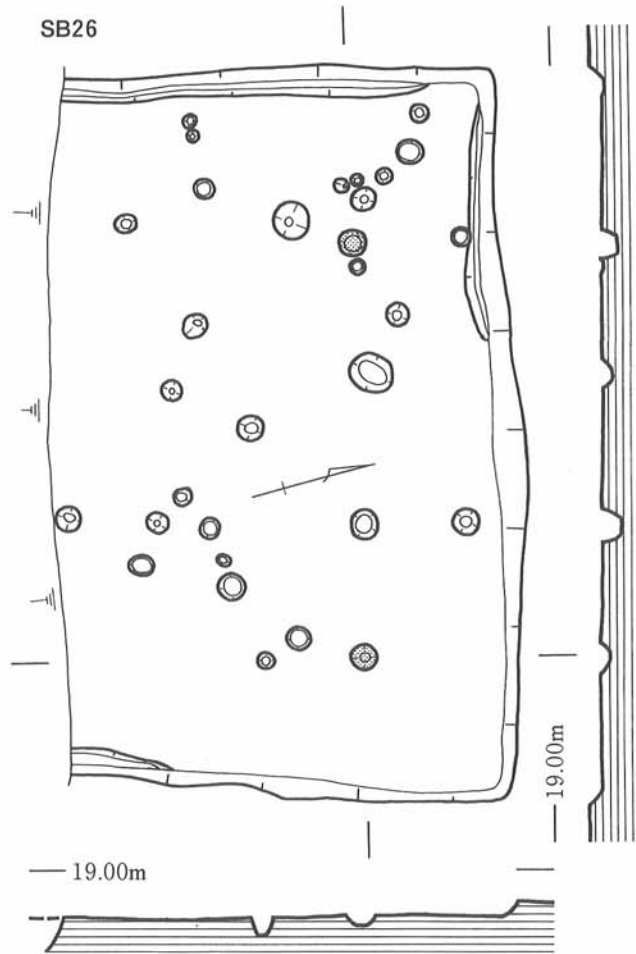
第9図 竪穴住居跡実測図⑦



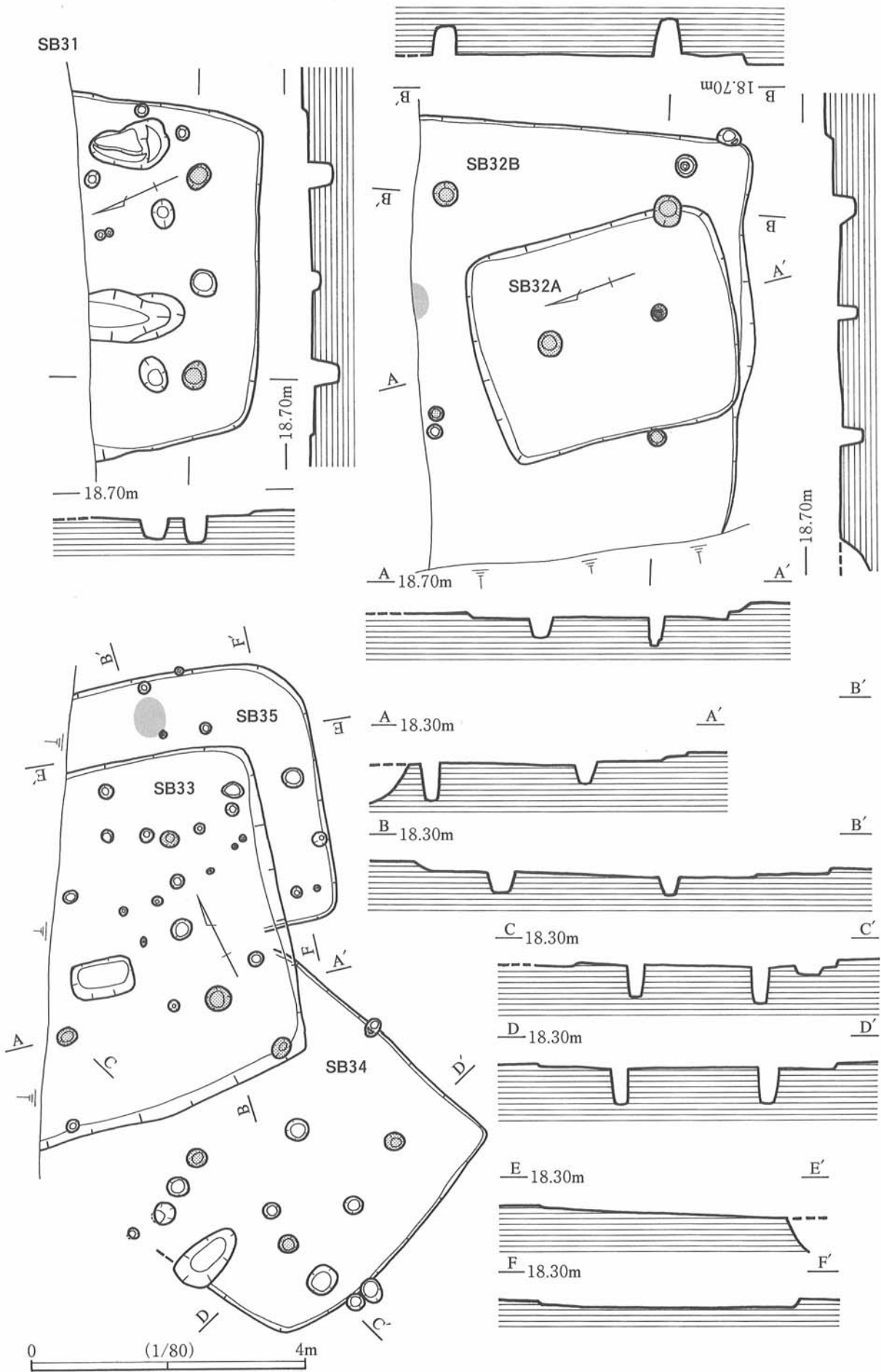
第10図 竪穴住居跡実測図⑧



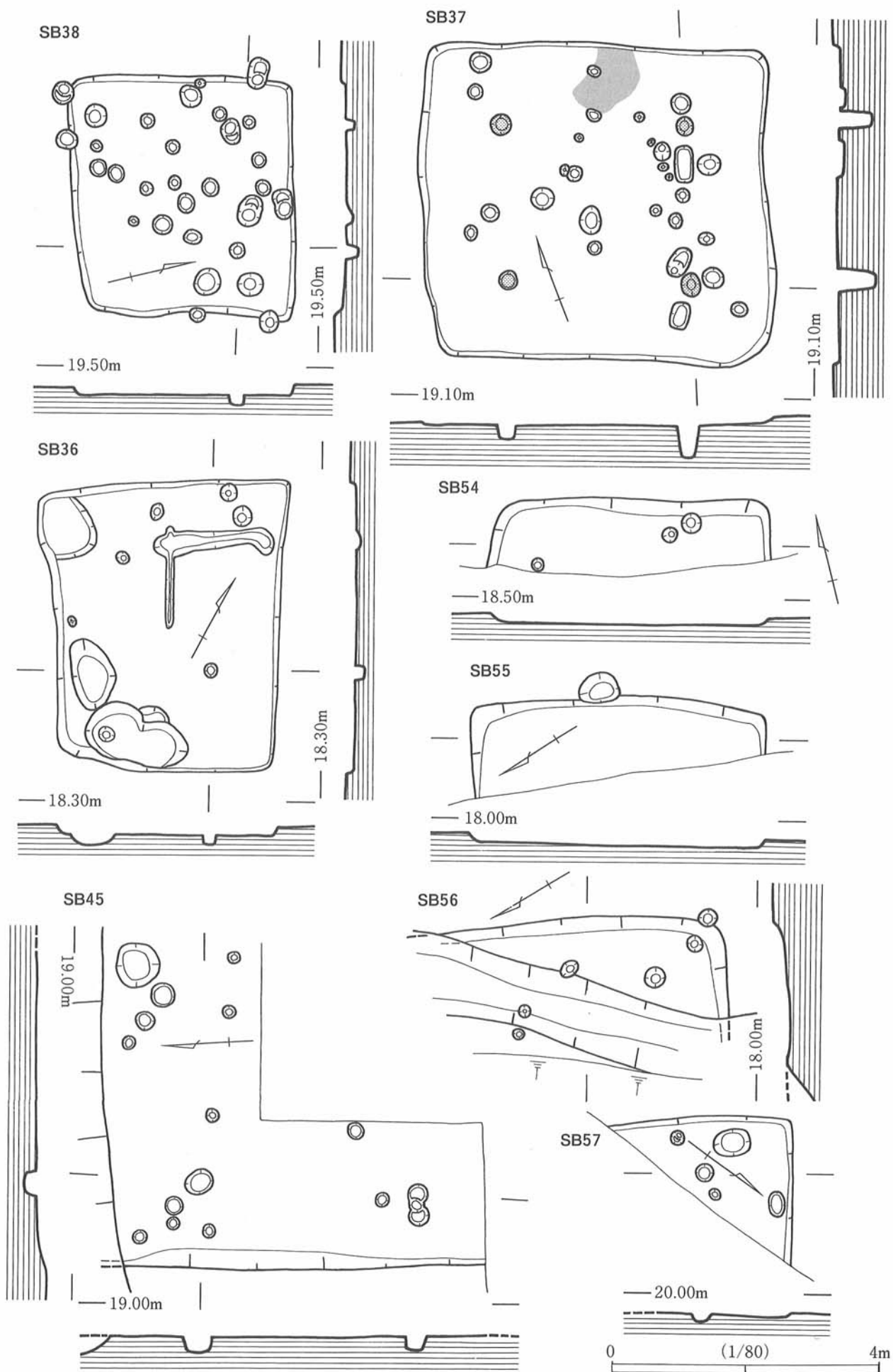
第11図 竪穴住居跡実測図⑨



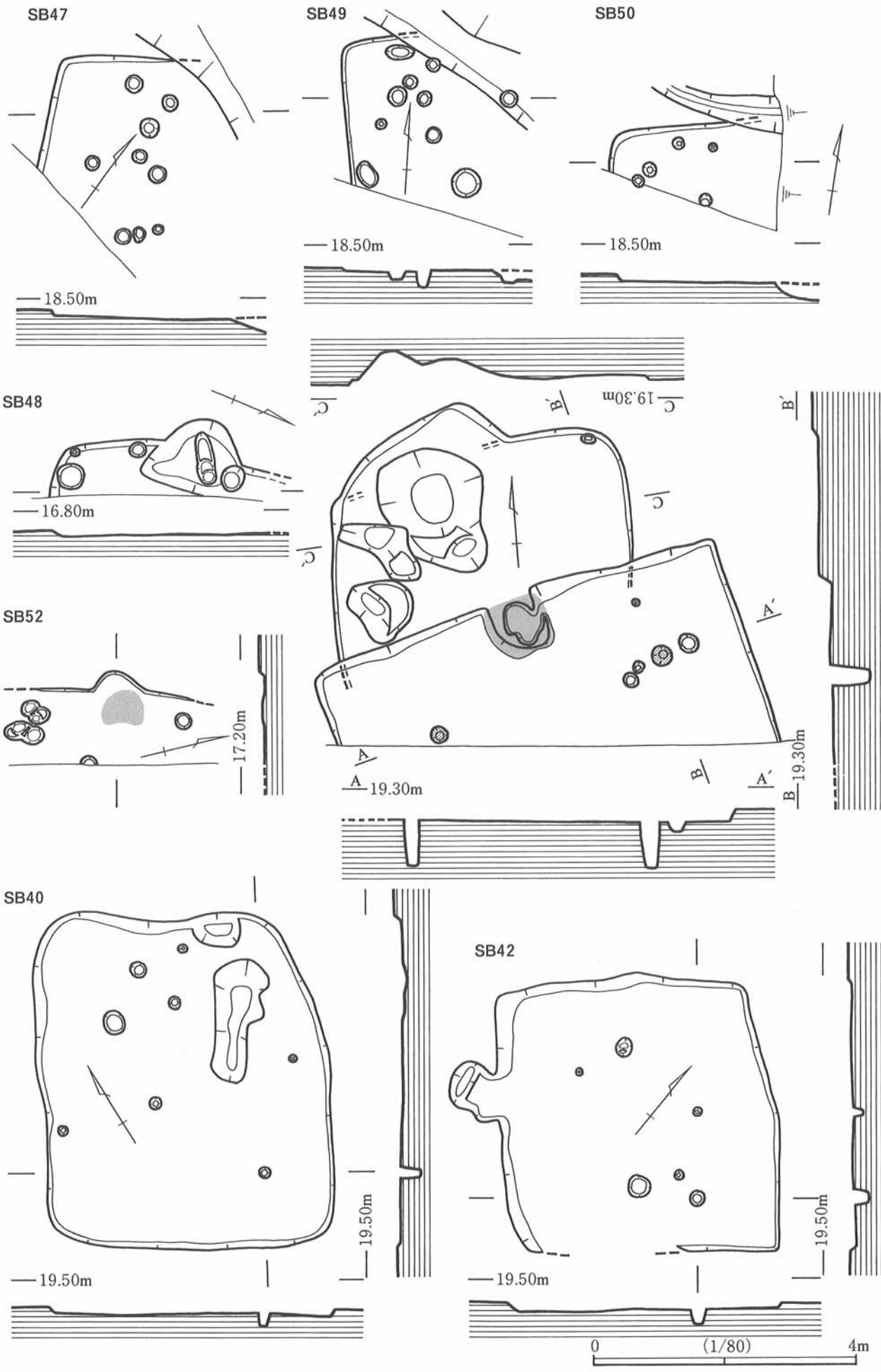
第12図 竖穴住居跡実測図⑩



第13图 竖穴住居跡実測图①



第14図 竪穴住居跡実測図⑫



第15図 竪穴住居跡実測図⑬

(127・128)・杯(126)などがある。また、埋土中より石鏃(368)が出土している。この住居の時期は6世紀前半頃に比定される。

S B 25 A・25 B (第12図) 2地区の中央付近に位置する。S B 25 AがS B 25 Bを切っている。S B 25 Aは支柱穴が4本の方形住居である。S B 25 Bは支柱穴不明の方形住居である。住居中央部の土坑と住居との関係は不明である。S B 25 Aの出土遺物には、須恵器の長頸壺の口縁部(134)・杯蓋(130～132)・杯身(133)・高杯の蓋(129)、土師器の甕(141・142)・杯(135・136)・高杯(137)などがあり、S B 25 Bの出土遺物には、土師器の杯(138・139)・高杯(140)・鞆羽口(364)などがある。S B 25 Aの時期は6世紀後半、S B 25 Bの時期は6世紀前半に比定される。

S B 26 (第12図) 2地区の中央部に位置する。今回の調査では1辺7.70mの最大規模の住居跡であるが、南側は後世の削平により、残存しない。2軒の切り合いをとまなう住居跡とも考えられるが、土層観察や出土土器などから支柱穴が4本で1軒の方形住居であると判断した。住居の西側に屋内周溝がある。周溝の幅は20cm、床面からの深さは4cm程度である。出土遺物には須恵器の蓋(143)、砥石(378)、滑石製模造品(419)などがあり、この住居の時期は6世紀中頃ではないかとみられる。

S B 32 A・32 B (第13図、図版7) 3A地区の西側に位置する。住居の北側は調査区外である。S B 32 AがS B 32 Bを切っている。S B 32 Aは支柱穴が2本の長方形住居、S B 32 Bは支柱穴が4本の方形住居である。S B 32 Bの北側中央部付近の床面より焼土塊を確認したので、北側は未調査ではあるが、この辺りにカマド跡があった可能性がある。S B 32 Aの出土遺物には須恵器の杯蓋(154)、土師器の甕(155)・ミニチュア土器(156)があり、S B 32 Bの出土遺物には須恵器の杯蓋(158)・提瓶(160)、土師器の甕(157・161)・杯(159)などがある。S B 32 Bが6世紀中頃、S B 32 Aが7世紀初めに比定される。住居の切り合いと杯蓋154と158の新旧関係からS B 32 Aの方が少し新しい。

S B 33・34・35 (第13図) 4B地区の南側に位置する。いずれの住居も西側は後世の削平によって残存していない。S B 33がS B 34・S B 35を切っている。S B 34とS B 35の新旧関係は不明である。S B 33とS B 34はそれぞれ支柱穴が4本の方形住居であると考えられる。S B 35は支柱穴は不明である。S B 33の出土遺物には、須恵器の杯蓋(162)・杯身(163・164)・高杯(165)・甕の口縁部(166)、土師器の甕(167～170)などが出土している。S B 33の時期は6世紀中頃に比定される。S B 34の遺物には、土師器の甕(171)などがあり、時期は6世紀前半に比定される。S B 35の時期は不明である。

S B 45 (第14図) 1A地区の西側に位置する。調査区の範囲が狭いところで、西側の壁のみ検出された。北側はS D 1に切られている。規模、平面形、支柱穴は不明である。遺物を多く含み、須恵器の短頸壺(242)・甕(240・241)・杯蓋(230・231・238)・杯身(232～235)・高杯(237・239)・高杯の蓋(236)、土師器の甕(243～245)・甗(246・247)・土錘(248)などが、床面の全面から出土した。この住居の時期は7世紀初めに比定される。

S B 43 (第15図) 5地区の南東隅に位置し、S B 39の南側を切っている。南側が調査区外であるが、支柱穴と見られる2本の柱穴が確認できることから、支柱穴4本の方形住居と考えられる。北壁中央部付近の床面にカマド跡と思われる焼土塊を確認した。カマド跡の中央部から支脚として使用されていたと思われる石も出土した。出土遺物には、土師器の壺(227)・甕(228)・甗(229)・杯(225・226)・製塩土器(224)・ミニチュア土器(223)などがある。この住居の時期は6世紀前半に比定される。

第1表 竪穴住居跡一覧表

	地区	遺構番号	規模 (cm)			軸方位 長軸基本	カマド の向き	出土遺物	時期
			長軸	短軸	深さ				
1	1C	SB1	392	340	36	N70°W	—	須恵器(杯蓋・杯身・皿)、石鏃	7世紀初め
2	1C	SB2A	396	364	34	N9°E	—	須恵器(杯蓋・杯身・提瓶?)、土師器(甕・高杯)、土錘	6世紀後半
3	1C	SB2B	388	376	20	N78°W	—	土師器(甕・甗・杯・ミニチュア土器)	6世紀後半
4	1C	SB3	436	—	4	N74°W	—	須恵器(杯身)、土師器(甕・杯)	6世紀後半
5	1C	SB4	—	—	8	N4°W	北	須恵器(杯蓋・甕)、土師器(甕・杯)	6世紀後半
6	1C	SB5A	—	—	30	N7°E	—	—	6世紀後半
7	1C	SB5B	588	—	15	N7°E	北	土師器(甕・杯・高杯)、砥石	6世紀後半
8	1C	SB6	—	—	8	N28°E	西	—	6世紀前半?
9	1C	SB7	562	—	18	N64°W	—	土師器(甕・杯・製塩土器)	6世紀後半
10	1C	SB8	—	534	10	N30°E	—	須恵器(短頸壺・杯蓋・杯身・蓋・器台?)、土師器(甕・甗・高杯)、砥石、紡錘車	7世紀初め
11	1C	SB9	540	—	16	N69°W	北東	須恵器(甕・杯蓋・杯身)、土師器(甕・甗・高杯)、切子玉	7世紀初め
12	1C	SB10	496	—	18	N79°E	—	須恵器(杯蓋・杯身)、土師器(甕)	6世紀後半
13	1C	SB11	462	426	8	N15°E	—	土師器(甕・杯・高杯)、滑石製模造品	—
14	2	SB13	352	—	5	N8°E	—	土師器(甕・杯)	—
15	2	SB14	456	442	21	N44°W	北西	須恵器(杯蓋)、土師器(甕・杯・製塩土器)、砥石	6世紀前半
16	2	SB15	499	484	15	N50°E	—	須恵器(杯身)、土師器(杯・ミニチュア土器)	6世紀前半
17	2	SB16	556	532	13	N32°W	北西	須恵器(杯蓋)、土師器(杯・高杯)、勾玉	6世紀前半
18	2	SB17	—	—	5	N59°W	—	須恵器、土師器(甕)	—
19	2	SB18	544	494	21	N79°W	西	須恵器(壺・長頸壺・大甕・杯蓋・杯身・高杯)、土師器(甕・杯)、有孔円板、砥石	7世紀初め
20	2	SB19	464	414	16	N24°E	西	土師器(甕)、砥石、滑石製模造品	6世紀後半?
21	2	SB20	482	470	15	N76°E	—	須恵器(杯蓋・杯身)、土師器(甕・甗・杯)、有孔円板、紡錘車、勾玉	6世紀前半
22	2	SB21	430	390	13	N75°W	北東	須恵器(杯蓋・杯身)、土師器(甕・甗・高杯)	7世紀初め
23	2	SB22	522	492	18	N12°E	北	須恵器(杯蓋・杯身)、土師器(甕・杯・製塩土器)、砥石	6世紀前半
24	2	SB23	630	618	20	N83°W	—	須恵器(壺・杯蓋・杯身・高杯・甗)、土師器(甕・高杯)、石鏃	6世紀後半
25	2	SB24	448	436	15	N22°E	—	土師器(甕・杯)、石鏃	6世紀前半?
26	2	SB25A	412	392	10	N86°W	—	須恵器(長頸壺・杯蓋・杯身・高杯蓋)、土師器(甕・杯・高杯)	6世紀後半
27	2	SB25B	408	388	15	N66°W	—	土師器(杯・高杯)、輪羽口	6世紀前半?
28	2	SB26	770	—	13	N76°W	—	須恵器(蓋)、砥石、滑石製模造品	6世紀中頃?
29	2	SB27	446	416	20	N22°E	北西	須恵器(杯蓋・杯身・高杯)、土師器(甕)、滑石製模造品	6世紀後半
30	2	SB28	438	388	12	N34°E	—	須恵器(杯蓋・杯身)	6世紀後半
31	2	SB29	578	516	4	N38°E	北西	土師器(甕)	6世紀後半
32	2	SB30	436	304	6	N35°E	—	須恵器(杯蓋・杯身・高杯蓋)	6世紀後半
33	3A	SB31	476	—	8	N65°W	—	須恵器(杯蓋・杯身)、土師器(甕・杯)	6世紀後半
34	3A	SB32A	376	304	8	N4°E	—	須恵器(杯蓋)、土師器(甕・ミニチュア土器)	7世紀初め
35	3A	SB32B	540	—	10	N71°W	北	須恵器(杯蓋・提瓶)、土師器(甕・杯)	6世紀中頃
36	4B	SB33	508	—	15	N9°E	—	須恵器(杯蓋・杯身・高杯・甗)、土師器(甕)	6世紀中頃
37	4B	SB34	436	—	10	N73°E	—	土師器(甕)	6世紀前半
38	4B	SB35	388	—	6	N16°E	北	滑石製模造品	6世紀前半
39	4B	SB36	436	326	24	N27°W	—	砥石	—
40	4A	SB37	514	470	10	N67°W	北	須恵器(杯蓋・杯身・高杯)、土師器(甕・鉢)	6世紀後半
41	4A	SB38	352	334	16	N76°W	—	土師器(杯・台付杯・ミニチュア土器)	6世紀前半?
42	5	SB39	454	—	7	N85°E	—	土師器(甕・製塩土器)、土錘、石製模造品、勾玉	6世紀前半
43	5	SB40	496	428	6	N27°E	—	須恵器(杯蓋・杯・杯(高杯?))、土師器(甕)	6世紀後半
44	5	SB41	482	458	20	N23°E	(北東)	須恵器(短頸壺・杯蓋・杯身)、土師器(甕・甗・杯・高杯・鉢・甗・製塩土器・ミニチュア土器)、勾玉?、滑石製模造品	6世紀前半
45	5	SB42	410	402	8	N39°W	(西)	土師器(甕・甗・杯)、滑石製模造品	6世紀前半
46	5	SB43	634	—	21	N75°E	北	土師器(壺?・甕・甗・杯・製塩土器・ミニチュア土器)	6世紀前半
47	1A	SB45	—	—	7	N8°E	—	須恵器(短頸壺・甕・杯蓋・杯身・高杯・高杯蓋)、土師器(甕・甗)、土錘	7世紀初め
48	1A	SB47	—	—	7	N52°E	—	須恵器(杯身)、土師器(甕)	6世紀後半
49	1B	SB48	—	—	5	N22°W	(西)	須恵器(杯蓋)、土師器(甕)	—
50	1A	SB49	—	—	4	N85°E	—	須恵器(杯(高杯?))、土師器(甕)	6世紀後半
51	1A	SB50	—	—	12	N82°E	—	須恵器(甕)	6世紀後半?
52	1B	SB52	—	—	8	N75°W	西	土師器(甕・高杯)	6世紀後半?
53	3A	SB54	420	—	10	N76°W	—	須恵器(杯蓋)、土師器(甕・杯・高杯)、滑石製模造品	6世紀中頃
54	4B	SB55	440	—	16	N31°E	—	—	—
55	4B	SB56	—	—	15	N58°W	—	—	—
56	4A	SB57	—	—	5	N35°W	—	—	—

カマドの向きの () は煙出部のあるもの

2 掘立柱建物跡 (第16図～21図、図版8・9)

今回の調査で多数の柱穴が検出され、その中から掘立柱建物跡が49棟復元できた(第2表)。他にも掘立柱建物として復元される可能性があるものもあるが、確実性の高い建物のみを取り上げた。掘立柱建物跡は1C・1D・2・3A・4A・4B・4C地区で検出された。特に2地区と4A地区で建物跡が集中している。北西に位置する4A地区の掘立柱建物は、棟方向、出土遺物から中世に建てられたものと推測される。全域では3間×2間の建物が9棟確認され、4間×3間(SB118)、4間×2間(SB123)の大型建物跡も検出された。以下、代表的なものを取り上げる。

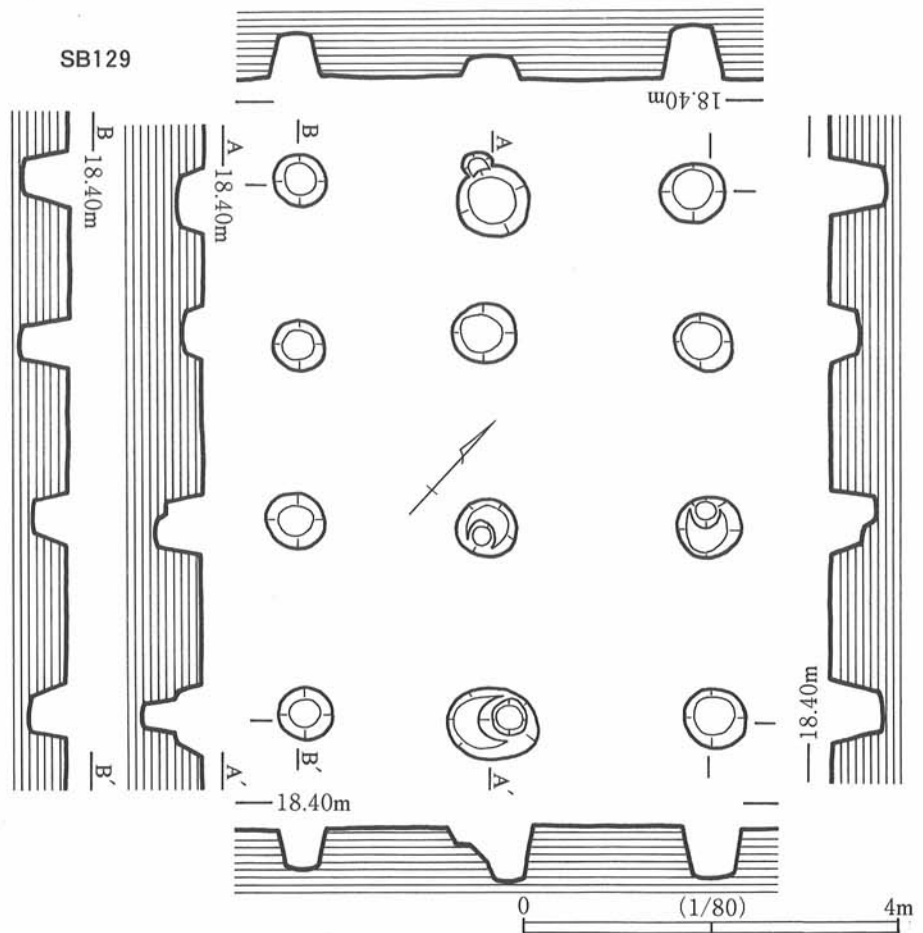
SB129(第16図、図版9) 2地区の南側に位置する。規模は3間×2間の総柱建物である。桁の北西方向の柱穴の並びが短くなっている。棟方向はN42°W。柱間の平均は桁行方向1.87m、梁行方向2.18m。柱穴の規模は直径52～72cm、深さ24～66cm。後世の削平によりかなり浅くなったと考えられる。土師器の椀・杯が出土。古墳時代の堅穴住居を切っている。この建物は、平安時代後期に比定される。

SB118(第17図、図版9) 2地区の北側に位置している。今回の調査で最大規模の建物である。側柱の建物で4間×3間である。棟方向はN78°E。桁行長7.10m、梁行長5.56m。床面積約40㎡。柱穴の規模は直径52～88cm、深さ30～44cm。1本の柱穴は耕作用水路で欠損。柱穴から須恵器片、土師器片、滑石片が出土。この建物は、平安時代後期に比定される。

SB123(第17図、図版8) 2地区の北側に位置し堅穴住居跡を切っている。4間×2間の大規模な建物である。棟方向はN62°Eで、棟方向と柱穴の規模及び出土遺物から隣接するSB118と同時期の建物であると考えられる。

柱間の平均は、桁行方向1.51m、梁行方向2.30m。柱穴の規模は直径56～72cm、深さ52～70cm。柱穴から黒色土器(土師器)出土。この建物の時期は、平安時代後期に比定される。

SB103(第18図) 1C地区の東側に位置する。規模は2間×2間の建物で梁方向に庇が付設されている。棟方向はN57°W。柱間の平均は桁行方向2.22m、梁行方向1.84m。柱穴の規模は直径32～40cm、深さ12～30cm。柱穴から須恵器片、土師器片、姫島産黒曜石片出土。この建物の時期は、



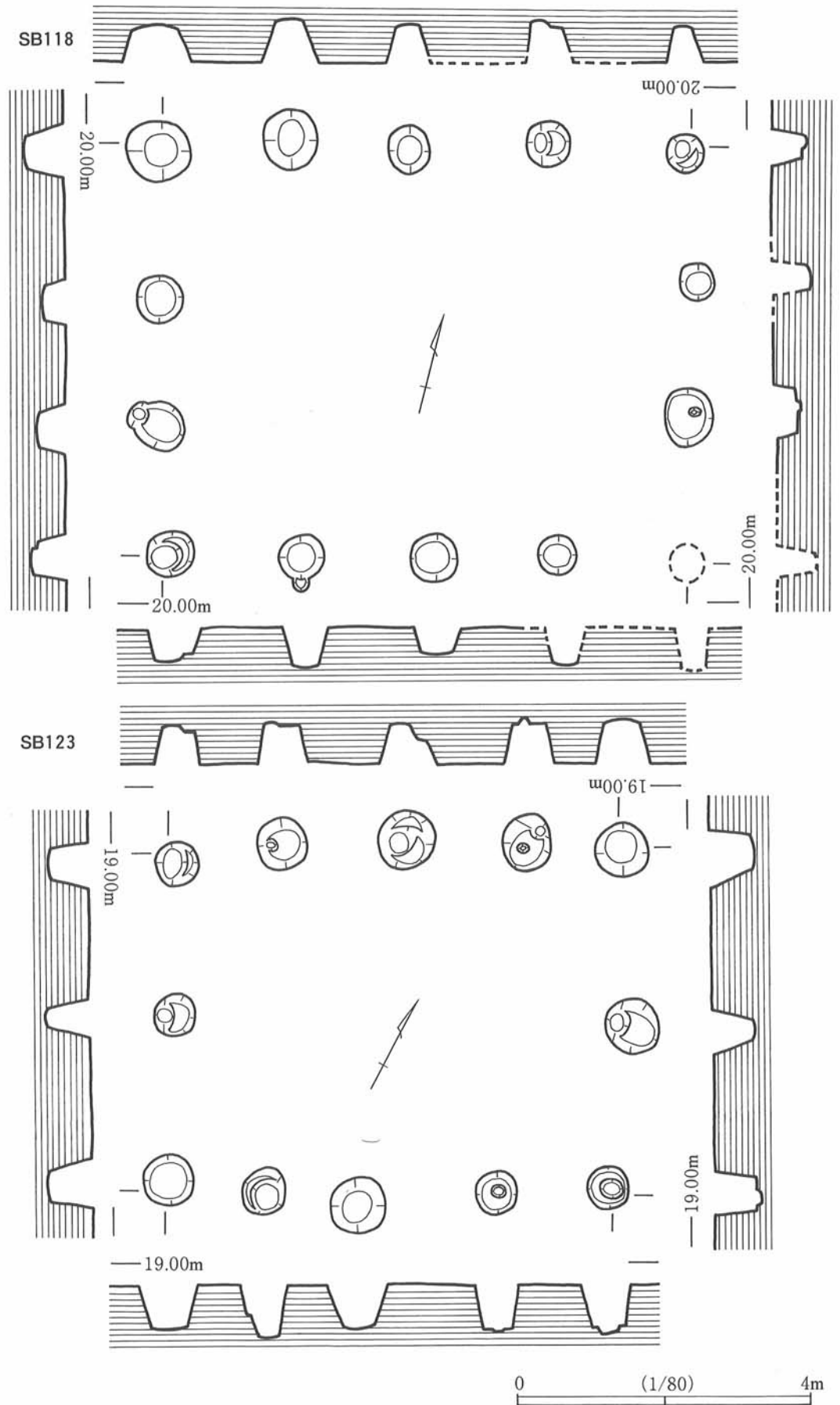
第16図 掘立柱建物跡実測図①

平安時代後期に比定される。棟方向と出土遺物からS B 102と同時期の建物であると考えられる。

S B 105(第18図) 1 C地区に位置する。規模は2間×1間の建物である。棟方向はN71° W。柱間平均は桁行方向1.64m、梁行方向3.18mで正方形に近い。柱穴の規模は、直径20~28cm、深さ10~18cmで浅く後世の削平が考えられる。小規模な小屋などの施設が想定される。

S B 102(第18図) 1 C地区に位置する。規模は3間×2間の建物である。棟方向はN58° W。柱間の平均は桁行方向1.63m、梁行方向1.89m。柱穴の規模は直径16~44cm、深さ8~36cm。柱穴から六連式製塩土器(255)出土。建物の時期は平安時代に比定される。

S B 117(第18図、図版9) 2地区の北側に位置する。規模は2間×2間の総柱の正方形に近い建物である。棟方向はN79° W。柱間の平均は桁行方向1.47m、梁行方向1.40m。柱穴の規模は直径28~56cm、深さ32~56cmで小規模な倉庫と推定される。柱穴から、須恵器片、土師器片出土。この建物は平安時代後期に比定される。



第17図 掘立柱建物跡実測図②

SB107(第19図) 1D地区の北側に位置する。規模は2間×1間の建物である。棟方向はN4°E。柱間の平均は桁行方向1.94m、梁行方向2.12m。柱穴の規模は直径20~28cm、深さ8~36cm。

SB113(第19図) 2地区の南東に位置する。規模は2間×2間の建物である。棟方向はN14°E

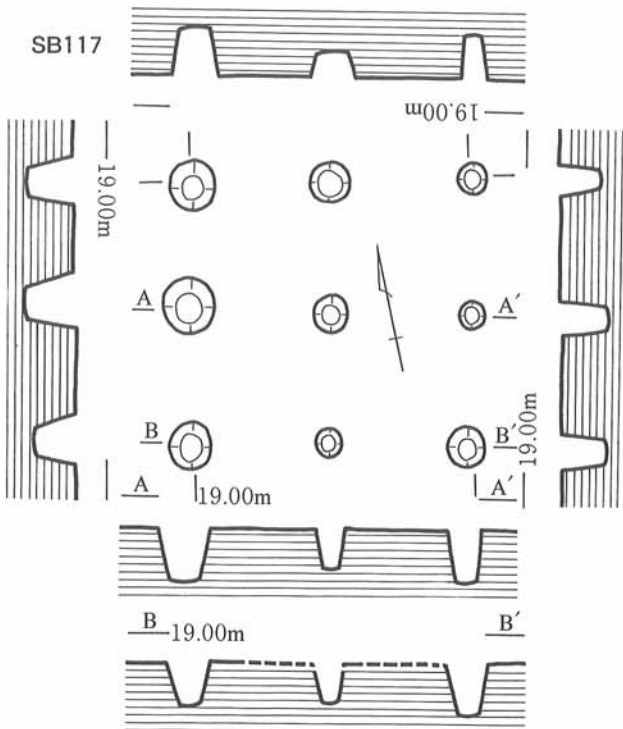
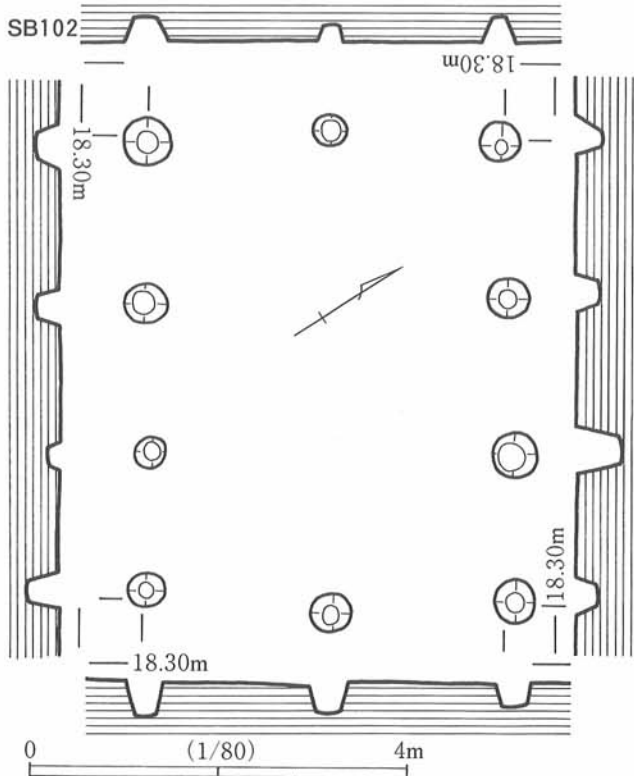
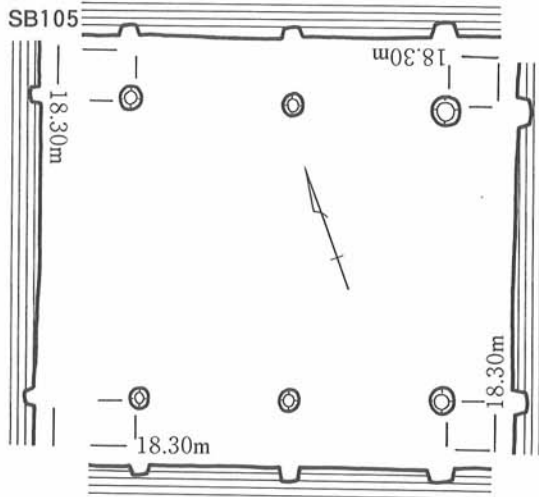
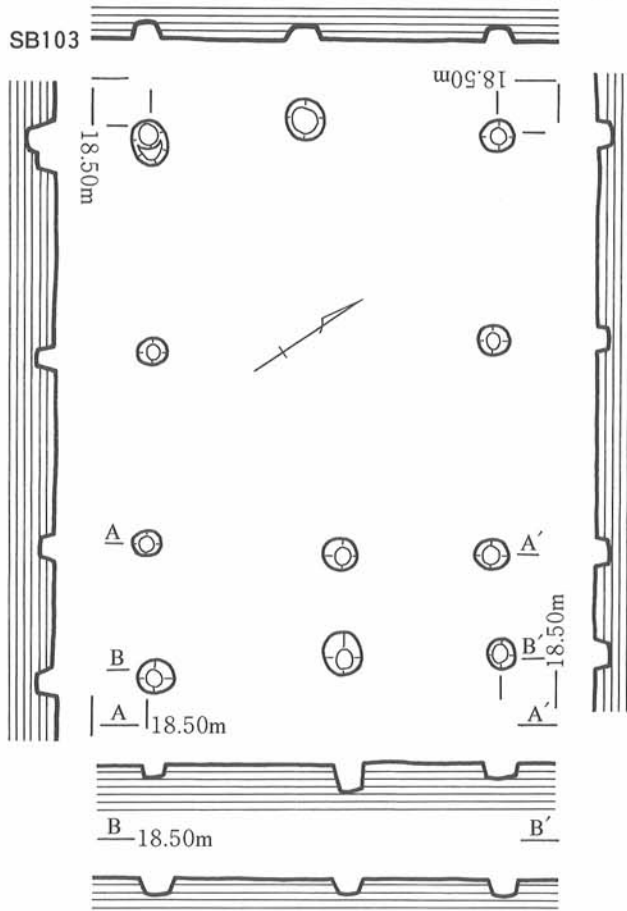
柱間の平均は桁行方向2.72m、梁行方向2.17m。

柱穴の規模は直径34~56cm、深さ40~48cm。柱穴から須恵器片、土師器の椀(256)出土。この建物の時期は、平安時代後期に比定される。

SB120(第19図) 2地区の北東に位置する。

規模は3間×2間の建物である。棟方向はN25°E。

柱間の平均は桁行方向1.68m、梁行方向1.56m。

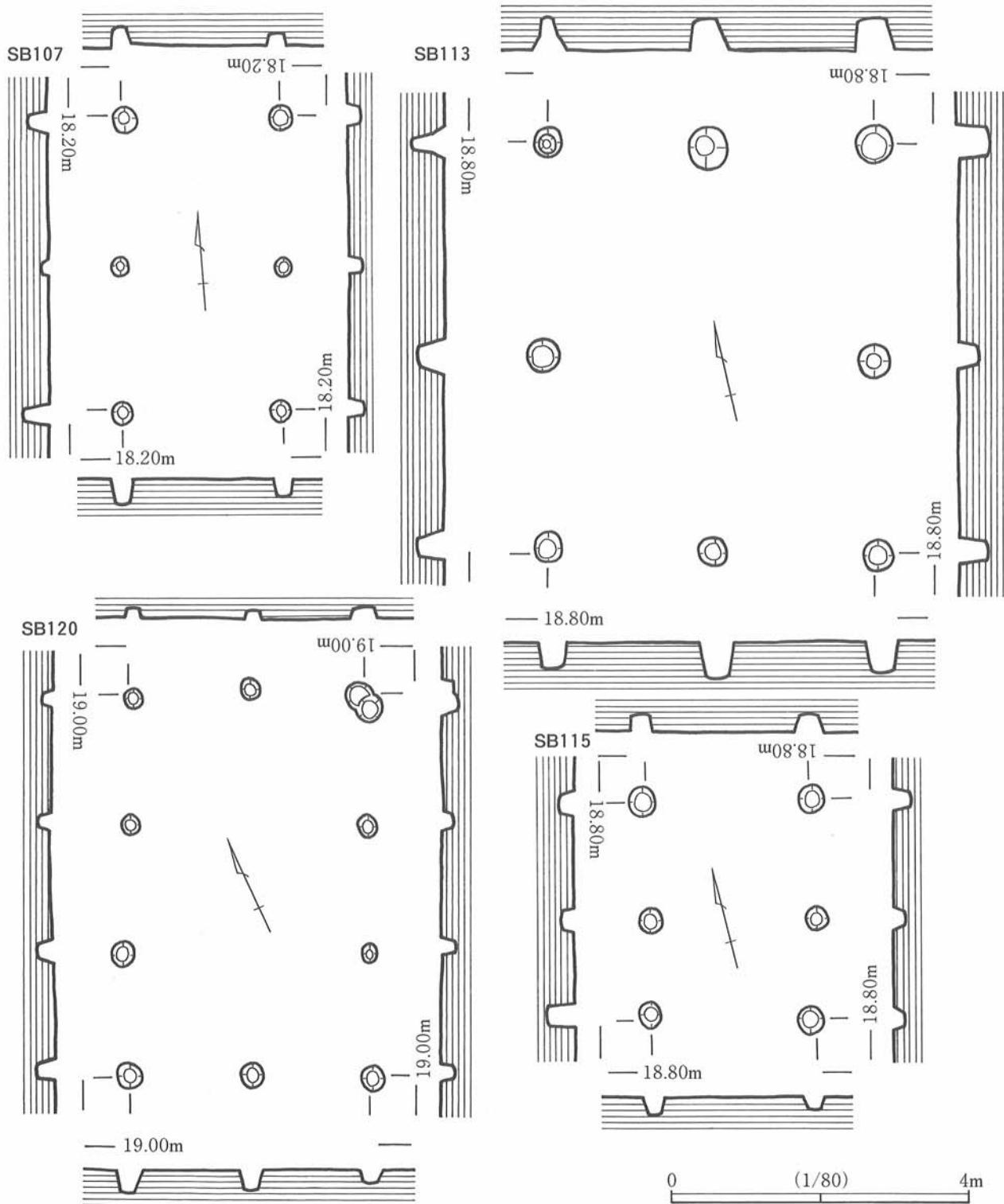


第18図 掘立柱建物跡実測図③

柱穴の規模は直径24~28cm、深さ10~28cm。柱穴から須恵器片、土師器片出土。この建物の時期は、平安時代後期に比定される。

SB 115(第19図) 2地区の南東に位置する。規模は2間×1間の建物である。棟方向はN14° E。柱間の平均は桁方向1.46m、梁行方向2.20m。柱穴の規模は直径28~36cm、深さ16~42cm。比較的規模が小さい小屋として使用された可能性がある。柱穴から土師器の椀(257)出土。この建物の時期は、平安時代後期に比定される。

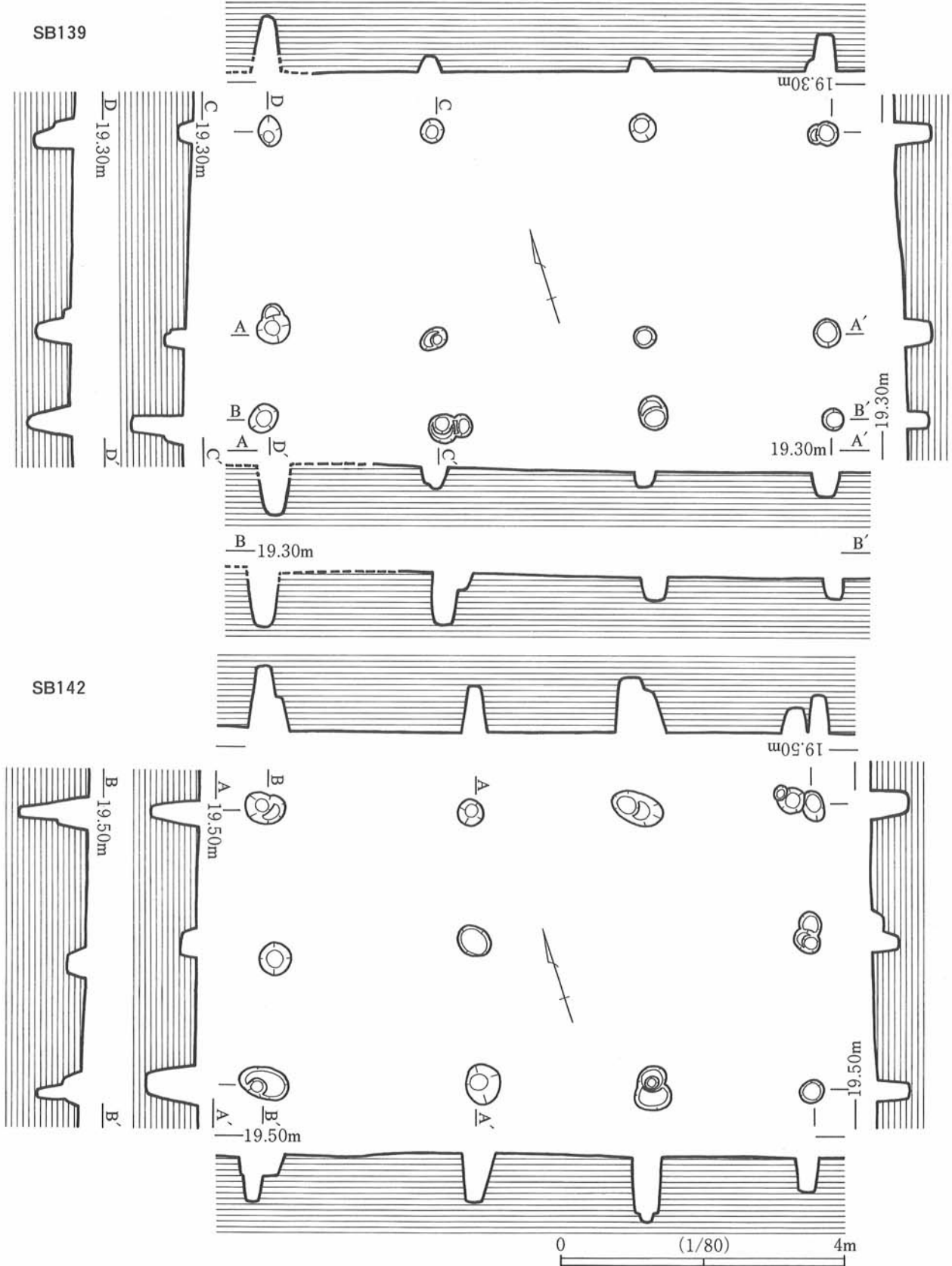
SB 139(第20図、図版 8) 4 A地区に位置する。規模は2間×1間の建物で南西に庇を構成する



第19図 掘立柱建物跡実測図④

柱穴が母屋から1.2mから離れたところにあり、西側の梁行方向にも庇がつく。棟方向はN73° W。
 柱間の平均は桁行方向2.60m、梁行方向2.82m。柱穴の規模は直径32~36cm、深さ20~74cm。柱穴から土師器の皿(258)、滑石片、瓦質土器の鍋片、白磁片出土。建物の時期は、中世に比定される。

S B 142(第20図、図版 8) 4 A 地区に位置する。規模は3間×2間の建物である。棟方向はN72° W。

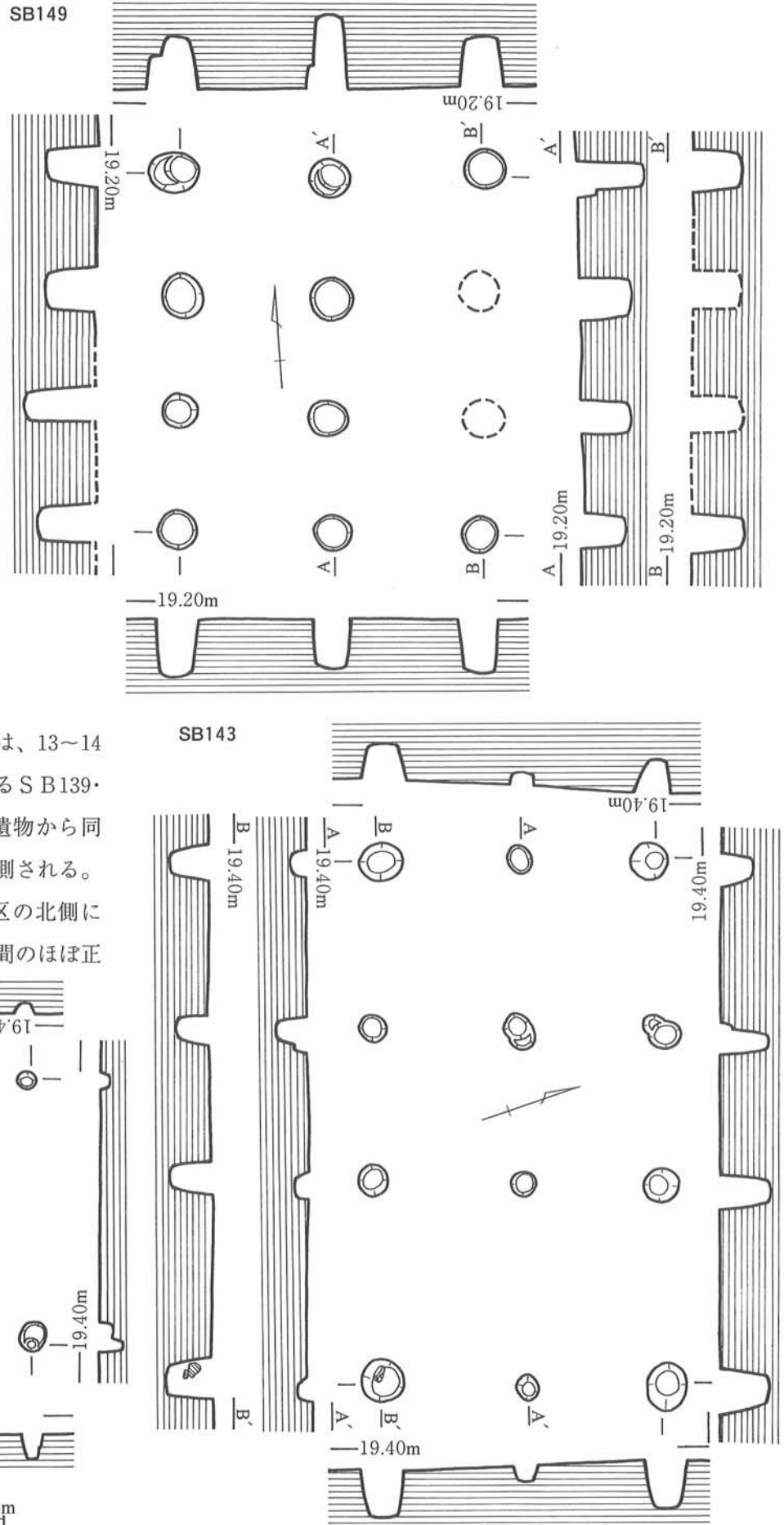


第20図 掘立柱建物跡実測図⑤

柱間の平均は桁行方向
2.52m、梁行方向1.92m。
柱穴の規模は直径32～
60cm、深さ28～85cm。柱
穴から土師器の皿
(261・262)・杯(263)、瓦
質土器の鍋、青磁片出土。
建物の時期は、13～14世
紀に比定される。

**S B 143 (第21図、図版
8)** 4 A地区に位置
する。規模は3間×2間
の建物である。棟方向は
N73° W。柱間の平均は
桁行方向2.25m、梁行方
向1.81m。柱穴の規模は
直径28～56cm、深さ16～
64cm。柱穴から土師器の
皿(259)・杯(260)、瓦質
土器の鍋出土。建物の時期は、13～14
世紀に比定される。隣接するS B 139・
S B 142とは棟方向・出土遺物から同
時期に建てられたものと推測される。

S B 146 (第21図) 5地区の北側に
位置する。規模は2間×1間のほぼ正



第21図 掘立柱建物跡実測図⑥

方形をした建物である。棟方向はN 9° W。規模は桁方向3.40m、梁行方向3.44m。柱穴の規模は直径20～40cm、深さ8～32cmとばらつきがある。柱穴から土師器片が出土。

S B149(第21図、図版9) 5地区の南東端に位置する。3間×2間の南北方向に長い大型建物である。棟方向はN 4° E。柱間の平均は桁行方向1.53m、梁行方向1.96m。柱穴の規模は直径44～60cm、深さ64～92cm。柱穴から土師器片が出土。この建物の時期は、平安時代に比定される。

第2表 掘立柱建物跡一覧表

No.	地区	遺構番号	規模(間)	棟方向	柱 間		出土遺物	時代
					桁 行	梁 行		
					建物の南西隅から(m)	建物の南西隅から(m)		
1	1A	SB101	2×?	N89°W	4.16(2.04・2.12)		須恵器(杯蓋)、土師器	
2	1C	SB102	3×2	N58°W	4.88(1.56・1.66・1.66)	3.78(1.84・1.94)	須恵器、土師器(杯・皿) 六連式製塩土器	平安時代
3	1C	SB103	2×2	N57°W	4.44(2.38・2.06)・1.30庇	3.68(1.62・2.06)	須恵器(甕)、土師器 姫島産黒曜石片	平安時代 庇がつく
4	1C	SB104	1×1	N68°W	3.12	2.08		
5	1C	SB105	2×1	N71°W	3.28(1.64・1.64)	3.18	須恵器(甕)、土師器	
6	1D	SB106	3×2	N17°E	5.39(1.80・1.64・1.86)	3.50(1.68・1.82)	土師器	
7	1D	SB107	2×1	N 4°E	3.88(1.90・1.98)	2.12	土師器	
8	1C	SB108	2×2	N16°E	3.40(1.80・1.6)	2.90(1.68・1.22)	土師器	
9	2	SB109	1×1	N62°W	2.78	1.60	土師器	
10	2	SB110	2×2	N 4°E	3.00(1.52・1.48)	2.96(1.52・1.44)	須恵器、土師器(杯)	平安時代後期
11	2	SB111	1×2	N64°W	2.40	2.04(0.86・1.18)	須恵器、土師器	平安時代後期
12	2	SB112	2×1	N25°E	3.38(1.66・1.72)	2.70(2.24)	土師器(椀)	平安時代後期
13	2	SB113	2×2	N14°E	5.44(2.58・2.86)	4.34(2.18・2.16)	須恵器、土師器(椀)	平安時代後期
14	2	SB114	2×2	N76°W	5.80(3.30・2.50)	4.26(2.14・2.12)	須恵器、土師器(椀)	平安時代後期
15	2	SB115	2×1	N14°E	2.92(1.32・1.60)	2.20	土師器(椀)	平安時代後期
16	2	SB116	3×2	N17°E	5.18(1.24・2.00・1.94)	4.74(2.34・2.40)	須恵器、土師器(椀)、白磁	平安時代後期
17	2	SB117	2×2	N79°W	2.94(1.42・1.52)	2.80(1.42・1.38)	須恵器、土師器	平安時代後期か?
18	2	SB118	4×3	N78°E	7.10(1.90・1.76・1.70・1.74)	5.56(1.78・1.68・2.10)	須恵器、土師器、滑石片	平安時代(後期)
19	2	SB119	2×2	N21°E	3.60(1.94・1.66)	3.20(1.70・1.50)	須恵器、土師器(甕)、製塩土器	平安時代後期
20	2	SB120	3×2	N25°E	5.04(1.60・1.72・1.72)	3.12(1.56・1.56)	須恵器、土師器(杯)	平安時代後期
21	2	SB121	1×1	N25°E	3.00	2.30		
22	2	SB122	2×2?	N81°W	3.74(1.92・1.82)	2.54(1.30・1.24)	土師器	平安時代後期
23	2	SB123	4×2	N62°E	6.04(1.30・1.34・1.82・1.58)	4.60(2.32・2.28)	須恵器、土師器	平安時代(後期)
24	2	SB124	1×1	N15°E	3.00	2.00	須恵器(甕)	
25	2	SB125	2×1	N66°W	3.76(1.36・2.40)	2.80	須恵器、土師器	
26	2	SB126	2×2	N70°W	6.32(3.34・2.98)	4.10(1.46・2.64)	須恵器、土師器(椀・皿) 瓦質土器(播鉢)	中世
27	2	SB127	1×1	N65°W	3.54	2.70	須恵器、土師器(杯)、青磁 白磁、瓦質土器(播鉢)	中世
28	2	SB128	1×1	N63°W	2.48	2.28	土師器(皿)、青磁	中世
29	2	SB129	3×2	N42°W	5.60(2.04・1.96・1.60)	4.36(2.04・2.32)	須恵器、土師器(椀・杯)	平安時代(後期)か?
30	2	SB130	2×1	N15°E	3.40(1.92・1.48)	3.12	土師器(杯)	中世
31	2	SB131	1×1	N34°E	1.92	1.64		
32	4B	SB132	1×1	N66°W	3.26	2.50		
33	4B	SB133	2×2	N33°E	3.46(1.32・2.14)	3.40(1.30・2.10)	土師器(杯)	
34	4B	SB134	2×1	N20°E	3.02(1.00・2.02)	2.03		
35	4B	SB135	2×1	N69°W	4.24(2.02・2.22)	3.38	須恵器、土師器	
36	4B	SB136	2×1	N72°W	3.72(1.88・1.84)	2.20	土師器	
37	4C	SB137	2×1	N73°W	3.04(1.84・1.20)	3.22	土師器(杯)	
38	4A	SB138	2×1	N72°W	3.72(2.06・1.66)	2.50	土師器	中世(13-14世紀)
39	4A	SB139	2×1	N73°W	5.60(2.96・2.64)・2.24庇	2.82・1.20庇	土師器(椀・杯・皿)、滑石片 瓦質土器(鍋)、青磁、白磁(碗)	中世(13-14世紀) 庇が2面につく
40	4A	SB140	2×2	N18°E	5.96(2.98・2.98)	4.22	須恵器(壺)、土師器(椀・杯・皿) 瓦質土器(播鉢)	中世(13-15世紀)
41	4A	SB141	1×1	N17°E	2.72	2.12	須恵器、土師器(椀・杯・皿)、青磁	中世
42	4A	SB142	3×2	N72°W	7.56(2.86・2.42・2.26)	3.84(1.74・2.10)	土師器(杯・皿) 瓦質土器(鍋、羽釜)、青磁	中世(13-14世紀)
43	4A	SB143	3×2	N73°W	6.74(2.06・1.92・2.66)	3.62(2.04・1.58)	須恵器、土師器(杯・皿) 瓦質土器(鍋)	中世(13-14世紀)
44	4A	SB144	3×2	N71°W	5.36(1.96・1.72・1.68)	3.36(1.08・2.24)	土師器(杯・皿)、瓦質土器(播鉢・羽釜) 東播系鉢、青磁	中世(13-15世紀)
45	4A	SB145	1×1	N22°W	2.96	2.84		
46	5	SB146	2×1	N 9°W	3.40(1.88・1.52)	3.44	土師器	
47	5	SB147	2×2	N10°E	2.76(1.76・2.00)	3.20(1.40・1.80)		
48	5	SB148	2×1	N85°W	3.44(1.56・1.88)	3.1		
49	5	SB149	3×2	N 4°E	4.60(1.56・1.50・1.54)	3.92(2.00・1.92)	須恵器、土師器	平安時代

3 土坑（第22・23図、図版9）

今回の調査で136基の土坑が確認された。平面形は、円形が14基、長円形が45基、隅丸長方形が29基、不整形が48基で、不整形が最も多かった。出土遺物から古代・中世と考えられるものが多いが、遺物を伴わないにぶい黄褐色埋土の土坑も多く検出された（第3表）。以下、代表的なものを取り上げる。

SK73（第22図、図版9） 3A地区の西側に位置する隅丸長方形の土坑である。規模は長軸165cm、短軸120cm、深さ20cm。須恵器の杯身、土師器の杯(268)・高杯(269～271)が出土した。古墳時代の竪穴住居と同時期の土器廃棄土坑と考えられる。

SK74（第22図、図版9） 3A地区の西側で、SK73の北側に位置する不整形の土坑である。規模は長軸176cm、短軸137cm、深さ20～37cm。二段掘り状に掘り窪められた穴に、弥生終末期の壺または甕(274)が底部を上にして、逆さに伏せられた状態で出土した。土器胴部の欠損部の割れ口は、2次加工により丁寧に打ち欠いた痕跡が認められた。また、中空の土器内に埋土(Ⅶ)が一部流入しており、土坑の埋土最下層(Ⅷ)には少量の灰が含まれていた。出土状況から判断して、小児用の埋葬坑である可能性も考えられる。この土坑は土器埋納後、南西部分が後世に新たに掘り込まれたと見られる。

SK85（第22図、図版9） 4B地区の南側に位置する円形の土坑である。規模は直径93cm、深さ38cm。土師器の杯(266)が完形で出土した。古墳時代の土坑と考えられる。

SK7（第23図、図版9） 1C地区の中央部北側に位置し、SD20に切られた長円形の土坑である。規模は長軸215cm、短軸130cm、深さ30cm。須恵器片、土師器片、土錘(273)、滑石製模造品(411)、子持ち勾玉らしき石製品(425)が出土した。古墳時代の土坑で祭祀関連遺物の出土が注目される。

SK56（第23図） 2地区の南側に位置し、SK57を切った長円形の土坑である。規模は長軸184cm、短軸98cm、深さ36cm。土師器の椀(288)、皿(285～287・289～291)、白磁(284)、鉄製刀子(292)が出土した。中世の土坑と考えられる。

SK111（第23図） 4A地区の南側に位置する円形の土坑である。規模は長軸200cm、短軸180cm、深さ105cm。掘り込み中に水が沸いてきたことやSD30に隣接することから、井戸というよりは水溜として使用されていた可能性も考えられる。土師器の杯・皿・播鉢(281)・鍋(282)、瓦質土器、白磁の皿が出土した。中世の土坑と考えられる。

4 墓（第24図、図版10）

今回の調査で7基の墓が確認された。平面形はすべて長方形で頭位が北を向くものが多い（第4表）。

ST3（第24図、図版10） 1C地区の中央部に位置しSB4を切っている。墓坑は長軸149cm、短軸91cm、深さ11cmで、後世の削平のため浅い。墓坑の西側で土師器の皿(294～297)・杯(298)が出土した。中世の墓と考えられる。

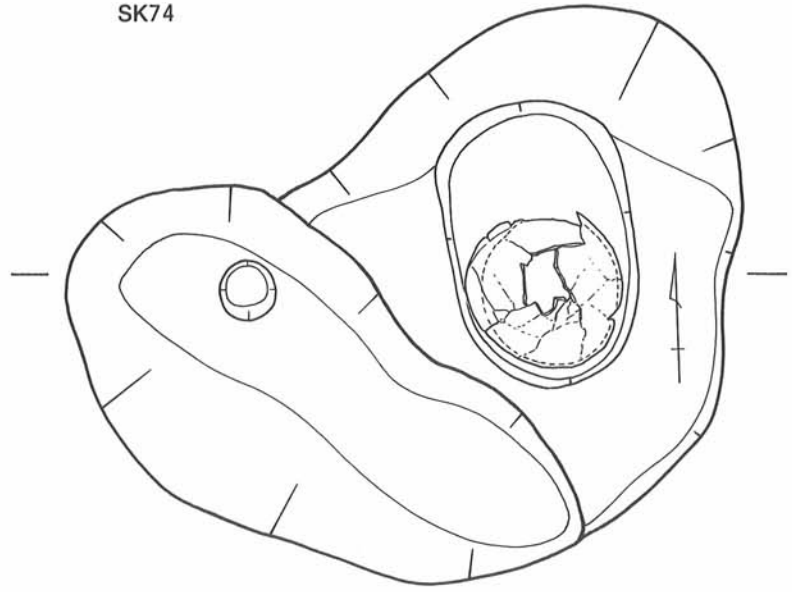
ST4（第24図、図版10） 4C地区の北東端部で4B地区の崖落ち付近に位置する。墓坑は長軸138cm、短軸72cm、深さ8cmで、後世の削平のため浅い。和紙に包まれ、円形の底板のある容器に入れられていたと推定される和鏡(293)が、墓坑の北西側で出土した。平安時代後期の墓と考えられる。

ST5（第24図） 4A地区の中央部でSD39の西側に位置する。墓坑は長軸124cm、短軸93cm、深さ8cmで、後世の削平のため浅く、中央が深さ5cmほど窪んでいる。墓坑の西側で鉄製刀子(307)が出土した。また、鉄釘(306)が出土しており、中世の木棺墓と考えられる。

ST 6 (第24図、図版10) 4 A

地区の西端でS B57の南側に位置する。墓坑は長軸205cmで、7基の中で最も長軸が長く、短軸78cm、深さ11cmで、後世の削平のため浅い。墓坑の北東隅で土師器の杯(303)、北西側で土師器の皿(301・302)・椀(304)、鉄製刀子(305)が出土した。平安時代後期の墓と考えられる。

SK74

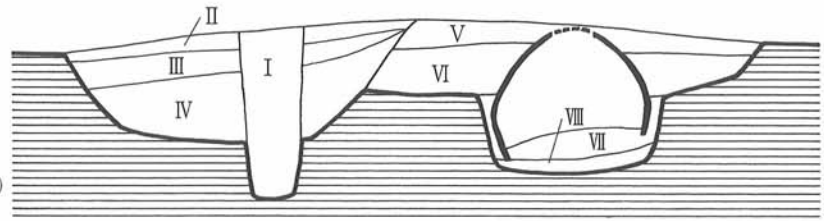


SK74

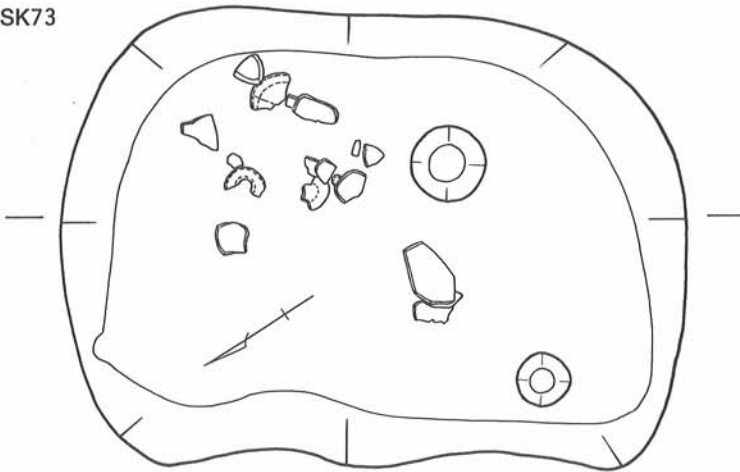
土層凡例

- I 暗褐色粘質土
- II 暗赤褐色粘質土
- III 黒褐色粘質土
- IV におい橙色粘質土
- V におい褐色粘質土 (多量のマンガン粒を含む)
- VI 灰褐色粘質土
- VII におい赤褐色粘質土 (少量のマンガン粒、レキを含む)
- VIII 褐灰色粘質土 (少量の灰を含む)

— 18.80m



SK73



— 18.70m



— 18.70m



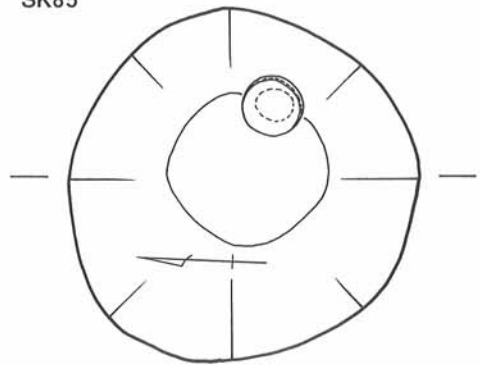
SK73

土層凡例

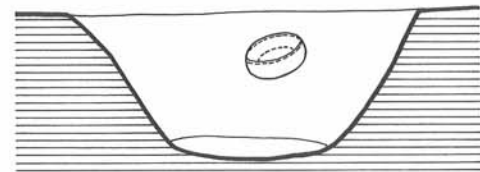
- I 灰褐色粘質土 (土師器を含む)
- II 明赤褐色粘質土
- III 赤褐色粘質土

0 (1/20) 1m

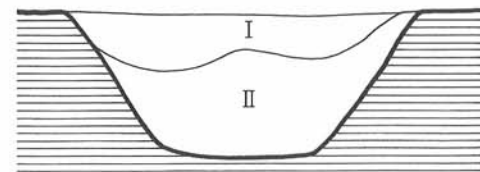
SK85



— 18.00m



— 18.00m

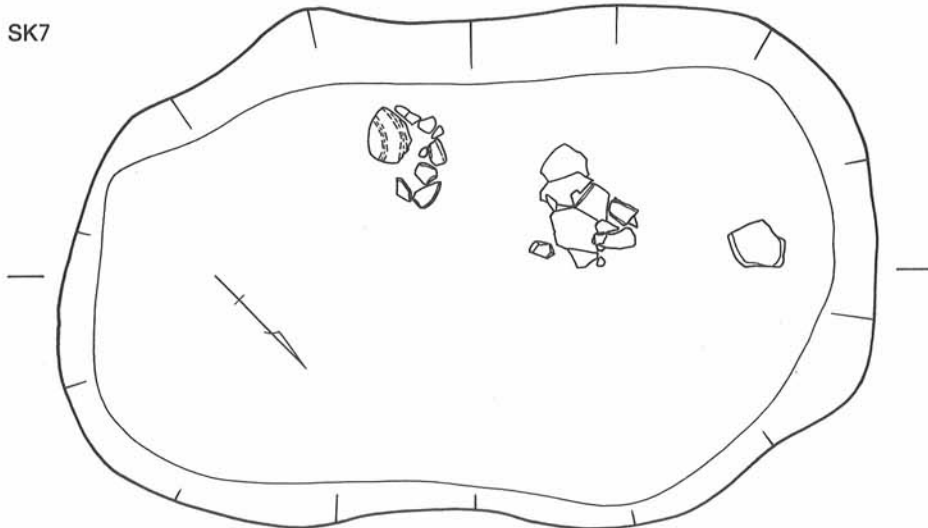


SK85

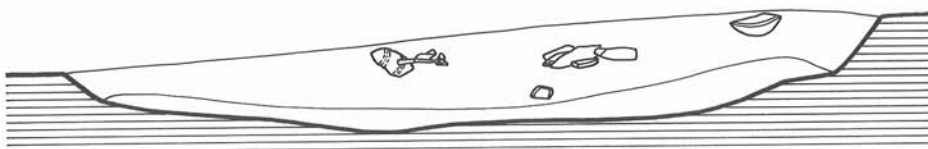
土層凡例

- I 明赤褐色粘質土
- II 褐色粘質土

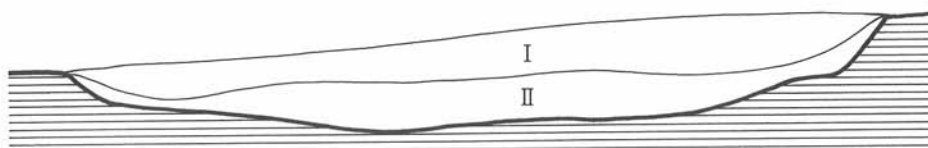
第22図 土坑実測図①



—18.40m



—18.40m



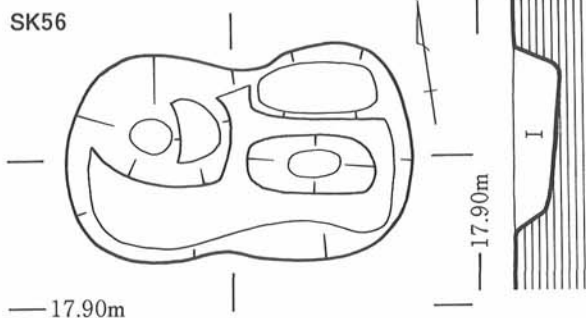
0 (1/20) 1m

SK7

土層凡例

I 暗褐色粘質土 (少量の炭を含む)

II 暗褐色粘質土 (明赤褐色粘質土ブロック塊混入)



—17.90m



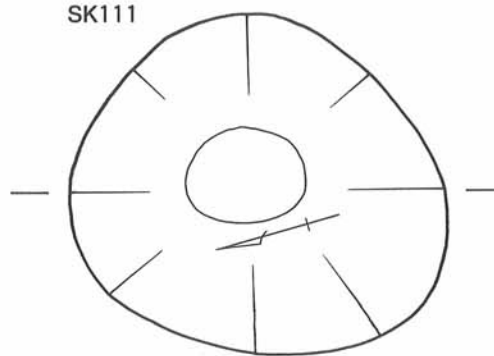
SK56

土層凡例

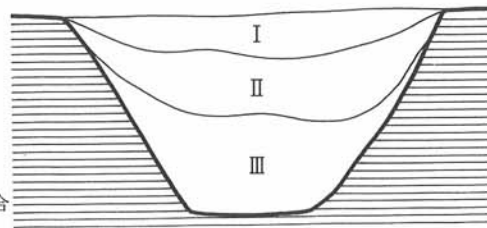
I 暗褐色粘質土

0 (1/40) 2m

SK111



—19.10m



SK111

土層凡例

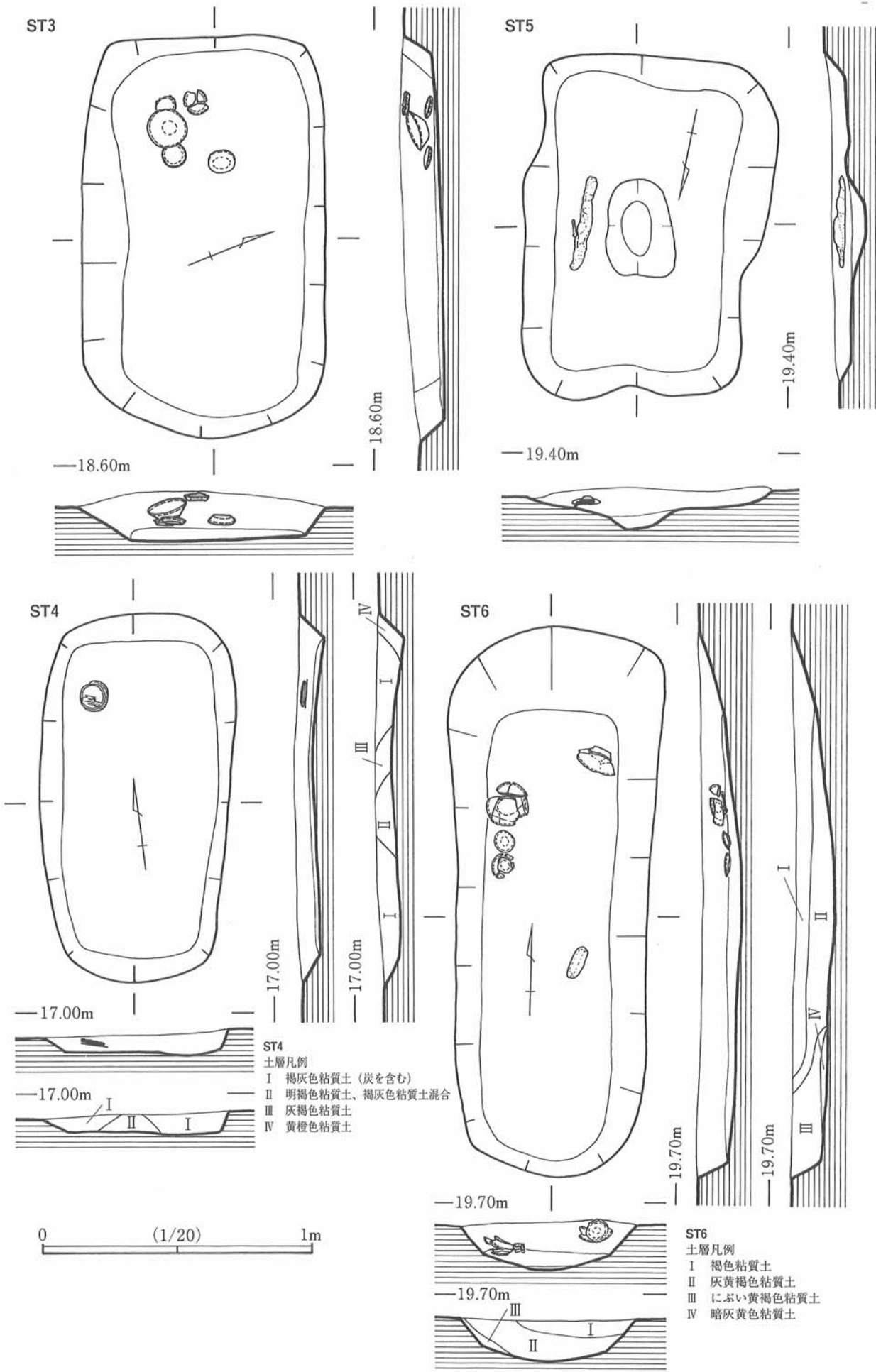
I 灰黄褐色粘質土

II 灰黄褐色粘質土

明黄褐色粘質土混合

III 明黄褐色粘質土

第23図 土坑実測図②



第24図 墓実測図

第3表 土坑一覽表(1)

()は残在値

	地区	遺構番号	平面形	規模 (cm)			出土遺物	時代
				長軸	短軸	深さ		
1	1A	SK1	長円形	122	94	8	須恵器(杯蓋)、土師器(甕・杯)	
2	1A	SK2	不整形	(68)	(62)	11		
3	1C	SK4	長円形	110	90	28	須恵器(杯蓋)、土師器(甕)	奈良時代末-平安時代
4	1C	SK5	長円形(?)	(110)	(56)	12	須恵器(杯蓋・杯身)、土師器	奈良時代末-平安時代
5	1C	SK6	長円形	114	98	26	須恵器(甕・杯蓋)、土師器(甕・杯)	
6	1C	SK7	長円形	215	130	30	須恵器(甕・杯蓋・杯身・提瓶?)、土師器(甕・甗・杯)、土錘、滑石製模造品、子持ち勾玉?	古墳時代
7	1C	SK8	不整形	172	92	33		
8	1C	SK9	隅丸長方形(?)	140	(100)	12	土師器(高杯・土製支脚?)	古墳時代
9	1C	SK10	不整形(?)	(170)	84	28		
10	1D	SK11	不整形	176	58	6	瓦質土器(足鍋)	中世(15世紀代?)
11	1D	SK12	長円形(?)	(50)	(32)	6		
12	1D	SK13	円形(?)	(100)	(100)	15		
13	1D	SK14	不整形	110	62	15		
14	2	SK15	不整形	320	80	40		
15	2	SK16	長円形	90	70	25	土師器(皿)	中世
16	2	SK17	円形	88	88	12	須恵器、土師器	
17	2	SK18	長円形	114	74	17		
18	2	SK19	長円形	94	56	12	土師器	
19	2	SK20	不整形	164	80	22		
20	2	SK21	長円形	200	154	13	須恵器、土師器(甕・杯)	古墳時代
21	2	SK22	長円形	188	94	51	須恵器(杯蓋)、土師器	
22	2	SK23	長円形	92	36	13	須恵器、土師器(椀)、滑石製模造品	平安時代後期
23	2	SK24	不整形	340	80	36		
24	2	SK25	不整形	260	150	56		
25	2	SK26	長円形	124	76	6	須恵器、土師器	古墳時代
26	2	SK28	円形	100	100	20	土師器	
27	2	SK29	長円形	90	76	30	須恵器(杯蓋)、土師器	古墳時代
28	2	SK30	長円形	(160)	90	30		
29	2	SK31	不整形	270	86	26		
30	2	SK32	不整形(?)	(100)	30	-	須恵器(杯蓋)、土師器(甕)	
31	2	SK33	隅丸長方形	134	88	13		
32	2	SK34	長円形	120	56	22		
33	2	SK35	長円形	104	68	38		
34	2	SK36	長円形	136	102	36	須恵器(杯蓋)	古墳時代
35	2	SK38	長円形	92	62	22		
36	2	SK39	隅丸長方形	192	66	18	須恵器、土師器(皿)	
37	2	SK40	長円形	276	228	11	須恵器(杯蓋・杯身)、土師器(甕)	古墳時代(6世紀後半)
38	2	SK42	長円形	92	76	6		
39	2	SK43	円形	82	82	13	須恵器(杯蓋)、土師器(甕・甗)	古墳時代
40	2	SK44	長円形	110	92	26		
41	2	SK45	隅丸長方形	128	60	11		
42	2	SK46	不整形	178	72	30	土師器	
43	2	SK47	円形	72	72	23	石鏝	
44	2	SK48	長円形	90	66	58	土師器	
45	2	SK49	不整形	(220)	78	34		
46	2	SK50	長円形	108	64	10		
47	2	SK51	不整形	100	62	15		
48	2	SK52	隅丸長方形	166	110	25		
49	2	SK53	不整形	(96)	40	39		
50	2	SK54	円形(?)	60	60	19	土師器	
51	2	SK55	長円形	114	90	13	土師器	
52	2	SK56	長円形	184	98	36	土師器(椀・皿)、白磁、鉄製刀子	中世
53	2	SK57	長円形	(172)	120	49	土師器(皿)	中世
54	2	SK58	隅丸長方形	90	54	18		
55	2	SK59	隅丸長方形	108	76	37	須恵器、土師器	平安時代後期?
56	2	SK60	不整形	156	110	14		
57	2	SK61	不整形	(220)	(120)	29	須恵器、土師器、瓦質土器(鍋)、白磁	中世
58	2	SK62	長円形	188	(140)	37	須恵器、土師器(甕・甗・杯)	古墳時代
59	2	SK63	隅丸長方形(?)	(80)	(48)	15	須恵器、土師器	
60	2	SK64	隅丸長方形(?)	94	(48)	11	須恵器、土師器	
61	2	SK65	隅丸長方形	236	66	25		
62	2	SK66	不整形	192	134	26	土師器	
63	2	SK67	長円形	80	68	42		
64	2	SK68	隅丸長方形	172	108	34		
65	2	SK69	長円形	74	52	15	土師器	
66	2	SK70	長円形	108	68	11	土師器(甕)	古墳時代
67	2	SK71	不整形	116	96	22		
68	3A	SK72	隅丸長方形(?)	(272)	(250)	20	土師器	
69	3A	SK73	隅丸長方形	165	120	20	須恵器(杯身)、土師器(甕・杯・高杯)	古墳時代
70	3A	SK74	不整形	176	137	37	弥生土器(壺または甕?)	弥生時代終末期
71	3A	SK75	不整形	240	184	16	須恵器(杯蓋・杯身)、土師器(甕)	古墳時代
72	3A	SK76	不整形	186	76	14		
73	3A	SK77	不整形	148	26	6		
74	3A	SK79	隅丸長方形	122	60	16	土師器	
75	3C	SK80	長円形(?)	(100)	100	-	須恵器、土師器	

第3表 土坑一覽表(2)

()は残存値

	地区	遺構番号	平面形	規模 (cm)			出土遺物	時代
				長軸	短軸	深さ		
76	4B	SK81	円形	70	70	19	土師器	
77	4C	SK82	隅丸長方形	222	110	49	須惠器、土師器、粘土塊	
78	4C	SK83	不整形	148	68	23		
79	4B	SK84	円形	118	118	32	須惠器、土師器	古墳時代
80	4B	SK85	円形	93	93	38	土師器(杯)	
81	4B	SK86	不整形	148	66	15		
82	4B	SK87	隅丸長方形	108	56	44		
83	4B	SK88	隅丸長方形	168	100	34		
84	4B	SK89	不整形	490	68	27		
85	4C	SK90	不整形	220	38	20		
86	4B	SK91	不整形	242	82	33		
87	4C	SK92	不整形	184	32	24		
88	4C	SK93	不整形	290	84	31		
89	4C	SK94	不整形	224	128	28	土師器(杯)	
90	4C	SK95	隅丸長方形	90	64	13	土師器	
91	4B	SK96	不整形(?)	(230)	(178)	15	土師器、瓦質土器(鍋)、白磁	中世(15世紀)
92	4A	SK97	不整形	316	200	25	土師器(甕・甕・杯)	
93	4A	SK98	隅丸長方形	138	78	23		
94	4A	SK99	不整形	268	200	25	須惠器(甕)、土師器	古墳時代
95	4A	SK100	長円形	130	114	12	須惠器、土師器、瓦質土器(鍋)、製塩土器	中世
96	4A	SK101	円形(?)	74	70	12		
97	4A	SK102	隅丸長方形	186	78	29		
98	4A	SK103	不整形	166	86	32	須惠器	
99	4A	SK104	不整形	200	128	11		
100	4A	SK105	長円形	122	88	21	土師器(羽釜)、瓦質土器(鍋)	中世(13世紀以降)
101	4A	SK106	不整形	210	120	7	土師器	中世
102	4A	SK107	長円形	74	60	7		
103	4A	SK108	隅丸長方形	128	56	11		
104	4A	SK109	不整形	90	60	40	土師器	
105	4A	SK110	不整形	276	234	12	須惠器、土師器(鍋・皿)	中世
106	4A	SK111	円形	200	180	105	土師器(杯・皿・鍋・播鉢)、瓦質土器(鉢)、白磁(皿)	中世
107	4B	SK112	円形	224	204	10	須惠器、土師器	古墳時代
108	4A	SK113	長円形	92	62	13	須惠器(杯身)、土師器(甕)	
109	4A	SK114	隅丸長方形	146	54	11		
110	4A	SK115	不整形	100	48	13		
111	4A	SK116	円形	54	50	13		
112	4A	SK117	長円形	120	94	49		
113	4A	SK118	長円形	70	36	24		
114	4A	SK119	隅丸長方形	96	48	29		
115	4A	SK120	隅丸長方形(?)	(174)	50	6		
116	4A	SK121	隅丸長方形	90	52	5		
117	4A	SK122	長円形	252	136	73	須惠器、土師器	
118	4A	SK123	長円形	100	48	29		
119	4A	SK124	隅丸長方形	118	38	6		
120	4A	SK125	長円形	198	134	11	土師器	
121	4A	SK127	不整形	170	128	32	須惠器、土師器(甕・杯・手捏ね土製品?)	古墳時代
122	1B	SK128	不整形	124	64	17	須惠器、土師器(皿)	
123	1B	SK129	長円形(?)	(150)	(70)	23	須惠器、土師器	
124	1B	SK130	隅丸長方形	135	102	6	土師器(杯・皿)、瓦質土器(足鍋)	中世
125	1B	SK131	隅丸長方形(?)	(194)	(130)	23	須惠器(杯蓋)、土師器(甕・杯・高杯)	古墳時代
126	1B	SK132	円形(?)	(92)	(62)	20		
127	5	SK133	不整形	152	70	7	須惠器、土師器(杯)	
128	5	SK134	不整形	144	82	11		
129	5	SK135	不整形	152	100	6		
130	1D	SK136	隅丸長方形(?)	(190)	(124)	22		
131	2	SK137	不整形	208	80	23		
132	2	SK138	長円形	116	82	18		
133	3A	SK139	不整形	246	64	8		
134	4A	SK140	長円形	344	260	73		
135	4A	SK141	不整形	180	144	50		
136	4A	SK142	長円形	116	98	27		

第4表 墓一覽表

	地区	遺構番号	平面形	規模 (cm)			長軸方向	出土遺物	時代
				長軸	短軸	深さ			
1	1A	ST1	長方形	109	72	10	N26°W	土師器(杯)	中世
2	2	ST2	長方形	144	82	35	N12°E		中世
3	1C	ST3	長方形	149	91	11	N69°W	土師器(皿・杯)	中世
4	4C	ST4	長方形	138	72	5	N13°E	和鏡	平安時代後期
5	4A	ST5	長方形	124	93	5	N3°W	鉄製刀子・鉄釘	中世
6	4A	ST6	長方形	205	78	11	N7°W	土師器(皿・碗)・鉄製刀子	平安時代後期
7	1B	ST7	長方形	137	93	50	N39°W	土師器(杯)	中世

5 堀 (第25・47図、図版11)

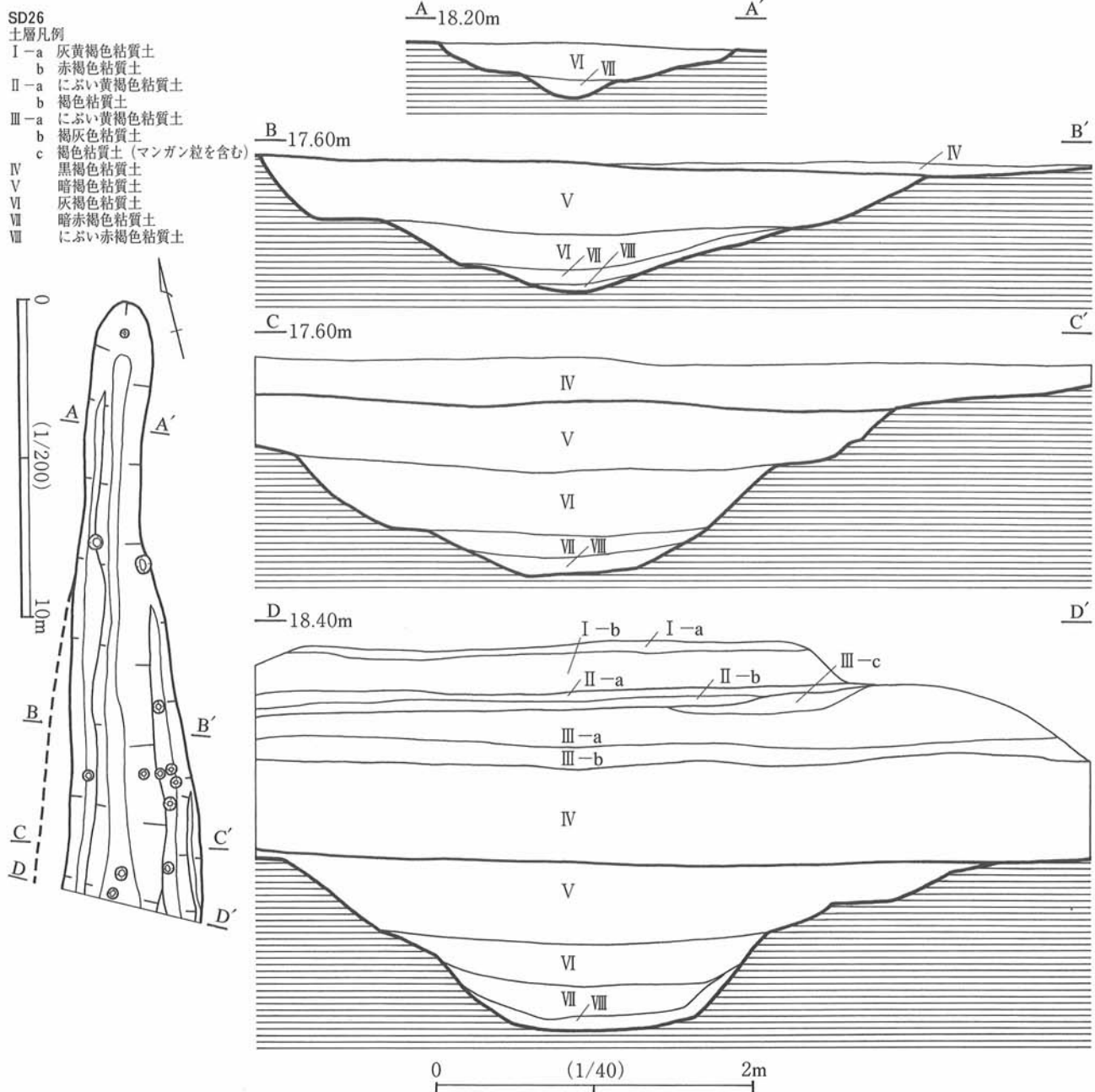
堀は、2地区南西部に位置し、東側に張り出す丘陵の基部を北側から南側方向に断ち切るように掘り込まれている。調査区範囲内で確認された現存規模は、長さ19.0m、南端部で最大幅4.5m、最大深さ1.0mとなる。遺構検出面での現存規模は、次のとおりである。

A-A'(上端幅1.8m、底幅0.2m、深さ0.35m) B-B'(上端幅4.2m、底幅0.35m、深さ0.75m)

C-C'(上端幅4.3m、底幅0.7m、深さ1.0m) D-D'(上端幅4.5m、底幅1.2m、深さ1.0m)

なお、南西端側については、堀の上端面はわずかに調査対象区外に広がっている。

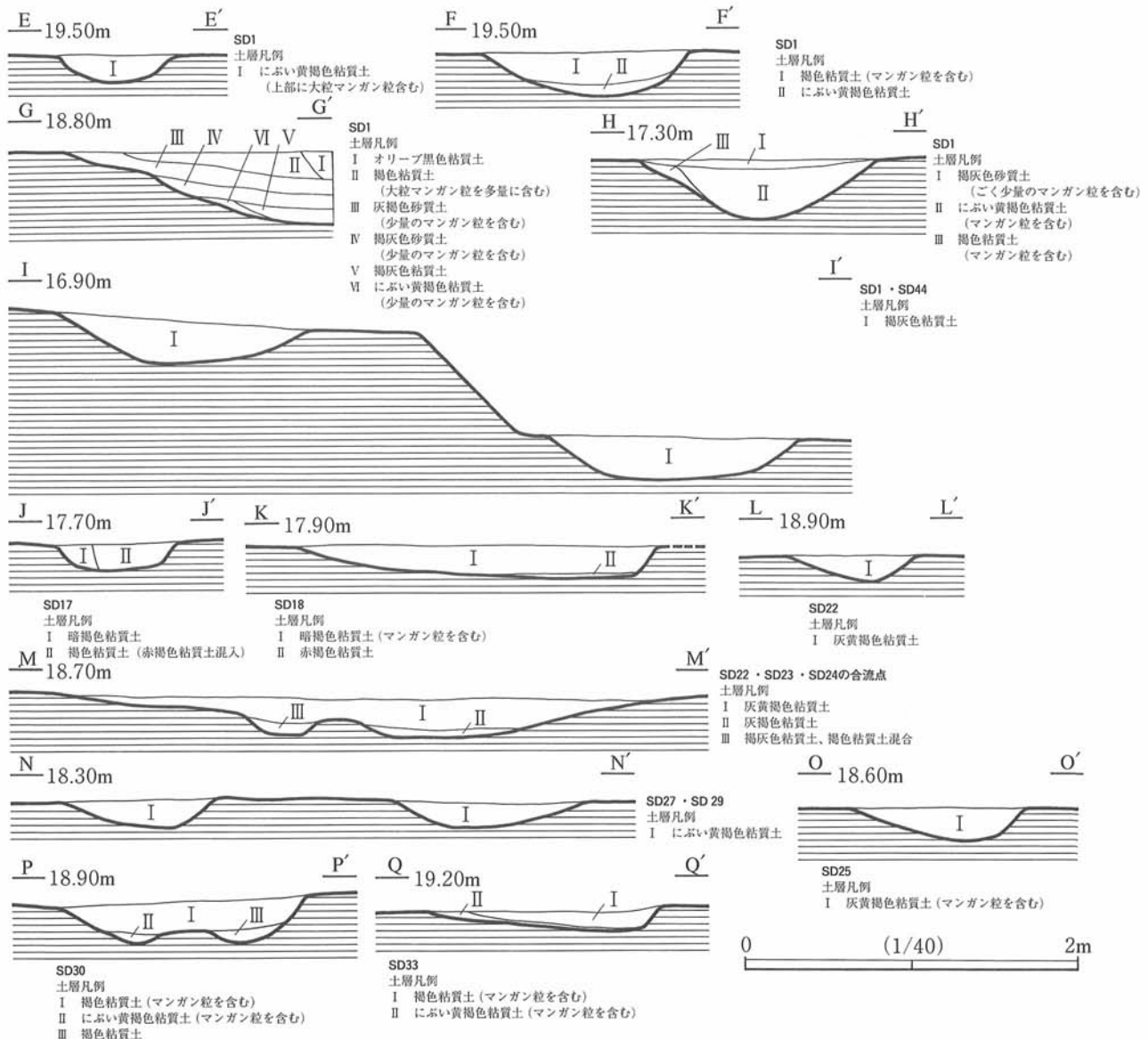
断面形は、ゆるやかな角度のほぼV字状を呈し、両内斜面はテラス状の段落ち部を伴う。堀の北側起点部周辺の遺構検出面は、竪穴住居跡の深さなどから見て、数10cm～1m程度の後世の削平が認められる。本来の堀の北側起点部は、さらに北側に位置し、南側へ緩やかに傾斜していく丘陵を断ち切るように、谷筋へ向けてしだいに深く幅広くV字状に掘り込まれ、突き抜けていたと推定される。堀



第25図 堀土層断面図

土層断面の状況からは、底部下層に青灰色泥質土などの沈殿堆積は認められず、空堀であったと考えられる。中・上層は、褐色系粘質土の段階的自然堆積が観察され、堀の廃絶後流れ込み土の長期にわたる堆積によって埋まったと思われる(第25図V～VIII層)。堀が埋まった後、IV層(黒褐色粘質土)が70cm程度厚く自然堆積し、後の耕地化により整地層(II・III層)や客土・盤土(I層)が形成されたものと見られる。土塁については、堀の東側では耕地化により堀上端面が削平されているため、堀の西側では調査区外のため、堀内外いずれにおいても確認できなかった。また、堀自体の内部にいくつかの柱穴が検出されたが、柵列・逆茂木などの施設と思われる整然と並ぶ構築物の痕跡は見い出せなかった。橋や門などの施設の存在を想定させる遺構についても、調査区範囲では検出されなかった。堀の埋土下層中から比較的少量ではあるが、中世の瓦質土器(鍋・足鍋)や石鍋などが出土した。

この堀については、赤迫遺跡(A地区)の堀との関連性が認められる。A地区の堀が東側に張り出す丘陵を中央部付近で南北に断ち切り、東側の防御機能を備えているのに対し、C地区で検出された堀は、A地区の堀にはほぼ平行して丘陵基部付近を同じく南北に断ち切り、西側の防御に当たっている。東西の堀間の距離は約170mある。堀自体の規模が相当大きく、区画内面積もかなり広いことなどから、今回未調査の中央地区には、かなりの規模の施設があったことが推定され、A地区調査で想定された



第26図 溝状遺構土層断面図

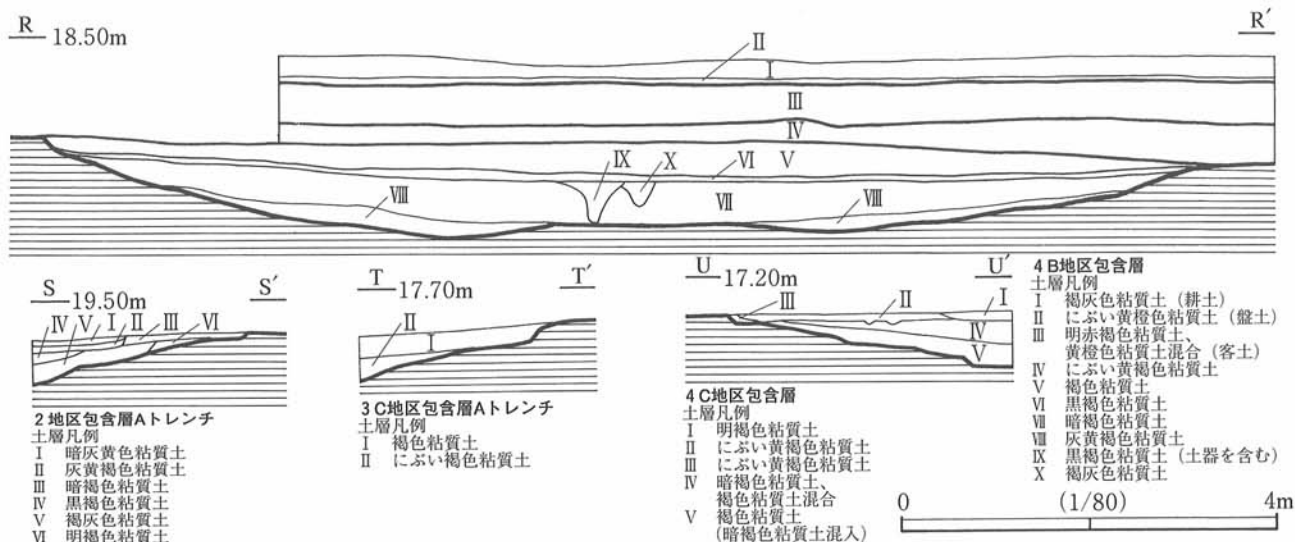
この周辺地域を支配した有力氏族の館跡が埋存している可能性が一段と高まったといえる。

6 溝状遺構（付図・第26・47図、図版12）

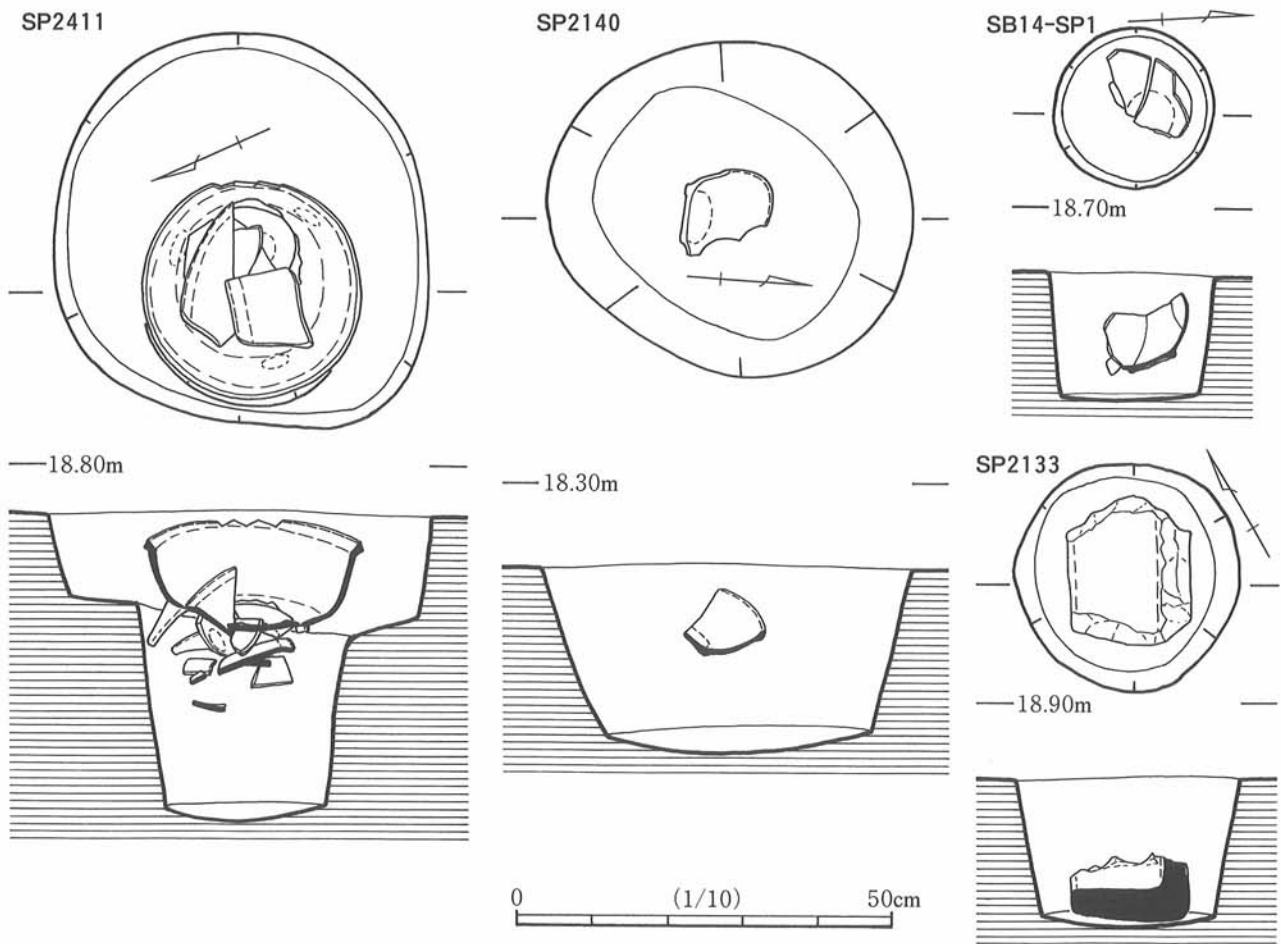
調査区内からは46条の溝状遺構を検出した。竪穴住居跡との切り合い関係、掘立柱建物跡群の検出状況、出土遺物（土師器・瓦質土器・備前焼）などから、大半は中世の溝と判断される。後世の耕地化などのため削平が多く、深さは浅い。幅広の溝が周囲を取り囲むように大きく巡り、小幅の溝が中を区画するように縦横に巡っている点が注目される。SD1は、4A地区北東部で南から東に大きく屈曲して東側に伸び、5地区・1A地区北側境界に沿って1A地区東端に至り、1B地区北端部で南側に大きく屈曲して1B地区中間辺りで調査区外へと続く。北西隅から北東隅までの1辺の長さは約93m、現存最大幅は1.5m、現存最大深さは0.4m。北東隅でSD1の東外側に並行するSD44は耕地化により、上端部を大幅に削平されているが、本来は幅・深さとも大規模な防御機能を備えた堀と考えてもよい。4A地区では、SD33がSD1の西外側に並行するように巡り、SD30が西側谷筋に向かって流れ落ちる。一方、1C地区のSD22は、北側のSD1と同じく東西方向に巡ってはいるが、削平が著しくかつ中央地区が未調査のため、南側を区画する溝であるかどうか判断が難しい。SD22・23・24と合流すると見られるSD25は、2地区東側を南側谷筋へと流れる。1D地区のSD27・29は、南北方向に走り、南側で屈曲して東側の未調査区に伸びる。1B地区のSD17・18は東側を取り囲むように2条並行して南北方向に走り、南側で屈曲して西側の未調査区に伸びており、SD17はSD29と、SD18はSD27とつながる可能性がある。また、SD27・29は1D地区北端のSD28や1A地区SB50東側の段落ち部で検出されたSD1から南側に伸びる支流溝とつながり、SD1が囲む大区画内を小区画している可能性もある。中央地区が未調査のため、溝や区画内の掘立柱建物跡の全貌がつかみにくい。溝と堀によって区画された中世集落の一端をうかがい知ることができる。

7 包含層（第27図）

包含層は2地区の南西隅、3C地区の中央部、4B地区の中央部、4C地区の北端部など丘陵の落ち込み部分に位置し、トレンチにより地形・土層の確認を行った。その結果、堆積土層はいずれも褐色系の粘質土で、2地区では6層、3C地区では2層、4B地区では10層、4C地区では5層が確認された。中でも4B地区の谷の落ち部トレンチ土層から判断すると、中世にはV層までの堆積が考えられ、この面が生活面であったと思われる。後に土器を含む流れ込み堆積（IV層）があり、さらにI層～



第27図 包含層土層断面図



第28図 柱穴遺物出土状況実測図

Ⅲ層は、耕地化にあたって造成した際の客土(Ⅲ層)・盤土(Ⅱ層)・耕土(Ⅰ層)と考えられる。各包含層からは古墳時代の須恵器・土師器、中世の土師器・瓦質土器などの遺物が出土しているが、3C地区の包含層からは、縄文時代の石斧(373)や古墳時代の紡錘車(400)といった石製品も出土している。

8 柱穴(第28図、図版12)

今回の調査では、調査区の広い範囲で掘立柱建物を構成するものも含んだ、約4,050個の柱穴が検出された。特に密集していたのは、2地区北側と東側、4A地区南側であった。検出された柱穴のうち、4分の1程度の柱穴から遺物が出土している。以下、代表的なものを取り上げる。

SP2411(第28図、図版12) 2地区の中央部でSB25Bの西側に位置する。規模は直径50.0cm、深さ40.0cmで、二段掘りになっている。土師器の杯(360)・足鍋(362・363)が共伴した。室町時代後期のものと思われ、廃絶儀礼に伴う遺物である可能性も考えられる。

SP2140(第28図) 2地区の中央部でSB15の西側に位置する。規模は直径43.0cm、深さ25.0cm。玉縁の白磁碗(329)が出土した。11~12世紀代のものと考えられる。

SB14-SP1(第28図) 2地区の東端でSB14を上から切っている。規模は直径21.5cm、深さ16.5cm。土師器の高台付椀(343)が出土した。平安時代後期のものと考えられる。

SP2133(第28図、図版12) 2地区の南東端でSB115の東側に位置する。規模は直径29.5cm、深さ19.0cm。県内では類例に乏しい、四方に瘤状把手のつく古いタイプの石鍋(385)が出土した。11世紀代のものと考えられる。

IV 遺物

調査の結果、古墳時代後期の6世紀代を中心とする時期の遺物を中心に、古代・中世の各時期にわたり多数の遺物が出土している。この他、縄文時代・弥生時代にさかのぼる遺物も遺構の流れ込み埋土中や包含層から少数ではあるが、出土が確認された。主な遺物の種類としては、須恵器・土師器が中心で、製塩土器・瓦質土器・輸入磁器・国産陶器、土製品、和鏡・刀子、石器・滑石製模造品・石鍋などがある。特に、竪穴住居跡から出土した遺物は多量であるが、図化可能なものや同一遺構内で同一型式のものが数点ある場合は代表的なものを選別して、時期決定の資料となるものを実測・掲載することとした。各遺物に関する法量や調整・特徴については、章末の各遺物観察表に一括して掲載した。以下、遺構ごとに主な遺物について簡略に説明する。

1 竪穴住居跡出土遺物（第29～37図、巻頭図版・図版13～20）

S B 1 出土遺物（第29図1～3） 1～3は須恵器の杯蓋・身・皿。陶邑IV-2段階に相当し、奈良末～平安期の8世紀後半～9世紀頃と見られる。埋土中の流れ込み遺物と考えられる。

S B 2 A・2 B 出土遺物（第29図4～9、10～16） 4・5は陶邑II-4段階相当の杯蓋・身、6は提瓶の口縁部か。7は甕で、頸部のくびれが小さく、指頭圧痕が外面に残る。8は高杯。杯部は屈曲が明瞭で外反しながら伸びる。10・11は杯（この種の器形は鉢・碗として器種分類されることもあるが、本報告書では杯の呼称で統一する）。12は甕で頸部のくびれがほとんどなく、胴部から口縁端部に直接至り終わる。13・14は同じタイプの甕で、口縁端部内面は面取りしたようにシャープである。15は手捏ねミニチュア土器。16は甕で、丸底の底部には少なくとも5個以上の丸い穴があいている。

S B 5 A・5 B・6 出土遺物（第29図18～21） 18は小型の甕で、外面に縦方向のハケ。19は高杯の脚部で、外面に縦方向のヘラミガキ。20・21は杯で、21は口縁端部で外反して終わる。

S B 7 出土遺物（第30図22～24） 22は杯。23は甕で、口縁端部は丸い。24は製塩土器で手捏ね。

S B 8 出土遺物（第30図25～36） 25～29は杯蓋・身でセット関係をなす。30は壺の蓋と思われる。31は短頸壺で、底部は回転ヘラケズリ。32は破片であるが、器台と推測される。33は甕。34は高杯で脚部は短く、脚部底径に対して杯部口径が小さい。35は把手付甕で、器高に対して、比較的胴部径が大きく横に張る。36は甕で、口縁部が最大径を有し、偏平な把手が胴部のほぼ中央に付く。

S B 9 出土遺物（第30図37～48） 37～39は杯蓋・身。37は口径が小さく、天井部は平坦。40は中型の甕で、口縁端部は帯状の突帯を巡らしたように断面方形を呈する。胴部内外面にタタキ痕がある。41は高杯。42は把手付きの小型甕または甕。欠損により、底部形態不明。43・44は小型の甕で胴長、横長の器形。45は甕。47も頸部のくびれない甕か。46・48は底部筒抜けの甕で、把手は偏平形。

S B 10 出土遺物（第31図49～52） 49は杯蓋で、天井部内面に同心円文。50・51は杯蓋・身。

S B 14 出土遺物（第31図53～63） 53は杯蓋で天井部境に稜が巡る。54は製塩土器。55～61は杯。口縁端部形態により、①真っすぐたちあがもの（58）、②内傾するもの（55・56・57）、③「く」の字状に外反するもの（59・60）、④上位で段をなして外反するもの（61）の4タイプが共伴する。口径・器高が類似し、53の須恵器とも共伴しており古い時期から併存した可能性がある。62・63は甕。

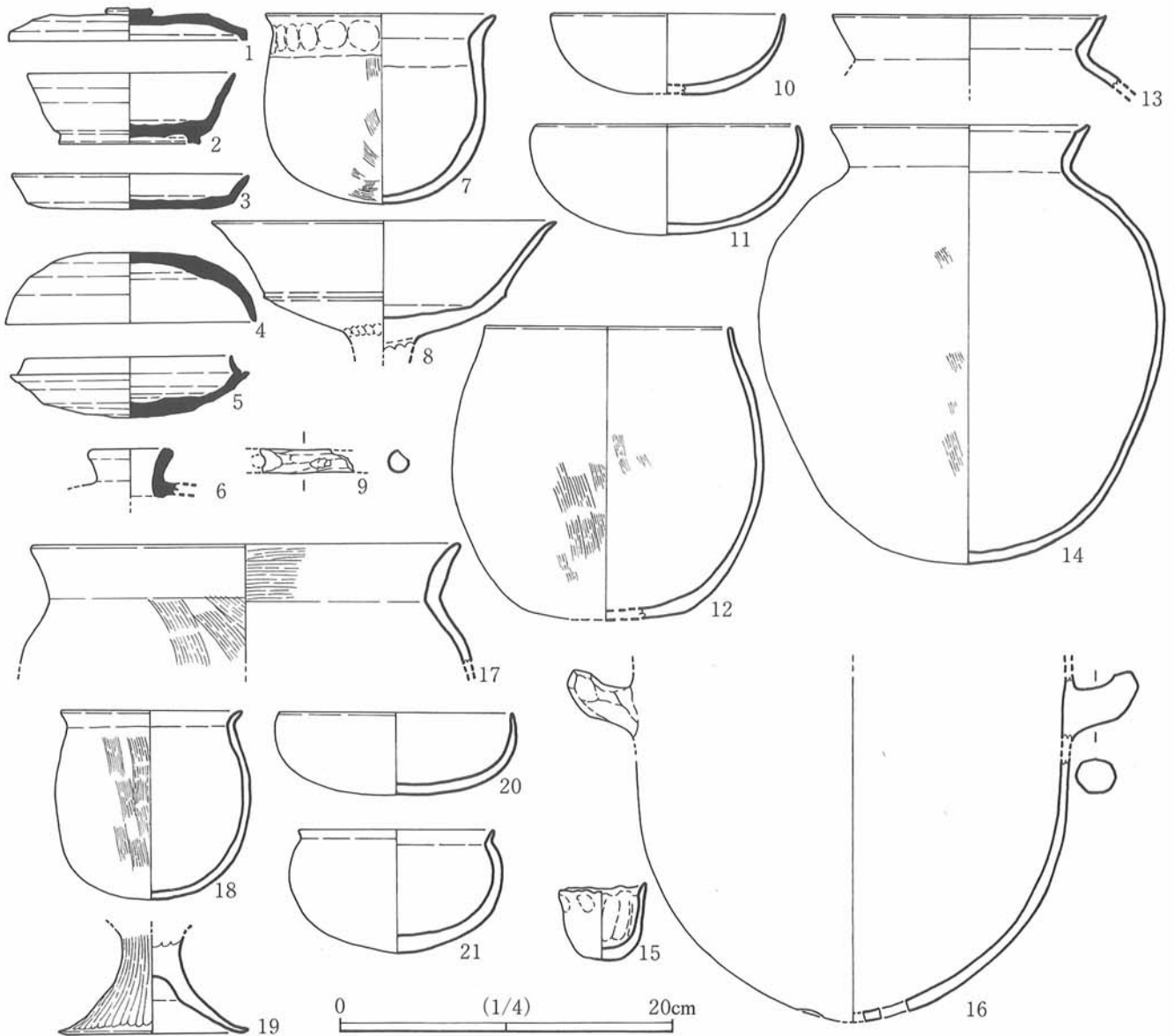
S B 15 出土遺物（第31図64～67） 64は手捏ねミニチュア土器。65は杯身で底部外面に「M」字状のヘラ記号がある。たちあがりはやや内傾しながら高く、端部は内傾する明瞭な段を有する。66・67

は口縁端部が真っすぐたちあがる杯。

S B16出土遺物 (第31図68~71) 68は天井部と口縁部を界する稜が明瞭で、口縁端部は内傾する凹面が明瞭で段をなしている。天井部は比較的平坦である。69は66・67と同タイプの杯。70・71は高杯で脚部裾部で外に屈曲している。

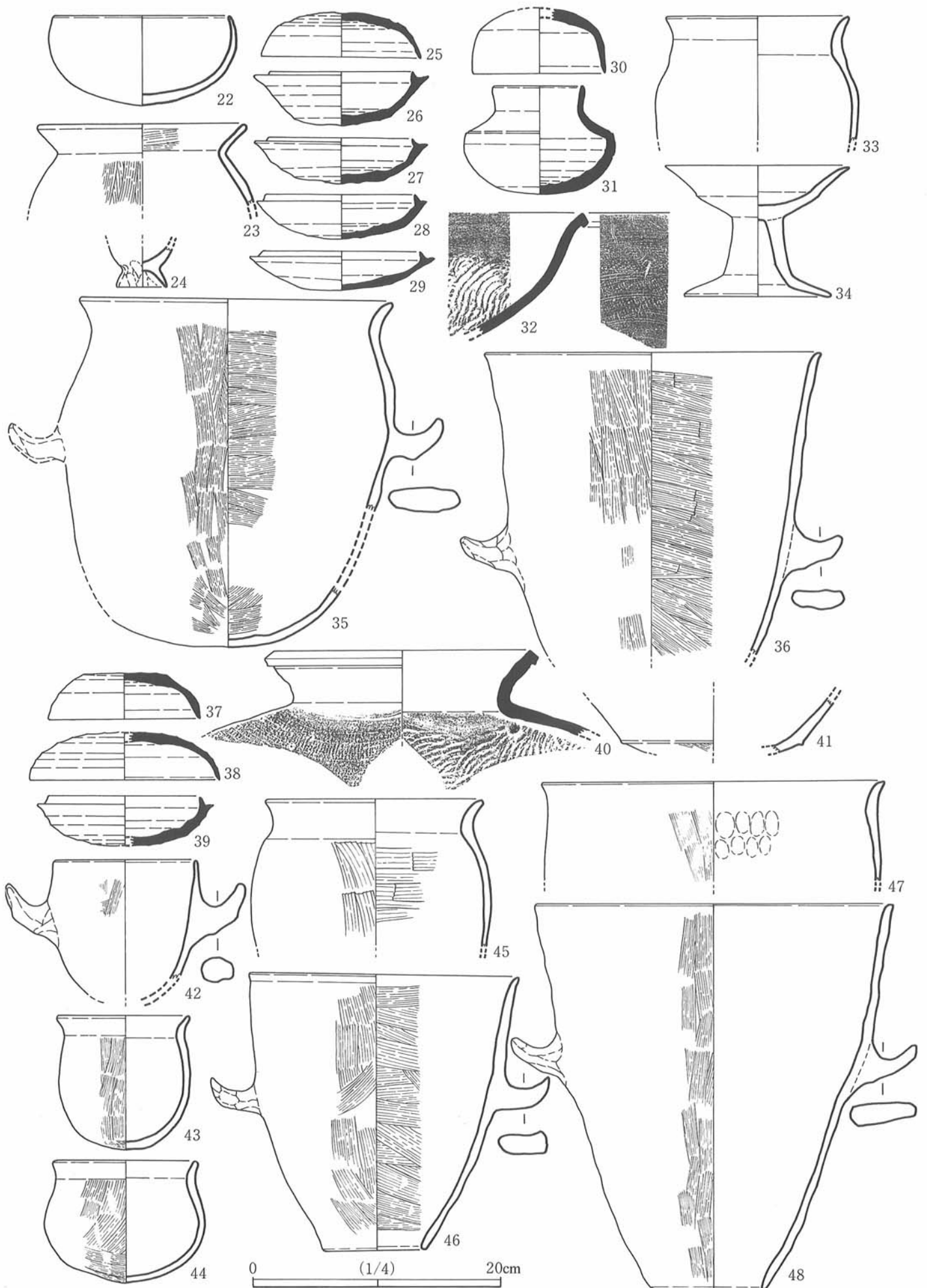
S B18出土遺物 (第31図72~86) 72~76は杯蓋・身で陶邑Ⅱ-4・5段階に相当するタイプである。蓋は天井部と口縁部の境の稜がなく、身はたちあがり短く内傾し、段を有さず、端部は丸い。77は高杯で、杯体部に左斜め方向の刺突文が巡る。78は口縁部が外反し、端部が突帯状に丸い壺。79は壺の蓋か。80は長頸壺で、胴部に三日月状の2段の刺突文がある。86は大甕。口縁上部に櫛描文が2段ある。81は上位で段をなして外反するタイプの杯。82はやや胴長の甕、83~85は中小型の甕。

S B20出土遺物 (第32図88~101) 88~90は杯蓋、91~94は杯身。蓋は天井部と口縁部の境の稜が退化し、ほとんど沈線状に一条巡るだけである。口縁端部の内傾する段も簡略化している。口径に比し器高が低いためやや扁平な器形を呈する。身は、65に比較してたちあがりやや低く、端部の内傾する段もやや形骸化している。底部は口縁部に比して浅くやや扁平な印象である。陶邑Ⅱ-2段階に

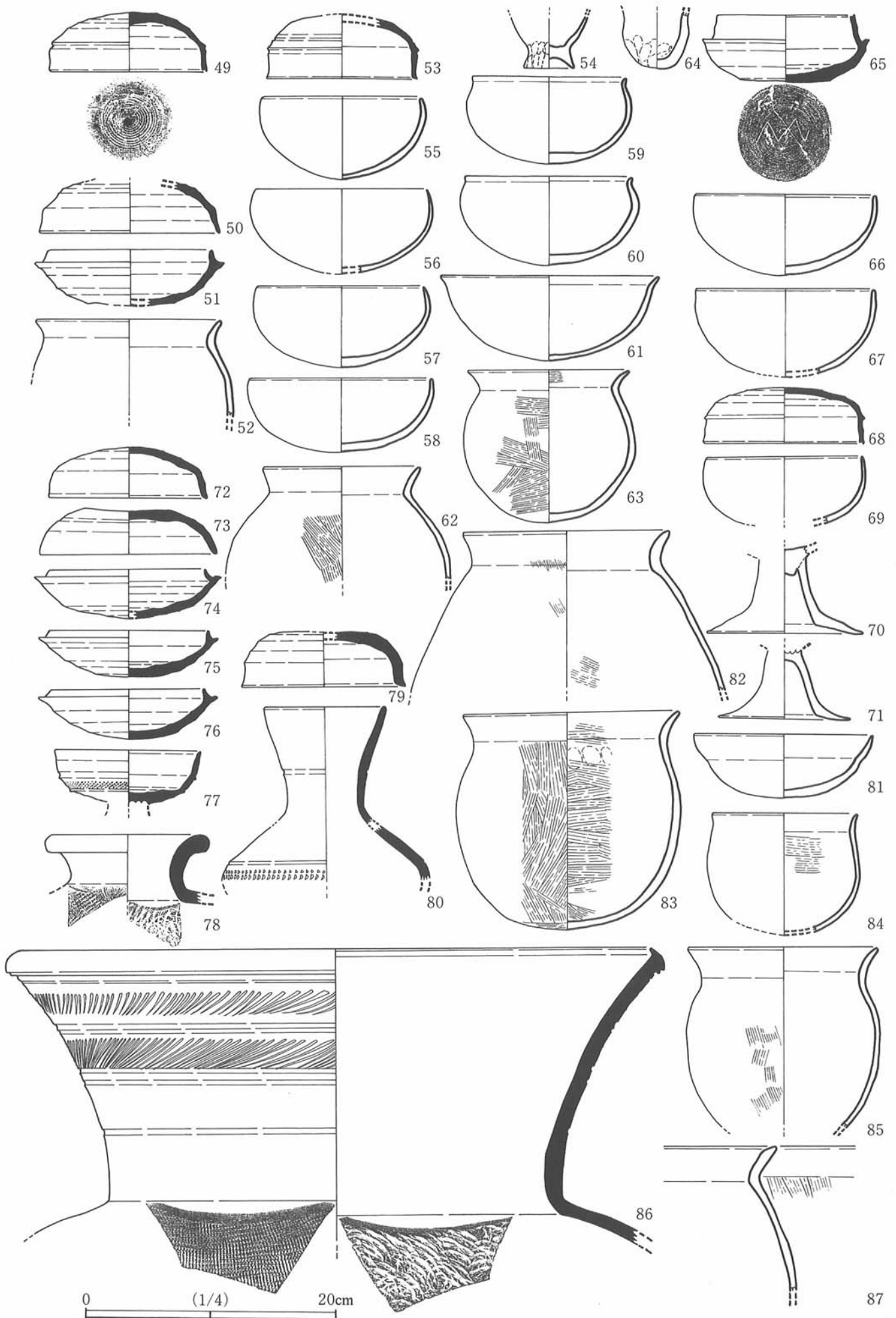


SB1(1~3)、SB2A・2B(4~9、10~16)、SB3(17)、SB5A・5B・6(18~21)

第29図 竪穴住居跡出土遺物実測図①

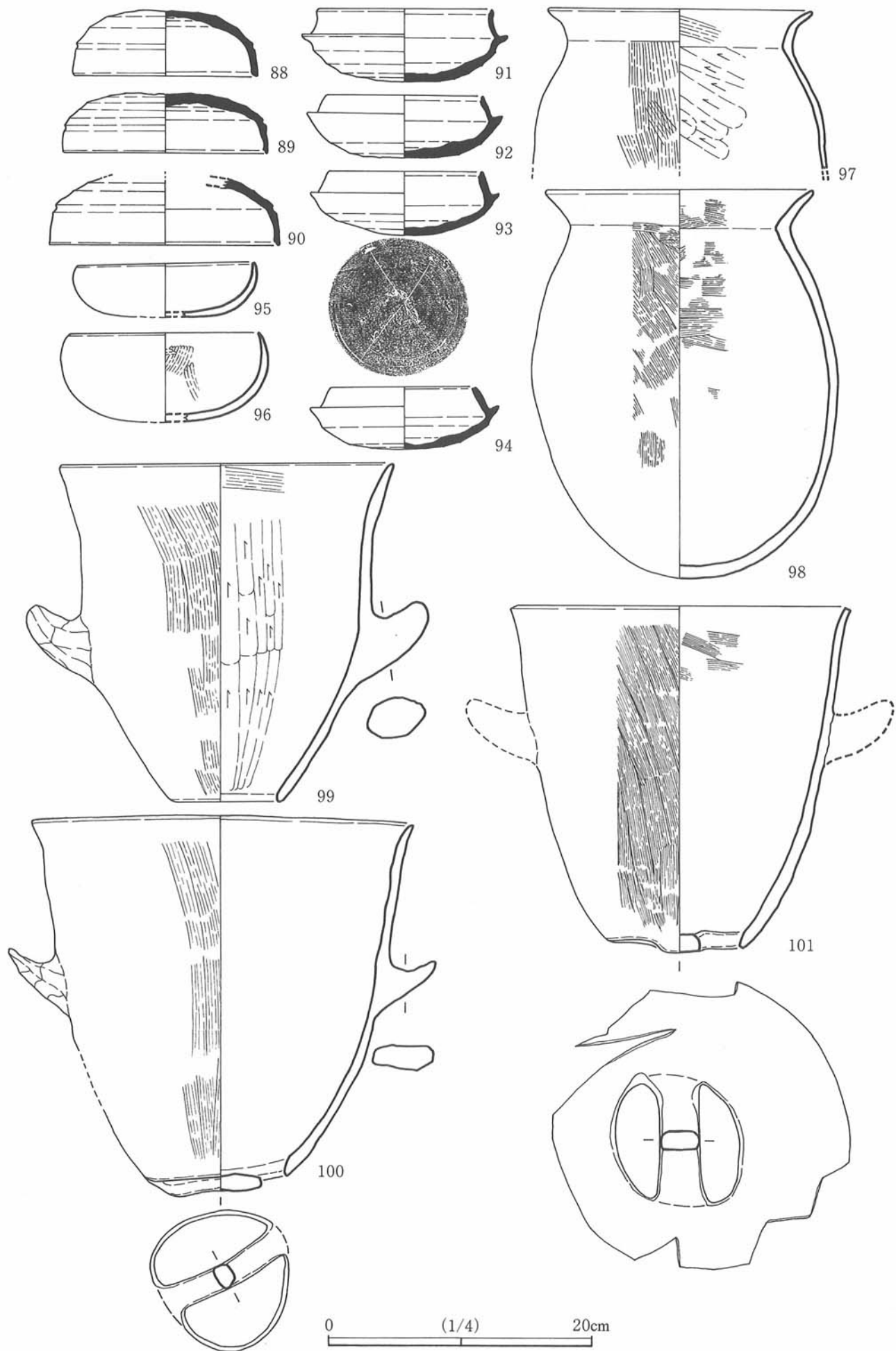


第30図 竪穴住居跡出土遺物実測図② SB7(22~24)、SB8(25~36)、SB9(37~48)



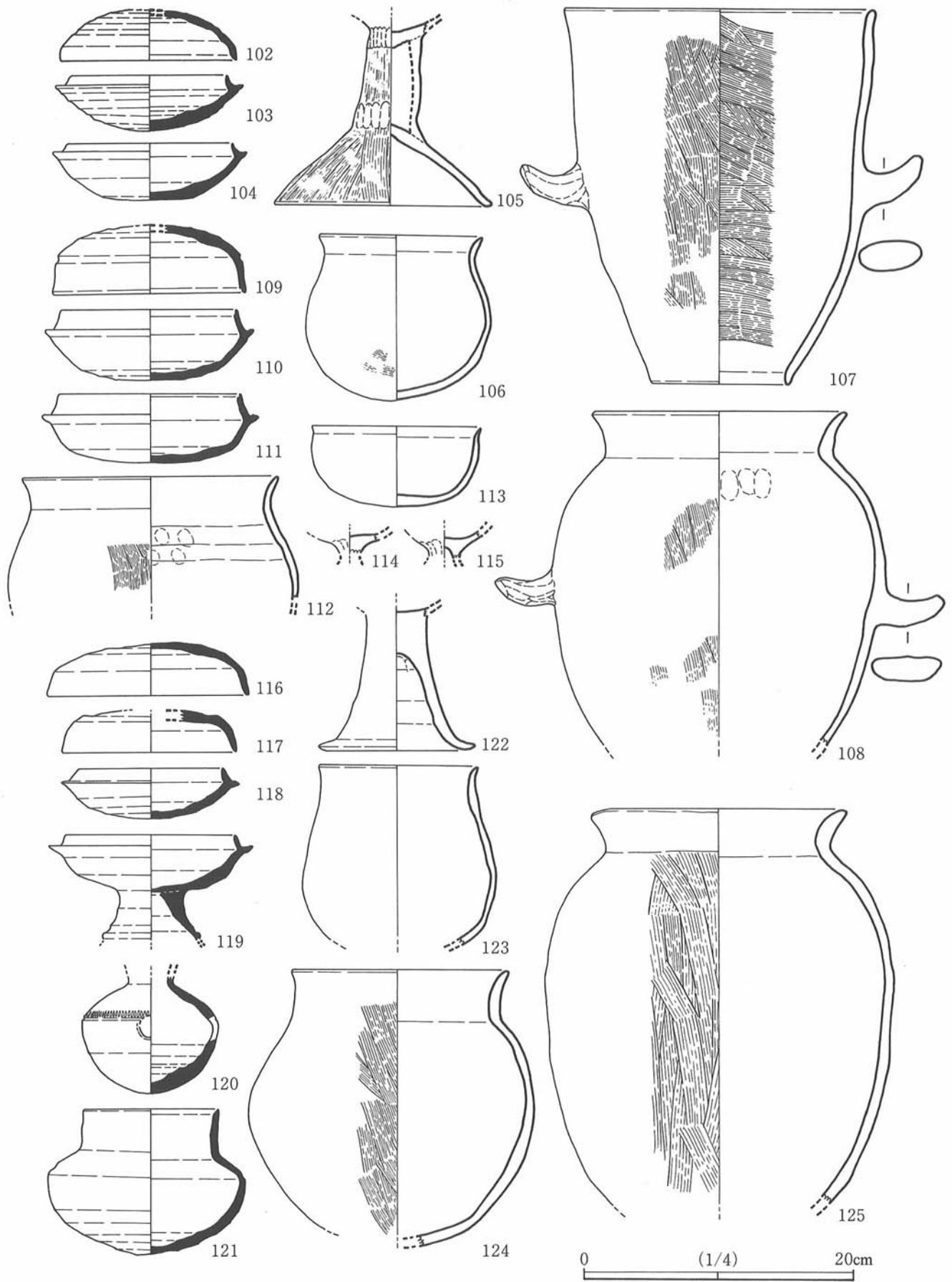
SB10(49~52)、SB14(53~63)、SB15(64~67)、SB16(68~71)、SB18(72~86)、SB19(87)

第31图 竖穴住居跡出土遺物実測図③

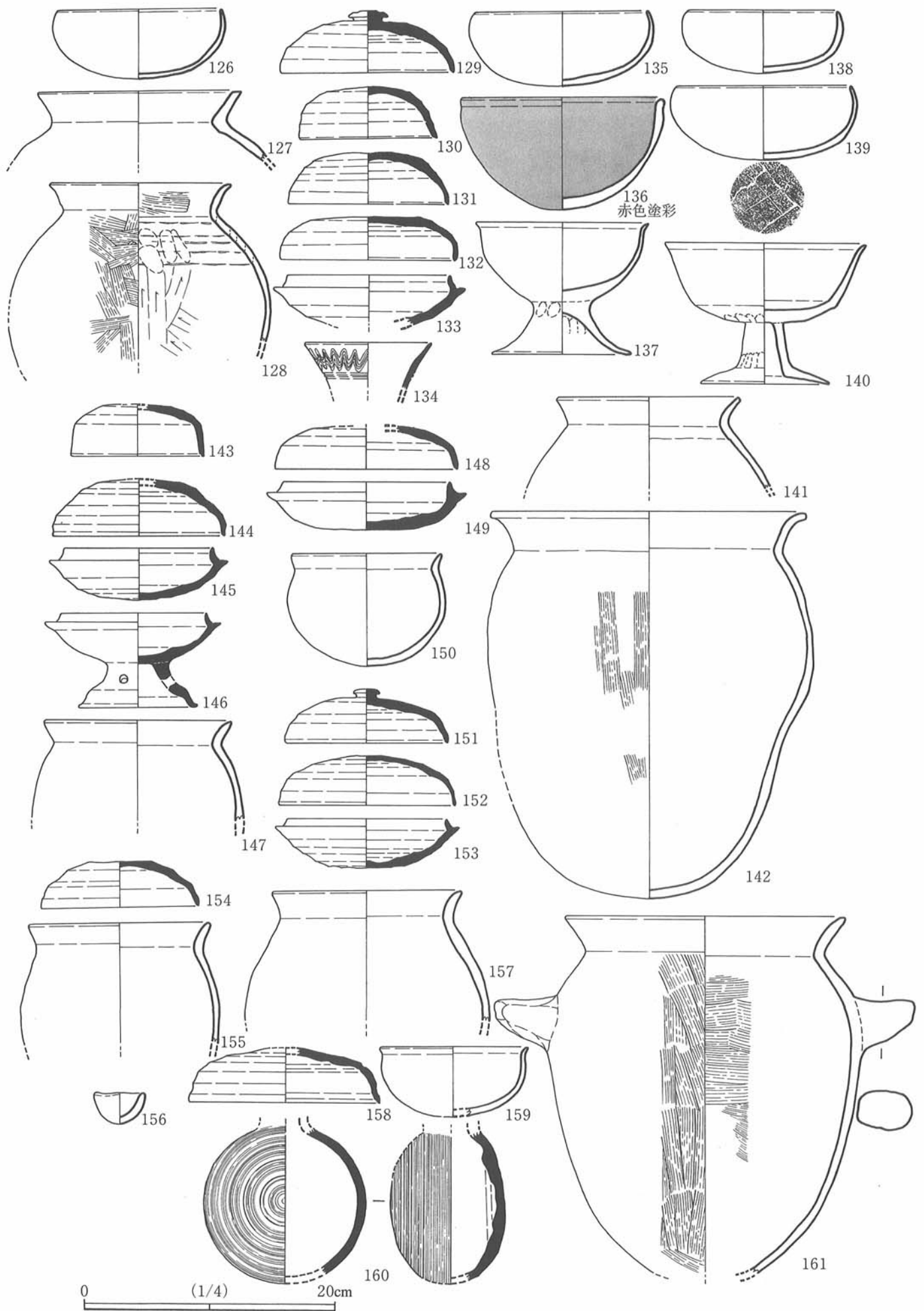


第32図 竪穴住居跡出土遺物実測図④

SB20(88~101)



SB21(102~108)、SB22(109~115)、SB23(116~125)
 第33图 竖穴住居跡出土遺物実測図⑤



SB24(126~128)、SB25A・25B(129~142)、SB26(143)、SB27(144~147)、SB28(148・149)、SB29(150)、SB30(151~153)
SB32A・32B(154~156、157~161)

第34図 竪穴住居跡出土遺物実測図⑥

相当すると見られる。93の底部には、ヘラ記号が刻まれている。96は杯。97・98は胴長の甕。97は内面に左斜め方向のヘラケズリが見られる。99～101は甕。100・101は底部に横方向の仕切り（棧）があり、前者は把手に対して斜め方向に、後者は直交して付いている。

S B 21出土遺物（第33図102～108） 102～104は杯蓋・身のセットで、蓋の稜、身のたちあがりとともにS B 20のタイプより一段と簡略化・退化して新しい様相がうかがわれ、陶邑Ⅱ－4・5段階に相当する。105は、脚部が中空の特異な高杯である。106は小型の甕。107は甕、108は把手付甕で、双方の底径・口径・器高から見て、おそらくセットで使用されたものと思われる。

S B 22出土遺物（第33図109～115） 109～111は杯蓋・身セットで、S B 20の杯とはほぼ同じタイプである。112は甕で、胴部から頸部にかけて粘土帯接合痕が内面に残る。113は杯で、口縁端部がわずかに外反する。114・115は美濃ヶ浜式の製塩土器破片と思われる。

S B 23出土遺物（第33図116～125） 116～118は杯蓋・身で陶邑Ⅱ－4段階に相当すると見られる。119の高杯についてもたちあがり、退化して低くなった同型式である。120は甕で、胴部上位に刻み目が巡る。121は胴部径に比して口径が大きい直口壺。122は高杯脚部。123～125は小型・中型・大型の甕で、123は頸部のくびれが緩やかな器形である。

S B 24出土遺物（第34図126～128） 126は杯。127・128は甕で、後者は内面に接合・ヘラケズリ痕。

S B 25 A・25 B 出土遺物（第34図129～137・141・142、138～140） 129は高杯の蓋か。130～133は杯蓋・身で陶邑Ⅱ－4段階に相当すると考えられる。134は長頸壺の口縁部と推定される。櫛描波状文が施されている。135・136・138・139は杯で、136は内外面に赤色塗彩。139は底部外面にヘラ記号がある。137・140は高杯。141・142は甕で、142は口径が大きく、胴部の下半部に歪みがある。

S B 26出土遺物（第34図143） 143は壺の蓋か。口縁端部に内傾する段が残る古い様相を呈する。

S B 27出土遺物（第34図144～147） 144・145は杯蓋・身のセットでS B 25 Aとはほぼ同じタイプ。146は高杯で杯部器形は、前者と同じ。脚部に3点の円孔透かしがあり、裾部で屈曲する。147は甕。

S B 28出土遺物（第34図148・149） 148・149は杯蓋・身で、扁平でたちあがり低くS B 25 A併行またはやや新しい様相を呈する。

S B 30出土遺物（第34図151～153） 151は高杯の蓋か。152・153は杯蓋・身で、129と同型式。

S B 32 A・32 B 出土遺物（第34図154～156、157～161） 154・158は杯蓋。154は口径が小さく天井部が平坦で、天井部との境の稜がなく、口縁端部は丸く簡略になっている。158は天井部との境の稜がわずかに沈線状に残り、口縁端部の内傾する段の痕跡が残るなど陶邑Ⅱ－3段階に相当し、154より古い。155・157は甕。156は手捏ねミニチュア土器。159は杯。160は提瓶。胴部に同心円のカキメが見られる。161は楕円形断面の把手が胴部上半に付く甕。

S B 33出土遺物（第35図162～170） 162～164は杯蓋・身。162は天井部境界に痕跡的に沈線状の窪みが巡り、口縁端部に内傾する段の形跡が残る。165は高杯で脚部の四方向に長方形の透かしがある。166は甕の口縁部破片と思われ、屈曲する外面に2条の沈線が巡る。167～170は、大型・中型・小型の甕。168は頸部から口縁部にかけてわずかに短く外反する。内面にヘラケズリが認められる。

S B 34出土遺物（第35図171） 171は小型の甕。

S B 37出土遺物（第35図172～176） 172・173は杯蓋・身のセット。174は低脚の高杯で、脚部に3点の円形の透かし穴が空けられ、裾端部の接地面は折り返したように内側に張り出している。175は

鉢で、内面上部に細かいハケメが見られる。176は小型の甕。

S B 38出土遺物 (第35図177~180) 177~179は杯。177は底部外面にヘラケズリが施されている。179は底部に幅広の高台が張り付けられている特異な台付杯である。

S B 39出土遺物 (第36図181~186) 181は小型の甕。182は甕の口縁部で、あまり外反せず真っすぐに立つ。183~185は製塩土器。186は棒状の有孔土錘。

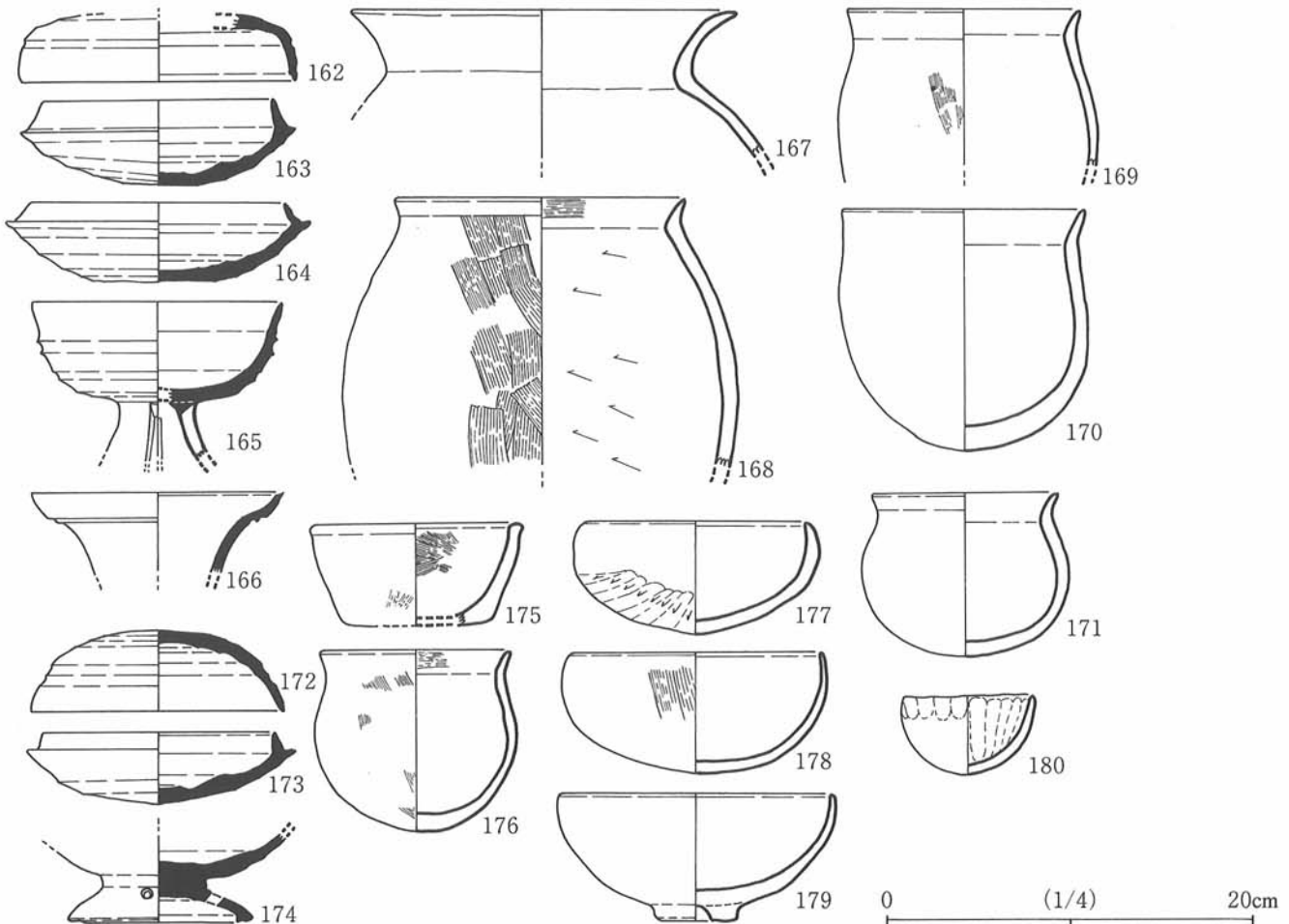
S B 40出土遺物 (第36図187~190) 187・188は杯蓋・身で陶邑Ⅱ-4段階相当と見られる。189は底部は完結するが、高杯の杯部と同器形で、体部に左斜め方向の刺突文が巡る。190は小型の甕。

S B 41出土遺物 (第36図191~219) 191~196は杯蓋・身で、陶邑Ⅱ-1段階に相当する。197は杯身または皿か。198は短頸壺。199は手捏ねミニチュア土器。200~203は製塩土器。204は小型鉢。205・206は高杯で段をなし外反する。207は土師器の甕。208は鉢で他とは胎土が異なる。209~214は杯で、211は内外面に赤色塗彩、214は内面にヘラミガキ。215~218は甕。219は甕で内面ヘラケズリ。

S B 42出土遺物 (第36図220~222) 220は甕。221は杯で外面ヘラミガキ。222は甕で内面ヘラケズリ。

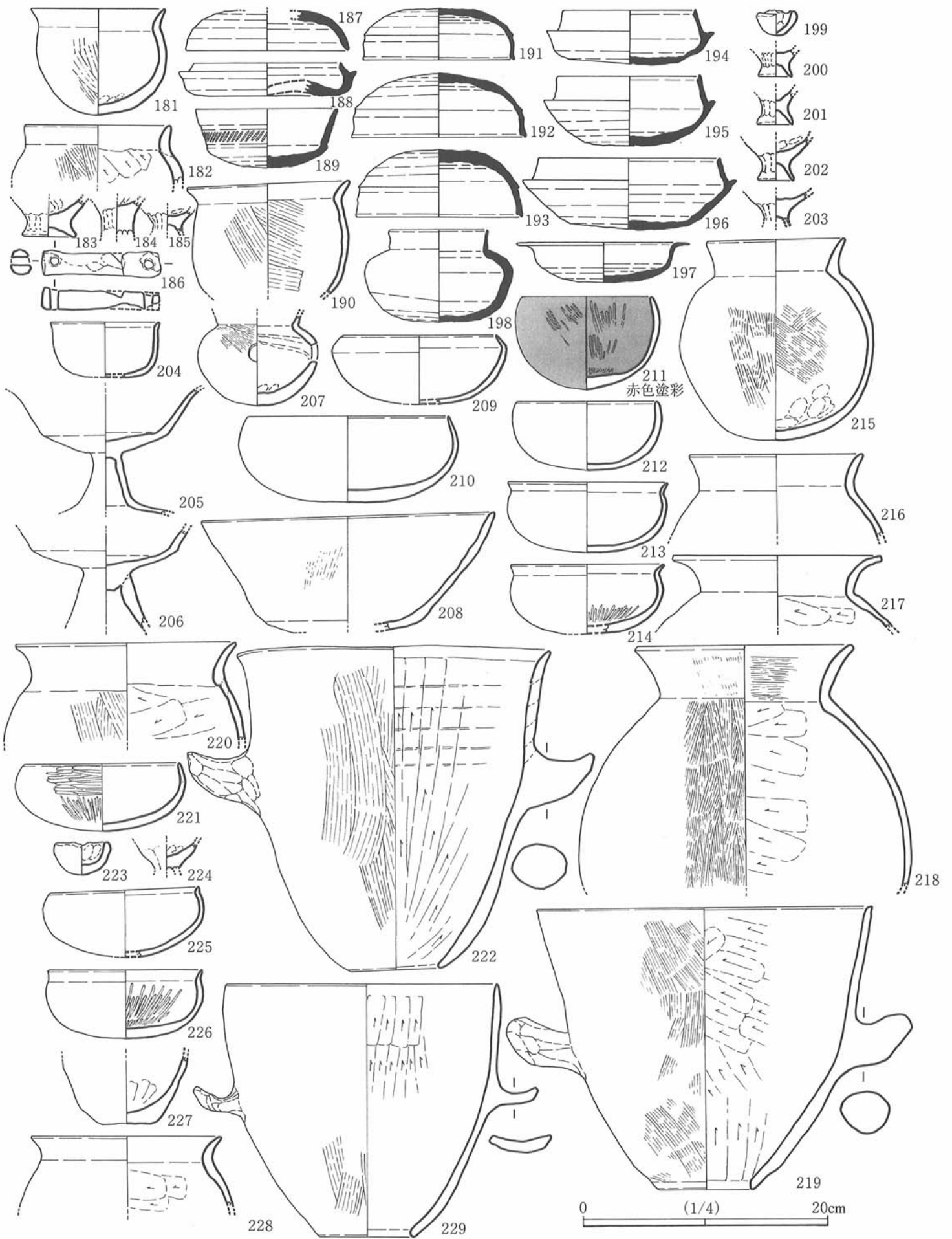
S B 43出土遺物 (第36図223~229) 223は手捏ねミニチュア土器。224は製塩土器。225・226は杯で、226は内面にヘラミガキ。227は壺の底部か。228は甕。229は小型の甕で内面にヘラケズリ。

S B 45出土遺物 (第37図230~248) 230~235・238は杯蓋・身で、陶邑Ⅱ-4・5段階相当の退化型式である。236は高杯蓋か。237・239は高杯。237は長脚で2段の長方形の透かしが2方向にある。239は短脚で円形の透かし穴が2方向に穿たれている。杯部のたちあがりは、両者とも短い。240・241



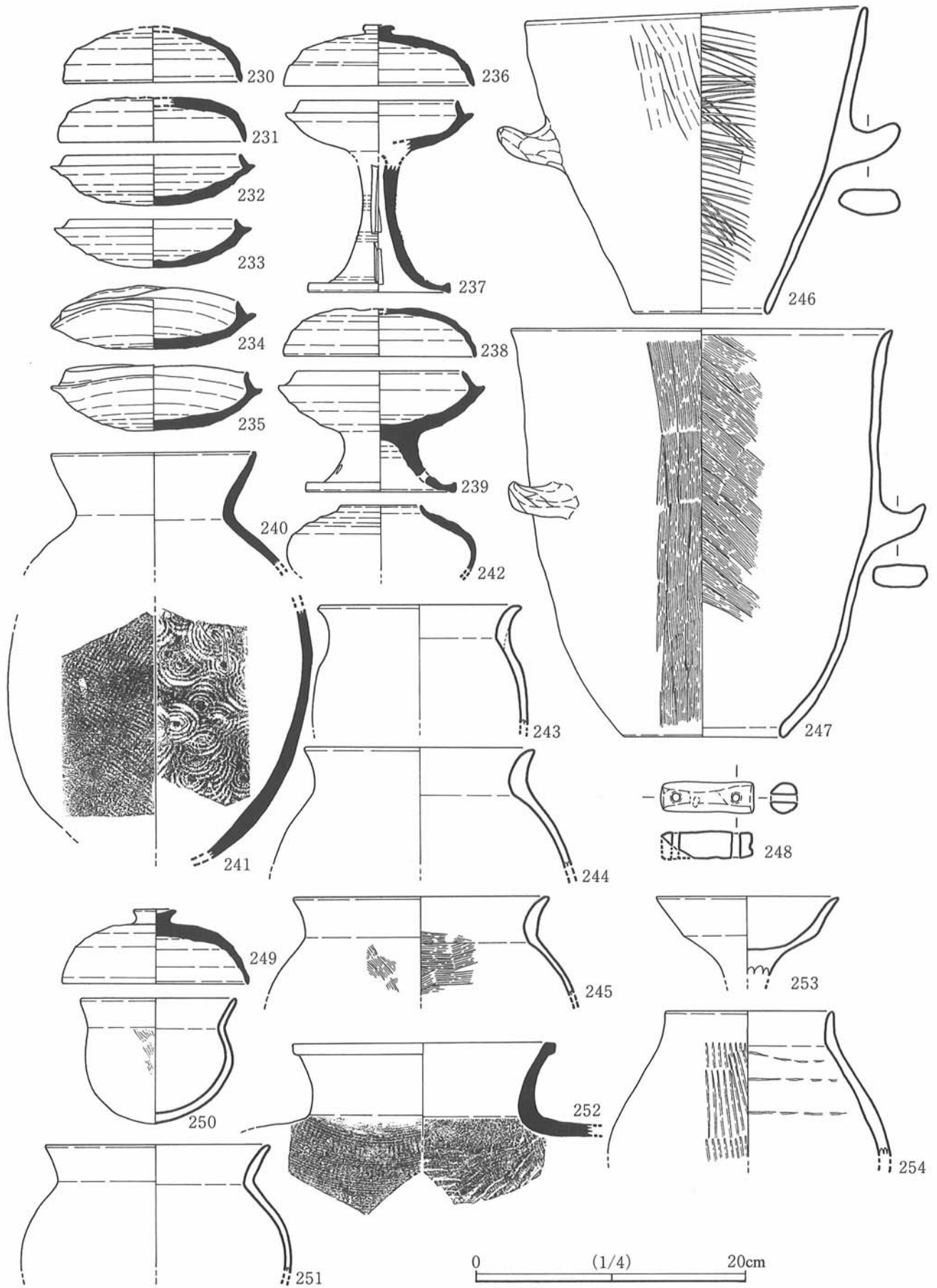
SB33(162~170)、SB34(171)、SB37(172~176)、SB38(177~180)

第35図 竪穴住居跡出土遺物実測図⑦



SB39(181~186)、SB40(187~190)、SB41(191~219)、SB42(220~222)、SB43(223~229)

第36图 竖穴住居跡出土遺物実測図⑧



SB45 (230~248)、SB49 (249~251)、SB50 (252)、SB52 (253·254)

第37图 竖穴住居跡出土遺物実測図⑨

は甕の口縁部と胴部で、同一個体の可能性もある。241は内外面にタタキ痕が残る。242は短頸壺。243～245は甕。246は底径に対して口径が約2.5倍ある外広がりの中型の甕。内外面粗いハケを施す。247は胴部下半がややふくらむ器形の甕。片方の把手がもう一方の把手の正反対の位置より、ややずれて取り付けられている。248は棒状の有孔土錘。

S B 49出土遺物 (第37図249～251) 249は高杯の蓋。250・251は小型・中型の甕。

S B 50出土遺物 (第37図252) 252は甕で内外面にタタキ痕が見られる。

S B 52出土遺物 (第37図253・254) 253は高杯で、杯部は屈曲して外反し、口径がやや小さい。254は甕で、胴部から頸部にかけてすぼまり口縁は外反せず真っすぐに短く立つ。胴部外面に縦方向の粗いハケ、内面には粘土帯接合痕が残る。

2 掘立柱建物跡出土遺物 (第38図、図版21)

255は内面に布目圧痕が見られる六連式製塩土器。256・257は口縁部のみであるが、平安時代後期頃の椀ではないかと見られる。258・259・261・262は土師器皿。260・263は杯で、真っすぐに外開きに立ち上がり、器高も比較的高い。底部糸切り。中世前半13世紀後半～14世紀頃のものと思われる。

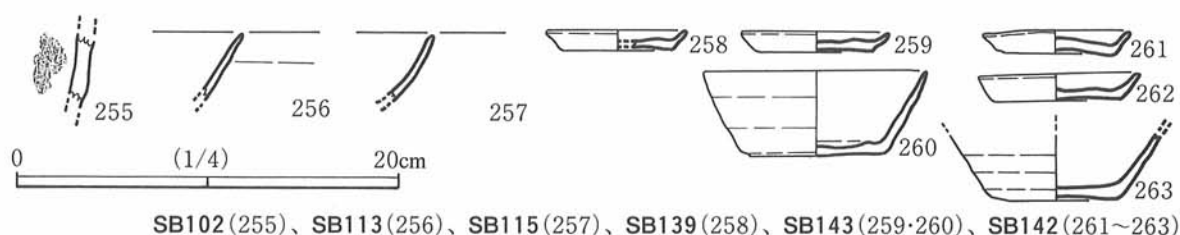
3 土坑出土遺物 (第39図、図版21)

古墳時代以前の遺物 (264～280) 264は壺と考えられ、口縁部はやや膨らみを持って立ち上がり、布留系の特徴を持つ。内面ヘラケズリなどの調整は確認できない。265は稜をなして外反する高杯。以上S K 131出土。266・267は杯。268～271は廃棄土坑と見られるS K 73出土の杯・高杯。272は手捏ねミニチュア土器。273は棒状の有孔土錘。274はS K 74出土の弥生終末期の壺または甕と見られる。底部内面はヘラケズリ。胴部欠損部には、同じ高さに打欠いた二次加工痕が認められ、埋葬容器などに二次的に使用されたことをうかがわせる。内面は黒褐色の焼成痕、外面は橙色。胴径40.8cm、残存器高28.9cm。275～277は甕。器壁は薄く頸部から口縁部にくの字状に鋭く屈曲する。胴部内面に粘土帯接合痕がある。278は胴長器形の甕。280の杯蓋の口縁部外面にはヘラ状工具による刻み目がある。

古代・中世の遺物 (281～292) 281は土師器の播鉢。内面横方向のハケ後6条単位のオロシメが放射状に刻まれている。282は土師器の鍋。以上2点S K 111出土。283は足鍋脚部。284～292はS K 56出土の一括遺物。284は白磁の皿底部と思われる。288は断面三角形の高台が痕跡的に貼り付けられた土師器椀の底部。その他は土師器皿。292は鉄製刀子で、身部と茎部の境の関が明瞭でない。

4 墓出土遺物 (第40・41図、巻頭図版・図版22)

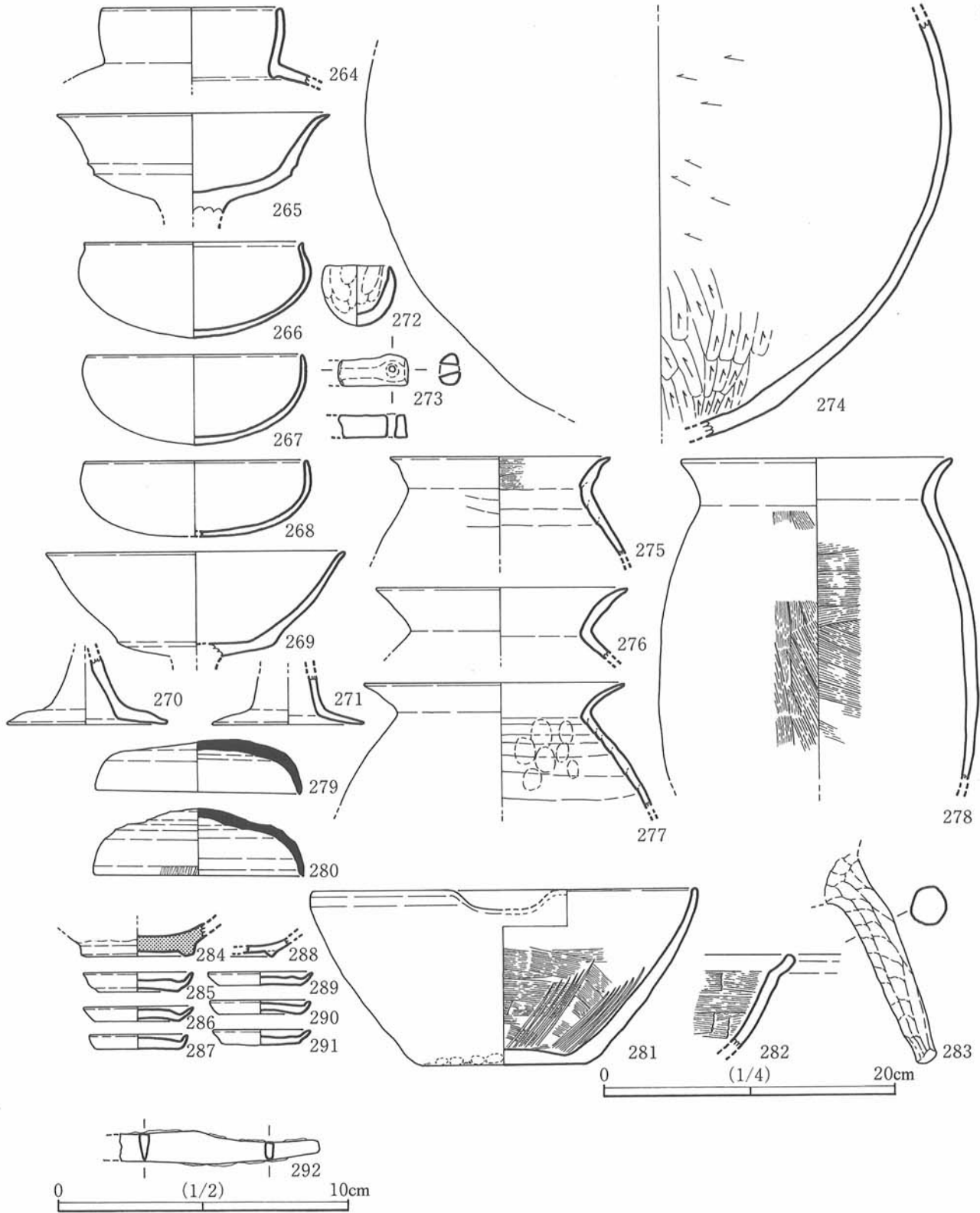
S T 4 (293-1・2・3) 和鏡は、和紙に包まれ、円形の底板を持つ容器に納められていたと推測される状態で、墓坑の北西隅近くの床面から出土した(293-1)。和鏡の保存処理は業務委託し、その過程で和紙・収納容器の材質分析を行った。和紙については、繊維組成分析を業務委託し、顕微鏡での繊維観察の結果、「薄膜に包まれた繊維、縦の筋条跡、節状部、薄膜に覆われた先端の状態などからこうぞです。繊維を包んでいる薄い膜が剥がれたものや欠損した繊維などが観察され、劣化が



第38図 掘立柱建物跡出土遺物実測図

進行しているものと思われます。」という高知県紙産業技術センターの大川昭典氏による分析報告を得ている。

収納容器の原形は、上部の残存状況が良好でなく復元が難しいが、和鏡の上部に残る木片や円形の底板から判断して、円筒状の木製容器ではなかったかと推測される。和鏡の上に残る木片と鏡の下の底板についても樹種鑑定を業務委託した。柾目面の切片を作製し、顕微鏡で観察する方法で同定が行われた結果、ともにヒノキを使用していることが判明した。顕微鏡写真(200倍)を図版22に掲げる。



SK131(264・265)、SK85(266)、SK96(267)、SK73(268～271)、SK81(272)、SK7(273)、SK74(274)、SK62(275)
SK55(276・277)、SK21(278)、SK80(279)、SK127(280)、SK111(281・282)、SK129(283)、SK56(284～292)

第39図 土坑出土遺物実測図

和鏡(293-2)は、直径9.4cm、厚さ1mm、鈕高3mm、鈕径9mm。周縁は幅4mm、厚さ5mmの直角式縁で薄く小型の鏡である。重量61.6g。青銅製で表面を青錆が覆い遺存状態はあまり良い方ではない。鈕は半球形で、鈕座には連珠文が巡る。文様構成は、一重の界圈が内外区を区画し、内区右側に生い茂った草花が描かれ、上部から左側にしなだれるように、内区から外区にわたり枝葉がのびる。左側隅には内区に羽を広げた鳥が一羽、外区にもう一羽の鳥が不鮮明ながら向かい合うように描かれている。全般に casting は悪く、文様の浮き出しは不鮮明である。鏡種は、草花双鳥鏡と呼ばれるものと見られる。文様構成・肉薄の描出技法・薄い鏡体などから平安時代後期の所産と考えられる。

底板(293-3)は、直径10.3cm、厚さ1.5mmのほぼ円形で、柀目が明瞭に見える。鏡が置かれていた面側に墨書文字が書かれている。文字は、縦4行にわたると見られるが、仮名文字・漢字として読むことが難しく、おそらく梵字で続け書きしているのではないかと思われる。墨書を書き写した実測図面(293-3)と赤外線写真(図版22)を掲載する。なお、和鏡上面に残っていた木片は、曲げ物状容器の上蓋または円筒側板の一部と推定される。厚さ0.7mmの薄片で柀目方向に数片に割れている。

ST 3 (294~298) 294~297は口径8.5~9.2cmの小型の土師器皿。底部糸切り。298は杯で、底径に対し口径が大きく器高はやや低く、外側に直線的に開く。299の杯より下る時期のもの。

ST 1 (299) 土師器の杯。5.0cmと器高が高く鋭角に立ち上がる器形で、298に比べ古い時期。

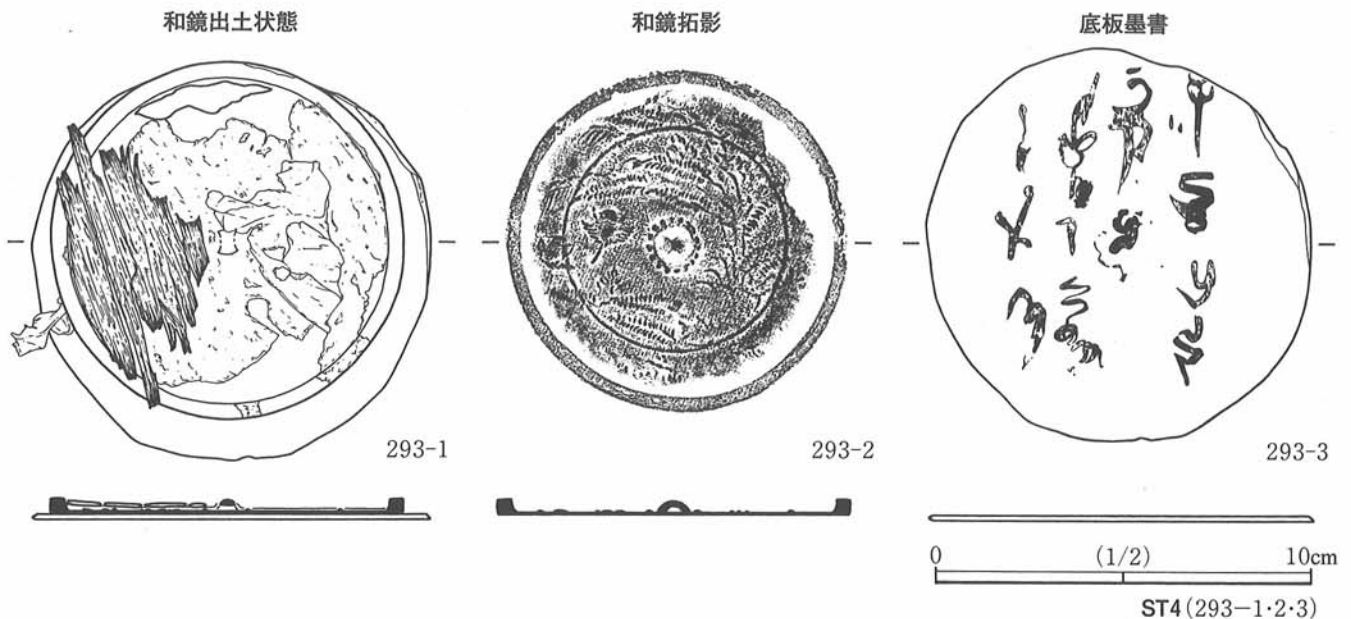
ST 7 (300) 土師器の皿。器壁が薄くロクロ回転痕が明瞭。墓出土の皿では最も新しい時期。

ST 6 (301~305) 301・302は底部糸切りの土師器皿で、302は底部が厚い。303は杯でやや内湾しながら大きく外に開きぎみに立ち上がる。304は椀で、接地部がやや丸みを帯びた高めの高台が貼り付けられ、やや内湾しながら立ち上がり、口縁端部がわずかに外反する。平安後期の12世紀頃か。305は鉄製刀子で、欠損した刃先を除く残存身部長4.7cm、茎部4.4cm。両関で、茎部に木質痕が残る。

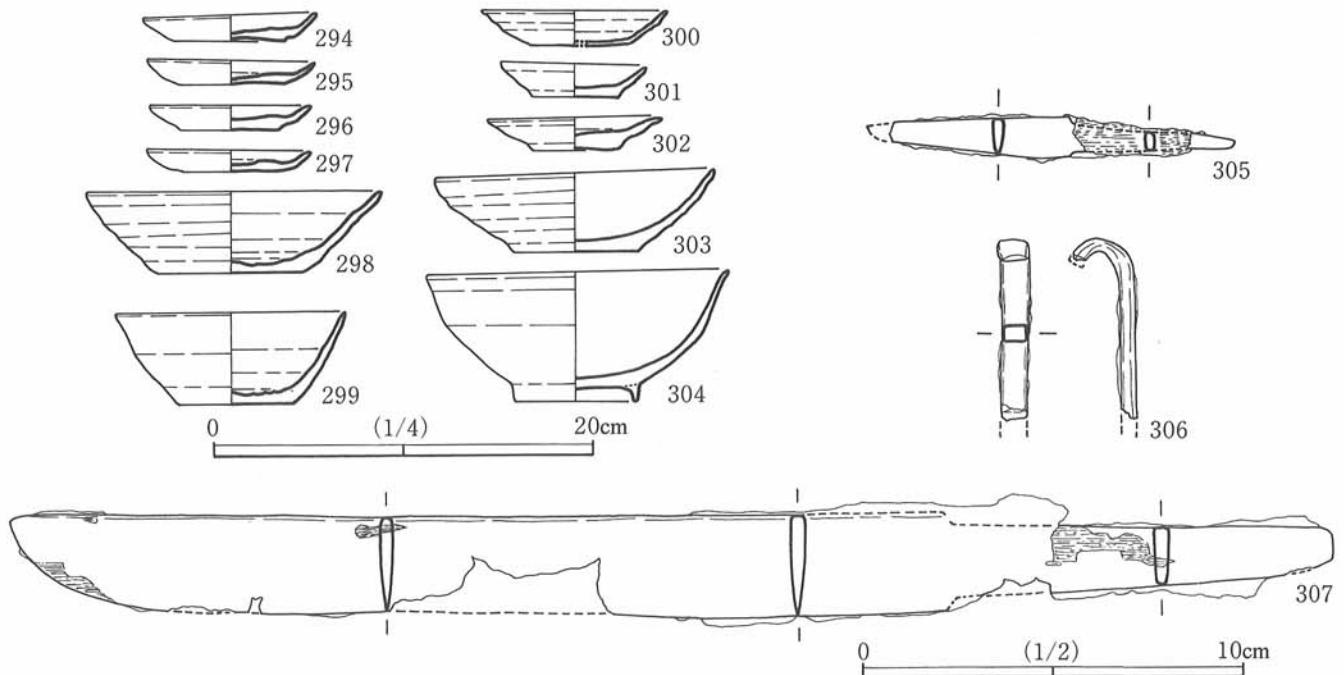
ST 5 (306・307) 306は鉄釘で、断面長方形。木棺に使用か。307は鉄製刀子で、長さ24.8cm、茎部推定10.1cm、幅2.7cm。厚さは背側で0.3cm。両関と推定され、身部・茎部に一部木質痕がある。

5 堀・溝状遺構出土遺物(第42図、図版22)

308は六連式製塩土器。内面に布目痕跡、外面には指頭圧痕が残る。309は土師器鉢。310は瓦質土器鉢。311は備前焼陶器の甕の底部破片。312は瓦質土器の足鍋脚部。313~316は瓦質土器鍋、備前焼陶器甕、鐔が巡る瓦質土器羽釜、土師器皿。317は器形不明の土師器。円筒の脚状を呈し、厚底で中



第40図 墓出土遺物実測図①



ST3(294~298)、ST1(299)、ST7(300)、ST6(301~305)、ST5(306・307)

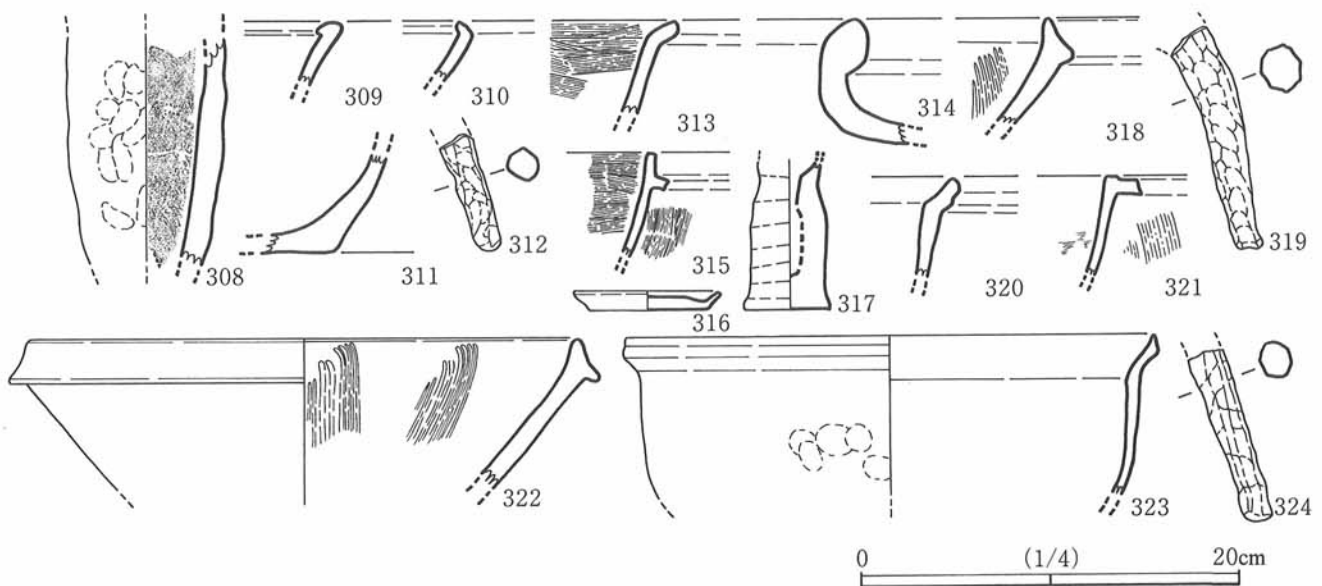
第41図 墓出土遺物実測図②

空である。胎土は精良で、浅黄橙色。318は備前焼陶器挿鉢。6条単位のおロシメがある。口縁部断面が丸い帯状突帯の幅広玉縁形で、備前焼間壁編年Ⅳ期の15世紀後半頃と見られる。319は瓦質土器足鍋脚部。320は瓦質土器鍋。321は口縁部外側に鏝がつく瓦質土器羽釜。322は備前焼陶器摺鉢。11条単位のおロシメがある。幅広玉縁口縁で、備前焼編年Ⅳ期の中でやや下の時期。323・324はS D 26(堀)出土の瓦質土器足鍋の口縁~胴部と脚部。323は胴部から口縁部にかけてくの字状に外反する。

6 柱穴出土遺物 (第43図、図版23)

古墳時代の遺物 (325・326) 325は須恵器杯身、326は甕。胴部内外面にタタキ痕が残る。

古代・中世の遺物 (327~365) 327は須恵器杯蓋で、欠損しているがつまみがつく。平坦な天井部から2段屈曲して口縁端部に至る。陶邑Ⅳ-3段階に相当し、8世紀後半~9世紀頃か。328は白磁の皿で、見込みに風車状に文様が描かれる。底部外面は無釉。底部から上が丁寧に打欠かれ二次加工



SD17(308)、SD1(309~312)、SD30(313~317)、SD22・23・24(318・319)
SD25(320)、SD33(321)、SD18(322)、SD26(323・324)

第42図 堀・溝状遺構出土遺物実測図

された状態で出土した。329は白磁碗。玉縁の口縁で、低い削り出し高台。330は青磁碗で、外面に鎬蓮弁文様が描かれる。331～342は土師器皿。342が直径9.0cm、器高2.0cmとやや大きめであるほかは、直径6.7～8.3cm、器高1.0～1.7cmの小型皿である。337は直径7.7cm、底径4.5cm、器高1.5cm、341は直径8.1cm、底径4.8cm、器高1.7cmで、いずれも他に比べて底径に対する口径が大きく、器高がやや高い。残りの皿は、口径に比べ底径が大きく、器高が低い。343～345は土師器碗。343は断面コの字形で高めの輪高台が貼り付けられている。底部糸切りかどうかは高台内ナデ消しのため確認できない。口径15.2cm。平安時代後半頃か。344は、断面三角形の貼り付け高台が付く。口縁端部外面はわずかにS字状に外反する。平安後期。345は断面三角形の高台が底部のやや内側に貼り付けられている。口縁部が浅黄色であるのを除き、体部から底部にかけては黒褐色。346～360は土師器杯。346～348は器高が4.9～5.1cmで比較的高く、わずかに内湾しながら立ち上がる。349は器高が3.6cmと低くやや内湾する。350・351は器高が4.6cm、4.5cmと高いが、焼き歪みが著しい。352・353はわずかに外反しながら立ち上がり、前者は内面が褐灰色を呈する。354～360はほぼ真っすぐに立ち上がる。354～358は器高が4.5～4.1cmで中程度の深さの杯である。359は焼き歪みがある。360は復元径12.5cm、復元底径5.6cm、器高2.9cmで浅く横に開きながら立ち上がる。器壁は薄い。362・363の瓦質土器足鍋とともにS P 2411からの一括出土。361は瓦質土器鍋。362・363は瓦質土器足鍋。361・363は底部にタキ痕がある。363の脚部先端はやや外側にとがる。15世紀代か。364は鞆羽口。内径は2.0～3.9cm。先端部にスラグが溶着する。365は中国銭で、景德2年(1005年)初鑄の「景德元寶」と見られる。

7 表面採集遺物 (第43図、図版22)

366は須恵器高杯。口縁端部は丸い。短脚で透かしはなく、基部が太くラッパ状に外反し、端部外側に稜をなす。陶邑Ⅱ-5・6段階相当。367は土製支脚で、竪穴住居カマドで使用されていたもの。

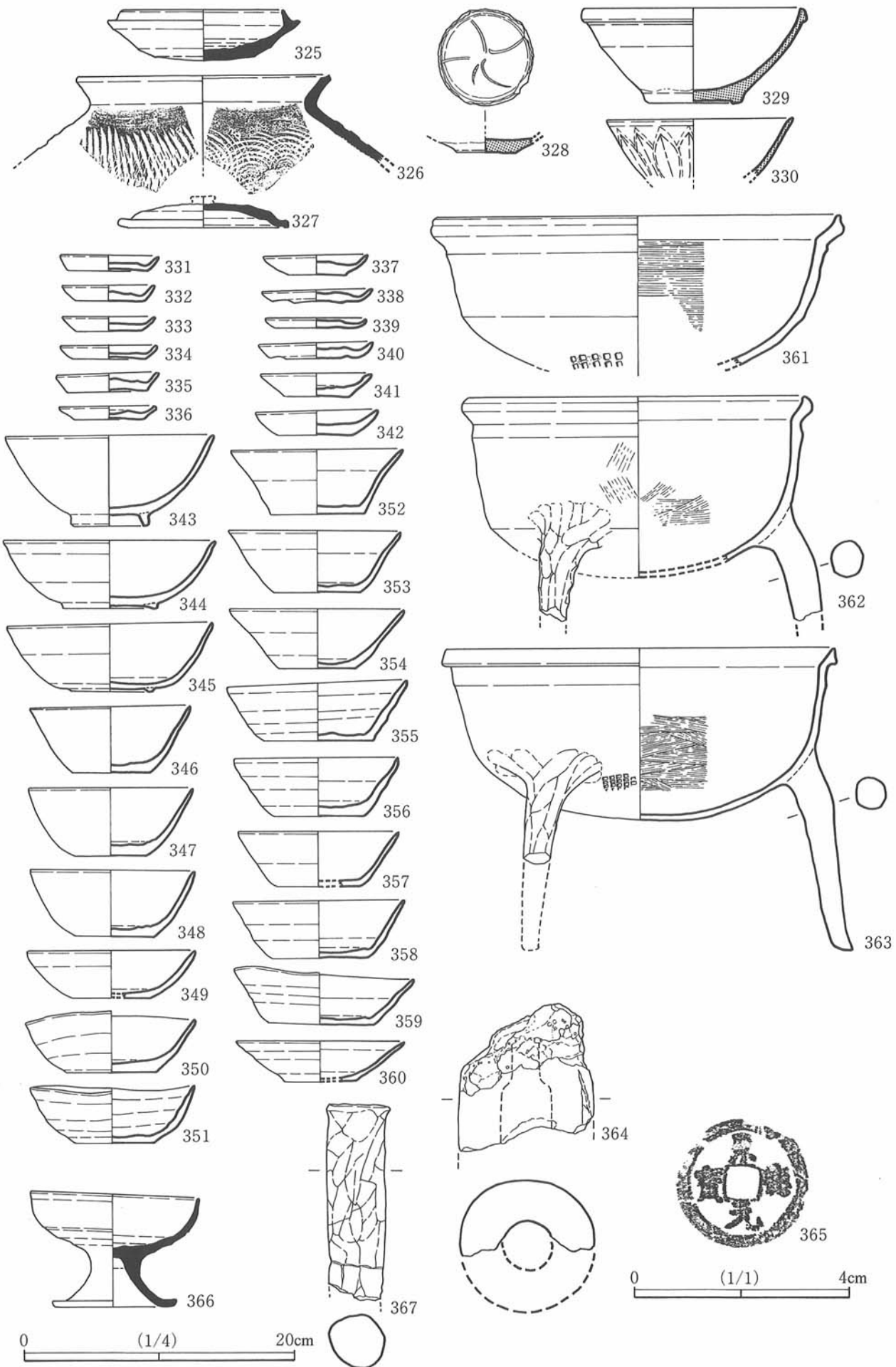
8 石器・石製品 (第44・45図、図版24)

縄文時代・弥生時代の遺物 (368～374、383・384) 368～372は石鏃。368は縄文時代早期の鋳形鏃。安山岩製。369～372も凹基無茎鏃で、仕上げの状態などから縄文期の所産と考えられる。373は縄文時代と見られる石斧で、刃部は欠損している。頁岩製。以上竪穴住居跡・土坑埋土や包含層からの出土で、各時期の遺構に伴う遺物ではない。374は弥生時代の玄武岩製の石庖丁で、中央に2個の穴がある。左側の穴の右に穿孔を途中でやめた形跡が認められる。383・384は両面に使用痕がある凹石。

古墳時代の遺物 (375～382) 375は水晶製の6面形の切子玉。376～381は竪穴住居跡内から出土した砥石。石材は凝灰岩・泥岩・砂岩である。379が荒砥石であるほかは仕上げ砥石。使用が著しい。

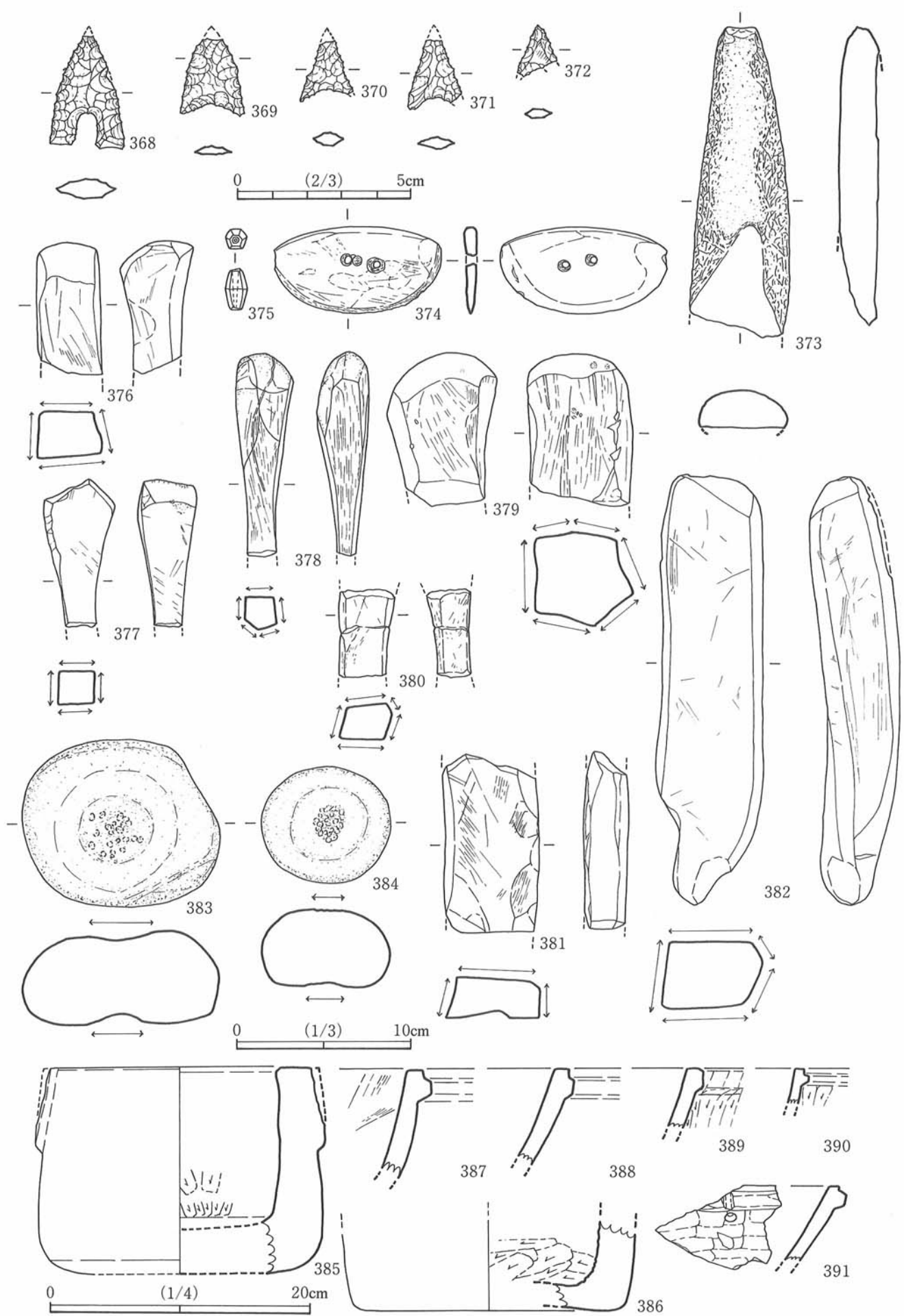
古代・中世の遺物 (385～391) 385～391は滑石製石鍋。385は底部から真っすぐ立ち上がり、口縁部四方に瘤状把手がつく古いタイプの石鍋で、県下では類例に乏しい。11世紀代の所産か。386も同タイプ。387～391は口縁外部に鏝がつき、外開きに立ち上がる。ノミの加工痕が一部残る。387はS D 1、388～390はS D 26 (堀) から出土。391には蔓状把手の取り付け穴と見られる穿孔がある。

古墳時代の石製模造品 (392～427) 392～399は滑石製の有孔円板。394は未穿孔。直径は、392が1.6cm、393が2.1cmと小型であるほかは、3.3～5.2cmの中型である。孔径は398が0.6cm、399が0.7cmで大きいほかは、0.2～0.3cmである。厚さは0.6～1.0cm。いずれも製作時の擦過痕が表裏面に残る。400～405は滑石製紡錘車。404は未穿孔。側面を滑らかに磨いて仕上げたものと面取り痕が残ったままの

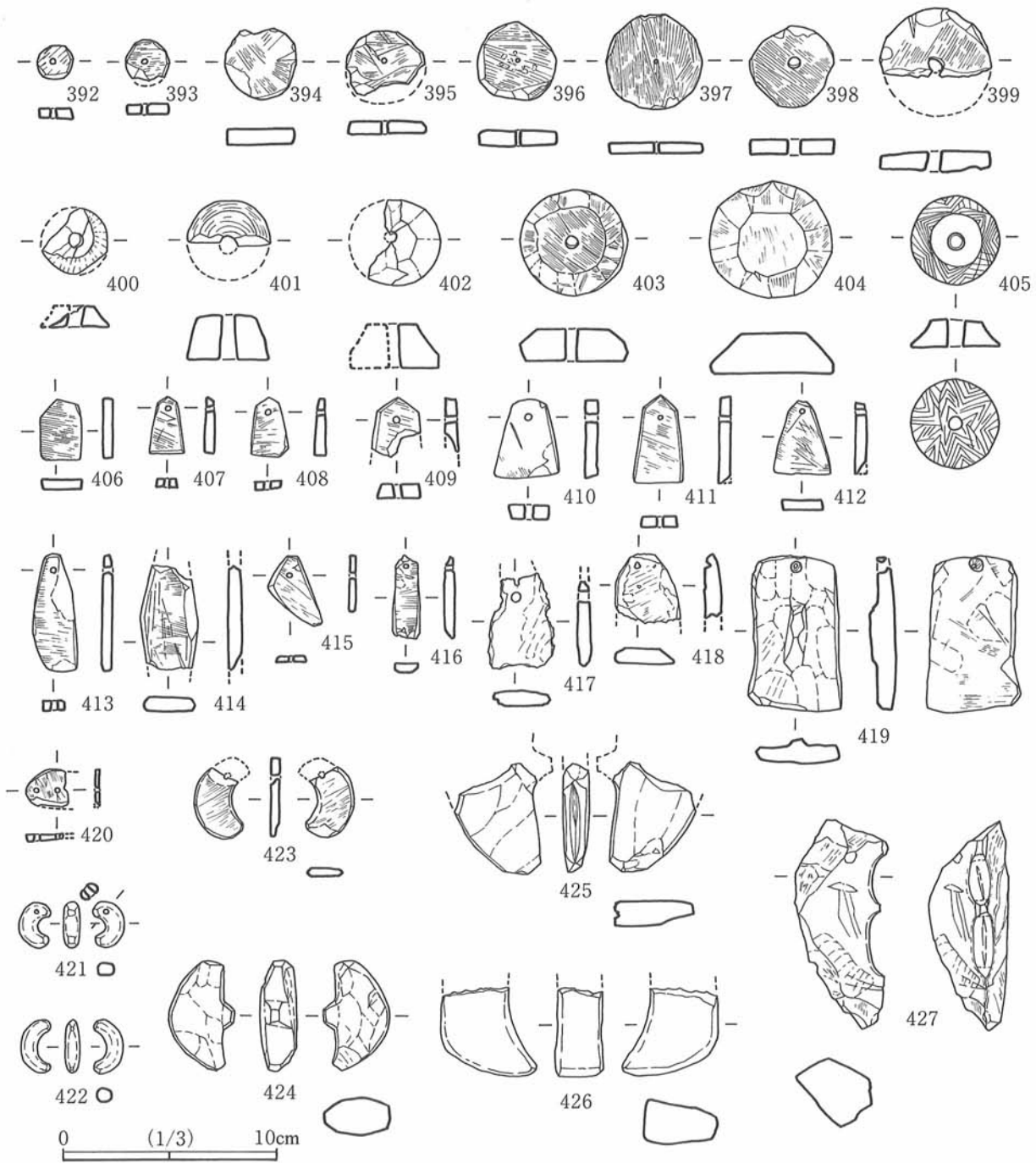


SB127(337)、SB141(344)、SB144(350-354)

第43图 柱穴出土遺物・表面採集遺物実測図



第44图 石器·石製品実測図



第45図 石製品実測図

ものがある。405は裏面・側面に放射状に山型文様が線描で刻まれている。406～420は祭祀用と見られる模造品で、417が泥質変岩である以外、いずれも滑石製。406～412は将棋の駒形を呈し、盾形または斧形を模したと考えられる。406は未穿孔である。413・414・416は剣形模造品と見られる。415は二次加工痕があり、破損後再加加工したものか。417・418・420は一部欠損のため模した器形はわかりにくい。420は破損後、再穿孔したと見られる。419は中央部に把手らしき突起があり、盾形と考えられる。421～423は滑石製勾玉。421は穿孔がある。423は断面が薄い板状を呈する。424は子持ち勾玉の最退化型式と見られ、親勾玉のみで子勾玉が省略または未製作と考えられる。425も欠損のため全体の形状はわからないが、子持ち勾玉の一部と推定した。426は勾玉の一部と見られるが、別製品の可能性もある。427は稜部に連弧状の製作痕があり、子持ち勾玉の未製品と思われる。

第5表 土器 観察表 (1)

※「復」は復元値、「残」は残存値

番号	出土地区	遺構番号	種類	器種	法 量 (cm)				胎土	焼成	色 調		調 整 ・ 備 考	
					口径	胴径	底径	器高			粗密	砂粒		内面
1	IC	SB1	須恵器	杯蓋	14.3			2.0	密	含砂粒少	硬質	灰白色	灰白色	内外面とも回転ナデ、重ね焼き痕あり
2	IC	SB1	須恵器	杯身	12.6		8.4	4.3	密	含砂粒多	硬質	灰色	灰色	内外面とも回転ナデ
3	IC	SB1	須恵器	皿	14.2		12.5	2.1	密	含砂粒少	硬質	灰白色	灰白色	内外面とも回転ナデ
4	IC	SB2A	須恵器	杯蓋	15.0			4.3	密	含細粒少	硬質	灰白色	灰白色	内面回転ナデ、外面回転ヘラケズリ
5	IC	SB2A	須恵器	杯身	復12.2			3.6	密	含砂粒多	硬質	灰白色	灰白色	内面回転ナデ、外面回転ヘラケズリ・回転ナデ
6	IC	SB2A	須恵器	提瓶?	4.6			残2.9	密	含細粒少	硬質	明青灰色	灰色	内外面とも回転ナデ
7	IC	SB2A	土師器	甕	13.7	13.3		11.4	粗	含砂粒多	やや軟質	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	内面粗いナデ、外面ハケ後粗いナデ・指頭圧痕
8	IC	SB2A	土師器	高杯	20.8			残7.4	密	含細粒少	やや軟質	橙色	橙色	内面ナデ、外面ナデ・指頭圧痕
10	IC	SB2B	土師器	杯	復13.8			復4.8	密	含細粒少	硬質	オリブ黒色	黒色	
11	IC	SB2B	土師器	杯	15.5			6.6	密	含砂粒少	硬質	にぶい褐色	にぶい褐色	内外面ともナデ
12	IC	SB2B	土師器	甕	14.4	18.8		復17.5	密	含砂粒少	やや軟質	にぶい褐色	浅黄褐色	内外面ともハケ後ナデ
13	IC	SB2B	土師器	甕	16.4			残4.4	粗	含砂粒多	やや硬質	褐色	褐色	内外面とも回転ナデ
14	IC	SB2B	土師器	甕	14.4	25.6		26.2	密	含砂粒少	やや軟質	にぶい褐色	にぶい褐色	外面ハケ
15	IC	SB2B	土師器	ミニチュア	5.0			4.7	密	含細粒少	硬質	褐色	褐色	手捏ね整形、内外面とも指頭圧痕
16	IC	SB2B	土師器	甕		26.0		残22.0	密	含細粒少	やや軟質	にぶい褐色	にぶい褐色	内外面ともナデ、底部に焼成前の穿孔
17	IC	SB3	土師器	甕	25.6			残7.2	粗	含砂粒少	やや軟質	明赤褐色	明赤褐色	内外面ともハケ後ナデ
18	IC	SB5A・SB6	土師器	甕	10.8	11.6		11.4	粗	含砂粒多	やや軟質	褐色	赤褐色	外面縦方向のハケ
19	IC	SB5A・SB6	土師器	高杯			10.4	残6.0	密	含細粒少	やや軟質	褐色	褐色	内面ナデ、外面ヘラミガキ
20	IC	SB5A・SB6	土師器	杯	復14.0			4.9	密	含砂粒多	やや軟質	赤褐色	赤褐色	
21	IC	SB5A・SB6	土師器	杯	11.6			7.4	密	含砂粒少	やや硬質	赤褐色	にぶい赤褐色	
22	IC	SB7	土師器	杯	14.2			7.3	密	含細粒少	やや硬質	褐色	褐色	
23	IC	SB7	土師器	甕	16.8			残6.6	粗	含砂粒少	硬質	にぶい黄褐色	灰黄褐色	内外面ともナデ・ハケ
24	IC	SB7	土師器	製塩土器			4.0	残3.1	粗	含細粒少	やや軟質	にぶい褐色	にぶい褐色	指頭圧痕、美濃ケ浜式製塩土器
25	IC	SB8	須恵器	杯蓋	12.8			3.6	密	含砂粒少	硬質	灰色	灰色	内面回転ナデ、外面回転ヘラケズリ・回転ナデ
26	IC	SB8	須恵器	杯身	11.4			4.4	密	含砂粒少	硬質	明青灰色	灰色	内面回転ナデ、外面回転ヘラケズリ・回転ナデ
27	IC	SB8	須恵器	杯身	11.6			3.7	密	含細粒多	硬質	灰色	灰色	内面回転ナデ、外面回転ヘラケズリ・回転ナデ
28	IC	SB8	須恵器	杯身	12.1			3.6	密	含砂粒多	硬質	灰白色	灰白色	内面回転ナデ、外面回転ヘラケズリ
29	IC	SB8	須恵器	杯身	12.6			3.1	密	含砂粒少	硬質	浅褐色	灰白色	内外面とも回転ナデ
30	IC	SB8	須恵器	蓋	復10.6			復5.3	密	含細粒少	硬質	灰色	灰色	内面回転ナデ、外面回転ヘラケズリ・回転ナデ
31	IC	SB8	須恵器	短頸壺	7.4	12.2		8.9	密	含砂粒多	硬質	灰白色	灰白色	外面口縁から肩は回転ナデ、他は回転ヘラケズリ
32	IC	SB8	須恵器	器台?				残9.7	密	含細粒少	硬質	明青灰色	明青灰色	内面当て具同心円文、外面タタキ
33	IC	SB8	土師器	甕	14.8	16.6		残10.0	密	含細粒少	やや軟質	褐色	黄褐色	
34	IC	SB8	土師器	高杯	14.8		11.8	10.6	密	含細粒少	やや軟質	明赤褐色	明赤褐色	
35	IC	SB8	土師器	甕	25.2	27.3		28.5	粗	含砂粒多	やや軟質	褐色	褐色	内面横方向のハケ、外面縦方向のハケ、把手付
36	IC	SB8	土師器	甕	27.0			残24.5	密	含細粒少	やや軟質	褐色	褐色	内面横方向のハケ、外面縦方向のハケ
37	IC	SB9	須恵器	杯蓋	12.4			3.6	密	含砂粒少	硬質	灰色	灰オリブ色	内面回転ナデ、外面回転ヘラケズリ・回転ナデ
38	IC	SB9	須恵器	杯蓋	15.2			復3.9	密	含細粒少	硬質	灰白色	灰白色	内面回転ナデ、外面回転ヘラケズリ・回転ナデ
39	IC	SB9	須恵器	杯身	復11.8			復4.2	密	含砂粒少	硬質	灰白色	灰色	内面回転ナデ、外面回転ヘラケズリ・回転ナデ
40	IC	SB9	須恵器	甕	20.8			残7.0	密	含砂粒多	硬質	青灰色	青灰色	胴部内面当て具同心円文、外面タタキ
41	IC	SB9	土師器	高杯				残4.4	密	含細粒少	やや軟質	にぶい褐色	にぶい褐色	内面回転ナデ、外面ハケ後ナデ
42	IC	SB9	土師器	甕?	復11.4			残9.7	粗	含砂粒少	やや軟質	にぶい褐色	にぶい褐色	把手付、外面ハケ、把手部には指頭圧痕
43	IC	SB9	土師器	甕	10.7	10.8		10.8	粗	含砂粒多	硬質	明赤褐色	褐色	外面ハケ
44	IC	SB9	土師器	甕	11.4	13.0		10.0	粗	含砂粒少	やや軟質	褐色	褐色	内面ナデ、外面ハケ
45	IC	SB9	土師器	甕	17.2	復19.4		残12.1	粗	含砂粒多	やや軟質	明褐色	明褐色	内面横方向のハケ、外面縦方向のハケ
46	IC	SB9	土師器	甕	21.6		8.0	22.6	粗	含砂粒少	やや軟質	褐色	褐色	内面ナデ・横方向のハケ、外面縦方向のハケ
47	IC	SB9	土師器	甕?	復27.6	復27.2		残8.1	粗	含砂粒多	軟質	黒褐色	暗赤褐色	内面に指頭圧痕、外面ハケ
48	IC	SB9	土師器	甕	29.0		9.2	31.5	粗	含砂粒多	やや軟質	明褐色	明褐色	内面ナデ、外面縦方向のハケ、把手は断面扁平形
49	IC	SB10	須恵器	杯蓋	12.6			4.8	密	含細粒少	硬質	青灰色	青灰色	天井部内面中央に当て具同心円文
50	IC	SB10	須恵器	杯蓋	復14.4			残4.1	密	含細粒少	硬質	灰褐色	青灰色	内面回転ナデ、外面回転ヘラケズリ・回転ナデ
51	IC	SB10	須恵器	杯身	復13.2			復4.4	密	含細粒少	硬質	灰色	灰色	内面回転ナデ、外面回転ヘラケズリ・回転ナデ
52	IC	SB10	土師器	甕	14.4			残7.7	粗	含砂粒多	やや軟質	赤褐色	赤褐色	
53	2	SB14	須恵器	杯蓋	12.0			復5.2	密	含細粒少	硬質	青灰色	青灰色	内面回転ナデ、外面回転ヘラケズリ・回転ナデ
54	2	SB14	土師器	製塩土器			復3.8	残4.1	粗	含砂粒少	やや軟質	褐色	褐色	内外面ナデ・指頭圧痕、美濃ケ浜式製塩土器
55	2	SB14	土師器	杯	12.6			6.5	密	含細粒少	やや軟質	赤褐色	赤褐色	
56	2	SB14	土師器	杯	13.5			復6.8	密	含砂粒少	やや軟質	黒褐色	にぶい黄褐色	内外面とも回転ナデ
57	2	SB14	土師器	杯	13.0			6.5	密	含細粒少	やや軟質	明赤褐色	明赤褐色	内外面とも回転ナデ

第5表 土器 観察表 (2)

※「復」は復元値、「残」は残存値

番号	出土 地	遺構 番号	種類	器種	法 量 (cm)				胎土 器砂粒	焼成	色 調		調 整 ・ 備 考
					口径	胴径	底径	器高			内 面	外 面	
58	2	SB14	土師器	杯	復14.4			5.9	密含細粒少	やや硬質	橙色	橙色	
59	2	SB14	土師器	杯	復12.2			7.0	密含砂粒少	やや軟質	にぶい赤褐色	にぶい赤褐色	
60	2	SB14	土師器	杯	13.2			7.1	密含細粒少	やや軟質	赤褐色	赤褐色	
61	2	SB14	土師器	杯	17.2			6.7	密含細粒少	やや軟質	赤褐色	赤褐色	
62	2	SB14	土師器	甕	12.2	18.0		残10.1	粗含細粒多	軟質	橙色	橙色	内面ナデ、外面ハケ後ナデ
63	2	SB14	土師器	甕	12.9	13.9		12.0	密含砂粒少	やや軟質	明黄褐色	赤色	内面ナデ、外面ハケ後ナデ
64	2	SB15	土師器	ミニチュア				残4.7	密含細粒少	やや軟質	淡褐色	淡褐色	手捏ね整形、指頭圧痕、内外面ともナデ
65	2	SB15	須恵器	杯身	13.2			5.3	密含砂粒少	硬質	青灰色	青灰色	内面回転ナデ、外面回転ヘラケズリ、底部にヘラ記号
66	2	SB15	土師器	杯	14.3			6.4	密含細粒少	軟質	淡赤褐色	橙色	
67	2	SB15	土師器	杯	復14.2			復7.1	密含細粒少	やや軟質	淡赤褐色	淡赤褐色	
68	2	SB16	須恵器	杯蓋	13.0			4.5	密含細粒少	硬質	青灰色	明青灰色	内面回転ナデ、外面回転ヘラケズリ・回転ナデ
69	2	SB16	土師器	杯	復12.6			残5.3	密含細粒少	やや軟質	灰色	灰色	内外面ともナデ
70	2	SB16	土師器	高杯			12.6	残6.9	密含細粒少	やや軟質	橙色	赤褐色	内外面ともナデ
71	2	SB16	土師器	高杯			10.8	残5.5	密含細粒少	やや軟質	浅褐色	浅赤褐色	内外面ともナデ
72	2	SB18	須恵器	杯蓋	12.7			4.1	密含細粒少	硬質	明青灰色	明青灰色	内面回転ナデ、外面回転ヘラケズリ・回転ナデ
73	2	SB18	須恵器	杯蓋	14.0			3.5	密含砂粒多	硬質	青灰色	青灰色	内面回転ナデ、外面回転ヘラケズリ・回転ナデ
74	2	SB18	須恵器	杯身	復12.2			復4.0	密含細粒多	硬質	灰色	灰色	内面回転ナデ、外面回転ヘラケズリ・回転ナデ
75	2	SB18	須恵器	杯身	復12.5			3.7	密含細粒少	硬質	灰白色	灰白色	内面回転ナデ、外面回転ヘラケズリ・回転ナデ
76	2	SB18	須恵器	杯身	12.2			4.0	密含細粒少	硬質	浅黄褐色	浅黄褐色	内外面とも回転ナデ
77	2	SB18	須恵器	高杯	復11.6			残4.3	密含砂粒多	硬質	青灰色	青灰色	内外面とも回転ナデ、体部に刺突文
78	2	SB18	須恵器	壺	復12.0			残5.6	密含砂粒少	硬質	青灰色	青灰色	胴部内面当て具同心円文、外面タタキ
79	2	SB18	須恵器	蓋	13.1			4.4	密含砂粒少	硬質	明緑灰色	明緑灰色	内面回転ナデ、外面回転ヘラケズリ・回転ナデ
80	2	SB18	須恵器	長頸壺	復9.4			残13.9	密含細粒少	硬質	青灰色	青灰色	内外面とも回転ナデ、胴部に刺突文
81	2	SB18	土師器	杯	14.2			5.1	粗含細粒多	やや軟質	明赤褐色	明赤褐色	内面回転ナデ、外面回転ナデ
82	2	SB18	土師器	甕	16.4			残12.7	密含細粒少	やや軟質	橙色	橙色	内外面ともハケ
83	2	SB18	土師器	甕	17.3	19.1		17.3	密含砂粒少	やや軟質	明赤褐色	明赤褐色	内面ハケ後ナデ・指頭圧痕、外面ナデ・ハケ
84	2	SB18	土師器	甕	11.6	12.2		復9.8	粗含砂粒多	軟質	明赤褐色	明赤褐色	内面ハケ後ナデ
85	2	SB18	土師器	甕	15.2	15.7		残14.5	密含砂粒少	硬質	青灰色	青灰色	内外面とも回転ナデ
86	2	SB18	須恵器	大甕	50.8			残23.9	密含砂粒少	硬質	青灰色	青灰色	口縁上部に2段の帯描文、胴部内面当て具同心円文、外面タタキ
87	2	SB19	土師器	甕				残11.5	粗含砂粒多	やや軟質	浅黄褐色	浅黄褐色	外面ハケ
88	2	SB20	須恵器	杯蓋	14.0			5.0	密含細粒少	硬質	灰色	灰色	内面回転ナデ、外面回転ヘラケズリ・回転ナデ
89	2	SB20	須恵器	杯蓋	15.4			4.5	密含砂粒少	硬質	灰色	灰色	内面回転ナデ、外面回転ヘラケズリ・回転ナデ
90	2	SB20	須恵器	杯蓋	復17.6			残5.0	密含細粒少	硬質	青灰色	青灰色	内面回転ナデ、外面回転ヘラケズリ・回転ナデ
91	2	SB20	須恵器	杯身	13.0			5.5	密含砂粒少	硬質	灰白色	灰白色	内面回転ナデ、外面回転ヘラケズリ・回転ナデ
92	2	SB20	須恵器	杯身	11.8			4.8	密含砂粒多	硬質	灰白色	灰白色	内面回転ナデ、外面回転ヘラケズリ・回転ナデ
93	2	SB20	須恵器	杯身	11.6			4.8	密含細粒少	硬質	青灰色	青灰色	内面回転ナデ、外面回転ヘラケズリ、底部にヘラ記号
94	2	SB20	須恵器	杯身	11.1			4.7	密含細粒少	硬質	青灰色	青灰色	内面回転ナデ、外面回転ヘラケズリ・回転ナデ
95	2	SB20	土師器	杯	13.3			4.1	密含細粒少	やや硬質	明赤褐色	明赤褐色	
96	2	SB20	土師器	杯	復14.2			復6.7	粗含砂粒多	やや軟質	浅黄褐色	橙色	内面ヘラミガキ
97	2	SB20	土師器	甕	19.6			残12.0	密含砂粒多	やや軟質	橙色	橙色	内面ハケ・ヘラケズリ、外面ハケ
98	2	SB20	土師器	甕	復20.2	23.4		29.5	密含細粒少	やや軟質	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	内面ナデ・横方向のハケ、外面ナデ・縦方向のハケ
99	2	SB20	土師器	甕	復24.2		復9.0	復25.6	粗含砂粒多	やや軟質	灰白色	灰白色	内面ヘラケズリ、外面ハケ
100	2	SB20	土師器	甕	29.0		10.5	29.1	粗含砂粒少	やや軟質	浅黄褐色	浅黄褐色	外面縦方向のハケ
101	2	SB20	土師器	甕	復25.0		10.3	復26.5	密含砂粒少	やや軟質	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	内面ハケ後ナデ、外面縦方向のハケ
102	2	SB21	須恵器	杯蓋	12.8			3.9	密含砂粒少	硬質	明青灰色	明青灰色	内面回転ナデ、外面回転ヘラケズリ・回転ナデ
103	2	SB21	須恵器	杯身	11.5			4.0	密含細粒少	硬質	灰白色	灰白色	内面回転ナデ、外面回転ヘラケズリ・回転ナデ
104	2	SB21	須恵器	杯身	12.3			4.2	密含細粒少	硬質	灰白色	灰白色	内面底部静止ナデ、他は回転ナデ
105	2	SB21	土師器	高杯			16.0	残13.9	粗含砂粒多	軟質	黄褐色	橙色	内面ナデ、外面ハケ・指頭圧痕
106	2	SB21	土師器	甕	12.0	13.7		12.1	密含細粒少	やや軟質	にぶい黄褐色	赤色	外面ハケ
107	2	SB21	土師器	甕	復22.5		復9.8	27.8	粗含砂粒少	やや軟質	明赤褐色	明赤褐色	内面横方向のハケ、外面縦方向のハケ・指頭圧痕
108	2	SB21	土師器	甕	復18.3	復24.6		残24.7	粗含砂粒多	軟質	にぶい黄褐色	明黄褐色	内面指頭圧痕、外面ハケ、把手付
109	2	SB22	須恵器	杯蓋	復12.6			復5.1	密含砂粒少	硬質	灰白色	灰色	内面回転ナデ、外面回転ヘラケズリ・回転ナデ
110	2	SB22	須恵器	杯身	12.8			5.2	密含砂粒少	硬質	灰白色	灰黄色	内面回転ナデ、外面回転ヘラケズリ・回転ナデ
111	2	SB22	須恵器	杯身	13.2			5.1	密含細粒少	硬質	青灰色	青灰色	内面回転ナデ、外面回転ヘラケズリ・回転ナデ
112	2	SB22	土師器	甕	復19.0	復21.6		残9.2	密含砂粒多	やや硬質	橙色	橙色	内面指頭圧痕、外面一部ハケ
113	2	SB22	土師器	杯	12.4			6.0	粗含細粒多	軟質	黄褐色	橙色	内外面ともナデ

第5表 土器 観察表 (3)

※「復」は復元値、「残」は残存値

番号	出土地区	遺構番号	種類	器種	法量 (cm)				胎土		焼成	色調		調整・備考
					口径	胴径	底径	器高	器密	砂粒		内面	外面	
114	2	SB22	土師器	製塩土器				残1.4	粗	含砂粒多	軟質	灰白色	灰白色	指頭圧痕、美濃ケ浜式製塩土器
115	2	SB22	土師器	製塩土器				残2.1	粗	含砂粒少	軟質	浅黄橙色	橙色	指頭圧痕、美濃ケ浜式製塩土器
116	2	SB23	須恵器	杯蓋	14.4			3.9	密	含砂粒少	硬質	青灰色	青灰色	内面回転ナデ、外面回転ヘラケズリ・回転ナデ
117	2	SB23	須恵器	杯蓋	復12.8			残3.1	密	含細粒少	硬質	明青灰色	灰色	内面回転ナデ、外面回転ヘラケズリ・回転ナデ
118	2	SB23	須恵器	杯身	10.6			3.7	密	含細粒少	硬質	青灰色	青灰色	内面回転ナデ、外面回転ヘラケズリ・回転ナデ
119	2	SB23	須恵器	高杯	12.4			残7.8	密	含細粒少	硬質	青色	青色	内面回転ナデ、外面回転ヘラケズリ・回転ナデ
120	2	SB23	須恵器	臚		10.1		残8.7	密	含細粒少	硬質	青灰色	明青灰色	内面回転ナデ、外面回転ヘラケズリ・回転ナデ
121	2	SB23	須恵器	壺	10.0	14.7		10.7	密	含砂粒少	硬質	灰白色	灰白色	内面回転ナデ、外面回転ヘラケズリ・回転ナデ
122	2	SB23	土師器	高杯			復11.6	残10.6	密	含細粒少	やや軟質	橙色	橙色	内外面ともナデ、粘土帯接合痕あり
123	2	SB23	土師器	甕	11.6	14.2		残13.2	粗	含砂粒多	軟質	赤褐色	赤褐色	内外面ともナデ
124	2	SB23	土師器	甕	15.8	21.1		残20.4	粗	含砂粒多	やや軟質	明赤褐色	明赤褐色	内面回転ナデ、外面縦方向のハケ・回転ナデ
125	2	SB23	土師器	甕	18.6	復26.2		残29.3	密	含砂粒多	やや軟質	明赤褐色	にぶい赤褐色	外面口縁部横ナデ、その他はハケ
126	2	SB24	土師器	杯	13.0			5.5	密	含砂粒多	やや軟質	暗灰色	暗灰色	内外面とも回転ナデ
127	2	SB24	土師器	甕	復16.2			残5.5	粗	含砂粒多	軟質	橙色	橙色	外面回転ナデ
128	2	SB24	土師器	甕	復14.0	21.0		残12.8	密	含細粒多	硬質	にぶい褐色	黒褐色	内面ヘラケズリ・肩の部分に粘土帯の痕、外面ハケ
129	2	SB25A	須恵器	(高杯)蓋	復13.8			5.0	密	含細粒多	硬質	灰色	灰色	内面回転ヘラケズリ後回転ナデ、外面回転ナデ、摘みあり
130	2	SB25A	須恵器	杯蓋	11.0			4.2	密	含砂粒少	硬質	灰色	灰色	内面回転ナデ、外面回転ヘラケズリ・回転ナデ
131	2	SB25A	須恵器	杯蓋	12.8			4.1	密	含細粒少	硬質	青灰色	青灰色	内面回転ナデ、外面回転ヘラケズリ・回転ナデ
132	2	SB25A	須恵器	杯蓋	14.0			3.5	密	含細粒少	硬質	青灰色	青灰色	内面回転ナデ、外面回転ヘラケズリ・回転ナデ
133	2	SB25A	須恵器	杯身	復13.0			残4.0	密	含細粒少	硬質	明青灰色	青灰色	内面回転ナデ、外面回転ヘラケズリ・回転ナデ
134	2	SB25A	須恵器	長頸壺	復10.2			残3.8	密	含細粒少	硬質	灰色	灰色	内外面とも回転ナデ、描繪波状文
135	2	SB25A	土師器	杯	13.5			6.0	密	含砂粒少	軟質	にぶい橙色	灰色	内外面ともナデ
136	2	SB25A	土師器	杯	15.9			8.9	密	含細粒少	やや軟質	淡赤橙色	淡橙色	内外面に赤色塗彩
137	2	SB25A	土師器	高杯	復13.8		復11.0	10.5	密	含細粒少	やや軟質	橙色	橙色	内面脚部ナデ・指頭圧痕、外面ナデ・指頭圧痕
138	2	SB25B	土師器	杯	11.8			5.0	密	含細粒少	やや軟質	にぶい褐色	灰褐色	内外面ともナデ
139	2	SB25B	土師器	杯	14.0			6.8	密	含細粒少	やや軟質	灰黄色	灰黄色	内外面ともナデ、外面底部にヘラ記号
140	2	SB25B	土師器	高杯	15.8		10.2	11.3	密	含細粒少	やや軟質	浅黄橙色	浅黄橙色	内外面ともナデ、外面に指頭圧痕
141	2	SB25A	土師器	甕	14.3			残7.3	粗	含細粒多	やや軟質	灰白色	灰白色	頸部に粘土帯接合痕
142	2	SB25A	土師器	甕	25.0	25.9		31.0	密	含細粒少	やや軟質	明赤褐色	橙色	外面縦方向のハケ、胴部にゆがみあり
143	2	SB26	須恵器	蓋	10.6			復4.1	密	含細粒少	硬質	灰色	明オリブ灰	内面回転ナデ、外面回転ヘラケズリ・回転ナデ
144	2	SB27	須恵器	杯蓋	13.2			復4.5	密	含砂粒少	硬質	緑灰色	緑灰色	内面回転ナデ、外面回転ヘラケズリ・回転ナデ
145	2	SB27	須恵器	杯身	11.6			4.2	密	含砂粒多	硬質	灰白色	灰白色	内面回転ナデ、外面回転ヘラケズリ・回転ナデ
146	2	SB27	須恵器	高杯	11.6		9.2	7.5	密	含細粒少	硬質	青灰色	青灰色	内外面とも回転ナデ、脚部に円形の3点の透かし
147	2	SB27	土師器	甕	14.8			残8.1	粗	含砂粒多	軟質	明赤褐色	橙色	外面口縁部ナデ
148	2	SB28	須恵器	杯蓋	14.4			残3.3	密	含細粒少	硬質	明青灰色	明青灰色	内面回転ナデ、外面回転ヘラケズリ・回転ナデ
149	2	SB28	須恵器	杯身	13.4			3.8	密	含細粒少	硬質	青灰色	青灰色	内面回転ナデ、外面回転ヘラケズリ・回転ナデ
150	2	SB29	土師器	甕	11.8	12.8		8.8	密	含細粒少	やや軟質	橙色	褐色	
151	2	SB30	須恵器	(高杯)蓋	13.0			4.4	密	含細粒多	硬質	灰白色	灰白色	内面回転ナデ、外面回転ヘラケズリ・回転ナデ、摘みあり
152	2	SB30	須恵器	杯蓋	復14.2			4.0	密	含細粒少	硬質	灰色	灰色	内面回転ナデ、外面回転ヘラケズリ・回転ナデ
153	2	SB30	須恵器	杯身	復12.8			4.0	密	含細粒多	硬質	灰白色	灰白色	内面回転ナデ、外面回転ヘラケズリ・回転ナデ
154	3A	SB32A	須恵器	杯蓋	復12.6			3.7	密	含細粒少	硬質	明青灰色	青灰色	内面回転ナデ、外面回転ヘラケズリ・回転ナデ
155	3A	SB32A	土師器	甕	14.4	15.8		残9.7	粗	含砂粒少	やや軟質	黒褐色	赤褐色	内面ナデ
156	3A	SB32A	土師器	ミニチュア	4.0			2.5	密	含細粒少	やや軟質	淡黄色	淡黄色	手捏ね整形、指頭圧痕
157	3A	SB32B	土師器	甕	14.8			残10.5	密	含砂粒少	やや軟質	褐色	にぶい赤褐色	
158	3A	SB32B	須恵器	杯蓋	15.2			4.4	密	含砂粒少	硬質	緑灰色	緑灰色	内面回転ナデ、外面回転ヘラケズリ・回転ナデ
159	3A	SB32B	土師器	杯	復11.6			復5.5	密	含砂粒少	やや軟質	橙色	橙色	内外面とも回転ナデ
160	3A	SB32B	須恵器	提瓶		13.0		残12.4	密	含細粒少	硬質	灰色	灰色	内面回転ナデ、外面回転ヘラケズリ・回転ナデ
161	3A	SB32B	土師器	甕	復22.2	復25.2		残28.5	粗	含砂粒多	やや軟質	明赤褐色	明赤褐色	内面横方向のハケ、外面縦方向のハケ、把手付
162	4B	SB33	須恵器	杯蓋	復14.6			残3.7	密	含細粒少	硬質	灰色	灰色	内面回転ナデ、外面回転ヘラケズリ・回転ナデ
163	4B	SB33	須恵器	杯身	12.5			4.6	密	含細粒少	硬質	灰色	灰色	内面回転ナデ、外面回転ヘラケズリ・回転ナデ
164	4B	SB33	須恵器	杯身	復13.8			4.3	密	含砂粒少	やや硬質	明オリブ灰	明オリブ灰	内面回転ナデ、外面回転ヘラケズリ・回転ナデ
165	4B	SB33	須恵器	高杯	復13.8			残8.8	密	含砂粒少	硬質	青灰色	青灰色	脚部に四方透かし、ロクロ左回転
166	4B	SB33	須恵器	臚	13.8			残4.5	密	含細粒少	硬質	暗青灰色	灰色	内外面とも回転ナデ、外面頸部に自然釉溶着
167	4B	SB33	土師器	甕	20.8			残8.1	粗	含砂粒多	やや軟質	明褐色	明褐色	内外面とも口縁部ナデ
168	4B	SB33	土師器	甕	15.4	21.7		残14.6	粗	含細粒多	軟質	橙色	橙色	内面ヘラケズリ後ナデ、外面ハケ
169	4B	SB33	土師器	甕	12.8	13.8		残8.7	密	含砂粒少	やや軟質	浅黄橙色	にぶい黄褐色	外面ハケ、口縁部ナデ

第5表 土器 観察表 (4)

※「復」は復元値、「残」は残存値

番号	出土 地区	遺構 番号	種類	器種	法 量 (cm)				胎土 粗砂粒	焼成	色 調		調 整 ・ 備 考
					口径	胴径	底径	器高			内 面	外 面	
170	4B	SB33	土師器	甕	13.0	13.6		13.2	粗含砂粒多	やや軟質	浅黄色	浅黄色	内面ナデ
171	4B	SB34	土師器	甕	10.0	11.4		8.9	密含細粒少	やや軟質	浅黄褐色	赤褐色	
172	4A	SB37	須恵器	杯蓋	復13.8			5.4	密含細粒少	硬質	灰色	黄灰色	内面回転ナデ、外面回転ヘラケズリ・回転ナデ
173	4A	SB37	須恵器	杯身	12.6			3.9	密含細粒少	硬質	明青灰色	明青灰色	内面回転ナデ、外面回転ヘラケズリ・回転ナデ
174	4A	SB37	須恵器	高杯			10.2	残4.9	密含砂粒少	硬質	青灰色	青灰色	内外面とも回転ナデ、低脚、脚部に円形の3点の透かし
175	4A	SB37	土師器	鉢	復11.0		復8.0	5.5	密含細粒少	やや軟質	褐色	褐色	内面ハケ、外面ハケ後ナデ
176	4B	SB37	土師器	甕	10.0	11.0		9.8	密含細粒少	やや軟質	黒褐色	黒褐色	内面ハケ後ナデ、外面縦方向のハケ
177	4A	SB38	土師器	杯	12.0			6.2	密含細粒少	やや軟質	褐色	褐色	内面ナデ、外面口縁部ナデ・底部ヘラケズリ
178	4A	SB38	土師器	杯	13.6			6.5	密含砂粒少	やや軟質	赤褐色	赤褐色	外面ハケ後ナデ
179	4A	SB38	土師器	台付杯	14.8		4.6	7.0	密含細粒少	やや軟質	浅黄褐色	褐色	内外面ともナデ
180	4A	SB38	土師器	ミニチュア	7.0			3.8	密含細粒少	やや軟質	浅黄褐色	浅黄褐色	手捏ね整形、指頭圧痕
181	5	SB39	土師器	甕	10.8	10.5		8.7	密含細粒少	やや軟質	黒褐色	黒褐色	内面底部に指頭圧痕・接合痕、外面ナデ・縦方向の粗いハケ
182	5	SB39	土師器	甕	11.8			残4.8	密含細粒多	硬質	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	内面ナデ・ヘラケズリ・接合痕、外面ナデ・縦方向のハケ
183	5	SB39	土師器	製塩土器			4.1	残3.2	密含砂粒少	硬質	褐色	褐色	手捏ね整形、指頭圧痕、美濃ケ浜式製塩土器
184	5	SB39	土師器	製塩土器				残2.8	密含砂粒少	やや軟質	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	手捏ね整形、指頭圧痕、美濃ケ浜式製塩土器
185	5	SB39	土師器	製塩土器				残1.8	密含砂粒少	やや軟質	褐色	にぶい黄褐色	手捏ね整形、指頭圧痕、美濃ケ浜式製塩土器
187	5	SB40	須恵器	杯蓋	復13.2			残3.8	密含砂粒多	硬質	灰色	灰色	内面回転ナデ、外面回転ナデ・ヘラケズリ
188	5	SB40	須恵器	杯身	復12.0			2.7	密含砂粒多	硬質	灰色	灰色	内面回転ナデ、外面回転ナデ・ヘラケズリ、器面ゆがみ
189	5	SB40	須恵器	杯(高杯?)	11.6			4.8	密含細粒多	硬質	灰色	灰色	内面回転ナデ、外面回転ヘラケズリ・回転ナデ、並縁線、刺突文、外面全体に黒く自然粘着
190	5	SB40	土師器	甕	13.3	12.9		残9.3	密含細粒多	やや硬質	にぶい黄褐色	明赤褐色	内面回転ナデ・ハケ、外面回転ナデ・縦方向の粗いハケ
191	5	SB41	須恵器	杯蓋	12.4			4.2	密含砂粒多	硬質	灰白色	灰白色	内面回転ナデ、外面回転ヘラケズリ・回転ナデ
192	5	SB41	須恵器	杯蓋	14.2			5.3	密含砂粒少	硬質	灰色	灰色	内面回転ナデ、外面回転ヘラケズリ・回転ナデ
193	5	SB41	須恵器	杯蓋	13.6			5.6	密含細粒多	硬質	灰色	灰色	内面回転ナデ、外面回転ヘラケズリ・回転ナデ
194	5	SB41	須恵器	杯身	10.8			5.5	密含細粒少	硬質	灰白色	灰白色	内面回転ナデ、外面回転ヘラケズリ・回転ナデ、外面に自然粘着
195	5	SB41	須恵器	杯身	11.7			5.7	密含砂粒少	硬質	灰白色	灰白色	内面回転ナデ、外面回転ヘラケズリ・回転ナデ
196	5	SB41	須恵器	杯身	14.8			5.9	密含砂粒多	硬質	灰色	灰色	内面回転ナデ、外面回転ヘラケズリ・回転ナデ
197	5	SB41	須恵器	杯身?	12.2	最大径14.2		3.3	密含細粒少	硬質	灰色	灰色	内面回転ナデ・底面静止ナデ、外面回転ヘラケズリ・回転ナデ
198	5	SB41	須恵器	短頸壺	8.0	12.1		7.6	密含細粒少	硬質	灰色	灰色	内面回転ナデ、外面回転ヘラケズリ・回転ナデ
199	5	SB41	土師器	ミニチュア	2.6			2.0	密含細粒少	硬質	にぶい褐色	にぶい褐色	手捏ね整形、内面に指頭圧痕
200	5	SB41	土師器	製塩土器			2.7	残2.3	密含砂粒多	硬質	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	手捏ね整形、指頭圧痕、美濃ケ浜式製塩土器
201	5	SB41	土師器	製塩土器				残2.8	密含細粒少	硬質	にぶい褐色	にぶい褐色	手捏ね整形、指頭圧痕、美濃ケ浜式製塩土器
202	5	SB41	土師器	製塩土器			2.8	残3.6	密含砂粒多	硬質	褐色	褐色	手捏ね整形、内面に指頭圧痕、美濃ケ浜式製塩土器
203	5	SB41	土師器	製塩土器				残2.5	密含砂粒多	硬質	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	手捏ね整形、指頭圧痕、美濃ケ浜式製塩土器
204	5	SB41	土師器	鉢	8.8			4.5	密含砂粒少	硬質	にぶい褐色	にぶい褐色	
205	5	SB41	土師器	高杯				残10.2	密含細粒少	軟質	にぶい黄褐色	にぶい赤褐色	
206	5	SB41	土師器	高杯				残8.2	密含細粒少	軟質	にぶい黄褐色	にぶい褐色	
207	5	SB41	土師器	甕		9.9		残7.3	密含細粒少	やや軟質	淡赤褐色	淡赤褐色	内面底面に指頭圧痕・接合痕、外面ナデ・ハケ
208	5	SB41	土師器	鉢	23.9			9.7	粗含砂粒多	やや硬質	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	外面薄いハケ、器面ゆがみ
209	5	SB41	土師器	杯	12.5			5.6	密含砂粒多	硬質	にぶい褐色	褐色	
210	5	SB41	土師器	杯	16.4			7.0	密含細粒少	硬質	にぶい褐色	にぶい褐色	
211	5	SB41	土師器	杯	10.6			7.6	密含細粒少	やや硬質	赤褐色	赤褐色	内面ヘラミガキ・ハケ、外面ヘラミガキ・指頭圧痕、赤色塗彩
212	5	SB41	土師器	杯	11.5			5.6	密含細粒少	やや硬質	にぶい褐色	にぶい褐色	
213	5	SB41	土師器	杯	13.0			5.7	密含細粒少	硬質	にぶい赤褐色	にぶい赤褐色	内外面ともナデ
214	5	SB41	土師器	杯	12.5			復5.7	密含細粒少	硬質	黒色	黒色	内面ナデ・ヘラミガキ、外面ナデ
215	5	SB41	土師器	甕	11.0	16.0		16.4	粗含砂粒多	軟質	にぶい褐色	褐色	内面ハケ・指頭圧痕、外面縦方向のハケ
216	5	SB41	土師器	甕	14.2			残6.8	粗含砂粒多	やや硬質	にぶい赤褐色	にぶい赤褐色	内面接合痕
217	5	SB41	土師器	甕	17.0			残5.8	密含砂粒多	硬質	にぶい黄褐色	にぶい褐色	内面ナデ・ヘラケズリ、外面ナデ
218	5	SB41	土師器	甕	17.6	27.3		残19.8	密含砂粒少	硬質	明褐色	褐色	内面ヘラケズリ、外面ナデ・縦方向のハケ
219	5	SB41	土師器	甕	復27.6		復7.7	23.1	粗含砂粒多	やや軟質	浅黄褐色	浅黄褐色	内面口縁部横方向のハケ・ヘラケズリ、外面縦方向のハケ・指頭圧痕
220	5	SB42	土師器	甕	17.8			残8.0	密含砂粒少	やや硬質	にぶい黄褐色	にぶい赤褐色	内面ナデ・ヘラケズリ・接合痕、外面ナデ・縦方向の粗いハケ
221	5	SB42	土師器	杯	12.6			5.5	密含細粒少	硬質	にぶい褐色	褐色	外面ヘラミガキ
222	5	SB42	土師器	甕	25.7		7.1	26.6	密含砂粒多	やや硬質	にぶい褐色	にぶい褐色	内面ナデ・ヘラケズリ、外面ナデ・縦方向のハケ、口縁下部に接合痕
223	5	SB43	土師器	ミニチュア	4.1			2.7	密含砂粒少	硬質	赤褐色	にぶい褐色	手捏ね整形、内面に指頭圧痕
224	5	SB43	土師器	製塩土器				残2.2	密含砂粒多	硬質	褐色	褐色	手捏ね整形、指頭圧痕、美濃ケ浜式製塩土器
225	5	SB43	土師器	杯	12.0			5.6	密含細粒少	やや硬質	にぶい褐色	にぶい褐色	
226	5	SB43	土師器	杯	12.5			5.6	密含細粒少	やや硬質	黒色	黒色	内面ナデ・ヘラミガキ、外面ナデ

第5表 土器 観察表 (5)

※「復」は復元値、「残」は残存値

番号	出土地区	遺構番号	種類	器種	法 量 (cm)				器型	胎土	焼成	色 調		調 整 ・ 備 考
					口径	胴径	底径	器高				含砂粒	内面	
227	5	SB43	土師器	壺?			4.0	残5.5	密	含砂粒少	硬 質	明褐色	明褐色	
228	5	SB43	土師器	甕	15.4			残5.8	密	含砂粒多	硬 質	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	内面ナデ・ヘラケズリ、外面ナデ
229	5	SB43	土師器	甕	22.1		7.7	20.7	粗	含砂粒多	やや軟質	灰黄色	にぶい褐色	内面ヘラケズリ、外面ナデ・ハケ、把手は指頭圧痕
230	1A	SB45	須恵器	杯蓋	復13.0			復4.1	密	含砂粒少	硬 質	灰色	灰色	内面回転ナデ、外面回転ヘラケズリ・回転ナデ
231	1A	SB45	須恵器	杯蓋	復13.6			復3.3	密	含細粒少	硬 質	灰白色	灰白色	内面回転ナデ、外面回転ヘラケズリ・回転ナデ
232	1A	SB45	須恵器	杯身	12.8			3.7	密	含細粒多	やや硬質	灰白色	灰白色	内面回転ナデ、外面回転ヘラケズリ・回転ナデ
233	1A	SB45	須恵器	杯身	12.3			5.8	密	含細粒少	軟 質	オリーブ灰色	オリーブ灰色	内外面とも回転ナデ
234	1A	SB45	須恵器	杯身	12.9			4.7	密	含砂粒少	硬 質	灰色	灰色	内面回転ナデ、外面底部ヘラケズリ・回転ナデ、器面ゆがみ
235	1A	SB45	須恵器	杯身	13.3			4.9	密	含砂粒少	硬 質	灰色	灰色	内面回転ナデ、底部ヘラケズリ・回転ナデ、器面ゆがみ
236	1A	SB45	須恵器	(高杯)蓋	13.8			4.5	密	含砂粒少	硬 質	青灰色	青灰色	内面回転ナデ、外面回転ヘラケズリ・回転ナデ、握みあり
237	1A	SB45	須恵器	高杯	11.6		10.6	復14.3	密	含細粒少	硬 質	青灰色	青灰色	内面回転ナデ、外面回転ヘラケズリ・回転ナデ、2段の透かし2方向
238	1A	SB45	須恵器	杯蓋	復14.0			3.5	密	含砂粒少	硬 質	灰色	灰色	ロクロ右回転
239	1A	SB45	須恵器	高杯	復12.2		12.0	9.0	密	含細粒多	硬 質	青灰色	青灰色	円形の2点の透かし
240	1A	SB45	須恵器	甕	14.8			残8.5	密	含砂粒少	やや硬質	灰白色	灰白色	口縁部内外面ともナデ
241	1A	SB45	須恵器	甕		22.5		残18.5	粗	含砂粒多	やや硬質	灰黄色	灰黄色	胴部内面当て具同心円文、外面タタキ
242	1A	SB45	須恵器	短頸壺	復6.0	復14.0		残4.8	密	含砂粒少	硬 質	にぶい黄褐色	灰白色	内外面とも回転ナデ
243	1A	SB45	土師器	甕	復14.6	復16.0		残9.0	粗	含砂粒多	軟 質	明赤褐色	明赤褐色	内面回転ナデ
244	1A	SB45	土師器	甕	16.6			残9.0	密	含砂粒多	やや軟質	明赤褐色	明赤褐色	内面回転ナデ
245	1A	SB45	土師器	甕	復19.5			残7.3	粗	含砂粒多	やや軟質	明赤褐色	明赤褐色	内外面ともナデ・ハケ
246	1A	SB45	土師器	甕	25.0		9.9	22.8	粗	含細粒少	やや軟質	明赤褐色	褐色	内外面とも粗いハケ
247	1A	SB45	土師器	甕	28.0		11.6	30.3	密	含砂粒少	やや軟質	明褐色	明褐色	内面横方向のハケ、外面縦方向のハケ
249	1A	SB49	須恵器	(高杯)蓋	13.6			5.6	密	含砂粒多	硬 質	褐色	灰褐色	内面回転ナデ、外面回転ヘラケズリ・回転ナデ、握みあり
250	1A	SB49	土師器	甕	11.3	10.8		9.3	密	含砂粒少	やや軟質	明赤褐色	明赤褐色	外面ハケ
251	1A	SB49	土師器	甕	16.4	19.8		残9.5	密	含砂粒少	やや軟質	褐色	明赤褐色	
252	1A	SB50	須恵器	甕	18.0			残7.0	密	含砂粒少	硬 質	暗青灰色	青黒色	口縁部内面回転ナデ、胴部内面当て具同心円文、外面タタキ
253	1B	SB52	土師器	高杯	13.4			残5.9	密	含細粒少	やや軟質	褐色	褐色	内外面ともナデ
254	1B	SB52	土師器	甕	12.2	21.0		残10.7	密	含細粒少	硬 質	浅黄褐色	にぶい黄褐色	内面に粘土帯接合痕、外面粗いハケ
255	1C	SB102	土師器	製塩土器				残3.9	密	含砂粒多	硬 質	にぶい褐色	黄灰色	六連式製塩土器、内面布目痕
256	2	SB113	土師器	椀				残3.5	粗	含細粒多	やや硬質	淡褐色	淡褐色	内外面ともナデ
257	2	SB115	土師器	椀				残3.6	密	含砂粒多	軟 質	灰白色	灰白色	
258	4A	SB139	土師器	皿	7.4		5.6	1.1	粗	含細粒多	軟 質	褐色	褐色	内外面とも回転ナデ、底部糸切り
259	4A	SB143	土師器	皿	7.8		6.0	1.1	粗	含細粒多	軟 質	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	内外面とも回転ナデ、底部糸切り
260	4A	SB143	土師器	杯	13.9		7.2	4.5	密	含細粒少	やや軟質	灰白色	浅黄褐色	内外面ともナデ、底部糸切り
261	4A	SB142	土師器	皿	7.8		6.4	1.3	密	含砂粒少	やや硬質	褐色	褐色	内外面とも回転ナデ、底部糸切り
262	4A	SB142	土師器	皿	8.4		6.9	1.4	密	含砂粒少	やや軟質	にぶい褐色	にぶい褐色	内外面とも回転ナデ、底部糸切り
263	4A	SB142	土師器	杯			6.6	残3.4	密	含砂粒少	やや硬質	灰白色	浅黄褐色	内外面とも回転ナデ、底部糸切り
264	1B	SK131	土師器	壺	12.2			残5.4	密	含細粒少	やや硬質	褐色	褐色	回転ナデ、内面に粘土帯接合痕
265	1B	SK131	土師器	高杯	復19.0			残6.9	密	含細粒少	やや軟質	褐色	褐色	内面ハケ後回転ナデ、外面回転ナデ
266	4B	SK85	土師器	杯	14.8			6.5	密	含細粒少	やや軟質	にぶい赤褐色	にぶい赤褐色	内外面とも回転ナデ
267	4B	SK96	土師器	杯	復14.8			6.1	密	含細粒少	やや軟質	褐色	褐色	
268	3A	SK73	土師器	杯	復15.4			復5.1	密	含細粒少	やや軟質	にぶい褐色	にぶい褐色	内外面ともナデ
269	3A	SK73	土師器	高杯	20.6			残7.2	密	含細粒少	軟 質	褐色	褐色	内外面ともナデ
270	3A	SK73	土師器	高杯			11.0	残4.7	密	含細粒少	やや軟質	褐色	褐色	外面回転ナデ
271	3A	SK73	土師器	高杯			10.4	残3.3	密	含細粒少	やや軟質	褐色	褐色	外面回転ナデ
272	4B	SK81	土師器	ミニチュア	4.5			4.1	粗	含細粒多	軟 質	灰白色	灰白色	手握ね整形、内外面に指頭圧痕
274	3A	SK74	弥生土器	壺		40.8		残28.9	密	含砂粒多	やや軟質	黒褐色	褐色	内面ヘラケズリ。壺転用の土器楕か
275	2	SK62	土師器	甕	復15.2			残6.8	密	含砂粒多	やや軟質	黄褐色	黄褐色	口縁から頸部内面に粘土帯接合痕
276	2	SK55	土師器	甕	復17.2			残4.8	密	含砂粒多	軟 質	赤褐色	赤褐色	内外面ともナデ
277	2	SK55	土師器	甕	16.8			残8.7	粗	含細粒多	軟 質	褐色	褐色	内外面ともナデ、内面に粘土帯接合痕・指頭圧痕
278	2	SK21	土師器	甕	18.7	22.3		残22.3	粗	含細粒多	やや硬質	褐色	褐色	内面ナデ・横方向のハケ、外面ナデ・縦方向のハケ
279	3C	SK80	須恵器	杯蓋	14.0			3.5	密	含砂粒多	硬 質	灰色	灰色	内面回転ナデ、外面回転ヘラケズリ・回転ナデ
280	4A	SK127	須恵器	杯蓋	復14.4			4.7	密	含細粒多	硬 質	灰色	灰色	内面回転ナデ、外面回転ヘラケズリ・回転ナデ
281	4A	SK111	土師器	摺鉢	復26.6		11.4	12.0	密	含砂粒多	やや軟質	明黄褐色	明黄褐色	オロシメ6条単位、底面に板目痕
282	4A	SK111	土師器	鍋				残6.6	密	含細粒少	やや軟質	浅黄褐色	浅黄褐色	内面横方向のハケ、外面ナデ
283	1B	SK129	瓦質土器	足鍋				残15.2	密	含細粒少	硬 質	灰黄褐色	褐色	外面指頭圧痕
284	2	SK56	白磁	皿			7.8	残2.2	密	含細粒少	硬 質	灰黄色	灰黄色	削り出し高台、胎土淡黄色

第5表 土器 観察表 (6)

※「復」は復元値、「残」は残存値

番号	出土 層	遺構 番号	種類	器種	法 量 (cm)				胎土 黒 砂粒	焼成	色 調		調 整 ・ 備 考
					口径	胴径	底径	器高			内面	外面	
285	2	SK56	土師器	皿	7.6		6.6	1.3	密含細粒少	やや軟質	にぶい褐色	にぶい褐色	内外面とも回転ナデ、底部糸切り
286	2	SK56	土師器	皿	7.6		6.6	1.0	密含細粒少	やや軟質	浅黄褐色	浅黄褐色	内外面とも回転ナデ、底部糸切り
287	2	SK56	土師器	皿	6.8		6.4	2.1	密含細粒少	やや軟質	黄褐色	黄褐色	内外面ともナデ、底部糸切り
288	2	SK56	土師器	椀				残1.2	密含細粒少	軟質	灰白色	灰白色	貼り付け高台
289	2	SK56	土師器	皿	7.2		5.6	0.9	密含細粒少	軟質	浅黄褐色	浅黄褐色	内外面とも回転ナデ、底部糸切り
290	2	SK56	土師器	皿	6.8		5.8	2.0	密含細粒少	やや軟質	浅黄褐色	浅黄褐色	内外面ともナデ、底部糸切り
291	2	SK56	土師器	皿	6.8		6.2	1.0	粗含細粒多	やや軟質	浅褐色	浅褐色	内外面とも回転ナデ
294	1C	ST3	土師器	皿	9.2		5.8	1.5	密含細粒少	やや軟質	褐色	褐色	内外面とも回転ナデ
295	1C	ST3	土師器	皿	8.8		5.4	1.4	密含細粒少	やや軟質	褐色	にぶい褐色	内外面とも回転ナデ、底部糸切り
296	1C	ST3	土師器	皿	8.6		5.2	1.3	密含細粒少	やや軟質	にぶい褐色	にぶい褐色	内外面とも回転ナデ、底部糸切り
297	1C	ST3	土師器	皿	8.5		4.7	1.2	密含砂粒少	やや軟質	にぶい褐色	にぶい褐色	内外面とも回転ナデ
298	1C	ST3	土師器	杯	15.3		7.7	4.4	粗含砂粒少	軟質	褐色	褐色	内外面とも回転ナデ、底部糸切り
299	1A	ST1	土師器	杯	12.0		6.0	5.0	密含砂粒少	やや軟質	浅黄褐色	浅黄褐色	内外面とも回転ナデ、底部糸切り
300	1B	ST7	土師器	皿	9.6		5.2	1.7	密含砂粒少	やや硬質	浅黄褐色	浅黄褐色	内外面とも回転ナデ
301	4A	ST6	土師器	皿	7.6		4.6	1.9	密含細粒少	やや軟質	浅黄褐色	浅黄褐色	内外面とも回転ナデ、底部糸切り
302	4A	ST6	土師器	皿	9.0		4.6	1.7	密含細粒少	やや軟質	にぶい褐色	にぶい褐色	内外面ともナデ、底部糸切り
303	4A	ST6	土師器	杯	14.7		6.4	4.2	密含砂粒少	軟質	浅黄褐色	浅黄褐色	内外面とも回転ナデ、底部糸切り
304	4A	ST6	土師器	椀	15.7		6.4	6.8	粗含砂粒多	軟質	灰白色	灰白色	内外面とも回転ナデ
308	1B	SD17	土師器	製塩土器				残12.1	粗含砂粒多	軟質	灰黄褐色	灰色	六連式製塩土器、内面布目痕、外面指頭圧痕
309	4A	SD1	土師器	鉢				残3.3	粗含砂粒少	軟質	にぶい褐色	浅黄褐色	内外面ともナデ
310	1B	SD1	瓦質土器	鉢				残3.2	粗含細粒多	やや硬質	黄灰色	灰白色	
311	1A	SD1	陶器	甕				残5.2	密含砂粒多	硬質	褐灰色	灰色	備前焼、外面ナデ
312	1A	SD1	瓦質土器	足鍋脚				残6.3	密含砂粒少	硬質	灰白色	灰白色	指頭圧痕
313	4A	SD30	瓦質土器	鍋				残4.9	粗含砂粒多	やや軟質	にぶい褐色	灰黄褐色	内面ハケ
314	4A	SD30	陶器	甕				残6.6	密含砂粒少	硬質	灰色	灰色	備前焼、内外面とも回転ナデ
315	4A	SD30	瓦質土器	羽釜				残5.6	密含砂粒少	硬質	暗灰色	暗灰色	内面横方向のハケ、外面縦方向のハケ・ナデ
316	4A	SD30	土師器	皿	復7.7		6.3	1.0	密含砂粒少	硬質	灰白色	灰白色	内外面とも回転ナデ、底部糸切り
317	4A	SD30	土師器	不明			4.5	残7.8	密含砂粒少	硬質	浅黄褐色	浅黄褐色	
318	1C	SD22他	陶器	搦鉢				残5.5	粗含細粒多	硬質	にぶい褐色	灰色-褐色	備前焼、内面ナデ、オロシメ、外面ナデ
319	1C	SD22他	瓦質土器	足鍋脚				残11.8	密含細粒多	やや硬質	褐色	褐色	外面に指頭圧痕、整形後ナデ
320	2	SD25	瓦質土器	鍋				残5.3	密含砂粒少	やや軟質	灰白色	灰白色	
321	4A	SD33	瓦質土器	羽釜				残5.3	密含砂粒少	やや硬質	灰色	灰色	内面横方向のハケ、外面縦方向のハケ
322	1B	SD18	陶器	搦鉢	復29.0			残8.1	密含砂粒多	硬質	にぶい褐色	赤褐色	備前焼、オロシメ11条単位、内外面ともナデ
323	2	SD26	瓦質土器	鍋	復28.0			残8.6	密含砂粒少	硬質	灰色	灰色	内面ナデ、外面ナデ・一部指頭圧痕
324	2	SD26	瓦質土器	足鍋脚				残9.3	密含細粒少	硬質	灰褐色	灰褐色	外面指頭圧痕
325	1A	SP1008	須恵器	杯身	11.8			3.8	密含細粒少	硬質	青灰色	明青灰色	内面回転ナデ、外面回転ヘラズリ・回転ナデ
326	4C	SP4017	須恵器	甕	復18.8			残6.6	密含砂粒少	硬質	青灰色	青灰色	内面ナデ、外面回転ナデ・タタキ
327	1B	SP1242	須恵器	杯蓋	12.6			残1.3	密含細粒少	硬質	明青灰色	明青灰色	内外面とも回転ナデ
328	3A	SP3001	白磁	皿			4.4	残1.1	密含細粒少	硬質	浅黄色	灰白色	内面施釉、見込みに文様、外面底部露胎
329	2	SP2140	白磁	碗	16.4		7.2	7.0	密含細粒少	硬質	灰白色	灰白色	玉縁部の口縁、高台部露胎
330	4A	SP4270	青磁	碗	13.6			残4.5	密含細粒少	硬質	オリブ灰色	オリブ灰色	外面に鎗蓮弁文様
331	4A	SP4139	土師器	皿	7.3		5.8	1.2	密含砂粒多	やや軟質	にぶい褐色	にぶい褐色	内外面とも回転ナデ、底部糸切り
332	4A	SP4139	土師器	皿	6.8		5.2	1.2	密含細粒少	やや軟質	灰黄褐色	灰黄褐色	内外面とも回転ナデ
333	2	SP2304	土師器	皿	6.7		4.8	1.2	密含細粒多	硬質	褐色	にぶい褐色	内外面とも回転ナデ
334	2	SP2224	土師器	皿	7.0		5.2	1.0	密含細粒少	やや軟質	浅黄褐色	浅黄褐色	内外面とも回転ナデ、底部糸切り
335	4A	SP4169	土師器	皿	7.6		5.9	1.2	密含細粒少	やや軟質	灰黄褐色	灰黄褐色	内外面とも回転ナデ
336	4A	SP4169	土師器	皿	6.8		5.2	1.0	粗含砂粒少	軟質	浅黄色	浅黄色	内外面とも回転ナデ
337	2	SP2378	土師器	皿	7.7		4.5	1.5	密含細粒少	やや軟質	褐色	にぶい褐色	内外面とも回転ナデ、底部糸切り ※SB127の柱穴
338	4A	SP4335	土師器	皿	8.3		3.6	1.1	粗含細粒多	やや軟質	黄褐色	黄褐色	内外面とも回転ナデ
339	4A	SP4335	土師器	皿	7.6		4.0	0.8	粗含細粒多	やや軟質	褐色	褐色	内外面とも回転ナデ
340	4A	SP4335	土師器	皿	8.2		4.3	1.2	粗含砂粒多	やや軟質	褐色	褐色	内外面とも回転ナデ、底部糸切り
341	2	SP2110	土師器	皿	8.1		4.8	1.7	密含細粒少	やや軟質	灰白色	灰黄色	内外面とも回転ナデ、底部糸切り
342	4A	SP4200	土師器	皿	9.0		5.4	2.0	密含砂粒少	やや軟質	浅黄褐色	浅黄褐色	内外面とも回転ナデ
343	2	SB14-SP1	土師器	椀	15.2		5.3	6.8	密含細粒少	やや軟質	灰白色	灰白色	内外面とも回転ナデ、貼り付け高台
344	4A	SP4098	土師器	椀	15.5		7.0	5.1	密含細粒多	軟質	淡黄色	淡黄色	内外面ともナデ、貼り付け高台 ※SB141の柱穴
345	4A	SP4099	土師器	椀	15.2		6.0	5.0	密含細粒多	やや軟質	黒褐色	黒褐色	内外面ともナデ、貼り付け高台

第5表 土器 観察表 (7)

※「復」は復元値、「残」は残存値

番号	出土地区	遺構番号	種類	器種	法 量 (cm)				胎土 粗 砂粒	焼成	色 調		調 整・備 考
					口径	胴径	底径	器高			内面	外面	
346	4A	SP4249	土師器	杯	11.8		5.6	4.9	密 含砂粒少	やや硬質	橙色	橙色	内外面とも回転ナデ、底部糸切り
347	4A	SP4249	土師器	杯	復12.2		5.0	5.1	粗 含砂粒多	やや軟質	にぶい黄褐色	浅黄褐色	内外面とも回転ナデ、底部糸切り
348	2	SP2244	土師器	杯	12.0		6.0	4.9	密 含細粒少	やや軟質	灰白色	灰白色	内外面とも回転ナデ、底部糸切り
349	2	SP2378	土師器	杯	復12.8		復5.8	3.6	密 含細粒少	やや軟質	橙色	橙色	内外面とも回転ナデ、底部糸切り
350	4A	SP4247	土師器	杯	12.2		6.7	4.6	密 含細粒少	やや軟質	橙色	浅黄色	内外面とも回転ナデ、底部糸切り ※SB144の柱穴
351	4A	SP4210	土師器	杯	12.0		5.8	4.5	密 含細粒多	軟 質	浅黄褐色	浅黄褐色	内外面とも回転ナデ、底部糸切り
352	2	SP2356	土師器	杯	12.8		7.0	4.8	密 含細粒少	やや軟質	褐灰色	浅黄色	内外面ともナデ、底部糸切り
353	4A	SP4365	土師器	杯	12.6		6.3	4.7	粗 含砂粒少	やや硬質	褐灰色	にぶい黄褐色	内外面とも回転ナデ、底部糸切り
354	4A	SP4350	土師器	杯	復12.9		5.6	4.5	粗 含砂粒少	やや軟質	浅黄褐色	浅黄褐色	内外面とも回転ナデ、底部糸切り ※SB141の柱穴
355	4A	SP4177	土師器	杯	11.0		8.2	4.5	密 含細粒少	やや軟質	淡黄色	淡黄色	内外面とも回転ナデ、底部糸切り
356	2	SP2289	土師器	杯	12.2		6.9	4.4	密 含細粒少	やや軟質	浅黄褐色	浅黄褐色	内外面とも回転ナデ
357	2	SP2304	土師器	杯	復11.8		復6.2	4.1	密 含細粒少	やや硬質	黄灰色	黄灰色	内外面とも回転ナデ、底部糸切り
358	4A	SP4372	土師器	杯	12.6		7.0	4.3	密 含砂粒少	やや軟質	灰白色	灰白色	内外面ともナデ
359	4A	SP4358	土師器	杯	13.1		7.5	4.3	密 含砂粒少	やや硬質	明黄褐色	橙色	内外面ともナデ、底部糸切り、器面ゆがみ
360	2	SP2411	土師器	杯	復12.5		復5.6	2.9	密 含細粒少	やや軟質	灰白色	灰白色	内外面とも回転ナデ
361	2	SP2298	瓦質土器	鍋	29.8			残11.1	粗 含砂粒多	やや硬質	にぶい褐色	にぶい黄褐色	内面ハケ後ナデ、外面底部はタタキ後ナデ
362	2	SP2411	瓦質土器	足鍋	復25.0			残16.6	密 含砂粒多	硬 質	黄灰色	黒褐色	内外面とも口縁部横ナデ、他はハケ後ナデ
363	2	SP2411	瓦質土器	足鍋	29.0		22.0	22.3	密 含細粒少	硬 質	黒色	黒褐色	内面ナデ・ハケ、外面ナデ・底部はタタキ後ナデ
366	1C	表面採集	須恵器	高杯	復12.6		9.2	8.7	密 含細粒少	硬 質	灰色	灰色	内面回転ナデ、外面回転ヘラケズリ・回転ナデ

第6表 土製品 観察表

番号	出土地区	遺構番号	種類	法 量 (cm)			重量 (g)	胎土 粗 砂粒	焼成	色 調	備 考
				長さ	幅	厚さ					
9	1C	SB2A	土錘	残 5.4	1.4	1.3	残10.8	密 含細粒少	やや軟質	橙色	指頭圧痕
186	5	SB39	土錘	9.6	2.1	1.6	残30.5	密 含細粒多	硬質	赤褐色	指頭圧痕
248	1A	SB45	土錘	6.8	2.3	2.1	残34.7	密 含砂粒少	硬質	浅黄褐色	指頭圧痕
273	1C	SK7	土錘	残 4.9	2.2	1.6	残18.6	密 含細粒多	やや軟質	橙色	指頭圧痕、ナデ
364	2	SB25B-SP10	繻羽口	残 9.5	外径10.0	内径2.0~3.9		密 含砂粒多	硬質	にぶい黄褐色	スラグ溶着
367	2	表面採集	土製支脚	残14.6	外径 4.0			密 含砂粒少	やや軟質	にぶい褐色	指頭圧痕

第7表 鉄製品 観察表

番号	出土地区	遺構番号	種類	法 量 (cm)					備 考
				長さ		幅	厚さ		
				身 部	茎 部		身 部	茎 部	
292	2	SK56	刀子	残4.0	2.9	1.1	0.4	0.3	
305	4A	ST6	刀子	残4.7	4.4	1.1	0.3	0.3	茎部に木質痕、刀先が欠損
306	4A	ST5	釘	残4.8		0.7	0.4		断面長方形
307	4A	ST5	刀子	24.8	10.1	2.7	0.4	0.4	両関か？身部・茎部ともに一部木質痕あり

第8表 和鏡 観察表

番号	出土地区	遺構番号	材質	種類	法 量 (cm)					重量 (g)	備 考
					直径	厚さ	鈕高	周 縁			
								幅	厚さ		
293	4C	ST4	青銅	草花双鳥鏡	9.4	0.1	0.3	0.4	0.5	61.6	直角式縁

第9表 銅銭 観察表

番号	出土地区	遺構番号	銭 類	初銭年代	書 体	読み方	法 量 (cm)		重量 (g)	備 考
							直径	孔径		
365	2	SP2224	景德元寶	景德2年(1005年)	楷書	順読	2.4	0.6	残1.3	

第10表 石鏃 観察表

番号	出土地区	遺構番号	石材	法 量 (cm)			重量 (g)	色 調	備 考
				長さ	幅	厚さ			
368	2	SB24	安山岩	残3.3	2.2	0.6	残2.2	青黒色	縄文時代早期の鏃形鏃
369	2	SK47	黒曜石	残2.2	2.3	0.4	残0.9	透明の黒色	先端部欠損
370	2	SB23	黒曜石	残1.8	残1.5	0.5	残0.3	透明な灰色	姫島産、先端部と基部右側先端部欠損
371		表面採集	安山岩	残2.1	残1.6	0.4	残0.4	暗青灰色	風化が著しく、先端部と基部右側先端部欠損
372	1C	SB1	安山岩	残1.5	残1.1	0.4	残0.1	暗青灰色	基部右側と左側先端部欠損

第11表 石斧 観察表

※「復」は復元値、「残」は残存値

番号	出土地区	遺構番号	石材	法 量 (cm)		重量 (g)	備 考
				長さ	幅		
373	3C	包含層	頁岩	残17.9	残5.2	残342	刃部欠損、敲打痕が表面に残る

第12表 石庖丁 観察表

番号	出土地区	遺構番号	石材	法 量 (cm)					重量 (g)	色 調	備 考
				長径	短径	厚さ	孔 径				
							左	右			
374	4A	SP4243	玄武岩	9.7	5.1	0.8	0.5	0.4	残55.5	青黒色	途中で穿孔を中断したと思われる窪みあり

第13表 砥石 観察表

番号	出土地区	遺構番号	石材	法 量 (cm)			色 調	備 考
				長さ	幅	厚さ		
376	2	SB14	凝灰岩	残 7.7	3.9	2.7	灰白色	仕上げ砥石
377	2	SB19	凝灰岩	残 8.5	4.1	3.1	灰白色	仕上げ砥石
378	2	SB26	泥岩	残11.6	3.4	3.0	暗青灰色	砥ぎ面 5面、仕上げ砥石、携帯用か
379	2	SB18	砂岩	残 9.2	6.0	6.4	黄橙色	荒砥石
380	1C	SB5A・5B・6	凝灰岩	残 5.2	3.0	2.2	灰白色	仕上げ砥石
381	1C	SB8	泥岩	残10.3	5.3	2.4	青黒色	仕上げ砥石
382	2	SB22	泥岩	25.8	6.3	5.2	オリブ灰色	仕上げ砥石

第14表 凹石 観察表

番号	出土地区	遺構番号	石材	法 量 (cm)			重量 (g)	色 調	備 考
				長さ	幅	厚さ			
383	1C	SD22ほか	花崗岩	11.4	9.6	5.4	1025	暗灰黄色	表裏に使用痕の窪み
384	1C	SD22ほか	花崗岩	7.4	6.7	4.4	363	灰黄色	表裏の中央部に使用痕の窪み

第15表 石鍋 観察表

番号	出土地区	遺構番号	石材	法 量 (cm)				色 調		備 考
				口径	胴径	底径	器高	内面	外面	
385	2	SP2133	滑石	復20.0	復22.0	復6.5	15.0	灰色	黒褐色	内面ノミ痕、外面横方向のミガキ、四方に瘤状の把手
386	4A	表面採集	滑石			復9.0	残7.0	灰色	灰色	内面ケズリ
387	4A	SD1	滑石				残8.4	灰色	灰色	内外面擦過痕
388	2	SD26	滑石				残7.5	灰色	灰色	内外面ミガキ
389	2	SD26	滑石				残4.8	灰黄褐色	灰褐色	内面ノミ整形の後ミガキ、外面縦方向のノミケズリ痕
390	2	SD26	滑石				残2.6	明黄褐色	明黄褐色	内面横方向のミガキ、外面縦方向のノミケズリ痕
391	2	SB27-SK2	滑石				残5.7	灰色	黒褐色	内面ミガキ、外面横方向にノミ痕、変状把手取り付け用の穿孔

第16表 有孔円板 観察表

番号	出土地区	遺構番号	石材	法 量 (cm)			色 調	備 考
				直径	孔径	厚さ		
392	2	SB18	滑石	1.6	0.2	0.6	灰白色	擦過痕
393	4A	SD32	滑石	2.1	0.3	0.6	浅黄色	両面穿孔、表面に擦過痕
394	2	SD26	滑石	3.3		0.8	灰色	擦過痕、未穿孔
395	2	SD26	滑石	復3.7	0.3	0.6	黄灰色	片面穿孔
396	4A	SP4264	滑石	3.7	0.2	0.7	黄褐色	表裏に擦過痕
397	2	SB20	滑石	4.4	0.2	0.5~0.6	にぶい黄褐色	擦過痕
398	4B	表面採集	滑石	4.0	0.6	0.8	にぶい黄褐色	擦過痕
399	4A	SD30	滑石	5.2	0.7	1.0	黄灰色	片面穿孔、両面に擦過痕

第17表 紡錘車 観察表

番号	出土地区	遺構番号	石材	法 量 (cm)			重量 (g)	色 調	備 考
				直径	厚さ	孔径			
400	3C	含層層	滑石	3.2	1.0	0.8	残9.6	青黒色	丁寧な表面ミガキ仕上げ
401	1C	SB8	滑石	3.8	2.1	0.5~0.8	残24.8	褐灰色	丁寧な表面ミガキ仕上げ
402	1C	SB8	滑石	4.2	2.1	復0.5	残25.4	灰黄色	面取り整形痕
403	2	SB20	滑石	5.0	1.6	0.5	64.3	灰オリブ色	面取り整形痕
404	4A	SP4248	滑石	5.8	1.9		92.9	緑灰色	放射状に面取り整形、表面に擦過痕、未穿孔
405	2	SB20	滑石	4.2	1.4	0.7~0.8	29.7	暗オリブ灰色	山型文様を裏面・側面に刻む

第18表 石製模造品観察表 ※「復」は復元値、「残」は残存値

番号	出土地区	遺構番号	石材	法 量 (cm)				色 調	備 考
				長さ	幅	厚さ	孔径		
406	2	SK23	滑石	2.8	1.9	0.5		にぶい黄橙色	盾形か?、未穿孔
407	2	表面採集	滑石	2.6	1.6	0.5	0.2	黄灰色	盾形
408	2	SB27-SK2	滑石	2.8	1.7	1.7	0.2	黄灰色	盾形
409	1C	SB11	滑石	残2.7	残2.3	0.3	0.3	灰白色	盾形
410	4A	包含層	滑石	3.6	3.0	0.7	0.4	淡黄色	斧形(または盾形)
411	1C	SK7	滑石	4.1	2.3	0.5	0.2	灰黄色	盾形
412	2	表面採集	滑石	3.4	2.6	0.6	0.2	灰色	盾形
413	3A	SB54	滑石	5.5	2.1	0.5	0.3	浅黄色	剣形
414	2	SD26	滑石	残4.9	2.7	6.7		にぶい黄橙色	剣形
415	4B	SB35	滑石	3.3	2.5	0.3	0.2	灰オリーブ色	剣形か、一部欠損後二次加工
416	5	SB41	滑石	3.9	1.2	0.5	0.2	灰色	剣形
417	5	SB39	泥質変岩	残4.5	残2.7	0.8	0.4	青灰色	
418	5	SB42	滑石	残3.2	残3.1	1.0	0.1	灰黄褐色	穿孔貫通せず
419	2	SB26	滑石	7.2	4.2	1.2	0.4-0.6	緑灰色	盾形
420	2	SB19	滑石	残1.9	残1.8	0.4	0.2	褐灰色	穿孔2個

第19表 玉・勾玉類観察表

番号	出土地区	遺構番号	種類	材質	法 量 (cm)				色 調	備 考	
					長さ	幅	厚さ	孔径			
								長			短
375	1C	SB9	切子玉	水晶	2.3	径1.3		0.35	0.15	透明	片面穿孔、重量3.8g
421	5	SP5016	勾玉	滑石	2.1	0.8	0.6	0.2		灰白色	穿孔あり
422	5	SB39	勾玉	滑石	2.5	0.8	0.7			灰色	穿孔なし
423	2	SB16	勾玉	滑石	残3.2	残2.2	0.45	復0.2		橙色	外面に擦過痕
424	1C	SK7	子持ち勾玉	滑石	5.2	3.1	1.7			灰黄色	子持ち勾玉の退化型か、突起部0.6cm
425	1C	SK7	子持ち勾玉?	滑石	残4.2		1.2			灰黄色	内側湾曲部に刻み目
426	5	SB41	勾玉?	滑石	残4.1	3.9	2.0			灰色	
427	3C	表面採集	子持ち勾玉	滑石	9.8	3.7	3.3			暗緑灰色	未製品

V まとめ

1 調査成果の概要

平成11年度赤迫遺跡（C地区）の調査により、古墳時代後期、古代（奈良～平安時代）、中世（鎌倉～室町時代）にかけて、断続的に営まれた集落跡であることが判明した。主な遺構は、竪穴住居跡56軒、掘立柱建物跡49棟、土坑136基、墓7基、堀1条、溝状遺構46条、柱穴約4050個である（付図参照）。主な遺物は、縄文・弥生時代の石器類・弥生土器が少数あるほか、古墳時代・古代・中世の須恵器・土師器を中心に、製塩土器・瓦質土器・陶器・青磁・白磁、土錘、石鍋・砥石・滑石製模造品・勾玉、和鏡・刀子・中国銭などである。以下、各時代の遺構・遺物などの特徴についてまとめる。

2 古墳時代

（1）竪穴住居跡について

竪穴住居跡は、56軒検出されたが、基本的形態は隅丸方形を呈し、一部に長方形もある。長軸が確認できる住居43軒の一辺の平均長は、4.77mとなる。一辺6mを超える大型住居（SB23・26・43）も存在しており、集落内における格差を反映しているかも知れない。2辺が確認でき床面積の算定できる住居27軒の平均床面積は、19.9㎡となる。主柱穴は4本柱が基本で、2本柱のほか主柱穴を確認できないものもあり、地面上に支柱を立てていたと考えられる。燃焼部・煙道部を備え定型化した本格的な造り付けカマド構造は確認されなかった。粘土壁の袖部や明確な煙道は検出されなかったが、焚き口の焼土とともに支脚として使用された石や転用された土師器の高杯が出土し、土製支脚（367）も表面採集されている。こうしたことから、本遺跡では本格的カマド構造導入の過渡期に位置づけられる原初形態のローカル色の強いカマドであったと思われる。カマドの設置箇所は、基本的に北または西方向の壁の中央辺りに限定されている。風向きや日当たりなどの自然要因に規制されたとも考えられるが、居住空間の使い方やカマドに反映された当時の家族観・世界観による規制が働いていた可能性もある。県内では、6～7世紀代の集落遺跡での竪穴住居跡のカマド検出事例として、秋根遺跡^(注2)（下関市）、高野遺跡^(注3)・船頭遺跡^(注4)（豊浦町）、上ノ山遺跡^(注5)（美祢市）、中村遺跡^(注6)・国秀遺跡^(注7)（秋芳町）、平原遺跡^(注8)（美東町）、吉部田遺跡^(注9)（山陽町）、毛割遺跡^(注10)（山口市）などが知られる。

今回の調査面積と検出住居数から推定すると、この丘陵全域での6世紀～7世紀前半の竪穴住居総数は100軒を超えると見られ、この地域の拠点集落であったことをうかがわせる密集度である。同型式の須恵器を出土した住居をほぼ同時期併存と推定すれば、少なくとも10軒程度、数10人規模の集落が存在した時期があったと推定される。1C地区の西側から2地区にかけてが一番の密集区であり、3A地区、4B地区南側、4A地区、5地区、1A地区に数件程度の時期差を伴う住居群が見られ、疎密を伴う一定の住居の広がり確認できる。住居の時期的変遷は、SB1・SB2A・2B、SB20・21・22・23、SB33・34・35の切り合い関係から少なくとも3時期以上ある。2地区のSB14・15・16の隣接する一群、5地区のSB41がもっとも古い様相を示し、続いてSB20・22→SB23→SB21の時期差が追え、SB8・9・18・45などがもっとも時期の下る住居と考えられる。

（2）土器について

須恵器・土師器が中心である。須恵器では、杯蓋・杯身をはじめ、高杯・壺・甕・器台・甕・提瓶

などの器種がある。土師器では、杯（鉢・椀として器種分類されることもあるが、本報告書では杯の呼称で統一した）・甕・甔が中心を占め、高杯・手捏ねミニチュア土器・製塩土器などの器種がある。

須恵器では、杯蓋・杯身は、陶邑編年Ⅱ型式（Ⅱ-1～Ⅱ-5）に相当する。杯蓋の宝珠つまみとかえりが現れ、杯身のたちあがりとの逆転があるⅢ型式段階のものは出土しておらず、堅穴住居の時期は、ほぼ陶邑Ⅱ型式5段階頃を下限とする。杯蓋は、天井部と口縁部を界する稜が簡略化されて、境が不明瞭になる。口縁端部の内傾する凹面が段をなすものから、簡略化されて丸みをおびているものまで型式変化がある。器高も天井部が高く丸いものから、低く偏平なものまである。天井部には回転ヘラケズリ、他の内外面は回転ナデ調整が施されている。杯身では、たちあがりが高く、端部に内傾する明瞭な段を有するものから、たちあがり退化して低く内傾し、端部が丸く短く終わるものまで型式変化がある。器高も高いものから浅く偏平なものへと変化が見られる。底部外面に回転ヘラケズリ、他の内外面は回転ナデ調整がなされている。赤迫遺跡の堅穴住居跡出土の須恵器杯身・杯蓋について、陶邑編年の分類基準を適用して、1式から5式までに分類したものが第46図である。














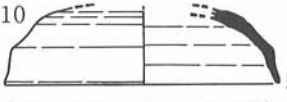













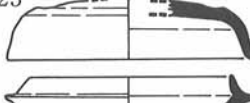














地方では、畿内と同型式の須恵器でも年代が下る時期まで古い器形が残存するタイムラグが存在すると考え、畿内の編年を同時期併行とみなして適用することはできないとする見解も最近提示されている。^(注12)しかし、ここでは従来の編年観に従い、実年代では、1・2期を6世紀前半代、3期を6世紀中頃～後半代、4期を6世紀後半代、5期を7世紀初めという範囲でとらえておきたい。なお、SB1の流入埋土からは、陶邑Ⅳ-2段階相当、奈良末～平安時代の須恵器杯蓋・杯身が出土している。

須恵器の産地については、県内では6世紀後半に在地生産が開始されたと見られ、小野田市須恵窯跡群^(注13)を最古とし、宇部市花ヶ池窯跡群^(注14)などが知られている。西遺跡^(注15)（山口市）出土の5世紀後半から6世紀前半の古式須恵器が胎土分析の結果から陶邑産と推定されている。赤迫遺跡でも6世紀前半代のは、陶邑など県外からの搬入品と推定される。6世紀後半以後のものは、距離的にも隣接している在地系の小野田市須恵窯跡群や花ヶ池窯跡群などが有力な産地として推定される。

土師器では、杯は、口径に対して器高が低く、底部が丸く偏平な半月に近い器形を基本とする。口縁端部の形態は、次のタイプに分けられる。①ほぼ真つすぐ立ち上がったまま終わるもの（10・20ほか）、②内傾するもの（11・22ほか）、③やや内傾しながら立ち上がり、端部で「く」の字状に外反するもの（59・60ほか）、④底部から緩やかに内湾しながら立ち上がり上位で段をなして外側に屈曲するもの（61・81）、⑤上端部で段をなして内側へ屈曲するもの（209）がある。この他に、台付きの特殊なものもある（179）。調整は、ナデ仕上げを基本とし器面は滑らかである。一部にハケ・ヘラケズリ・ヘラミガキなどの痕跡をとどめるものがあるほか、赤色塗彩したものもある（136・211）。

甕は、口径・器高に基づく大きさから、大型・中型・小型がある。口縁部の形状は、頸部が締まり「く」の字形に大きく屈曲して外反するもの、頸部の屈曲が緩やかで外反角度が緩やかなもの（33・47・123・254）、頸部の屈曲がほとんどないもの（12）などがある。また、把手がつくもの（35・108・161）もある。大型のものは、時期が下るにつれて長胴化傾向がうかがわれる。調整は、基本的には外面は縦または斜め方向のハケ、内面は横または斜め方向のハケが施され、一部にヘラケズリもみられる。口縁部はナデで仕上げられており、胴部・底部についてもハケのちナデの仕上げもある。

甔は、大型と中型のものがある。把手の形態は、断面形が円形・楕円形・偏平隅丸四角形のものがある。

1 式	SB14  53	SB41  192	SB16  68	陶邑Ⅱ—1相当
	SB15  65	 195	SB10  49	
2 式	SB20  88	SB22  109		陶邑Ⅱ—2相当
	 92	 110		
3 式	SB33  162	SB32B  158		陶邑Ⅱ—3相当
	 163			
4 式	SB10  50	SB27  144	SB2A  4	陶邑Ⅱ—4相当
	 51	 145	 5	
	SB25A  132	SB28  148	SB37  172	
	 133	 149	 173	
	SB30  152	SB40  187	SB23  117	
	 153	 188	 118	
5 式	SB9  37	SB21  102	SB45  231	陶邑Ⅱ—5相当
	 39	 104	 233	
	SB8  25	SB18  73	SB32A  154	
	 27	 75	0 (1/4) 20cm	

第46図 竪穴住居跡出土の須恵器編年図

ある。底部は、底が抜けたもの(46・48・99・107ほか)、横に1本の仕切り(棧)があるもの(100・101)、丸底で数個の丸い穴があるもの(16)がある。器高が低く胴張りぎみの器形から、器高が高く胴張りが少ない器形へと変化し、甕の長胴化に対応した変化と見られる。外面は縦または斜め方向のハケ、内面は横または斜め方向のハケが施され、古いタイプに縦または斜め方向のヘラケズリもある。

高杯は、口径が20cmを超えるもの(8)を除き、15cm前後の中型サイズが多い(34・137・140・205・206・253)。杯部は、脚部から屈曲なく丸く立ち上がるもの(137)を除き、他は途中で屈曲して立ち上がるタイプである。脚部は全体的に低脚傾向である。屈曲して外側に開き端部で接地するタイプ(34・70・71・140・205)と屈曲がなくなだらかに外反するタイプがある(19・122・137)。

器種構成・器形変化などに高野遺跡ほか6世紀代の集落遺跡と共通する傾向がうかがえる。毛割遺跡では、7世紀前半代と考えられる竪穴住居跡から出土した土師器について器形分類を行い、甕について大中小型の3類6型式が抽出されているが、本遺跡でも同様な甕の型式変化が追える。また、山本一期氏による防長の土師器編年の内、須恵器を共伴する6世紀前半～7世紀前半の14式(土師Ⅳ)・15式(土師Ⅴ)・16式(土師Ⅵ)の型式変化ともほぼ一致する傾向が見られる。

(3) その他の遺物について

滑石製模造品(盾形・剣形・斧形)・有孔円板・紡錘車・玉類(勾玉・子持ち勾玉・切子玉)など祭祀にかかわる石製品が数多く出土した。竪穴住居跡に伴うほか、土坑・柱穴・堀・溝の埋土、包含層などからも出土している。未穿孔のものや子持ち勾玉の未製品とみられるもの(427)などがあり、現地での加工が想定される。祭祀遺物の出土が確認された住居は12軒にのぼり、分布も全域に広がっていることから、当時の集落内でかなり一般的な祭祀品として使用されたとも考えられる。一方で、未製品や製品の原材料となる滑石片が出土しており、滑石製模造品の加工生産をうかがわせ、集落内での生産体制があった可能性についても考慮する必要がある。こうした祭祀用石製品は、県内では西遺跡・美濃ヶ浜遺跡(山口市)、東須恵遺跡(注18)・波雁ヶ浜遺跡(注19)(宇部市)などで出土している。特に西遺跡では5世紀中葉～後半の第12号竪穴住居跡から大量に一括出土し、工房跡としての可能性も指摘されている。本遺跡でも、各住居で屋内祭祀用品として使用された可能性と生産遺跡としての可能性の両面からの検討を要する。同じく祭祀用と見られる手捏ねミニチュア土器も6軒の住居から出土している。西遺跡では、滑石製模造品と手捏ね土器の共伴出土が認められず、祭祀行為での両者の質的差が推定されているが、本遺跡でもSB41で滑石製模造品(416)と手捏ね土器(199)が共伴した以外は、他の住居では共伴関係はない。また、鏡形などの土製模造品は、本遺跡では出土していない。内陸部の中村遺跡・国秀遺跡では、鏡形などの土製模造品が出土しているのに対して、近くの上ノ山遺跡では石製模造品のみで土製模造品は出土しておらず、時期差・地域差・祭祀対象の差異などが考えられている。石製品と土製品で祭祀品として何らかの差異があったとも考えられる。

美濃ヶ浜式製塩土器が、SB7・14・22・39・41・43の6軒の住居跡から1～数点出土している。器形は深鉢形の身部に低脚が付き、裾部がハの字形に開くタイプで、脚部が柱状に長く伸びる典型的な美濃ヶ浜式の2類・3類に先立つやや古式の4類のものが主体をなす。出土分布は山口湾岸と山口盆地周辺に限られ、時期的には6世紀後半から7世紀前半が中心となることが指摘されている。本遺跡の製塩土器は、古い4類の型式が中心であり、美濃ヶ浜遺跡や波雁ヶ浜遺跡などの生産地からの搬

入品と考えられ、消費地における6世紀前半から中頃の古い型式の出土事例として注目される。また、数点の土錘の出土と合わせて、滑石製模造品などの祭祀遺物に見られる製塩遺跡との関連性や海浜部を生産拠点とする海民集団と丘陵部の農民集団との交流を具体的に物語る資料としても興味深い。

3 古代・中世

(1) 掘立柱建物跡について

49棟の掘立柱建物跡が確実性の高いものとして確認された。柱穴の密集度からすれば、ほかにも建物の可能性があるもの、建て替えられたものがあると見られる。各地区で建物跡が検出されているが、特に2地区、4A地区に多い。規模は、1間×1間、2間×1間、2間×2間、3間×2間、4間×2間、4間×3間のパターンがある。桁行方向の1間当たりの長さは、1.6~2.0m程度が多い。SB103・SB139は庇がつく建物と見られる。SB117・SB129・SB149・（おそらくSB110も）は総柱建物で、小型・中型・大型の倉庫などの建築物と考えられる。

建物の棟方向は、桁行方向を基準とした場合、N10°EからN20°E前後の北北東方向、N70°WからN80°W前後の南南西方向の2方向が多い。これら2方向は、直角に近い角度をなしている。2地区SB113~SB116や4A地区SB138~SB144などのように、数棟がほぼ平行または直角に、隣接したり重なりあっている場合には、同時期併存または建て替えと推定される。

建物の時期は、柱穴からの出土遺物が少なかったが、原則的に最も新しい遺物の時期をその建物の時期と推定することとし、時期比定の確実性が高い建物との棟方向・切り合い関係などを加味した。その結果、古代の平安時代後期（11~12世紀）と中世の鎌倉~室町時代（13~15世紀）との2時期に建物の多くが集中する傾向があった。奈良末~平安時代前期（8~9世紀）の可能性のある建物もあるが、古墳時代の建物は調査区内では見い出せなかった。2地区東側のSB110~117、SB119・120周辺の建物群は平安時代後期と見られる。SB14-S P 1出土の土師器椀（343）、S P 2140の白磁碗（329）、S P 2133の石鍋（385）などこの時期の遺物が隣接する柱穴から出土していることは傍証となろう。4A地区のSB138~SB144の一群は中世（13~14世紀頃）の建物と見られる。周辺の土坑SK111からは土師器播鉢（281）・鍋（282）、柱穴からは土師器皿・杯、瓦質土器、鎬蓮弁文の青磁碗（330）など中世的様相を示す遺物が多く出土している。大型建物SB118とSB123は古墳時代の竪穴住居跡を切り、中世の溝等に切られているため、古代に属すると考えられ、遺物も平安時代後期頃と見られる。SB129・SB149は、竪穴住居より後続的で、中世の遺物を伴わず、棟方向も他と異なるため、古代の別々の時期の所産と見られる。1C地区のSB102・SB103は、棟方向が他の地区とやや異なり、SB102の柱穴から8~9世紀代と見られる六連式製塩土器（255）が出土し、隣接するSB1やSK4・5の埋土中から陶器IV型式奈良末~平安前期の須恵器杯蓋・身が出土していることから、この時期の建物である可能性がある。4B・4C地区のSB132~SB137の一群は、時期決定の資料となる遺物をほとんど伴わず判断が難しいが、隣接するST4から平安後期末と見られる和鏡（293）が出土しており、古代末~中世初めの時期と関連づけられるかもしれない。2地区S P 2411からは瓦質土器の足鍋（362・363）と土師器杯（360）が一括出土しており、15世紀代から16世紀初めに比定され、隣接する中世のSB126などに関連して考えると、15世紀代が集落の下限と見られる。

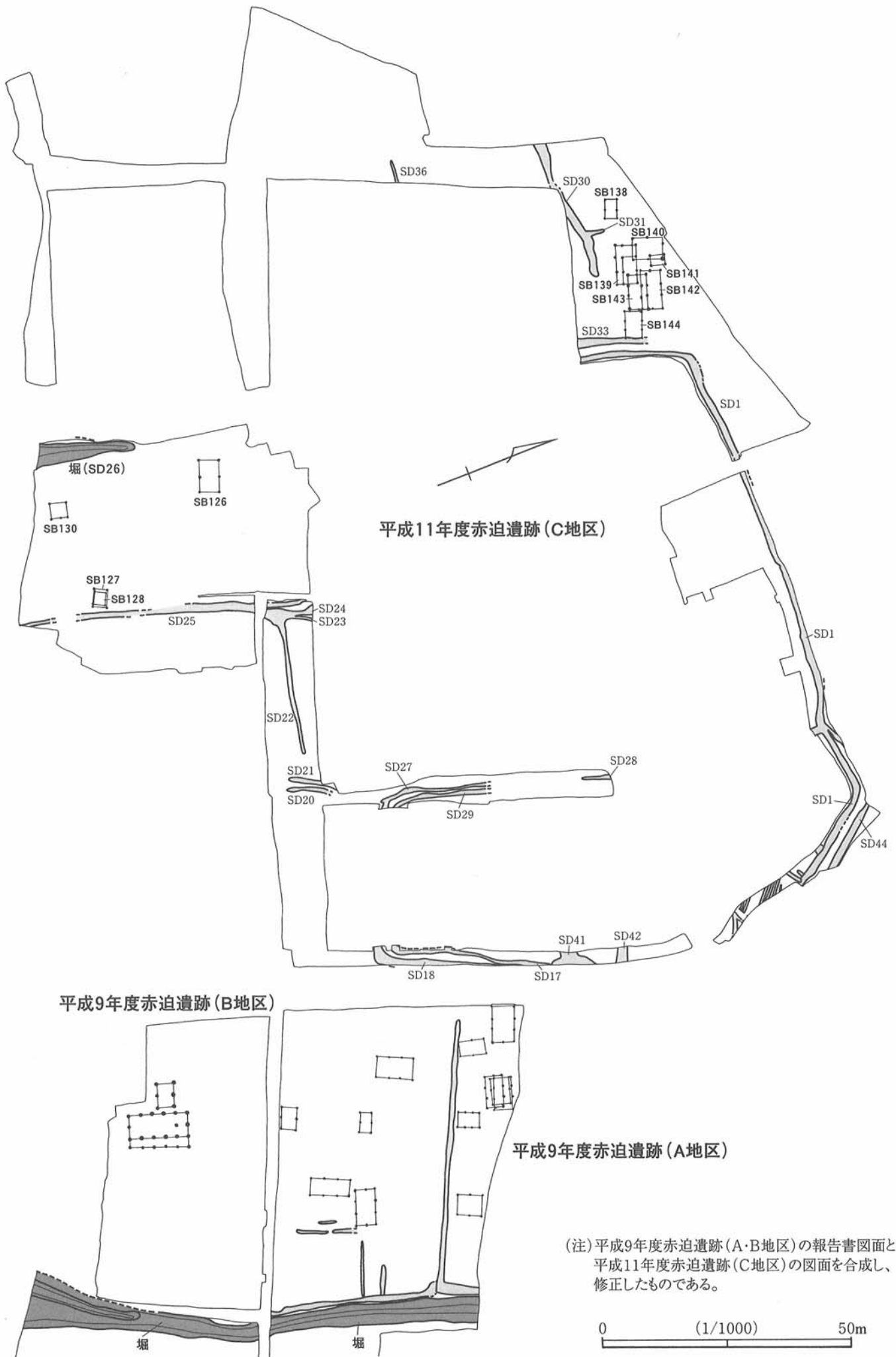
(2) 中世の堀・溝と館について

大小の溝状遺構46条、堀1条が、調査区内で確認された。土師器・瓦質土器・陶器(309~324)・石鍋(387~391)などの出土遺物や遺構の切り合い関係などから、大半は中世の13~15世紀代のものと見られる。県内で、全面的な発掘により溝に囲まれた中世の方形区画がまとまって確認された事例としては下右田遺跡^(注20)(防府市)や船頭遺跡(豊浦町)などが知られ、平野部に立地する中・上層農民の集落と見られている。赤迫遺跡の場合、丘陵上に立地し、周囲を取り囲む溝(SD1)は、丘陵の自然地形を生かしながら不整な四角形や多角形をなし、内部を小さな溝が区画していた模様である。

堀(SD26)は、SD1の延長線に並行に南西外側に位置し、丘陵を断ち切るように北側から南側に掘り込まれたと見られ、内部に有力氏族の館跡の存在が推定される。一方で、堀や溝で囲まれた地区を一律に館と見なすのではなく、出土遺物や遺構の状況によっては寺院や灌漑用水路の一部である場合など多面的な視点から遺構を判断する必要がある^(注21)。赤迫遺跡の場合、堀の規模の大きさや防御性、丘陵上に位置する地形や周囲の建物配置、寺院関連の遺物が出土していない点などから判断して、寺院や灌漑施設ではなく、有力氏族の館である可能性が高いと考えられる。

領家遺跡^(注22)(阿知須町)、大内氏館跡^(注23)(山口市)、平子(仁保)氏の館跡と推定される土井遺跡^(注24)(山口市)、岡田・江良遺跡^(注25)(むつみ村)などで館に伴う堀が発掘されている。三井氏の館跡と推定される三太屋敷跡^(注26)(下関市)も測量調査により範囲が確認されている。大内氏館跡は平野部に立地し、溝や堀が周囲を巡る方形館であるのに対して、赤迫遺跡は周囲が急峻な崖をなす標高20m弱の丘陵の自然の要害性を利用し、堀が丘陵を断ち切る二重の防御機能を持ち、溝が周囲を取り巻き区画している点に違いがある。中世の平城に対する平山城のような立地条件の対比が見られる。大内氏館跡は平地の館化しているが、赤迫遺跡の推定される館と堀は、自然地形を利用した古い様相を持つ中世の在地系土豪の岩的色彩を帯びている。丘陵上に館が立地するのは、低地沖積平野部は農業用地としてなるべく生産にあてるという中世の土地利用のあり方を反映したものかもしれない。堀で区画された館の規模は大内氏館跡が約150m四方、堀幅5m以上、深さ4mであるのに対して、赤迫遺跡は東(A地区)・西(C地区)の堀間の距離が約170mで、9年度A地区では最大堀幅5m、最大深さ2mで、内部の取り囲む溝SD1の一辺の長さが93mである。土井遺跡、岡田・江良遺跡ともに堀で囲まれた館の区画の短辺70m弱、長辺60~100mの長方形になることが推測されている。館主の政治的立場は異なるとはいえ、赤迫遺跡の堀・溝・推定される館の規模はこれらに遜色がない。また、SD1東側線と9年度A地区の堀との位置関係と距離が、SD1西側線と3B地区の崖落ち部との位置関係と距離に対応しているようにも見受けられる。3B地区は、農道として利用され西側斜面は削平を受けているが、堀跡であった可能性もあり、赤迫遺跡の推定される館域は西側に広がる余地も残っている。

溝と同時期と見られる中世の掘立柱建物跡は、4A地区のSD1北西隅の屈曲部西側外区で、SB138~144として集中して確認された。2地区にもSD25と堀(SD26)の間にSB126~128などの建物がある。SD1に囲まれた内部は、未調査のため建物の配置や推定される館の構造はわからない。ただし、平成9年度赤迫(A地区)で、検出された東側の堀の内部には、C地区と同じように棟方向が北北東や南南西を向く中世の建物群がある(第47図)。



第47図 中世の堀・溝状遺構・掘立柱建物跡の全体配置図

(3) 遺物について

土師器は、平安時代後期(11~12世紀代)と中世前期(13~14世紀代)の2時期の一群が柱穴・墓・土坑などから出土している。杯・皿の底部は回転糸切り痕が残るものが大半で、11世紀以後に比定できよう。平安時代前期(8~9世紀代)と比定できる明確な特徴をもつ良好な土器資料は少なく、小破片の一部に皿・杯とおぼしきものも含まれていたが、確定は難しい。平安時代後期では、椀(304・343)などが挙げられ、中世前期では、杯(346~359)や皿類があり、椀(344・345)などは両者の過渡期に位置づけられようか。杯(360)や皿(300)などが15世紀代から16世紀初めと見られ、赤迫遺跡の下限を示すものと思われる。なお、大内氏館跡で出土する極めて薄手でロクロ回転痕が明瞭で、器高が低く直線の外開きのA式土師器はほとんど見られない。13世紀代とおぼしき東播系の鉢や瓦質土器では、古いタイプの羽釜(315・321)、15世紀代以降に下る鍋(323)・足鍋^(注28)(323・361~363)などが出土している。白磁は、玉縁の碗(329)や皿(328)など11~12世紀代に比定されるものが少量ある。青磁は、龍泉窯系の鎬蓮弁文の碗(330)など13~14世紀代と見られるものが少数ながら出土している。一方、景德鎮系の16世紀代の染付磁器類は、出土していない。備前焼についても、播鉢(318・322)など間壁編年IV期の15世紀代を下限とし、16世紀代のV期に下るものは見かけない。

和鏡^(注29)(293)が、ST4から出土した。草花双鳥鏡と見られ、文様構成・薄い鏡体・やや厚く幅広いの周縁などの要素から平安時代後期末の所産と考えられる。この種、この時期の墓からの出土事例は鑄銭司大歳遺跡(山口市)ほか県内でも数少なく、一定の社会的地位を有した人物にかかわる副葬品と見られる。また、こうぞ和紙に包まれ、底板に墨書のある円筒形と推定されるヒノキ材製容器に納められた状態で出土しており、当時の副葬儀礼の一端をうかがう上での貴重な発見となった。

2地区SP2133から1点(385)、表面採集品1点(386)の特殊なタイプの石鍋が出土した。やや深い桶形で、四方向に瘤状把手が付くタイプと見られ、木戸雅寿氏の石鍋編年のII-a類^(注34)に属する。石鍋としては、I類に次ぐ11世紀前半の所産と考えられる古い部類に入る。県内ではI類と見られる秋根遺跡出土の1点に次いで、II類は上嘉川遺跡^(注35)出土の3点、下請川南遺跡^(注36)の伝表面採集品1点、筏石遺跡^(注37)の1点、平成11年度切畑南遺跡^(注38)出土1点などの類例がわずかに知られるだけである。また、石鍋は柱穴の底部に意図的に横に伏せられた状態で出土しており、建物の地鎮・廃絶など何らかの儀礼的意味を持つものと考えられる。削り出しの鑿が口縁部外面に巡る外開きタイプの石鍋(387~391)は、県内各地でも出土が多く、隣接する石鍋生産遺跡である下請川南遺跡^(注39)が有力な産地と見られる。

4 赤迫遺跡の歴史の変遷のまとめ - 周辺のは場整備事業に伴う発掘調査と関連して -

平成11年度赤迫遺跡(C地区)の調査成果を中心に、平成9年度赤迫遺跡(A・B地区)^(注40)の調査成果を合せて、遺跡の立地するこの丘陵の歴史の変遷を概観するとともに、隣接する平成7年度領家遺跡および平成8年度神正遺跡(A・B地区)^(注41)の調査成果を踏まえた現時点でのまとめをしておきたい。

赤迫遺跡(C地区)に人々の生活が開始される時期は、鍬形石鏃の出土から見て、縄文早期と考えられる。石斧や石鏃・凹石などからも縄文期の活動の跡がうかがえるが、具体的な遺構としては確認されなかった。弥生時代では、石庖丁のほか終末期の壺または甕を二次加工して埋葬容器として転用し、逆さまに伏せて埋めた可能性をうかがわせるSK74は、県内でも珍しい事例として注目される。

こうした前史を経て、C地区における継続的な本格的集落が形成された第1の画期は、古墳時代後

期である。6世紀代を中心に7世紀初めにかけて100年以上数世代にわたり、竪穴住居の集落が営まれた。ただし、確認されたのは竪穴住居を中心とする集落であって、海浜部で海にかかわる生業を基盤とする集団の墓として知られる古墳時代後期の丸塚古墳群^(注42)に対比して、農業を基盤とする丘陵部の拠点と考えられる赤迫遺跡の集団にかかわる古墳群の所在については、今回の調査でも手がかりを得ることができず、依然として残された課題である。なお、平成9年度A地区では、これら一群の竪穴住居跡より古い段階の布留系の小型丸底壺や甕を伴う竪穴住居跡1軒（A地区S B10）が検出されており、古墳時代前期にさかのぼるこの丘陵での居住の萌芽が認められる。

陶器編年Ⅲ型式の7世紀代に相当する宝珠つまみとかえりを持つ杯蓋タイプの須恵器は確認されていないことから7世紀代には集落は一旦衰退したと見られる。これに対して、今回の11年度1 C地区東側の遺構、道路をはさんで1 B地区の東側に位置する9年度A地区の大型建物S B24やその周辺および隣接するB地区の土坑・柱穴などから8～9世紀代の奈良～平安時代前期にあたる陶器Ⅳ型式相当の須恵器杯蓋・杯身が出土している。同じB地区の土坑からは、9世紀頃の在来系の可能性のある緑釉陶器片の出土が報告されている。さらに、8～9世紀代に比定される六連式製塩土器が11年度1 C地区S B102、1 B地区S D17から出土し、9年度A地区S B24や周辺の柱穴・堀の埋土からも出土している。こうした遺物の出土位置から判断すると、11年度1 C地区東側・1 B地区南東側より東側の丘陵地区周辺（9年度A・B地区）に、集落内で特別の意味を持ち、郡衙・国衙との直接的結びつきを持つ公的性格を帯びた施設である可能性をも想定させる規模を持つ大型建物（9年度A地区S B24）を中心とした8～9世紀代の奈良～平安時代前期の人々の居住域が想定される。

C地区での第2の画期は、平安時代後期（11～12世紀）である。この時期には掘立柱建物跡や土師器の椀・皿、白磁、石鍋や墓に副葬された和鏡などの遺物の出土によって密度はやや希薄ではあるが、一定規模の集落が営まれていたことが確認された。他の掘立柱建物跡群とは棟方向が異なる大型の掘立柱建物（S B118・123・129・149）もこの平安時代後半期内の時期を異にする建物と思われる。

C地区での第3の画期は、中世前期の鎌倉・室町時代前期にあたる13～14世紀頃と見られる。遺跡が立地する丘陵の西側で大規模な堀が検出され、一辺100m近い長さの溝によって大きく周囲が囲まれ、内部がさらに溝によって区画されている状況が確認された。平成9年度の調査で確認された東側の堀と併せて考えると、中央部の未調査区にこの地域の有力氏族の館跡が埋存している可能性が一段と高まった。溝（S D1）の北西外周付近では、掘立柱建物跡群が確認され、土師器の杯・皿、瓦質土器、青磁などの堀・溝と同時期の遺物が共伴しており、9年度A・B地区の遺構分布と合わせると丘陵一帯に集落が広がっていたことがわかる（第47図）。堀の埋土状況や遺物から判断して、15世紀後半には堀は廃絶されたと見られる。これを機に赤迫の丘陵は、拠点集落としての歴史に終焉を迎えた模様である。文献では、中世の阿知須地域は厚東氏とつながりが深い白松氏の支配が及んでいたことが知られる^(注43)。14世紀半ばの南北朝争乱期、正平13年（1358年）に厚東氏は大内氏に敗れた。厚東氏敗戦前後の軍事的緊張が、厚東氏ゆかりの白松氏支配下のこの地域にもおよび大規模な堀の造営につながったとの推測も成り立つのではなかろうか。15世紀後半応仁の乱後の大内氏による堀増設・敷地改修等の大内氏館の整備や法制整備と軌を一にした領国支配強化などの政治的要因によって、中世的在地有力者としての政治的独立性を失い、家臣化の道をたどる中で、堀・館の廃絶を余儀なくされた

の見方も可能である。さらに別の見方として、15世紀後半応仁の乱前後の軍事的緊張と支配の強化が、堀の緊急造営とその後の廃絶を短期の内にもたらしたとも考えられる。一方、赤迫の丘陵と谷ひとつ隔てて北側に位置する丘陵には、有力者の拠点と見られる領家遺跡があり、大内氏館跡で出土する薄手土師器A-2式タイプの杯・皿が出土し、15~16世紀代に館と堀・土塁・門が築かれていた。この丘陵の南側に位置する神正遺跡A・B地区では、この時期の溝・掘立柱建物跡・土坑・墓・地下式横穴などが確認され、館に関連する勢力の集落とも考えられる。赤迫の地に埋存すると推定される館は、領家の館より時期的に先行し堀などの規模も大きい。両者の内容・関係について文献資料はないが、発掘調査では周辺での火災や戦闘などの形跡は確認されておらず、直接の戦乱を伴わず政治的決着により比較的平和裡に館・堀の明け渡し・廃絶が行われた状況であり、より大きな政治勢力に組み込まれて行ったと推定される。具体的には、赤迫の場合は14~15世紀代に白松氏にかかわると見られる在地勢力から大内氏へ、領家の場合は16世紀後半に大内氏が敗れ毛利氏に政権が交代する政治変動に呼応して、大内氏にかかわると見られる半独立の在地勢力または大内系家臣から毛利氏へと政治基盤が移る中で、館と堀周辺地域はこの地域の独立した拠点としての基盤を失い、廃絶を余儀なくされたとの推測もひとつの可能性として成り立ち得る。やがて、近世の毛利氏による藩政時代を迎え、かつての拠点的集落も開作・新田開発により耕地化されて、地中に埋もれることとなったのである。

以上のように、発掘調査を通じて、この地域の古墳時代から中世にかけての歴史を解明する上での多くの資料を得ることができ、重要な埋蔵文化財の記録を後世に残すこととなった。今後、調査成果が十分に活用されるとともに、調査が実施されなかった地区についても、ほ場整備事業において、地下に埋存する遺跡に対する周回な保存対策を伴った工事と長期的対応が強く望まれるところである。

参考文献

- 注1 笹森健一 「堅穴住居の使い方」
(石野博信ほか『古墳時代の研究第2巻 集落と豪族居館』
雄山閣 1990年)
- 注2 下関市教育委員会 『秋根遺跡』 1977年
- 注3 財団法人山口県教育財団 山口県埋蔵文化財センター
『高野遺跡(北地区)』 1999年
- 注4 財団法人山口県教育財団 山口県教育委員会
『船頭遺跡Ⅱ』 1995年
- 注5 財団法人山口県教育財団 山口県教育委員会
『上ノ山遺跡』 1994年
- 注6 財団法人山口県教育財団 山口県教育委員会
『中村遺跡』 1987年
- 注7 財団法人山口県教育財団 山口県教育委員会
『国秀遺跡』 1992年
- 注8 財団法人山口県教育財団 山口県教育委員会
『平原遺跡』 1996年
- 注9 財団法人山口県教育財団 山口県埋蔵文化財センター
『吉部田遺跡』 1998年
- 注10 山口市教育委員会 『毛割遺跡』 1983年
- 注11 中村浩 『和泉陶器出土遺物の時期編年』
(大阪府教育委員会 『陶器Ⅲ』 1978年)
- 中村浩 『須恵器集成図録 第1巻 近畿編Ⅰ』 1995年
- 注12 大林達夫 『周防国府の成立期の土器の年代観・序章』
(森郁夫先生還暦記念論文集刊行会 『瓦衣千年 - 森郁夫先生還暦記念論文集 -』 1999年)
- 注13 小野田市教育委員会 『小野田市松山窯』 1985年
- 注14 山口県埋蔵文化財センター 『花ヶ池窯跡』 1988年
- 注15 山口市教育委員会 『西遺跡』 1986年
- 注16 山本一朗 『防長の土師器』
(周陽考古学研究所 『山口県の土師器・須恵器』 1981年)
- 注17 小野忠熙 『美濃ガ浜遺跡』
(山口県教育委員会 『山口県文化財概要』 第4集 1961年)
- 注18 藤田 等 『厚南東須恵遺跡発見の遺物』
(『宇部の遺跡』 編集委員会 『宇部の遺跡』 宇部市教育委員会 1968年)
- 注19 小野忠熙・本村豪章 『波雁ガ浜遺跡』
(『宇部の遺跡』 編集委員会 『宇部の遺跡』 宇部市教育委員会 1968年)
- 宇部市教育委員会 『波雁ガ浜遺跡』 1987年
- 注20 山口県教育委員会
『下右田遺跡第4次調査概報・総括』 1980年
- 注21 中井 均 『中世の居館・寺そして村落』
(石井進・萩原三雄 『中世の城と考古学』 新人物往来社 1991年)
- 注22 阿知須町教育委員会 『領家遺跡』 1996年
- 注23 山口市教育委員会 『大内氏館跡Ⅶ』 1987年
『大内氏館跡Ⅷ』 1991年
『大内氏館跡Ⅸ』 1992年
- 注24 財団法人山口県教育財団・山口県教育委員会
『土井遺跡』 1990年
- 注25 財団法人山口県教育財団 山口県埋蔵文化財センター
『岡田・江良遺跡』 1998年
- 注26 山口県教育委員会 『下関市三太屋敷跡』 1977年
- 注27 橋口定志 『中世「方形館」の形成』
(季刊考古学第39号「中世を考古学する」雄山閣 1992年)
- 注28 岩崎仁志 『防長地域の足鍋について』
(山口考古学会 『山口考古17号』 1988年)
- 財団法人山口県教育財団 山口県埋蔵文化財センター
『切畑南遺跡』 1999年
- 注29 上田秀夫 『14~16世紀の青磁碗の分類』
(『貿易陶磁研究 NO.2』 1982年)
- 注30 小野正敏 『15~16世紀の染付碗、皿の分類と年代』
(『貿易陶磁研究 NO.2』 1982年)
- 注31 間壁忠彦 『備前焼』 ニューサイエンス社 1991年
- 注32 中野政樹 『和鏡』 至文堂 1969年
- 広瀬都巽 『和鏡の研究』 角川書店 1974年
- 注33 山口県教育委員会文化課・山口県埋蔵文化財センター
『上辻・鑄銭司大蔵・今宿西遺跡』 1984年
- 注34 木戸雅寿 『石鍋』
(中世土器研究会 『概説中世の土器・陶磁器』 1995年)
- 注35 山口市教育委員会 『上嘉川遺跡』 1993年
- 注36 注35の文献に記述がある。
- 注37 小野忠熙 『筏石遺跡』
(山口県教育委員会 『山口県文化財概要』 第4集 1961年)
- 注38 財団法人山口県教育財団 山口県埋蔵文化財センター
『切畑南遺跡Ⅱ』 2000年3月刊行予定
- 注39 山口県埋蔵文化財センター 『下請川南遺跡』 1987年
- 注40 財団法人山口県教育財団 山口県埋蔵文化財センター・
- 注41 阿知須町教育委員会
『神正遺跡(A地区) 赤迫遺跡(A地区)』 1998年
- 阿知須町教育委員会
『領家・神正遺跡(神正遺跡B地区)』 1997年
- 阿知須町教育委員会
『赤迫遺跡 B地区発掘調査報告』 1998年
- 注42 阿知須町教育委員会 『丸塚古墳群』 1980年
- 注43 阿知須町史編さん委員会 『阿知須町史』 1981年

圖 版



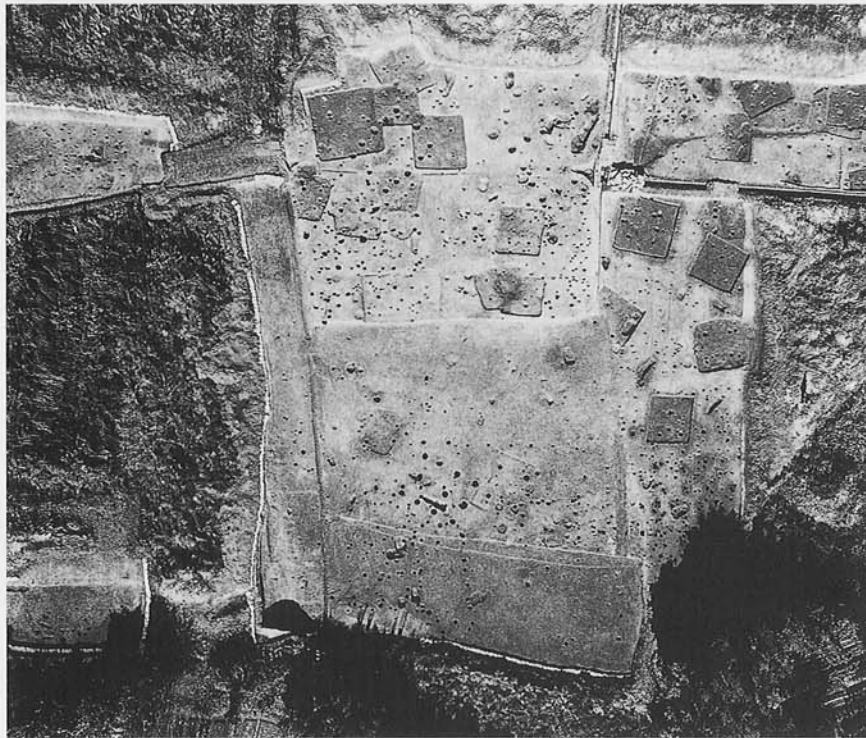
赤迫遺跡（C地区） 遠景（西から）



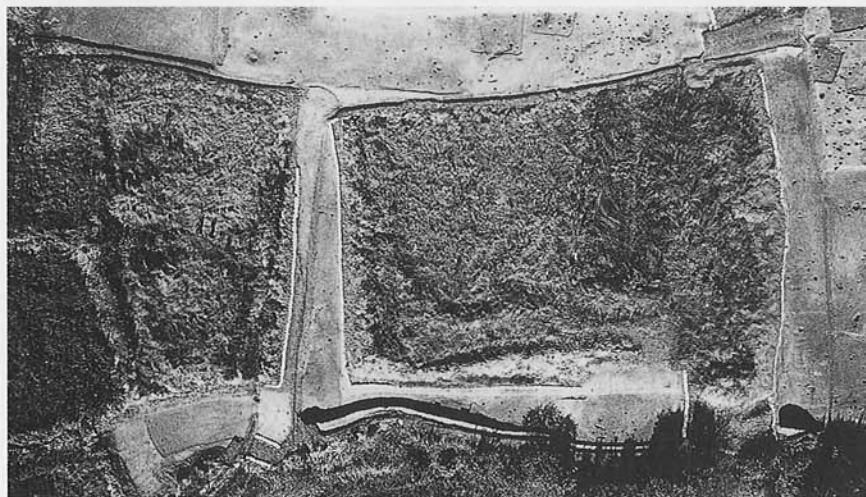
赤迫遺跡（C地区） 全景



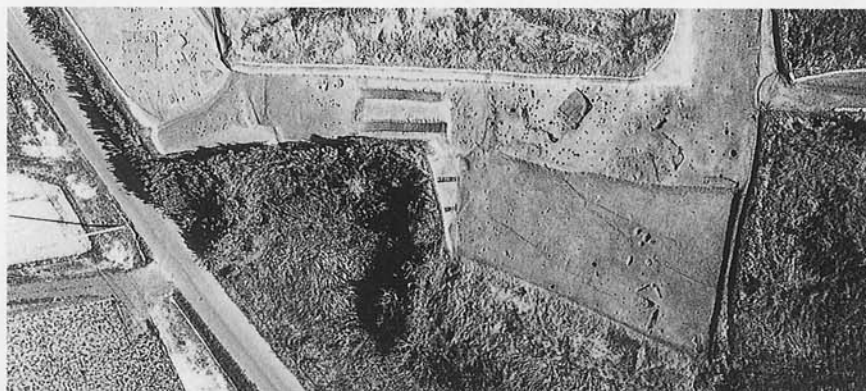
1地区 全景



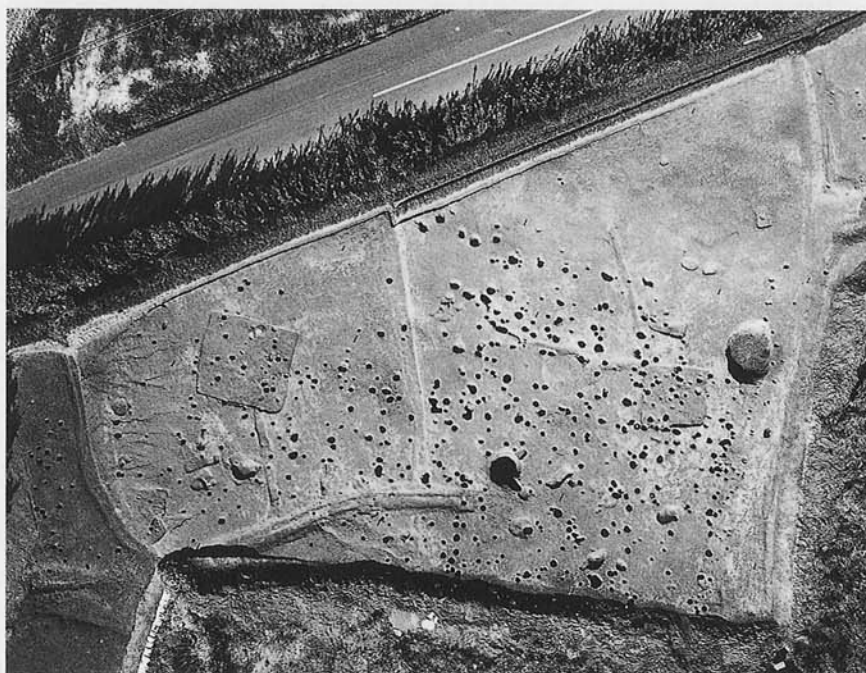
2地区 全景



3地区 全景



4 B · 4 C 地区 全景



4 A 地区 全景



5 地区 全景



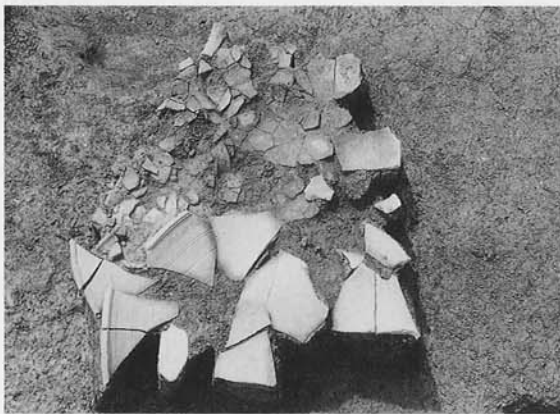
2地区北側 豎穴住居跡群



2地区東側 豎穴住居跡群



SB18 土器出土状況（東から）



SB18 土器出土状況（東から）



SB18 土器出土状況（東から）



SB14 土器出土状況（東から）



SB14 カマド周辺遺物出土状況（東から）



SB41 土器出土状況 (南から)



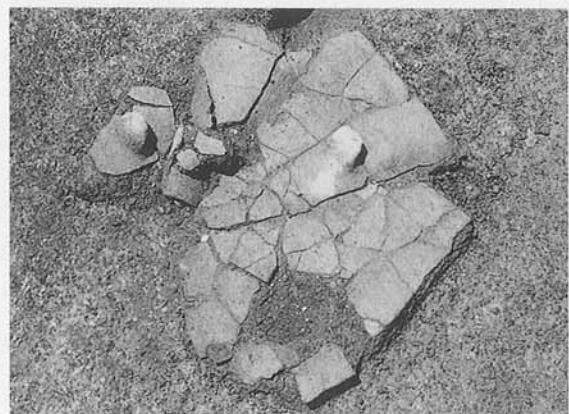
SB41 土器出土状況 (西から)



SB41 土器出土状況 (南から)



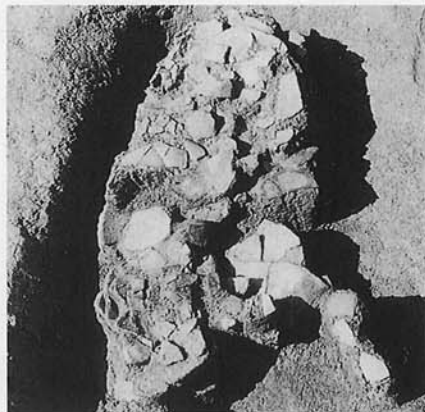
SB 9 土器出土状況 (南から)



SB 9 土器出土状況 (東から)



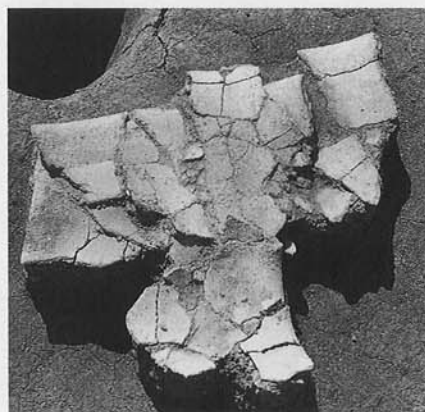
SB20 土器出土状況 (南から)



SB20 土器出土状況



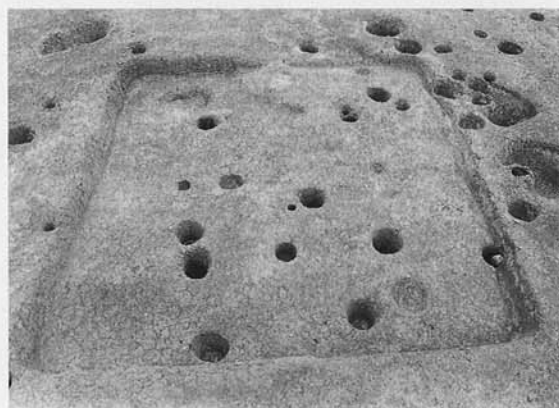
SB 8 土器出土状況 (南から)



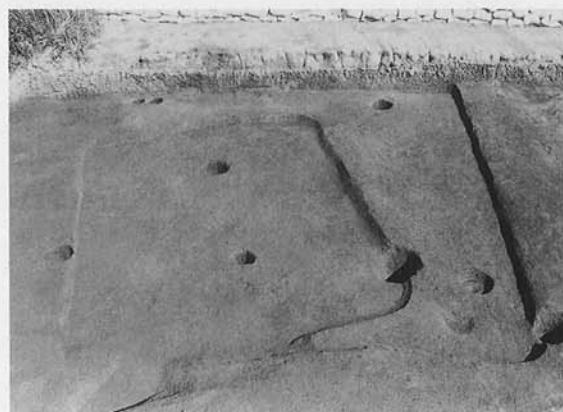
SB 8 土器出土状況 (東から)



SB 1・SB 2 A・SB 2 B 完掘状況 (東から)



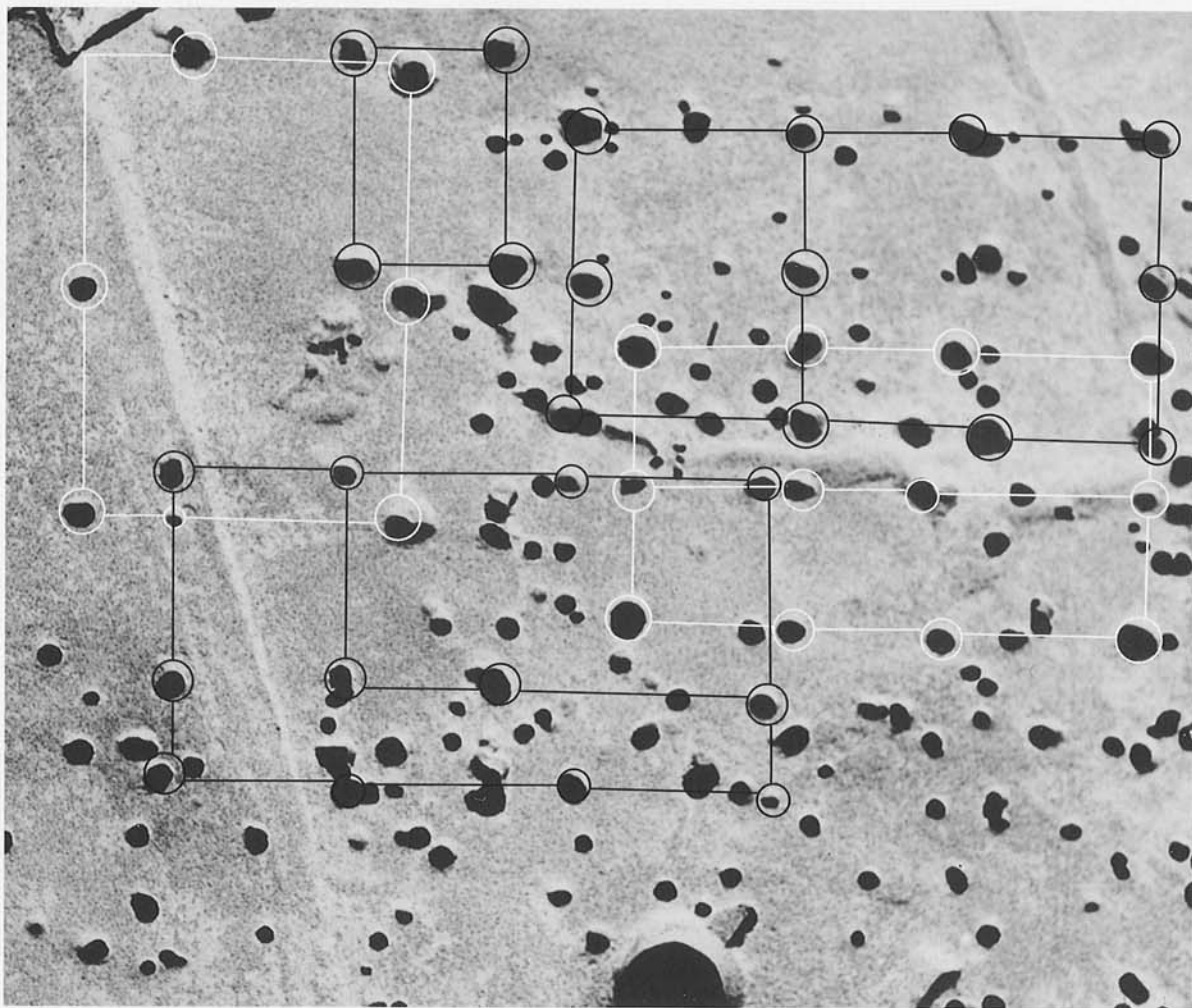
SB24 完掘状況 (南から)



SB32 A・SB32 B 完掘状況 (南から)



SB37 完掘状況 (南から)

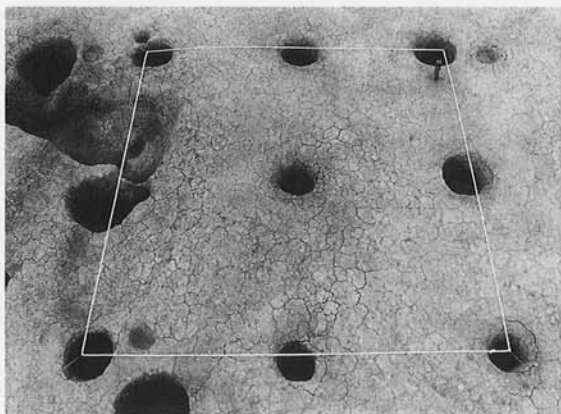


4 A 地区 掘立柱建物群

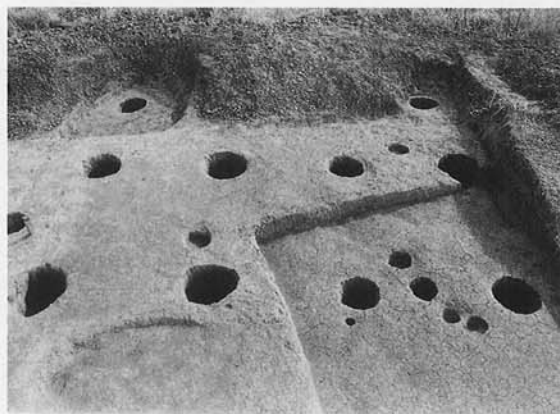


SB123 完掘状況 (南西から)

掘立柱建物跡



SB117 完掘状況 (東から)



SB149 完掘状況 (西から)



SB118 完掘状況 (南西から)



SB129 完掘状況 (南東から)



SK74 土器出土状況 (南から)



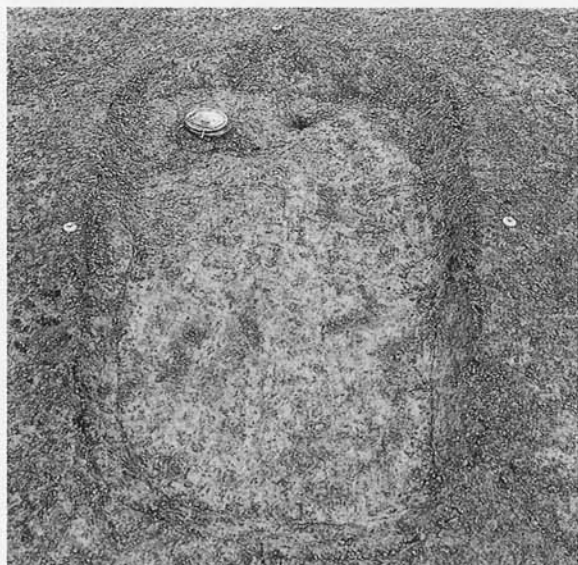
SK73 土器出土状況 (西から)



SK85 土器出土状況 (西から)



SK7 土器出土状況 (北東から)



ST 4 和鏡出土状況 (南から)



ST 4 和鏡出土状況 (南から)



ST 3 土器出土状況 (南西から)



ST 6 土器出土状況 (西から)



堀 (SD26) 完掘状況 (北から)



堀 (SD26) (東から)



堀 (SD26) D'-D 土層断面 (北から)



SD1 全景 (西から)



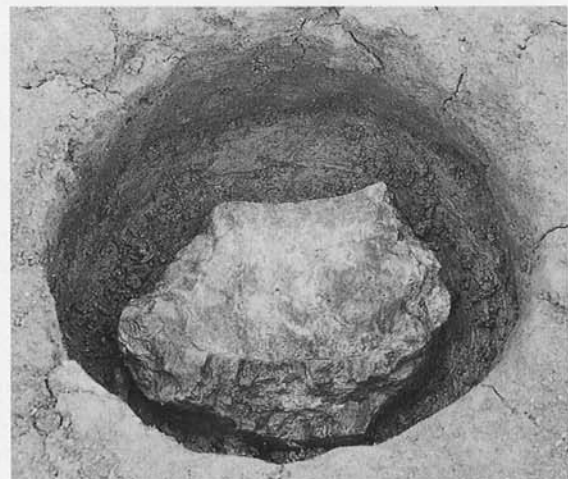
SD1 全景 (東から)



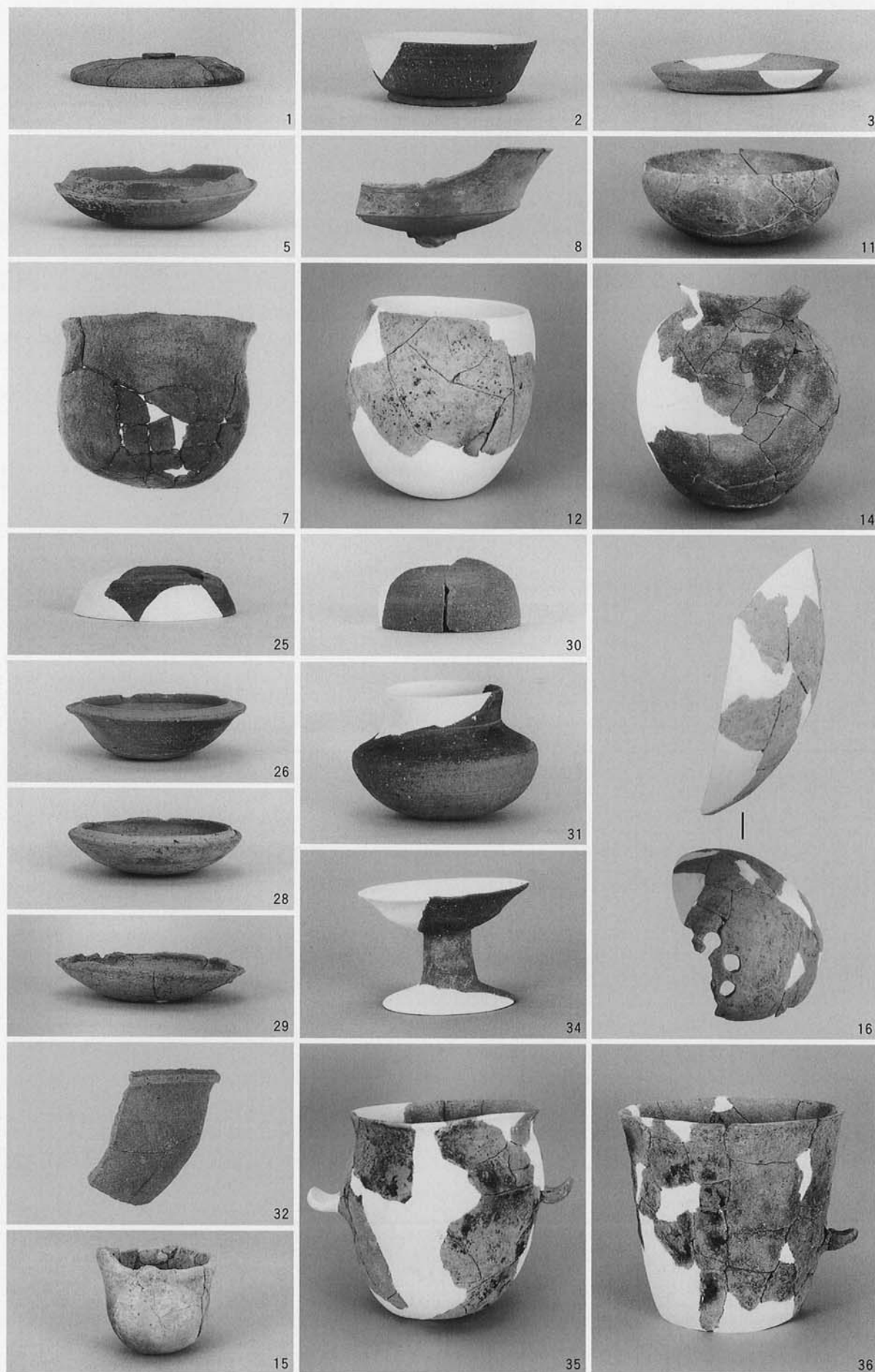
SD22・23・24 合流点 (西から)

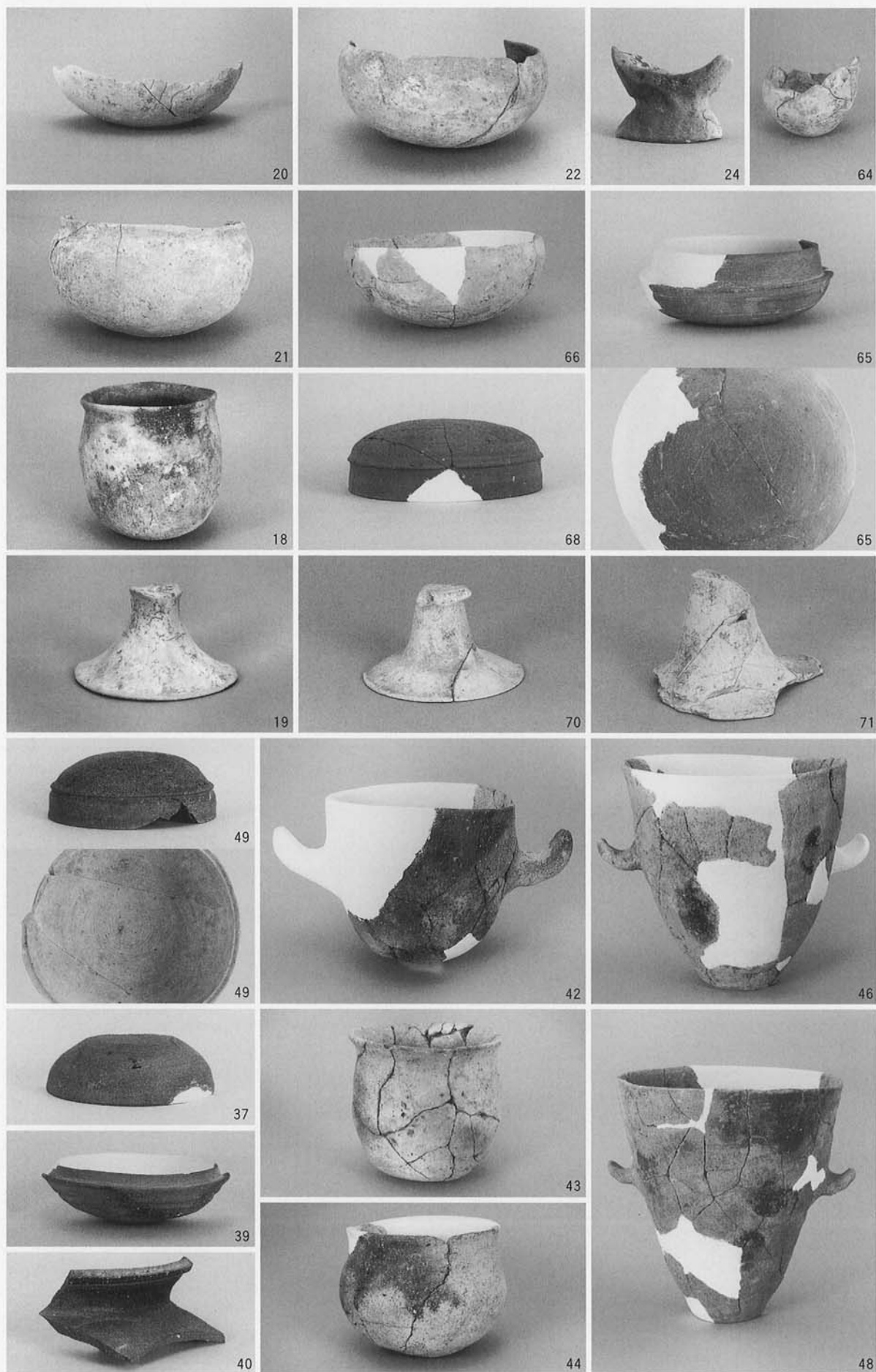


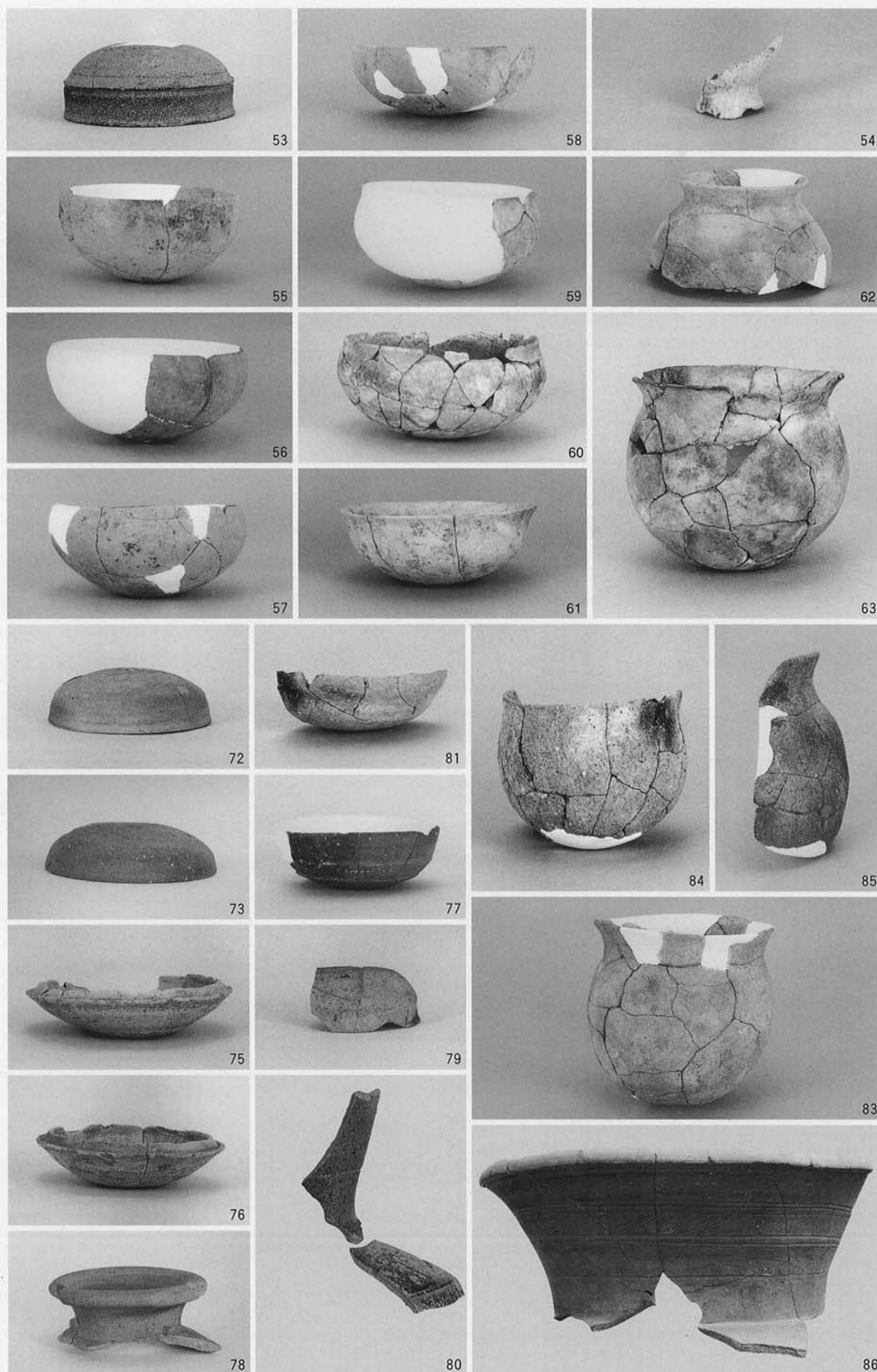
SP2411 足鍋出土状況 (東から)

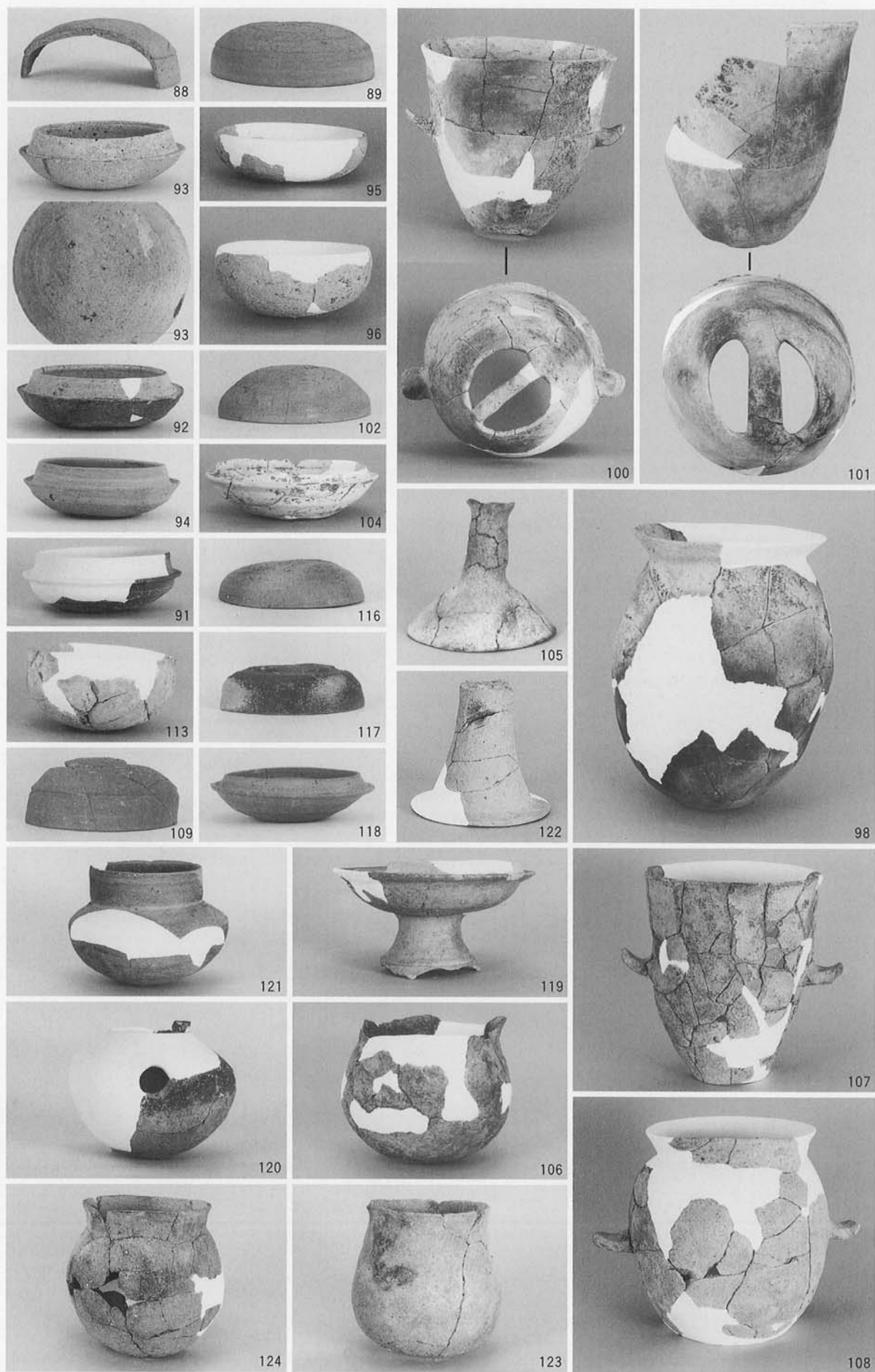


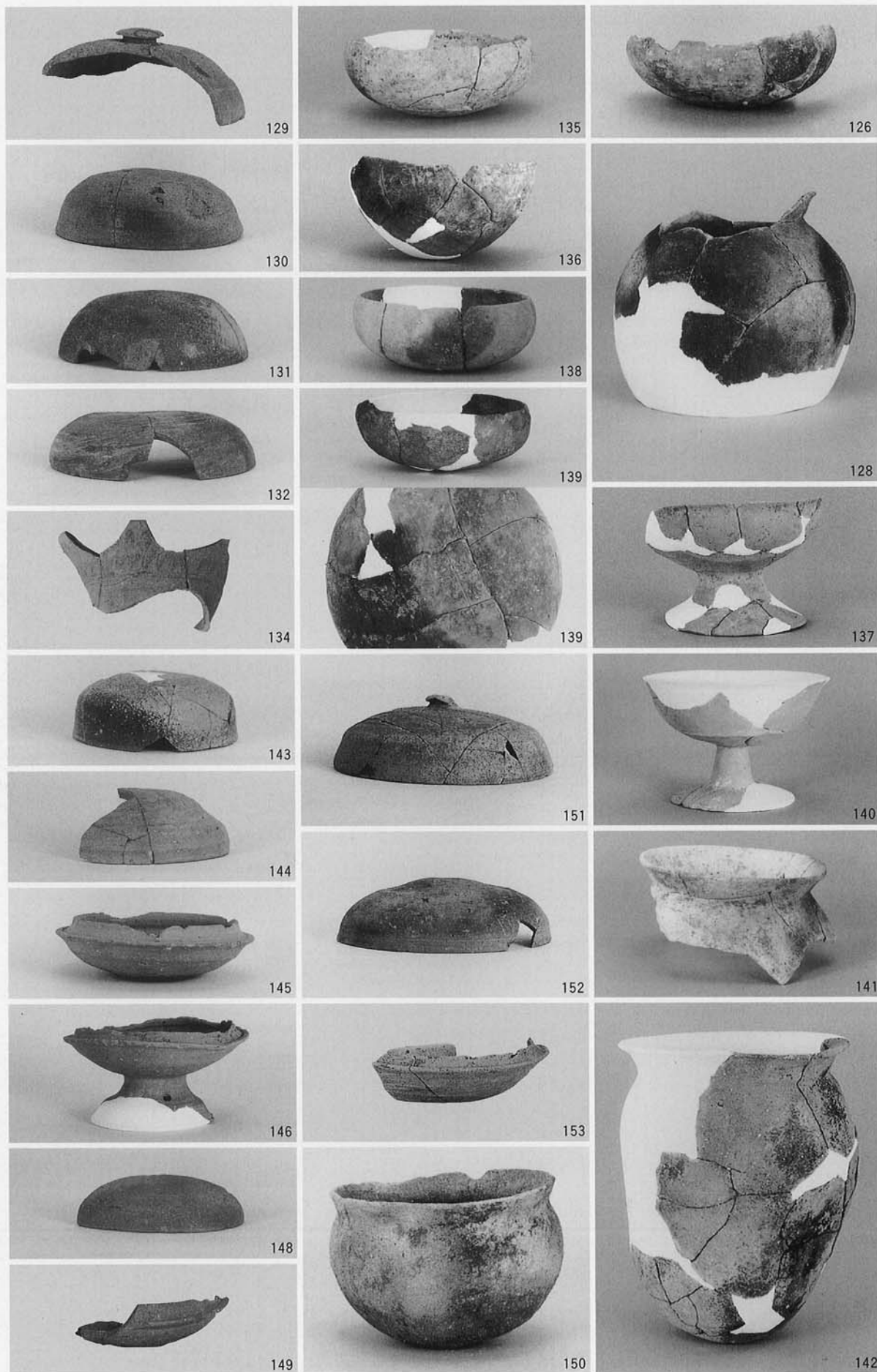
SP2133 石鍋出土状況 (東から)

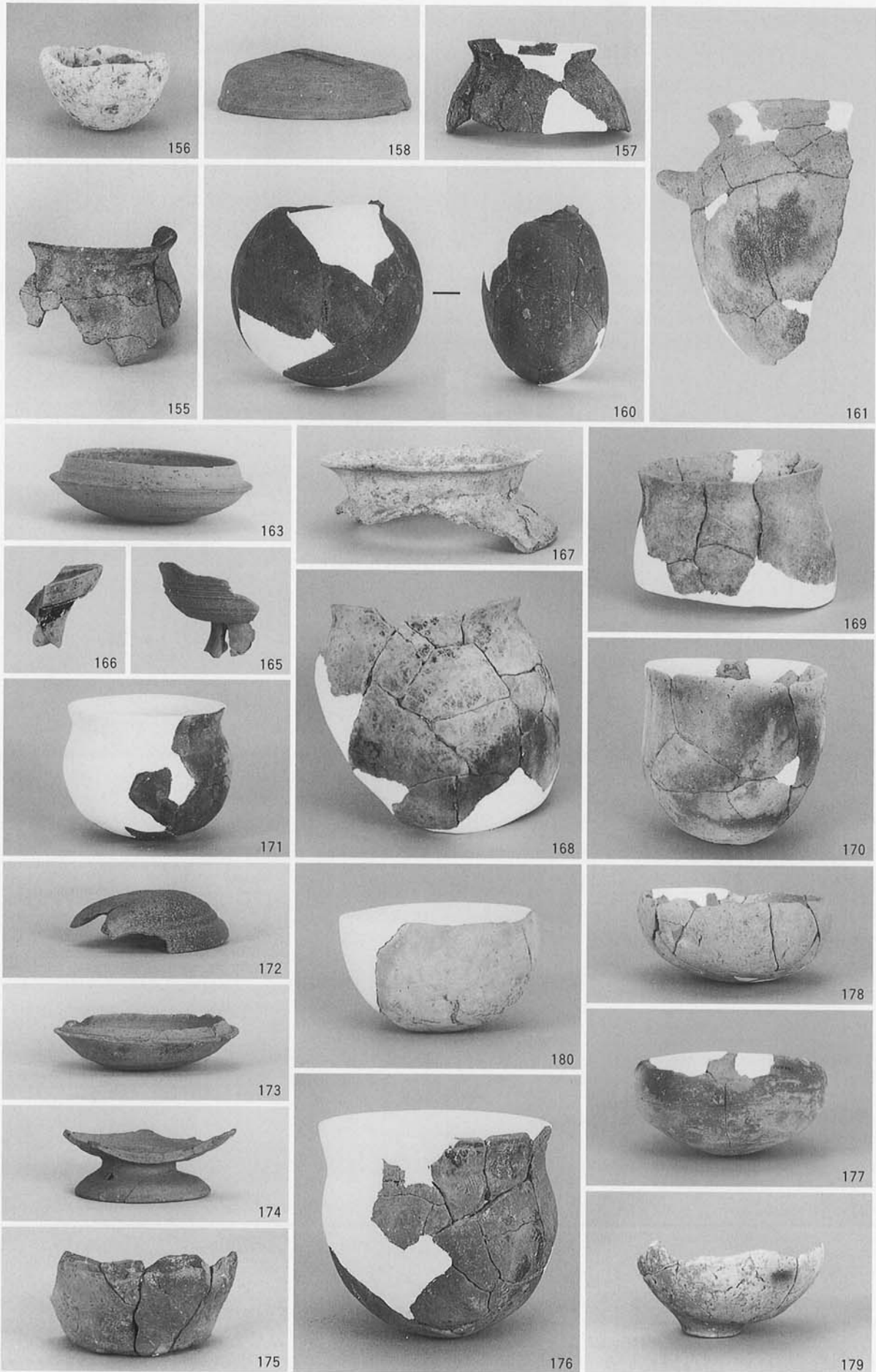


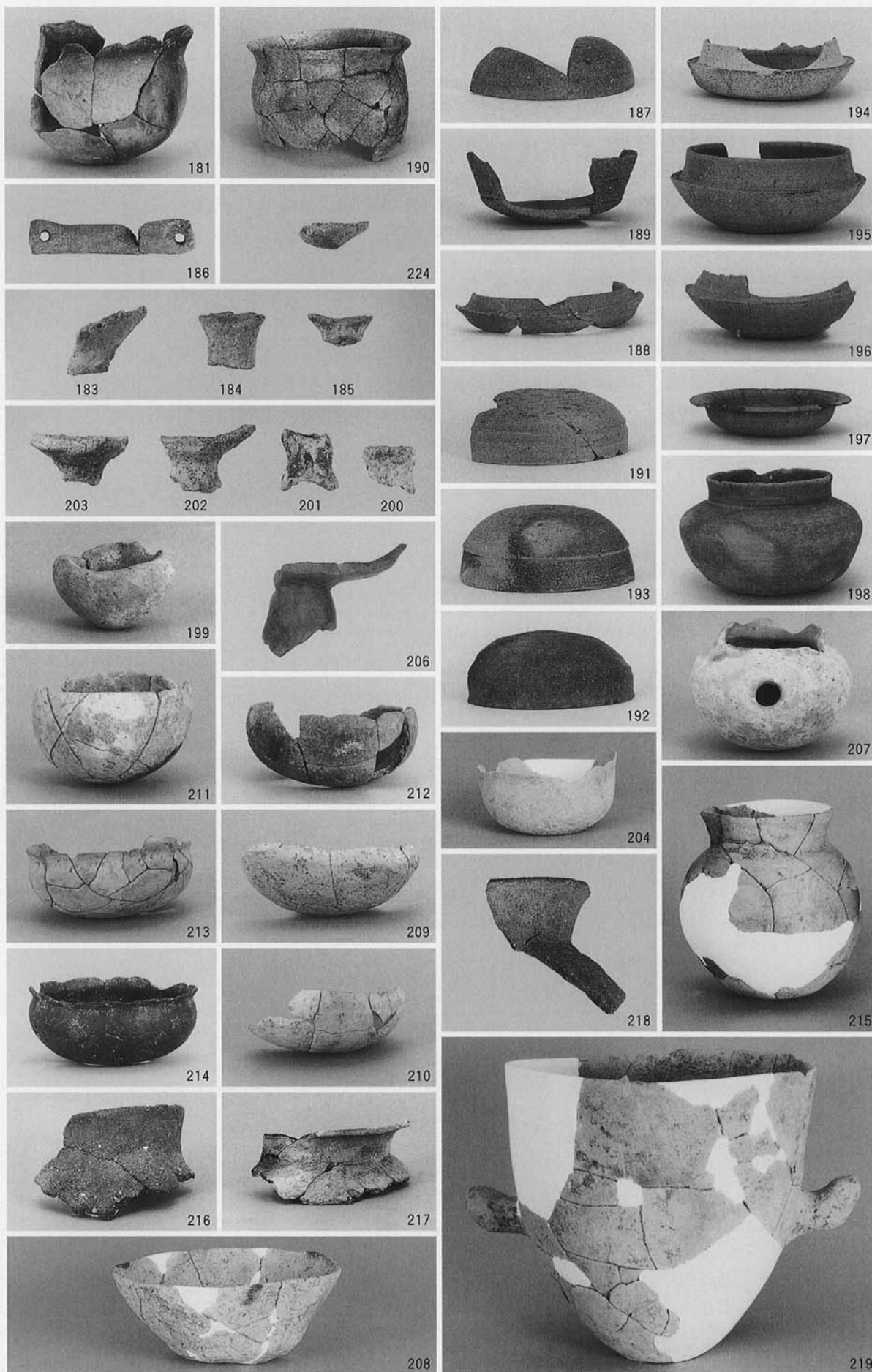


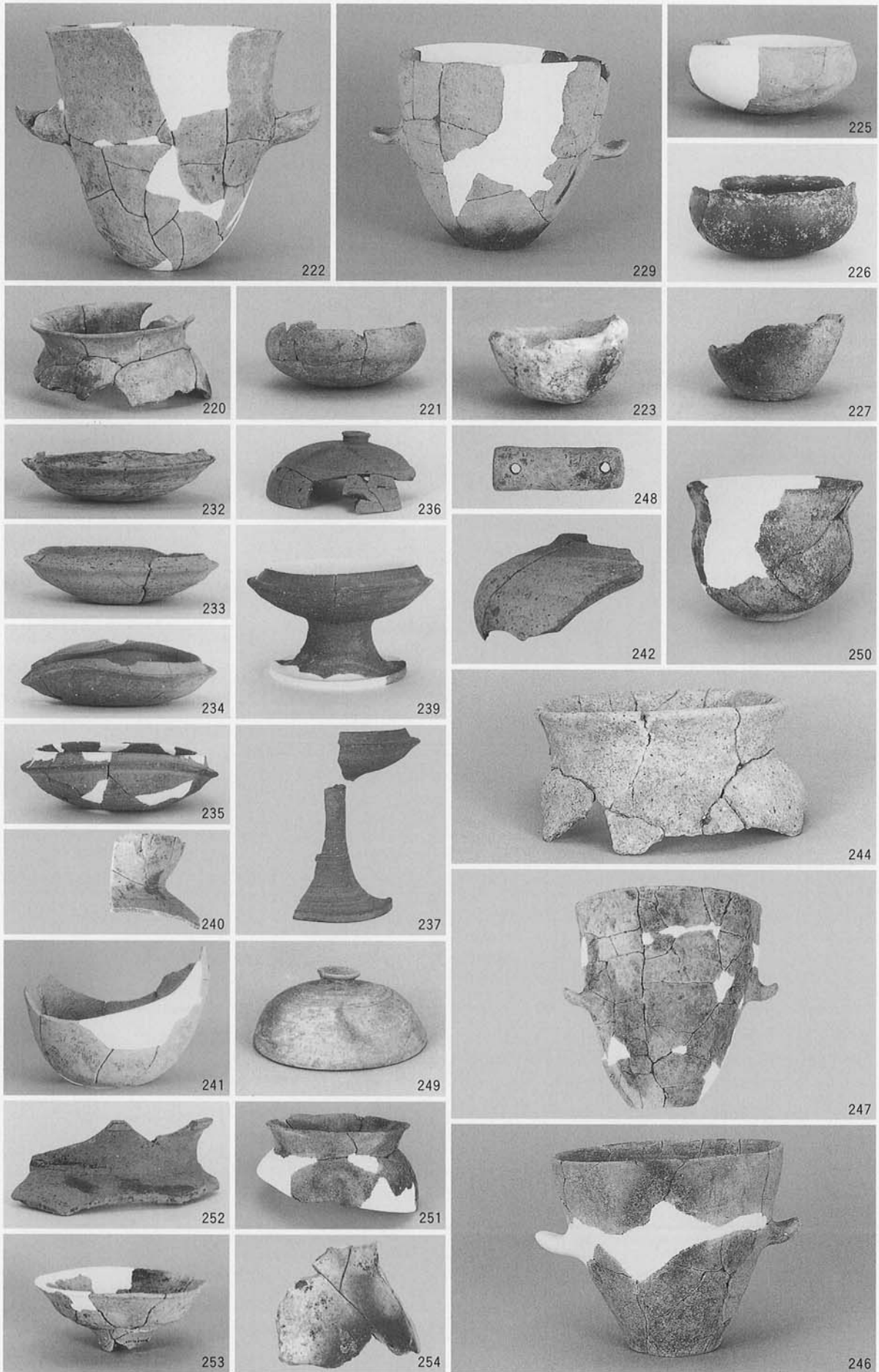


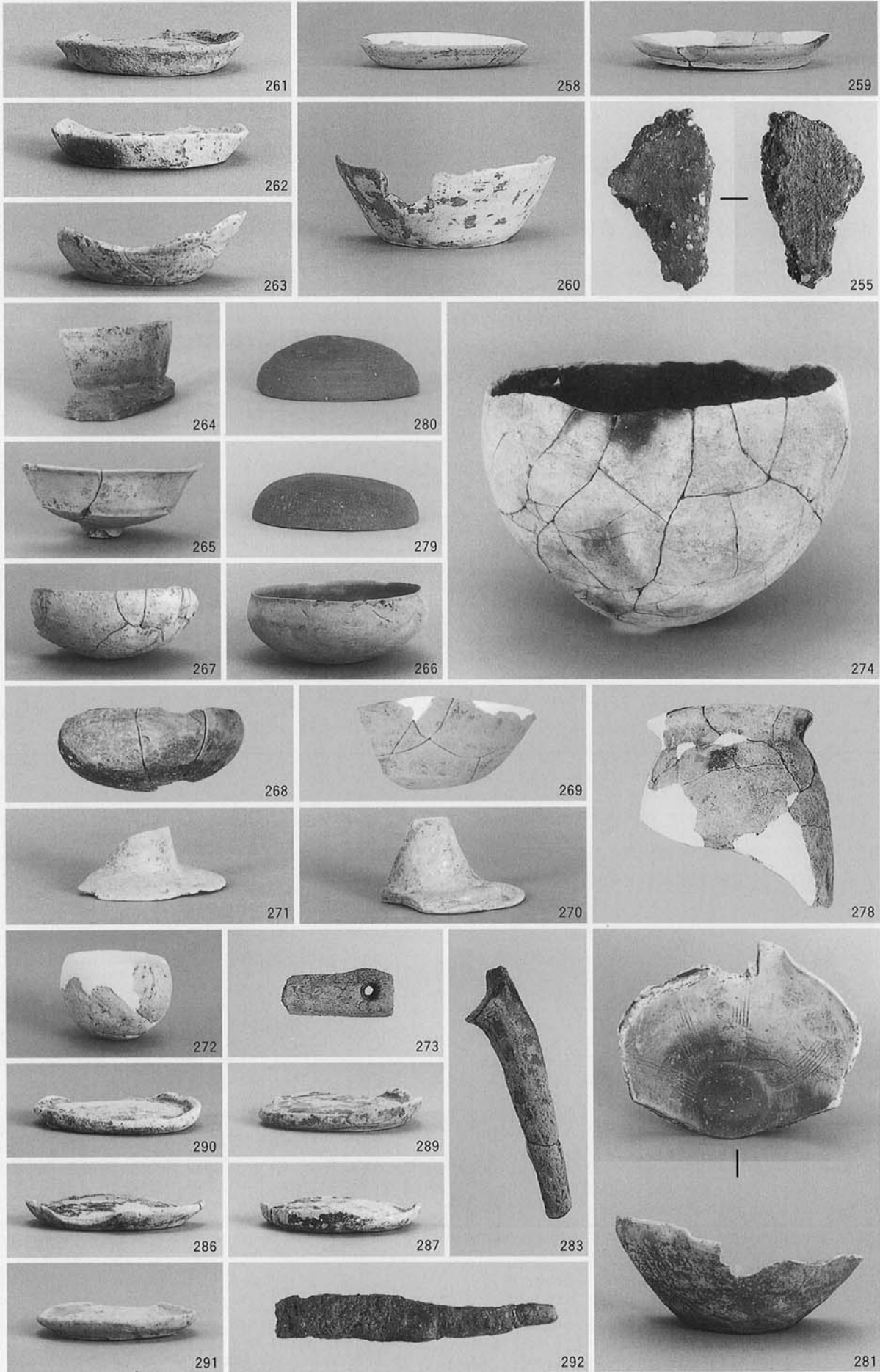










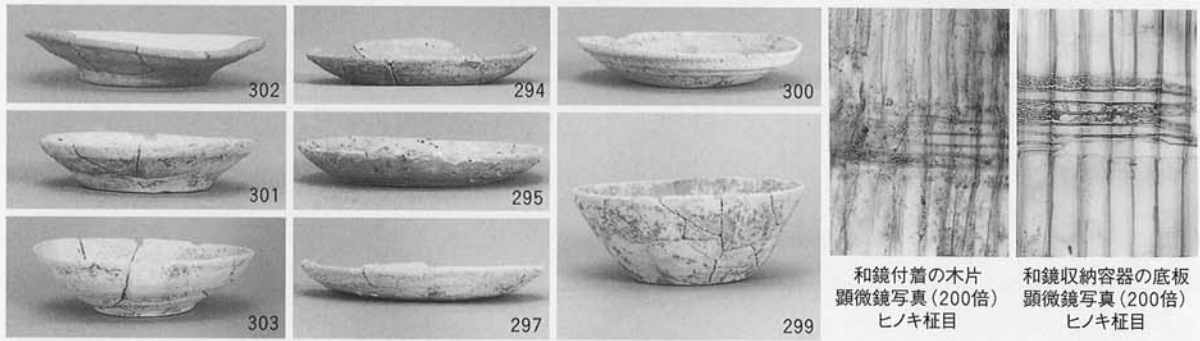




和鏡出土状態

保存処理後の和鏡

和鏡収納容器の底板墨書



302

294

300

301

295

299

303

297

299

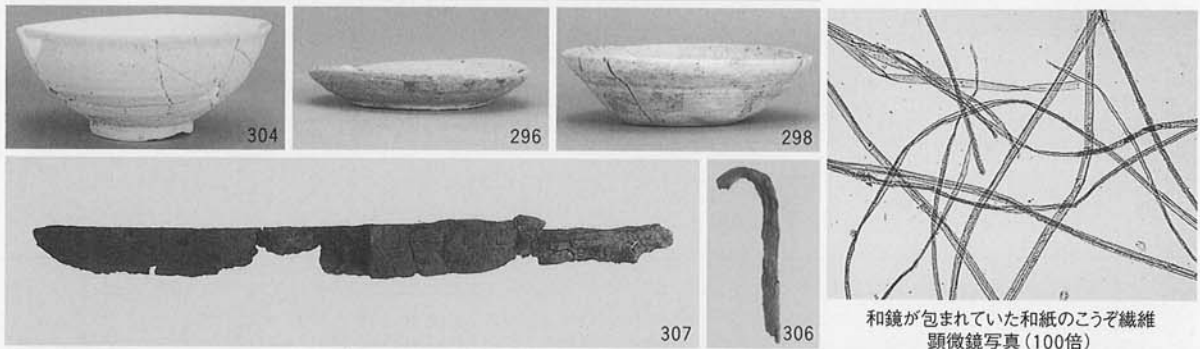
304

296

298

和鏡付着の木片
顕微鏡写真(200倍)
ヒノキ柱目

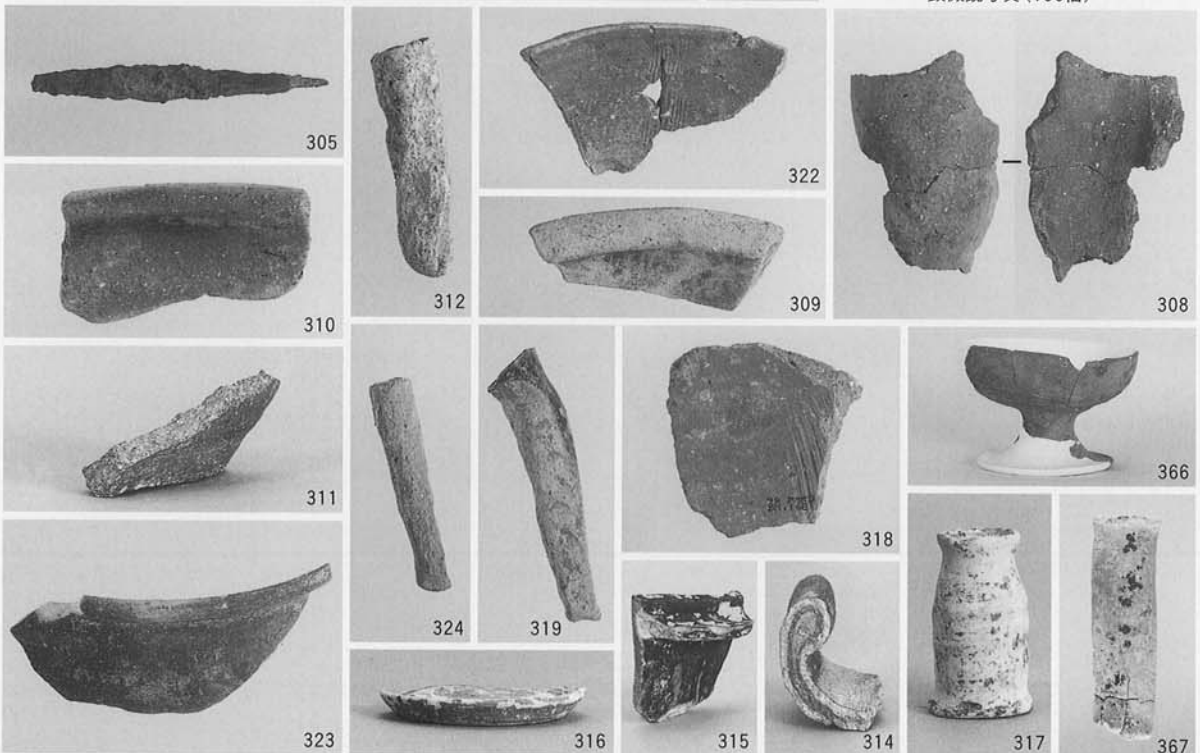
和鏡収納容器の底板
顕微鏡写真(200倍)
ヒノキ柱目



307

306

和鏡が包まれていた和紙のこうぞ繊維
顕微鏡写真(100倍)



305

310

311

323

312

324

322

309

319

316

322

309

318

315

308

308

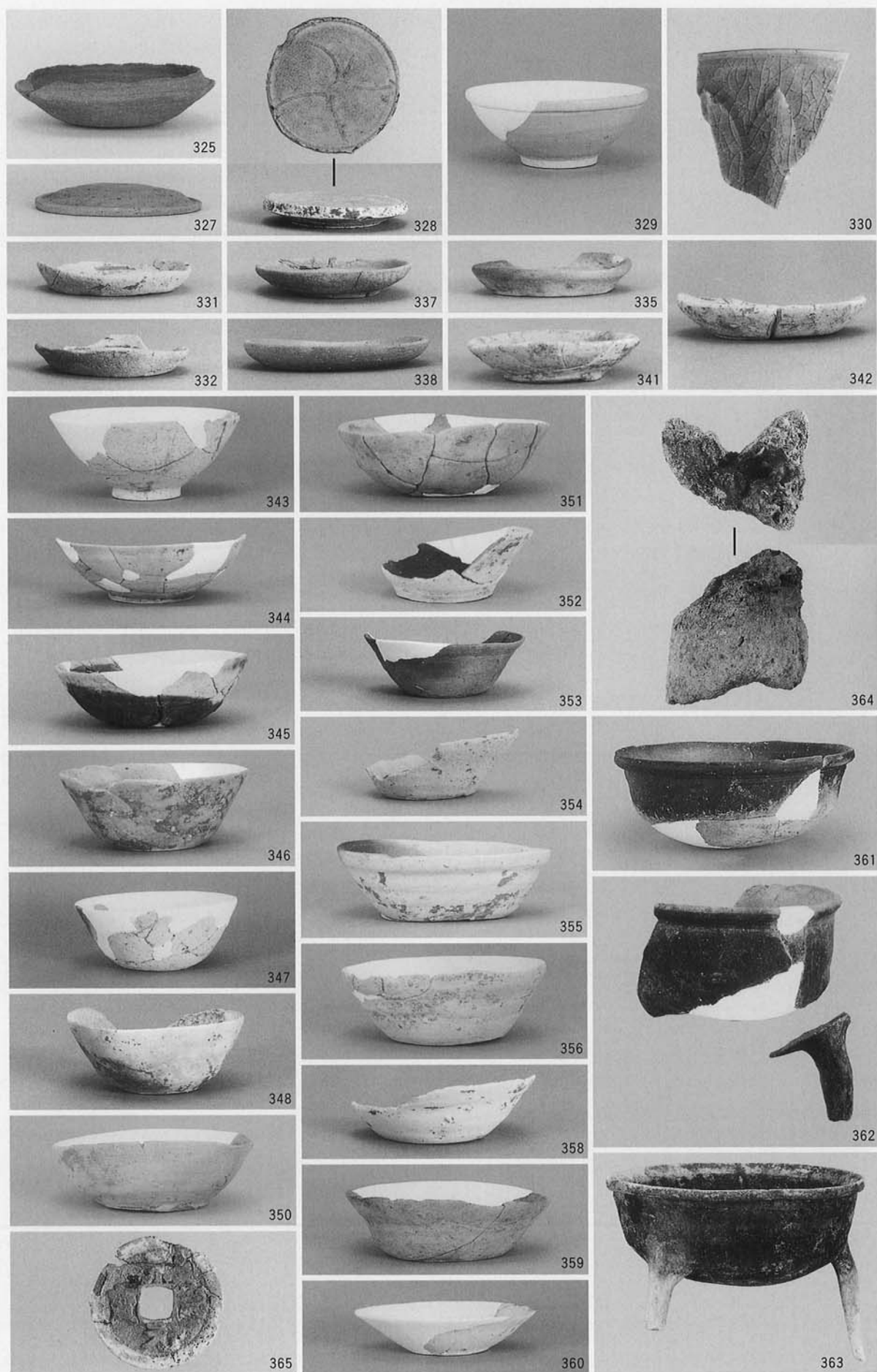
318

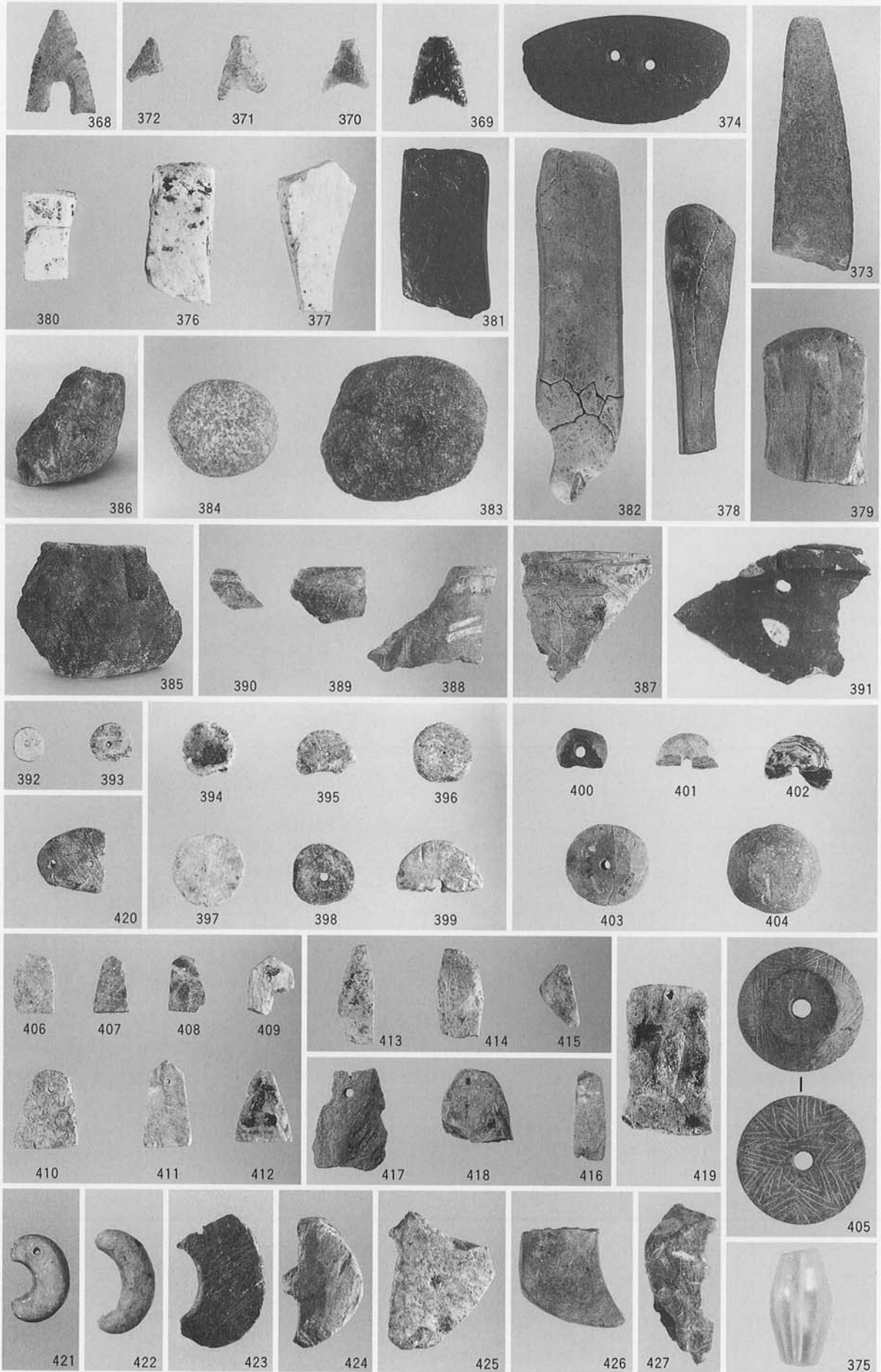
314

366

317

367





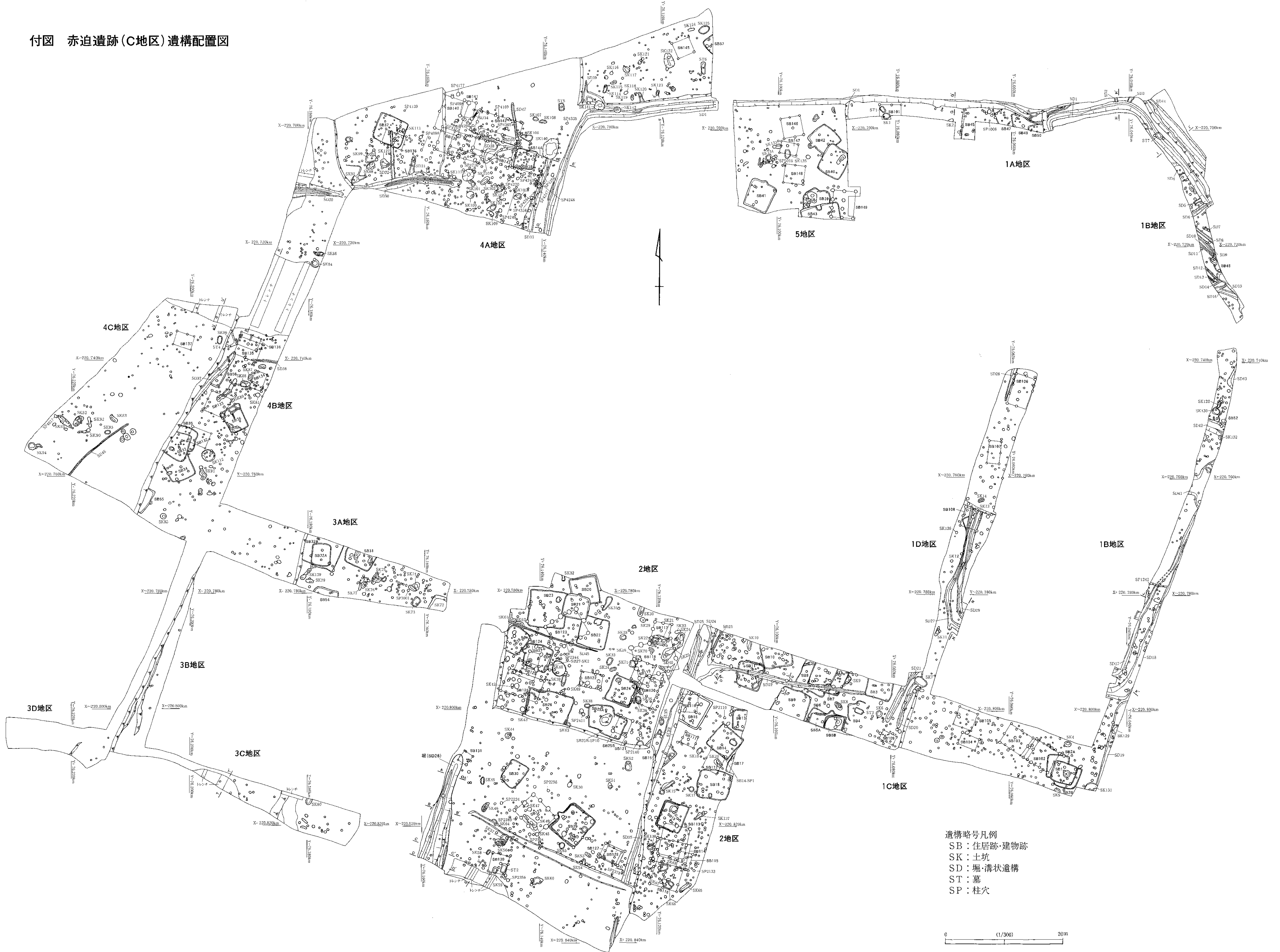
報告書抄録

ふりがな	あかさこいせき（しいちく）	
書名	赤迫遺跡（C地区）	
副書名	平成11年度県営ほ場整備事業（担い手育成型）に伴う発掘調査報告	
巻次		
シリーズ名	山口県埋蔵文化財センター調査報告	阿知須町埋蔵文化財発掘調査報告
シリーズ番号	第19集	第17集
編著者名	上山佳彦 大村 勇 渡邊栄二	伊藤恵理子
編集機関	山口県埋蔵文化財センター	阿知須町教育委員会
所在地	〒753-0073 山口県山口市春日町3番22号 TEL 083-923-1060	〒754-1292 山口県吉敷郡阿知須町2743 TEL 0836-65-2022
発行年月日	西暦2000年3月28日（平成12年3月28日）	

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯 ° ' "	東経 ° ' "	調査期間	調査面積 m ²	調査原因
		市町村	遺跡番号					
あかさこいせき 赤迫遺跡 （しいちく） （C地区）	やまぐちけん よしきぐん 山口県吉敷郡 あじすちょう 阿知須町 あかさこ 赤迫	35403		34°0'29"	131°20'30"	19990506 } 19991130	6,400	ほ場整備

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
赤迫遺跡 （C地区）	集落跡	古墳 古代 中世	竪穴住居跡 56軒 掘立柱建物跡 49棟 土坑 136基 墓 7基 堀 1条 溝状遺構 46条 柱穴 約4,050個	弥生土器 須恵器 土師器 瓦質土器 製塩土器 青磁 白磁 土錘 鞆羽口 石鎌 石斧 凹石 石庖丁 砥石 石鍋 滑石製模造品 紡錘車 有孔円板 勾玉 切子玉 和鏡 鉄製刀子 鉄釘 中国銭	古墳時代後期の 竪穴住居跡が多数 検出された 中世の堀・溝状 遺構が遺跡全体を 巡るような状況で 検出された

付図 赤迫遺跡(C地区)遺構配置図



- 遺構略号凡例
- SB：住居跡・建物跡
 - SK：土坑
 - SD：堀・溝状遺構
 - ST：墓
 - SP：柱穴

0 (1/300) 20m

山口県埋蔵文化財センター調査報告 第19集
阿知須町埋蔵文化財発掘調査報告 第17集

赤 迫 遺 跡 (C地区)

— 平成11年度県営ほ場整備事業（担い手育成型）に伴う発掘調査報告 —

2000年 3月

編集・発行 財団法人 山口県教育財団
山口県埋蔵文化財センター
〒753-0073 山口県山口市春日町3番22号
阿知須町教育委員会
〒754-1292 山口県吉敷郡阿知須町2743

印 刷 泉菊印刷株式会社